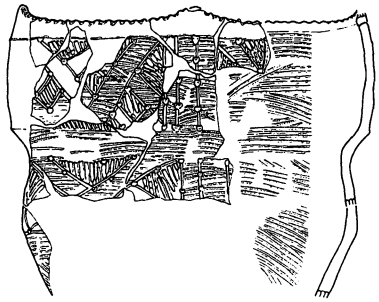
千葉県文化財センター調査報告第224集

千葉市地蔵山遺跡（2）

―住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書II―



1993

住宅・都市整備公団

財団法人　千葉県文化財センター

千葉市地蔵山遺跡（2）

じぞうやま

―住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書II―

1993

住宅・都市整備公団

財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

千葉市は千葉県のほぼ中央に位置し、県都として千葉県の政治・経済・文化の中心としての役割を担っています。また近年は、幕張新都心の開発、各種公共施設の拡充や大規模な宅地造成事業が盛んに実施され、首都機能の一翼を担う中核都市として目覚ましい発展を遂げ、平成4年4月1日には政令指定都市への移行も行われました。そのようななか、人口の増加も著しく、宅地の供給と整備も重要な課題の一つとなっています。こういった状況に対応すべく、千葉市の中心部にほど近い千葉寺地区においても、住宅・都市整備公団により土地区画整理事業が計画されました。

一方、千葉市は貝塚や古墳をはじめとする埋蔵文化財の宝庫としても知られ、千葉寺地区周辺においても、青葉の森公園内に保存された荒久古墳や荒久遺跡、事業地の南側を通る千葉急行電鉄建設に伴って調査された鷲谷津遺跡及び観音塚遺跡など数多くの貴重な遺跡が密集していることが知られております。このようなことから千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関との慎重な協議を重ねてまいりましたが、事業計画の変更も不可能であるとの結論に達し、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、昭和60年度から当文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

千葉寺地区所在の遺跡群のうち最も北側に位置する地蔵山遺跡は、昭和61年度から昭和62年度にかけて主要地方道千葉・大網線を挟んだ南半部について確認・本調査を実施し、縄文時代から平安時代の集落跡、墳墓群の検出などの重要な成果が得られました。特に、縄文時代の条痕文系土器群については今後当地域の編年研究に供するところは大きいと思われます。

このたび、地蔵山遺跡南半部の整理作業が終了し、北半分に引き続き千葉寺地区遺跡群の発掘調査報告書の2冊目として刊行するはこびとなりました。本書が学術資料としてはもとよりのこと、地域の歴史を知る資料として、また文化財の保護と普及のために広く活用されることを願ってやみません。

終わりにあたり、発掘調査から整理作業、報告書の刊行まで終始ご指導とご協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係諸機関各位に深くお礼申し上げるとともに、酷暑、厳寒のなかで発掘調査、整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から深謝の意を表したいと思います。

平成5年3月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　奥　山　　浩

凡　　例

1．本書は千葉県千葉市中央区千葉寺町776他に所在する地蔵山遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは201－058Ｂである。

当遺跡は委託契約時には鷲谷津遺跡Ｂ区として調査されたが、本来は主要地方道千葉・大網線を挟んだ北側に所在した地蔵山遺跡（遺跡コード201－060）と同一遺跡であり、『千葉市地蔵山遺跡（１）－住宅･都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ－』の刊行を機に遺跡名を改称して地蔵山遺跡に含めた。便宜上、本書で報告する南半部を地蔵山遺跡Ｂ区、既報告の北半部を地蔵山遺跡Ａ区と呼称する。遺跡名の改称を行った理由の詳細は『千葉市地蔵山遺跡（１）』に明記した。

2．この調査は、住宅・都市整備公団千葉寺地区土地区画整理事業に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、住宅・都市整備公団との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．調査は、昭和61年10月１日から11月28日に上層確認調査を行い、続いて昭和62年６月１日から12月14日までに上層本調査、下層確認・本調査を実施した。

現地の調査は、昭和61年度については調査研究員加納実が、昭和62年度については主任調査研究員伊藤智樹、西口徹、調査研究員山田貴久、福田誠が担当した。

4．整理作業は平成元年10月１日から着手し、平成４年４月30日に終了した。作業は平成元年度については主任技師伊藤智樹、山口典子、上守秀明が、平成２年度については主任技師藤岡孝司が、平成３年度については主任技師渡辺修一が、平成４年度については主任技師小林清隆が担当した。

5．本書は、調査部長天野努、調査部長補佐阪田正一、佐久間豊、班長谷　旬の助言のもとに渡辺修一が編集を行った。執筆については、Ｉ序章を小林が、他を渡辺が行った。

6．本書図版１の航空写真は、京葉測量株式会社撮影によるものを使用した。

7．本書の作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、住宅・都市整備公団の関係各位をはじめ多くの方々のご指導、ご協力を得た。記して深謝の意を表する。

用　　例

1．本書で使用した地形図の出典は次のとおりである。

第１図：国土地理院発行1/25,000地形図『千葉東部』　（ＮＩ－54－19－15－１）

同上　『蘇我』　（ＮＩ－54－19－15－２）

第４図：明治15年参謀本部陸軍部測量局作成1/20,000『千葉町』

上記以外：住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部作成現況図

2．本書では、一部で一般的に使用される用語とは異なる遺構の名称を使用している。それらについては次のとおりである。

竪穴建物跡　一般に「竪穴住居跡」あるいは「竪穴住居址」と呼ばれるもの。

古墳・方墳　８世紀以降に築かれた周溝により区画される墳墓を古墳の範疇に含める。一般に「方形周溝遺構」「方形周溝状遺構」「方形区画墓」「方形墳墓」等と呼ばれるもの。

3．本書に掲載した遺構の縮尺は、竪穴建物跡、古墳が1/80、土坑が1/50で統一している。

4．遺物の縮尺は、小型の石器が2/3、大型の石器が1/2、土器（縄文土器拓影を含む）が1/4、弥生土器拓影が1/3を基本とするが、他の遺物については任意に縮尺を設定しているので留意されたい。

5．遺構実測図に使用しているスクリーントーンは次のとおりである。

カマド構造　**炉・火床**　**焼土塊**　**粘土塊**　**宝永富士火山灰**

カマド内断面：構築材崩落層　**焼土層**　**灰層**

6．土器の断面については、縄文土器～土師器を白抜きとし、須恵器を黒とした。

7．土器の中で赤色塗彩されたものに関しては器面にスクリーントーンを入れた。

8．本書の刊行を機に調査時の遺構番号を変更して、既報告の地蔵山遺跡Ａ区と共通の遺構番号（通し）とした。新旧遺構番号の対照表を次頁に掲げておく。

地蔵山遺跡Ｂ区　新旧遺構番号対照表

（左側が新番号、右側が旧番号）

竪穴状遺構・竪穴建物

ＳＩ-017:047	ＳＩ-022:011	ＳＩ-027:017	ＳＩ-032:094
ＳＩ-018:048	ＳＩ-023:012	ＳＩ-028:020	ＳＩ-033:099
ＳＩ-019:006	ＳＩ-024:014	ＳＩ-029:021	ＳＩ-034:103
ＳＩ-020:007	ＳＩ-025:015	ＳＩ-030:022	ＳＩ-035:104
ＳＩ-021:010	ＳＩ-026:016	ＳＩ-031:027	

古墳・土壙墓

ＳＸ-005:013	ＳＫ-049:018	ＳＫ-050:028	ＳＫ-051:102

炉　穴

ＳＫ-020:013Ｅ	ＳＫ-028:050	ＳＫ-036:085	ＳＫ-044:119
ＳＫ-021:029	ＳＫ-029:051	ＳＫ-037:086	ＳＫ-045:120
ＳＫ-022:042	ＳＫ-030Ａ,Ｂ:052Ａ,Ｂ	ＳＫ-038:090	ＳＫ-046:121
ＳＫ-023:043	ＳＫ-031:053	ＳＫ-039:097	ＳＫ-047:122
ＳＫ-024:044	ＳＫ-032:060	ＳＫ-040:101	ＳＫ-048:123
ＳＫ-025:045	ＳＫ-033:062	ＳＫ-041:105	
ＳＫ-026:046	ＳＫ-034:079	ＳＫ-042:110	
ＳＫ-027:049	ＳＫ-035Ａ,Ｂ:082Ａ,Ｂ	ＳＫ-043:111	

土　坑

ＳＫ-052:001	ＳＫ-065:033	ＳＫ-078:058	ＳＫ-091:073	ＳＫ-104:084	ＳＫ-117:107
ＳＫ-053:002	ＳＫ-066:034	ＳＫ-079:059	ＳＫ-092:074	ＳＫ-105:087Ａ	ＳＫ-118:108
ＳＫ-054:003	ＳＫ-067:035	ＳＫ-080:061	ＳＫ-093:075	ＳＫ-106:087Ｂ	ＳＫ-119:109
ＳＫ-055:004	ＳＫ-068:036	ＳＫ-081:063	ＳＫ-094:076	ＳＫ-107:088	ＳＫ-120:112Ｂ
ＳＫ-056:005	ＳＫ-069:037	ＳＫ-082:064	ＳＫ-095:077	ＳＫ-108:089	ＳＫ-121:112
ＳＫ-057:019	ＳＫ-070:038	ＳＫ-083:065	ＳＫ-096:078Ａ	ＳＫ-109:091Ａ	ＳＫ-122:113
ＳＫ-058:023	ＳＫ-071:039	ＳＫ-084:066	ＳＫ-097:078Ｂ	ＳＫ-110:091Ｂ	ＳＫ-123:114
ＳＫ-059:024	ＳＫ-072:040	ＳＫ-085:067	ＳＫ-098:078Ｃ	ＳＫ-111:092	ＳＫ-124:115
ＳＫ-060:025	ＳＫ-073:041	ＳＫ-086:068	ＳＫ-099:078Ｄ	ＳＫ-112:093Ａ	ＳＫ-125:116
ＳＫ-061:026	ＳＫ-074:054	ＳＫ-087:069	ＳＫ-100:078Ｅ	ＳＫ-113:093Ｂ	ＳＫ-126:117
ＳＫ-062:030	ＳＫ-075:055	ＳＫ-088:070	ＳＫ-101:080	ＳＫ-114:098	ＳＫ-127:118
ＳＫ-063:031	ＳＫ-076:056	ＳＫ-089:071	ＳＫ-102:081	ＳＫ-115:100	ＳＫ-128:013Ｄ
ＳＫ-064:032	ＳＫ-077:057	ＳＫ-090:072	ＳＫ-103:083	ＳＫ-116:106	

溝状遺構

ＳＤ-006:008	ＳＤ-007:009

本文目次

I　序　章

1　千葉寺地区遺跡群と地蔵山遺跡の調査……1

2　周辺の遺跡について……3

3　調査の方法……6

II　素　描……7

III　先土器時代

1　梗概……9

2　第2ブロック……10

3　第3ブロック……11

4　単独出土の石器……12

IV　縄文時代

1　梗概……17

2～4　（遺構・遺物各説）……17

5　小結……68

V　古墳時代

1　梗概……76

2～14　（遺構・遺物各説）……76

15　小結……106

VI　古　代

1　梗概……109

2～9　（遺構・遺物各説）……109

10　小結……122

VII　時期・性格不明の遺構

1　梗概……126

2　土坑……126

3　溝状遺構……141

4　遺構外出土の遺物……142

VIII　補　論

1　鵜ガ島台式土器から茅山下層式土器へ……143

2　地蔵山遺跡における集落の形成……157

抄　録……162

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置……1
第 2 図　遺跡の範囲と名称（1）……2
第 3 図　遺跡の範囲と名称（2）……3
第 4 図　遺跡周辺図……5
第 5 図　先土器時代ブロック・単独出土石器出土位置……8
第 6 図　第2ブロック遺物出土状況……9
第 7 図　第2ブロック出土遺物……10
第 8 図　第3ブロック遺物出土状況……11
第 9 図　第3ブロック出土遺物……12
第10図　M23－21・M23－22区遺物出土状況……13
第11図　単独出土の石器1……14
第12図　単独出土の石器2……15
第13図　縄文時代早期の遺構位置図……16
第14図　ＳＩ-017・ＳＩ-018……18
第15図　炉穴跡1……19
第16図　炉穴跡2……21
第17図　炉穴跡3……23
第18図　炉穴跡4……24
第19図　炉穴跡5……26
第20図　炉穴跡6……27
第21図　炉穴跡7……28
第22図　炉穴跡8……29
第23図　炉穴内遺物出土状況1……31
第24図　炉穴内遺物出土状況2……32
第25図　炉穴内遺物出土状況3……33
第26図　縄文時代石器分布……35
第27図　縄文時代礫・礫片分布……37
第28図　縄文土器1……40
第29図　縄文土器2……42
第30図　縄文土器3……43
第31図　縄文土器4……45
第32図　縄文土器5……46
第33図　縄文土器6……47
第34図　縄文土器7……48
第35図　縄文土器8……49
第36図　縄文土器9……50
第37図　縄文土器10……51
第38図　縄文土器11……53
第39図　縄文土器12……54

第 40 図　縄文土器13……55
第 41 図　縄文土器14……56
第 42 図　縄文土器15……57
第 43 図　縄文土器16……58
第 44 図　縄文土器17……60
第 45 図　縄文土器18……61
第 46 図　縄文時代の石器 1 ……62
第 47 図　縄文時代の石器 2 ……64
第 48 図　縄文時代の石器 3 ……65
第 49 図　縄文時代の石器 4 ……66
第 50 図　縄文時代の石器 5 ……67
第 51 図　縄文時代の石器 6 ……68
第 52 図　ＳＩ－021 ……77
第 53 図　ＳＩ－021出土遺物 ……78
第 54 図　ＳＩ－022 ……79
第 55 図　ＳＩ－022出土遺物 ……80
第 56 図　ＳＩ－023 ……80
第 57 図　ＳＩ－023炭化材・焼土ブロック検出状況 ……81
第 58 図　ＳＩ－023出土遺物 ……82
第 59 図　ＳＩ－025 ……83
第 60 図　ＳＩ－025出土遺物 ……84
第 61 図　ＳＩ－026 ……85
第 62 図　ＳＩ－026出土遺物 ……86
第 63 図　ＳＩ－027 ……87
第 64 図　ＳＩ－027炭化材・焼土ブロック検出状況 ……88
第 65 図　ＳＩ－027出土遺物 1 ……89
第 66 図　ＳＩ－027出土遺物 2 ……90
第 67 図　ＳＩ－028 ……91
第 68 図　ＳＩ－028出土遺物 ……92
第 69 図　ＳＩ－029 ……93
第 70 図　ＳＩ－029出土遺物 ……94
第 71 図　ＳＩ－030 ……95
第 72 図　ＳＩ－030出土遺物 ……96
第 73 図　ＳＩ－031 ……97
第 74 図　ＳＩ－031炭化材・焼土ブロック検出状況 ……98
第 75 図　ＳＩ－031出土遺物 ……99
第 76 図　ＳＩ－032……100
第 77 図　ＳＩ－032出土遺物……101
第 78 図　ＳＩ－034……102
第 79 図　ＳＩ－034出土遺物……103
第 80 図　ＳＩ－035……104

第 81 図　ＳＩ－035出土遺物 1 ……105
第 82 図　ＳＩ－035出土遺物 2 ……106
第 83 図　ＳＩ－019……109
第 84 図　ＳＩ－019出土遺物 1 ……110
第 85 図　ＳＩ－019出土遺物 2 ……111
第 86 図　ＳＩ－020……113
第 87 図　ＳＩ－020出土遺物……114
第 88 図　ＳＩ－024……115
第 89 図　ＳＩ－024出土遺物……115
第 90 図　ＳＩ－033……116
第 91 図　ＳＩ－033出土遺物……117
第 92 図　ＳＸ－005……118
第 93 図　ＳＫ－049・出土遺物……120
第 94 図　ＳＫ－050・出土遺物……121
第 95 図　ＳＫ－051・出土遺物……123
第 96 図　土坑及び溝状遺構位置 図 ……125
第 97 図　土坑 1 ……127
第 98 図　土坑 2 ……129
第 99 図　土坑 3 ……131
第100図　土坑 4 ……133
第101図　土坑 5 ……135
第102図　土坑 6 ……137
第103図　土坑 7 ……138
第104図　土坑 8 ……140
第105図　土坑出土遺物 ……141
第106図　ＳＤ－006・ＳＤ－007 ……141
第107図　遺構外出土遺物 ……142
第108図　炉穴跡出土土器集成 1 ……145
第109図　炉穴跡出土土器集成 2 ……147
第110図　芝山町新東京国際空港No.7遺跡出土土器……148
第111図　空港No.14遺跡の土器 ……149
第112図　佐原市大稲塚遺跡出土土器 ……150
第113図　佐倉市山崎貝塚・我孫子市柴崎遺跡出土土器 ……152
第114図　5 世紀～ 6 世紀の地蔵山遺跡 ……158
第115図　7 世紀～ 8 世紀初頭の地蔵山遺跡 ……159
第116図　8 世紀～ 9 世紀の地蔵山遺跡 ……160

付図　1　地蔵山遺跡全体図
付図　2　縄文時代早期土器分布

表 目 次

第１表　第２ブロック出土遺物計測表 ……11
第２表　第３ブロック出土遺物計測表 ……12
第３表　単独出土石器計測表 ……15
第４表　縄文時代石器計測表１ ……70
第５表　縄文時代石器計測表２ ……71
第６表　縄文時代石器計測表３ ……72
第７表　縄文時代石器計測表４ ……73
第８表　縄文時代礫集計表１ ……74
第９表　縄文時代礫集計表２ ……75
第10表　古墳時代竪穴建物跡出土玉類・紡錘車・土錘計測表……108
第11表　土坑出土及び遺構外出土玉類・土錘計測表……142

図 版 目 次

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　１　調査区全景（南より）
　　２　調査区全景（東より）
図版３　１　第２ブロック遺物出土状況
　　２　第３ブロック遺物出土状況
　　３　ローム層断面
図版４　先土器時代石器
図版５　１　ＳＩ－017
　　２　ＳＩ－018
　　３　ＳＫ－020
　　４　ＳＫ－021
図版６　１　ＳＫ－022
　　２　ＳＫ－023
　　３　ＳＫ－024
　　４　ＳＫ－025
　　５　ＳＫ－026
　　６　ＳＫ－027
　　７　ＳＫ－030～032
図版７　１　ＳＫ－035
　　２　ＳＫ－036
　　３　ＳＫ－037
　　４　ＳＫ－038
図版８　１　ＳＫ－039
　　２　ＳＫ－040
　　３　ＳＫ－041
　　４　ＳＫ－042
　　５　ＳＫ－043
　　６　ＳＫ－044
　　７　ＳＫ－045
　　８　ＳＫ－046
　　９　ＳＫ－047
　　10　ＳＫ－048
図版９　縄文土器１
図版10　縄文土器２
図版11　縄文土器３
図版12　縄文土器４
図版13　縄文土器５
図版14　縄文土器６
図版15　縄文土器７
図版16　縄文時代の石器１
図版17　１　縄文時代の石器２
　　２　ＳＩ－022
図版18　１　ＳＩ－021
　　２　ＳＩ－023
　　３　ＳＩ－023炭化材検出状況
　　４　ＳＩ－025

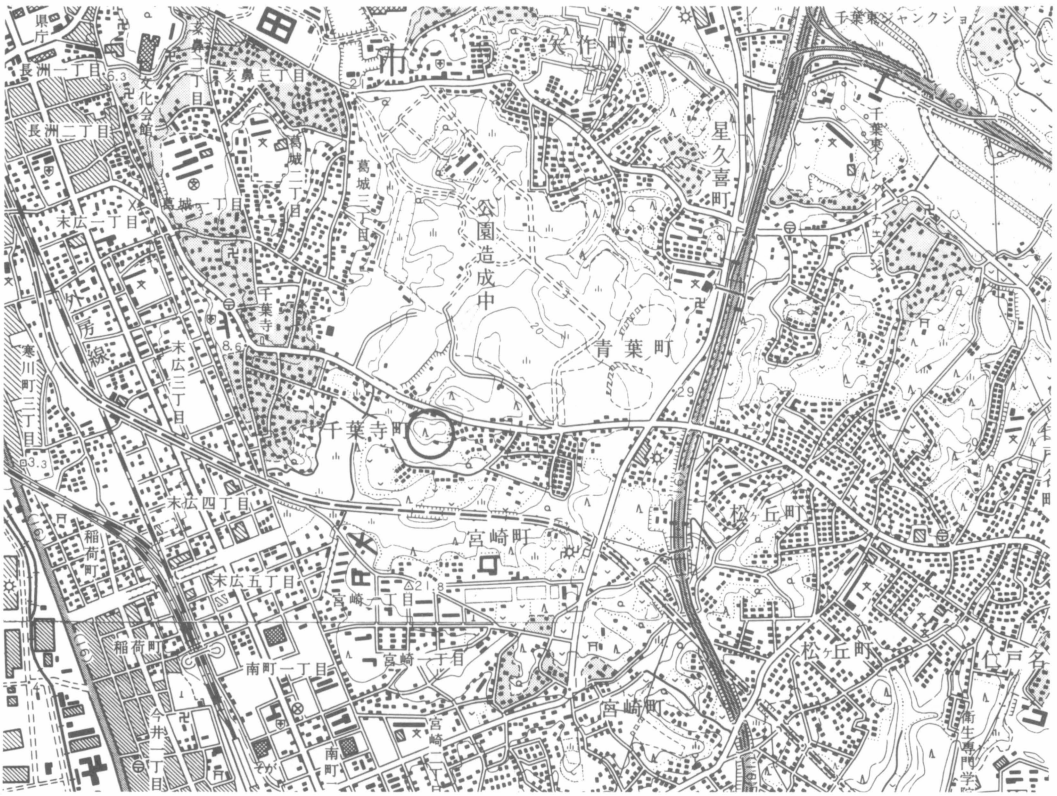
図版19　1　ＳＩ－026
2　ＳＩ－027
3　ＳＩ－027臼玉出土状況
4　ＳＩ－028
図版20　1　ＳＩ－029
2　ＳＩ－030
3　ＳＩ－031
図版21　1　ＳＩ－032
2　ＳＩ－034
3　ＳＩ－035
図版22　古墳時代出土遺物１
図版23　古墳時代出土遺物２
図版24　古墳時代出土遺物３
図版25　古墳時代出土遺物４
図版26　古墳時代出土遺物５
図版27　1　古墳時代出土遺物６
2　ＳＩ－019
図版28　1　ＳＩ－020
2　ＳＩ－024
3　ＳＩ－033
図版29　古代出土遺物１
図版30　古代出土遺物２
図版31　古代出土遺物３
図版32　1　古代出土遺物４
2　ＳＸ－005
3　ＳＸ－005中央部土壙
4　同上断面
5　ＳＫ－049
6　ＳＫ－050
図版33　1　ＳＫ－051
2　土壙墓出土遺物
図版34　1　ＳＫ－054
2　ＳＫ－055
3　ＳＫ－056
4　ＳＫ－057
5　ＳＫ－058
6　ＳＫ－059
7　ＳＫ－060
8　ＳＫ－062
9　ＳＫ－061
10　ＳＫ－065
11　ＳＫ－070
12　ＳＫ－082
図版35　1　ＳＫ－077
2　ＳＫ－078
3　ＳＫ－079
4　ＳＫ－080
5　ＳＫ－083
6　ＳＫ－084～086
7　ＳＫ－087
8　ＳＫ－088
9　ＳＫ－091
10　ＳＫ－092
図版36　1　ＳＫ－095
2　ＳＫ－111
3　ＳＫ－113
4　ＳＫ－114
5　ＳＫ－115
6　ＳＫ－116
7　ＳＫ－117
8　ＳＫ－118
9　土坑出土遺物
10　遺構外出土遺物

Ⅰ　序　　章

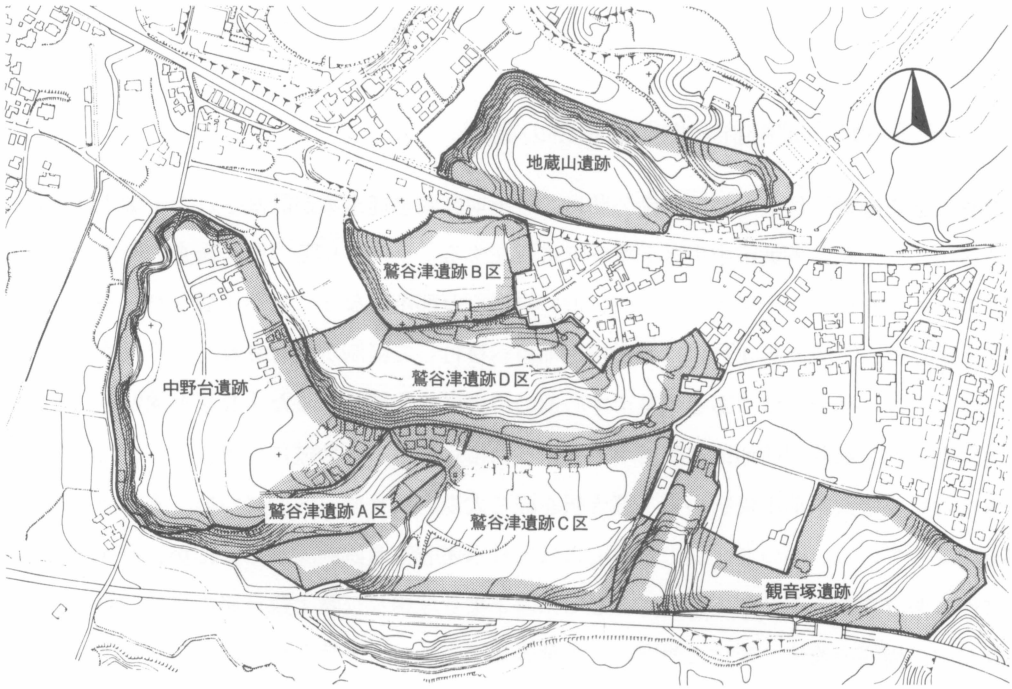
1　千葉寺地区遺跡群と地蔵山遺跡の調査

調査に至る経緯　住宅・都市整備公団による土地区画整理事業が計画された千葉寺地区は、行政区画では千葉県千葉市中央区千葉寺町に所在する。平成２年度の国勢調査の時点でおよそ83万人の人口を擁する千葉市であるが、近い将来百万都市となることが予想され、各種施設の拡充も著しく、平成４年４月には政令指定都市へ移行して区制が施行された。千葉寺町は、そのように急速に発展しつつある千葉市中心部の中央区に位置し、またＪＲ京葉線開通などにより再開発の進む蘇我駅前地区に隣接するという都市化の著しい地域に位置する。また平成４年４月には京成電鉄千葉中央駅から千葉寺駅を経て大森台駅までの区間について千葉急行電鉄が部分開業している。かつて北側の青葉町には農林水産省畜産試験場があったが、畜産試験場移転に伴う県立青葉の森公園の整備、そして県営千葉寺球場及び陸上競技場の青葉の森公園への移転などの周囲の環境の変化に対応し、千葉寺球場跡地から千葉急行電鉄に沿った地区に至る千葉寺町一帯に、土地区画整理事業が計画されたのである。

土地区画整理事業の施行にあたり、区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、千葉



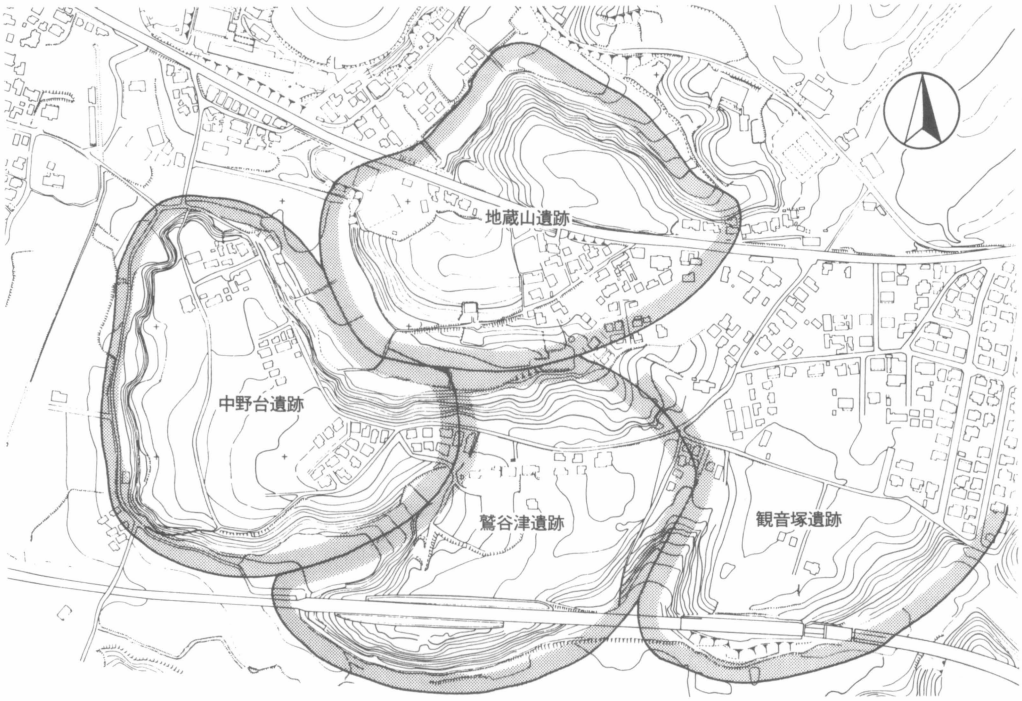
第１図　遺跡の位置（国土地理院発行1/25,000千葉東部・蘇我）



第２図　遺跡の範囲と名称（１）（1/6,000）

県教育庁文化課と住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部との間で度重なる協議が行われ、事業地内に緑地として現状保存する部分と記録保存を行う部分を定め、記録保存を行う部分については事業計画との整合を図りつつ、調査計画を策定して実施することになった。対象となった遺跡は、中野台遺跡（201－057）、鷲谷津遺跡（201－058）、観音塚遺跡（201－059）、地蔵山遺跡（201－060）の４遺跡である。

調査の経過　上記４遺跡の範囲は、字名を参照のうえ、当初第２図のように決定された。最も広い範囲を占める鷲谷津遺跡については、地形的条件等を考慮してＡ区からＤ区の４区に分割された（201－058A～D）。そして現地の調査は昭和60年度より着手された。昭和60年度は中野台遺跡の一部の確認調査（ごく一部本調査）、観音塚遺跡の一部の確認調査を行った。昭和61年度には中野台遺跡、観音塚遺跡の本調査、鷲谷津遺跡Ａ区、Ｂ区の確認調査を実施、翌昭和62年度には観音塚遺跡の確認、本調査、鷲谷津遺跡Ａ区、Ｂ区の本調査を行った他、鷲谷津遺跡Ｃ区の一部の確認、本調査も開始された。昭和63年度には地蔵山遺跡主要部分の確認、本調査が行われ、また観音塚遺跡及び鷲谷津遺跡Ｃ区の確認、本調査の継続、鷲谷津遺跡Ｄ区の確認調査が実施されている。平成元年度は地蔵山遺跡の下層確認、本調査、鷲谷津遺跡Ｄ区の確認、本調査、中野台遺跡の残りの一部の確認、本調査を行った。この年度を境にして以後、大規模な調査はなくなり、用地問題解決地点の小規模な調査と整理作業の比重が増加する。平成２年度には鷲谷津遺跡Ｃ区2,280㎡の本調査、そして平成３年度には観音塚遺跡1,120㎡と地蔵



第３図　遺跡の範囲と名称（２）（1/6,000）

山遺跡の残り660㎡の本調査を行っている。これにより地蔵山遺跡の発掘調査はすべて終了したが、平成３年度の調査では遺構、遺物とも全く検出されなかった。

上記の経過に述べた遺跡名は委託契約時のそれであるが、凡例に記したように千葉寺地区の遺跡の範囲と名称については『千葉市地蔵山遺跡（１）』刊行時点で見直しを行っている。その結果は第３図に示した通りである。本書で報告する地蔵山遺跡Ｂ区とは、かつて鷲谷津遺跡Ｂ区として調査されたものである。地蔵山遺跡Ｂ区は現時点で一部の調査を残しているが、遺構の分布状況や内容を見ると、縄文時代早期の遺物包含層と炉穴群、古墳時代～平安時代の集落跡や墳墓群など多面に亙って地蔵山遺跡Ａ区と一連のものとして把握される。

２　周辺の遺跡について（第４図）

千葉寺地区の遺跡群は、千葉市中心街のある都川沖積地の南側に広がる台地上にある。台地のすぐ西側には狭隘な海岸平野を挟んで東京湾が控えており、本来台地と東京湾との距離は僅か１㎞にも満たない。台地には都川側と東京湾側に向かって開く開析谷が樹枝状に入り組んでいる。千葉寺地区遺跡群は開析谷によって分断された一つの台地の先端付近に位置し、北東の奥には県立青葉の森公園の整備に伴って調査された荒久遺跡があり、遺跡群の北西側の、通称「千葉寺谷」及び「引越し谷」を隔てて８世紀初頭の創建と言われる千葉寺がある。付近に広がる台地上には、早くから市街地化されたところを除いて、多くの遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は、その性格上大規模調査に伴って初めて確認されることが多いため、殆ど知られた遺跡はない。しかし県立中央博物館・青葉の森公園（荒久遺跡）の調査でややまとまった石器群が得られている他、千葉寺地区でも随所で小規模なブロックの調査例がある。

縄文時代の遺跡には、早期の炉穴群を伴う遺跡が多い。千葉寺地区内では中野台遺跡、地蔵山遺跡があり、千葉寺地区から谷を隔てた山ノ神遺跡などでも同様の炉穴群の調査がなされている。縄文時代の著名な遺跡としては当遺跡群の北方、都川に面する矢作貝塚がある。遺跡は後期から晩期を中心に形成されている。しかし縄文時代についても、さほど周辺遺跡の実態は明らかになっていないと言えよう。

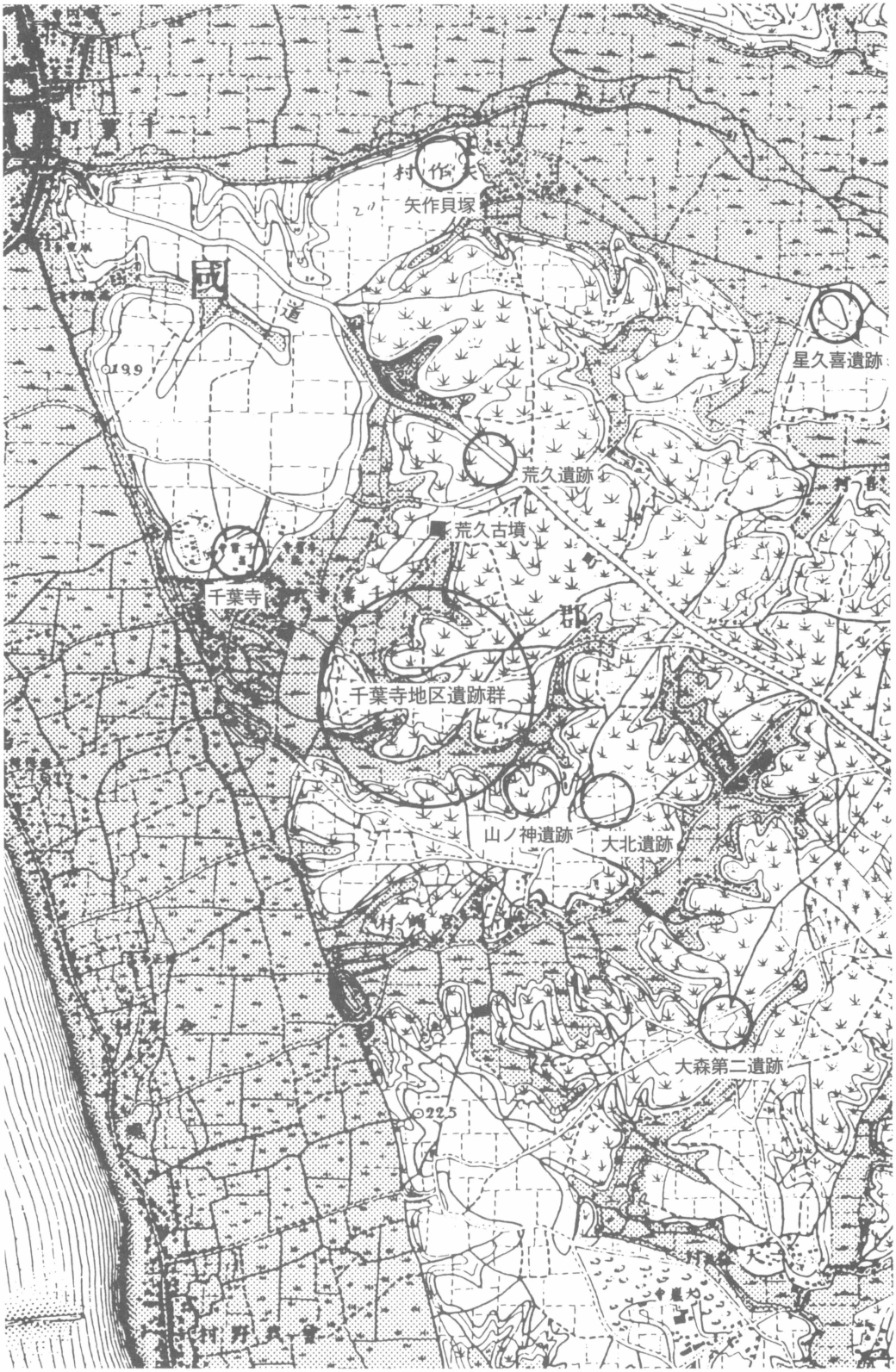
弥生時代の遺跡としては、京葉道路の建設に伴って調査された星久喜遺跡や大森第二遺跡、千葉東金道路の建設によって調査された城の腰遺跡がよく知られている。いずれも弥生時代中期後半の代表的な集落跡である。千葉寺地区では中野台遺跡で同時期の方形周溝墓群が調査された他、地蔵山遺跡A区では集落跡が検出されている。弥生時代後期には中野台遺跡と荒久遺跡で集落跡が調査されている。

古墳時代の遺構、遺物が検出された遺跡は多い。先述の荒久遺跡では古墳時代各期の遺構が検出されているし、矢作貝塚は古墳時代後期の集落跡でもある。京葉道路建設によって調査された星久喜遺跡、大北遺跡(当初は宮崎第一遺跡)、大森第一遺跡、大森第二遺跡などの各遺跡で、古墳時代前期から後期の集落跡の調査がなされている。千葉寺地区の各遺跡でも古墳時代の遺構、遺物は多く、今回報告する地蔵山遺跡の場合は、古墳時代の竪穴建物群が中核的な存在となっている。

奈良時代～平安時代についても、古墳時代に続いて多くの遺跡で遺構、遺物が検出されている。千葉寺地区ではとくに鷲谷津遺跡、観音塚遺跡に該期のまとまった集落跡があるが、谷を挟んだ対岸の山ノ神遺跡や大北遺跡でも同様に多くの遺構が調査されている。とりわけ大北遺跡の掘立柱建物群及び多量の畿内産土師器、緑釉陶器の存在は、一般的な集落跡を超えたものを想定させる。この時期は千葉寺が既に創建され、また荒久古墳や荒久遺跡、地蔵山遺跡の墳墓群と各集落跡の関係についても興味深いものがある。

周辺遺跡の参考文献

柿沼修平・他『京葉』（財）千葉県都市公社　1973
菊池真太郎・他『千葉市城の腰遺跡』（財）千葉県文化財センター　1979
相京邦彦『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』（財）千葉県文化財センター　1983
池田大助・他『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』（財）千葉県文化財センター　1986
清藤一順・他『千葉市矢作貝塚』（財）千葉県文化財センター　1981
菊池健一・他『千葉市山ノ神遺跡』（財）千葉市文化財調査協会　1989
山口典子・他『千葉市荒久遺跡（1）』（財）千葉県文化財センター　1989
小林信一・他『千葉市荒久遺跡（2）』（財）千葉県文化財センター　1989



第４図　遺跡周辺図（明治15年参謀本部陸軍部測量局作成）

渡辺修一・他『千葉市荒久遺跡（３）』（財）千葉県文化財センター　1991
渡辺修一『千葉市地蔵山遺跡（１）』（財）千葉県文化財センター　1992

3　調査の方法

調査区の設定　調査対象域全域を、公共座標に合わせて覆う50m×50mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点を置き、西から東へA、B、C…とし、北から南へ１、２、３…として、これを組み合わせて使用する。大グリッド内は10m×10mのグリッドに25分割し、北西隅を起点に01、02、03…として南東隅を25とする。小グリッドをさらに分割する必要があるときは、５m×５mに４分割し、北西、北東、南西、南東の順にａ～ｄを付す。このため最小グリッドの表示方法は、例えばA15－24ｂのようになる。

確認調査　上層確認調査については、調査区全域に２m×２m～２m×５mの調査坑を10%設定して遺構、遺物の分布を確認し、本調査に移行している。下層（ローム層）については、調査区全域に２m×２mの確認坑を４%設定し、石器等の遺物が出土した地点について周囲に拡張し、石器集中の存否と広がりを追及するという方法をとっている。

遺構番号　基本的に遺構種別毎にＳＩ-001、ＳＩ-002…、ＳＫ-001、ＳＫ-002…等の番号を付している。本書で報告する地蔵山遺跡Ｂ区（旧鷲谷津遺跡Ｂ区）は、発掘調査時にすべての遺構を通し番号で処理しているため、本書の刊行を機に地蔵山遺跡Ａ区と共通の遺構番号に改めることにする(巻頭の用例を参照のこと)。そのため各種記録類と出土遺物に記された遺跡コード及び遺構番号は当初のままである。本書と遺構実測図原図や遺物、遺物実測図原図との対照において、些か煩わしさが生じることについてはご寛恕願いたい。

II 素　　描

地蔵山遺跡は、主要地方道千葉・大網線（通称大網街道）によって開削されて南北に二分されている。北半部をA区、南半部をB区と呼ぶ。今回報告するのはB区であるが、ここで既に報告されているA区を含めて、遺跡全体の遺構・遺物分布を時期毎に概観しておきたい。

先土器時代の遺物集中は3か所で検出された。いずれも比較的小規模なブロックである。A区ではその南縁、N22区～N23区にかけてⅣ層に帰属するブロックが検出されている。2種のナイフ形石器と角錐状石器を指標的器種として持っている。B区では中央北寄りでブロックが2か所検出されている。一方はⅢ層、他方はⅥ層からの出土であるが、出土遺物点数はごく少なく、特徴的な器種を含まない。地蔵山遺跡の北方に広がる広大な荒久遺跡では、確認調査によってⅥ層からの遺物が目立って出土しており、その段階には広範囲に亙って頻繁な居住の反復があった可能性がある。

縄文時代の遺構・遺物はA区、B区ともに西寄りに濃密な分布を示す。時期は早期鵜ガ島台～茅山下層期で、多数の炉穴と遺物包含層の展開を見る。特にB区は遺構数、遺物量とも豊富で、竪穴遺構2基も調査され、遺構の重複も見られることからある程度の期間に亙って存続したものと思われる。また炉穴群の分布範囲には焼礫が目立ち、黒曜石を素材とした剝片石器の製作も行われていたようである。

弥生時代の遺構・遺物はA区にのみ存在する。竪穴建物4棟がそれで、いずれも弥生時代中期後半に属する。中野台遺跡の墳墓群との関係が注目される。

古墳時代に入るとA区、B区合わせて25棟の竪穴建物が営まれている。5世紀後半から6世紀前半と、7世紀中葉の二度のピークがある。7世紀代の集落の中心はB区にある。

古代にはA区からB区にかけて小規模方墳・土壙墓・火葬墓によって構成される墳墓群と、A区1棟、B区4棟の竪穴建物の二重の性格の占地がなされている。墳墓群、特に方墳からは遺物がほとんど出土していないため時期比定は困難であるが、火葬墓や土壙墓からは8世紀から9世紀の遺物が出土しており、おそらく方墳もほぼ並行して営まれたものであろう。竪穴建物の方も1棟が8世紀初頭の所産で、他は時期が降り、年代幅があるが、墳墓群と竪穴建物群相互の関係は判然としない。おそらく墳墓群の造営期間と集落のそれはオーバーラップはしていまい。なお墳墓群については北側の**荒久遺跡**の墳墓群や**荒久古墳**との関係も注目されよう。

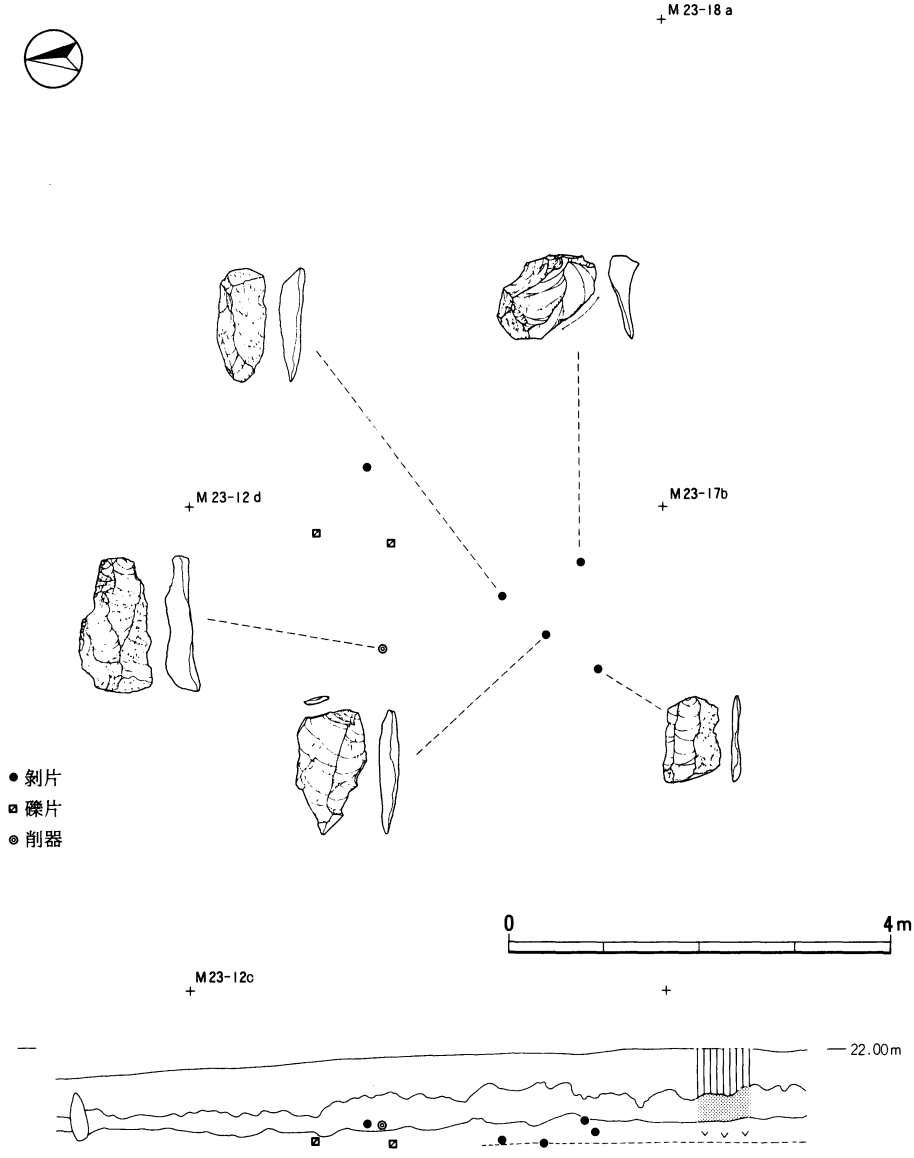
遺跡の概観は以上の通りである。A区とB区の間にある道路及び家屋によって遺跡が分断されているのは非常に惜しまれるところであるが、いずれにしても上記のように本来は同一の遺跡であったことは明らかであろう。以下、遺跡B区の遺構・遺物の詳細について時期毎に記述する。

第５図　先土器時代ブロック・単独出土石器出土位置（1/1,500）

III　先土器時代

1　梗概

地蔵山遺跡における先土器時代の遺構、遺物の分布は希薄である。既に報告された地蔵山遺跡A区では2地点から遺物が出土しているが、うち1か所は時期を異にする単体の石器2点が偶然近接して検出されたもので、他の1か所において、Ⅳ～Ⅴ層を出土層準とする185点の遺物を包含した遺物集中が検出されていた。ここでA区N22－23・N23－03区を中心に検出されたその遺物集中を第1ブロックとしておく。



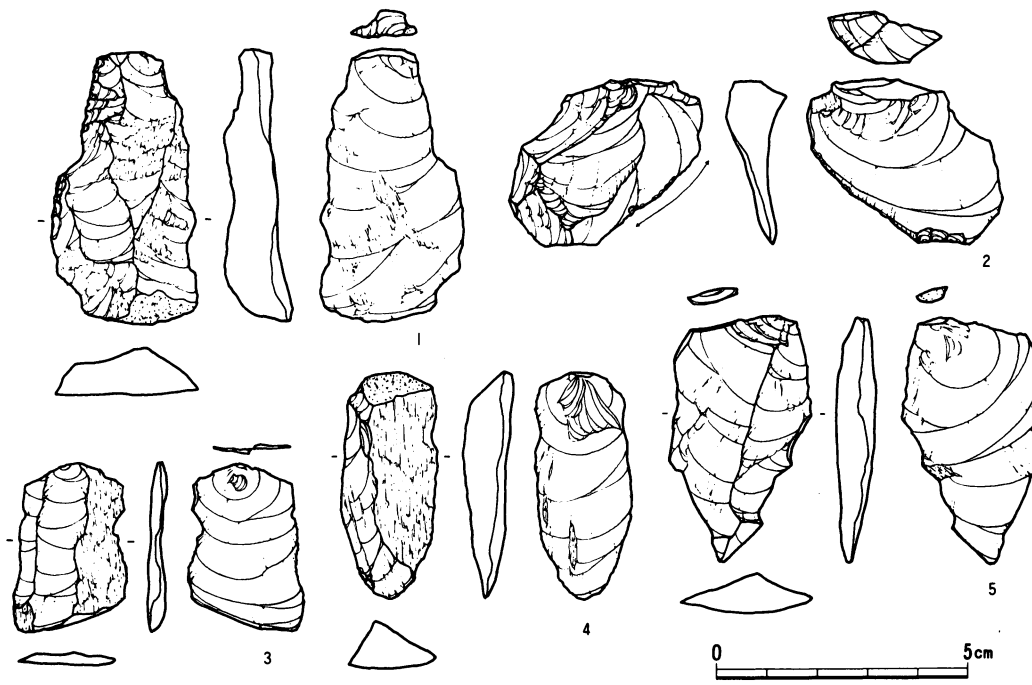
第6図　第2ブロック遺物出土状況（1/80）

B区では調査区の北縁に近いM23－12区に1か所、調査区のほぼ中央のL23－24・25区で1か所の二つの遺物集中が検出されている。前者はVI層、後者はIII層中に包含されていた。前者を第2ブロック、後者を第3ブロックとする。いずれも遺物点数は少ない。他にはM23－21区と22区で確認調査によって遺物が出土していたが、その周囲には遺物集中を形成しておらず、単体出土で終わった。また上層調査中に出土した先土器時代の石器も数点あるが、やはりいずれも単独出土であった。

2　第2ブロック（第6図・第7図）

出土状況　M23－12区において検出された遺物集中である。遺物総点数は8点と少ない。分布範囲は南北3.0m、東西2.1mと狭く、とくに偏在傾向も認められなかった。垂直方向のレベル差はおよそ25cmであまり大きなものではなく、VI層上面から同下底にかけて包含されていた。本来的にVI層中に生活面を持った文化層であるのは疑いあるまい。なお当ブロックから出土した遺物はすべて別母岩である。

出土遺物　1は暗緑色チャート製の削器である。縦長剝片を素材とする。末端は礫皮面を残した底面に到達している。複剝離の打面を残しているが、打面調整が行われたものではない。加工は背面左側縁に集中するが、その頭部側と中位付近の2か所に部分的に施されている。また背面右側縁頭部寄りに使用痕と思われる微細な剝離痕が連続している。2は灰白色チャート製の剝片である。腹面末端の一部に連続した二次的剝離痕が認められる。削器としての機能を



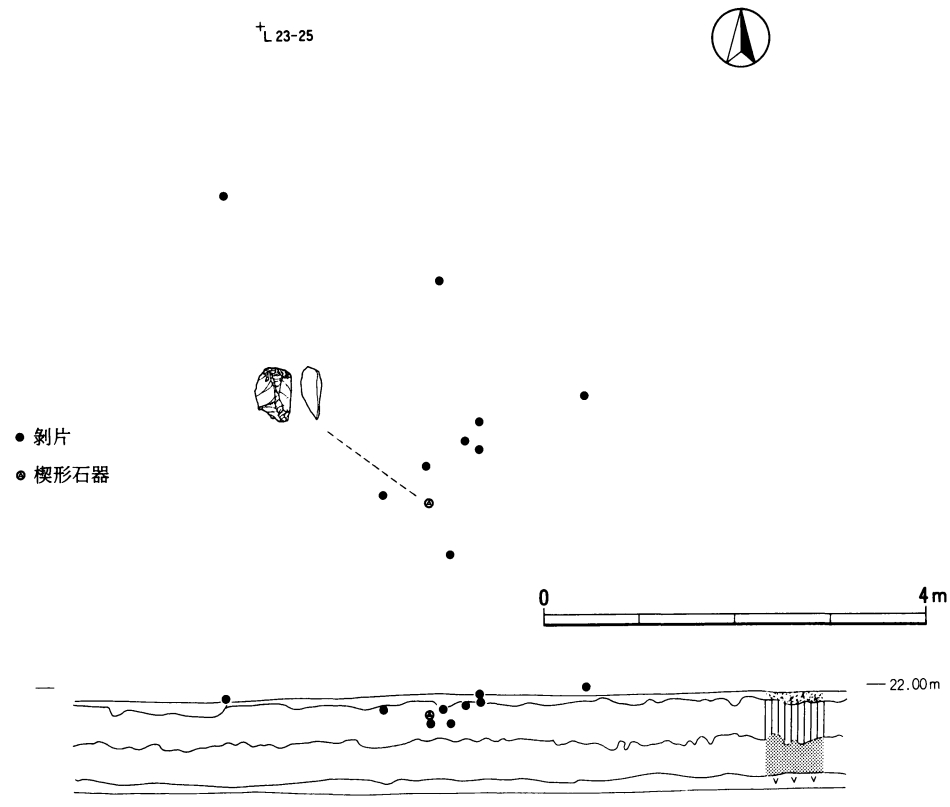
第7図　第2ブロック出土遺物（2/3）

企図した加工であろうか。また背面末端の右寄りには微細剝離痕が観察され、使用痕と想定される。3は茶褐色珪質頁岩製の剝片である。末端は背面側に回り込む。背面の剝離痕から縦長剝片が連続的に剝離されたことが知れる。4も3によく似た珪質頁岩製の剝片である。あまり良質ではなく、節理で割れ易い。5は緑灰色凝灰岩製の剝片。頭部寄りに折れ面があるが、意図的なものではあるまい。図示しなかった遺物としては、粗悪な黒曜石製の剝片とチャートの礫2点がある。

第1表　第2ブロック出土遺物計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角 剝離角	調整角	使用痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	M23-12-1	礫	チャート	45.1	31.2	29.5	49.30	−	−	−	−	−
1	M23-12c-1	削器	チャート	53.1	28.8	11.2	14.80	98	58〜72	+	−	−
	M23-12-2	剝片	黒曜石	32.0	21.9	10.1	6.50	−	−	−	−	−
	M23-12-3	礫	チャート	38.5	30.4	25.1	33.72	−	−	−	−	−
4	M23-12-4	剝片	珪質頁岩	44.3	20.0	9.6	7.44	108	−	+?	−	−
5	M23-12-5	剝片	凝灰岩	49.2	29.3	7.7	9.33	104	−	−	−	−
2	M23-12-6	剝片	チャート	27.5	43.5	9.9	6.99	125	54	+	−	−
3	M23-12-7	剝片	珪質頁岩	32.0	23.9	3.2	2.80	96	−	−	−	−

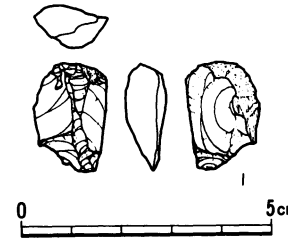
3　第3ブロック（第8図・第9図）



第8図　第3ブロック遺物出土状況（1/80）

出土状況　L23－24・25区において検出された遺物集中である。遺物総点数は10点で第２ブロック同様零細なもの。遺物は南北3.7m、東西3.8mの範囲に分布しているが、その南寄りに偏在し、L23－24区出土の１点はやや離れて拡散した印象を与える。出土層準はIII層中位以上II層下位までにあり、最大のレベル差はおよそ40cm。なお当ブロックから出土した遺物についてもすべて別母岩と判断された。

出土遺物　１は緑灰色チャート製の楔形石器である。礫皮面を打面として剝離された小型の剝片を用いる。背稜が高く、大きさに対して比較的厚い。ここで図示しなかった遺物として剝片９点がある。石材は凝灰岩が１点、珪質頁岩が１点、チャートが７点で、目的的な剝片として有効なものは認められない。



第９図　第３ブロック出土遺物（2/3）

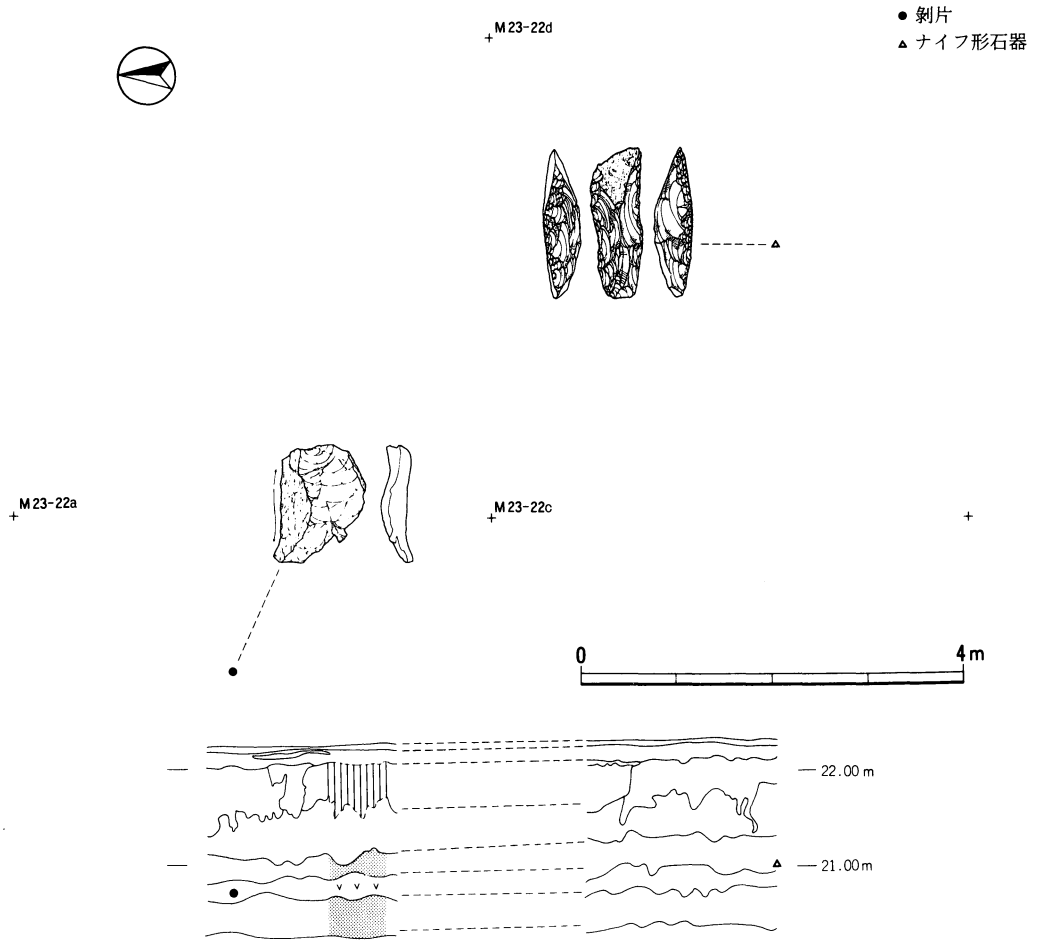
第２表　第３ブロック出土遺物計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角 剝離角	調整角	使用痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	L23-24-1	剝片	凝灰岩	29.5	17.0	9.5	4.11	94	－	－	－	－
	L23-25-1	剝片	チャート	40.4	22.3	6.0	11.87	－	－	－	－	－
	L23-25-2	剝片	チャート	15.4	19.5	5.0	1.03	116	－	－	－	－
1	L23-25-3	楔形石器	チャート	21.2	15.5	8.2	2.49	－	－	－	－	－
	L23-25-4	剝片	珪質頁岩	26.6	21.8	8.2	3.46	106	－	－	－	－
	L23-25-8	剝片	チャート	21.2	32.0	7.2	3.93	88	－	－	－	－
	L23-25-9	剝片	チャート	13.0	21.0	3.7	0.96	100	－	－	－	－
	L23-25-10	剝片	チャート	16.6	17.0	6.3	1.57	106	－	－	－	－
	L23-25-11	剝片	チャート	16.3	23.8	7.5	1.68	86	－	－	－	－
	L23-25-12	剝片	チャート	34.0	18.4	9.5	5.33	－	－	－	－	－

4　単独出土の石器（第10図～第12図）

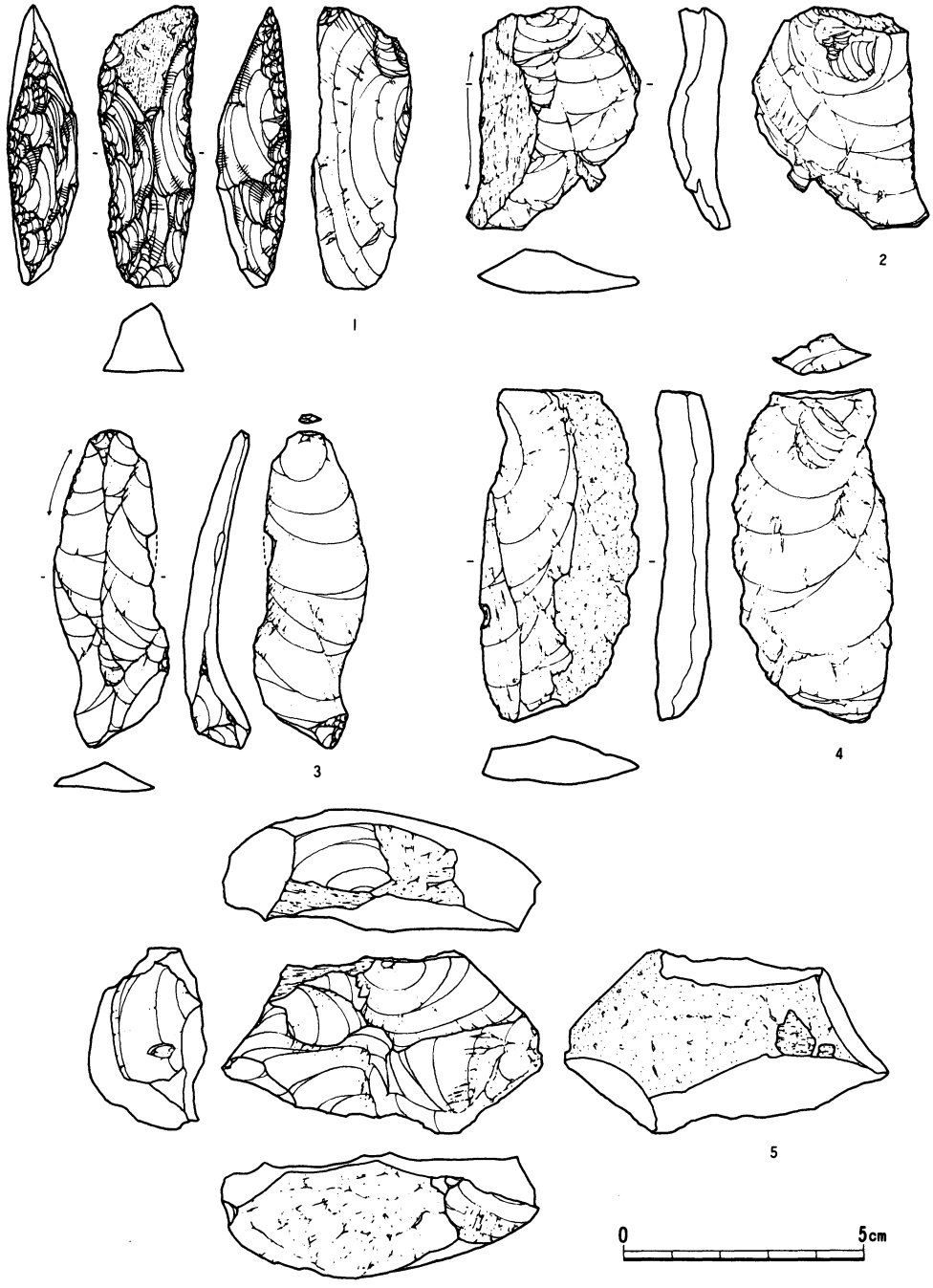
M23－21・22区出土の石器　第10図は出土した２点の石器の出土状況を示したものである。いずれも確認調査の際に出土している。その間の距離は７m余りを測る。出土レベルは比較的近いが、周辺からは遺物は出土せず、両者を関係づける要素はない。第11図１はナイフ形石器で、確認坑壁際から検出されたもの。出土層準はV層下位になる。黒曜石製で横長剝片を素材とし、刃部は切出状を呈している。加工はナイフ形石器としての側縁全体に及び、両側縁からの加工によって形成された背稜は高く、断面形は概ね三角形となる。素材の用い方、加工、形状などIV層下部に特徴的な角錐状石器に共通する要素が多く、本来もう少し上位に包含される石器かも知れない。第11図２は青黒色チャート製の剝片である。網目状構造が発達した石材を用いる。背面左側縁にはごく微細な剝離痕が連続しており、使用痕と考えられる。出土層準はVI層。

その他の石器　３は暗灰色安山岩製の石刃である。打面は平坦で調整痕を残さないが、頭部調整は行われているようである。背面の剝離痕はすべて上方からの剝離を示している。末端に

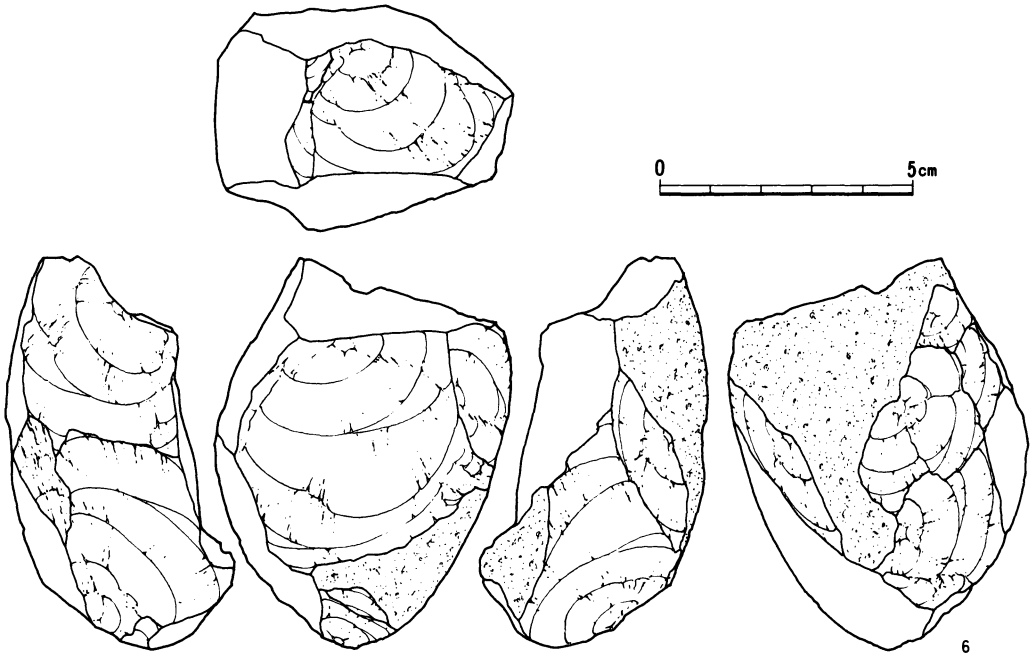


第10図　M23－21・M23－22区遺物出土状況（1/80）

は主要剝離面を切る二次剝離が認められるが、いかなる性格のものか不明。また背面左側縁の一部にはきわめて微細な剝離痕が観察される。4は風化面が灰褐色を呈する安山岩製の剝片である。刃器として適した形状を有するが、とくに使用痕等は観察されなかった。5は赤褐色珪質頁岩製の石核である。一部礫皮面を残しているが、90°方向の打面転移を繰り返されており、最終的な作業面には周縁からの剝離痕が残されている。6は風化面が黄灰褐色を呈する安山岩製の石核である。多方向からの剝離痕が交錯する。上記3～6までの遺物はいずれも縄文時代の遺物包含層の調査中に出土したものであり、したがって層位もII層下位からIII層、深くてもIV～V層に包含されたものであろうがそれらの出土状況の詳細は記録されていない。また単独出土の遺物としては他に6点の剝片があった。



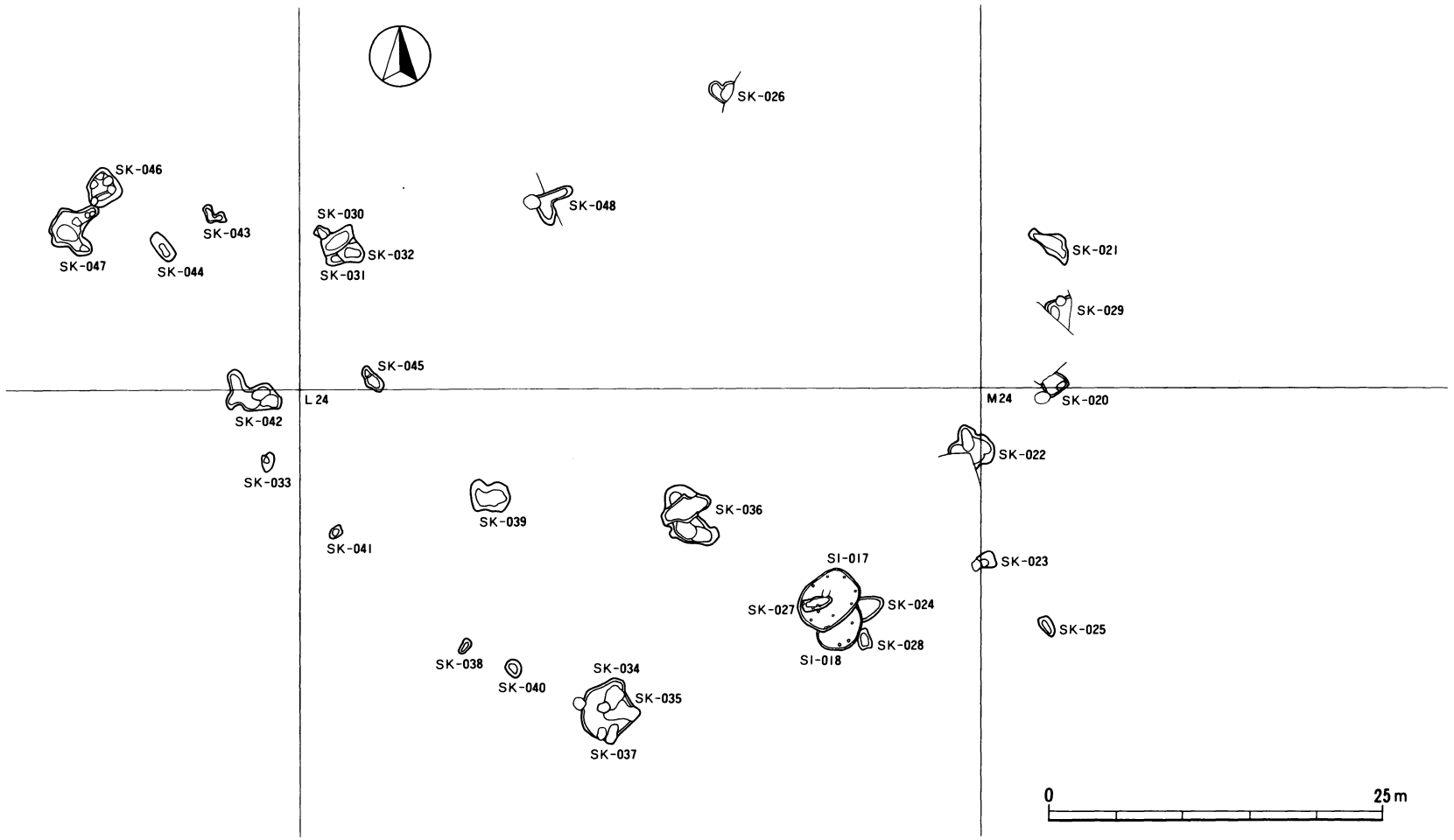
第11図　単独出土の石器１（2/3）



第12図　単独出土の石器２（2/3）

第３表　単独出土石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角 剝離角	調整角	使用痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	K23-24-14	剝片	安山岩	47.6	31.9	5.1	9.63	−	−	−	−	−
	K23-5-3	剝片	安山岩	27.5	34.5	7.9	6.06	−	−	−	−	−
5	L23-08-15b	石核	珪質頁岩	67.0	36.0	22.8	51.86	92	−	−	−	−
	L23-15-53	剝片	チャート	35.0	16.2	6.2	3.69	112	−	−	−	−
	L23-22-248	剝片	安山岩	35.0	43.0	16.5	25.63	−	−	−	?	−
6	L24-01-1	石核	安山岩	71.7	57.8	39.5	206.42	110	−	−	−	−
3	L24-01-390	剝片	安山岩	61.6	21.0	9.8	9.65	112	−	+	−	+
	L24-02-119	剝片	チャート	27.7	44.4	7.0	9.43	−	−	−	−	−
4	L24-02-170	剝片	安山岩	67.3	32.6	10.8	28.06	108	−	−	−	−
	047-66	剝片	頁岩	18.0	24.5	7.9	3.08	−	−	−	−	−
2	M23-21b-2	剝片	チャート	43.5	40.1	11.2	16.51	120	−	+	−	−
1	M23-22c-3	ナイフ形石器	黒曜石	58.4	21.5	14.6	15.36	−	68〜86	−	−	−



第13図　縄文時代早期の遺構位置図（1/500）

Ⅳ 縄文時代

1 梗概

地蔵山遺跡Ａ区と同様、Ｂ区でも縄文時代早期条痕文系土器期の遺構、遺物が検出されているが、量的にはＡ区を遙かに凌駕し、縄文時代の遺跡の中心は明らかにＢ区に存する。台地の南西縁部を中心に遺跡全体に遺物包含層が形成されており、多量の土器、石器、焼礫等が出土した。土器は鵜ガ島台式土器、茅山下層式土器が殆どで、他の時期の土器はごく少量である。石器は黒曜石の剝片等が多く見られ、黒曜石を素材とする石器生産が行われた可能性が指摘される。遺構には、竪穴遺構２、炉穴29（遺構番号の数であり、重複を考慮すればさらに基数は増える）があり、遺物包含層と重なって分布する。

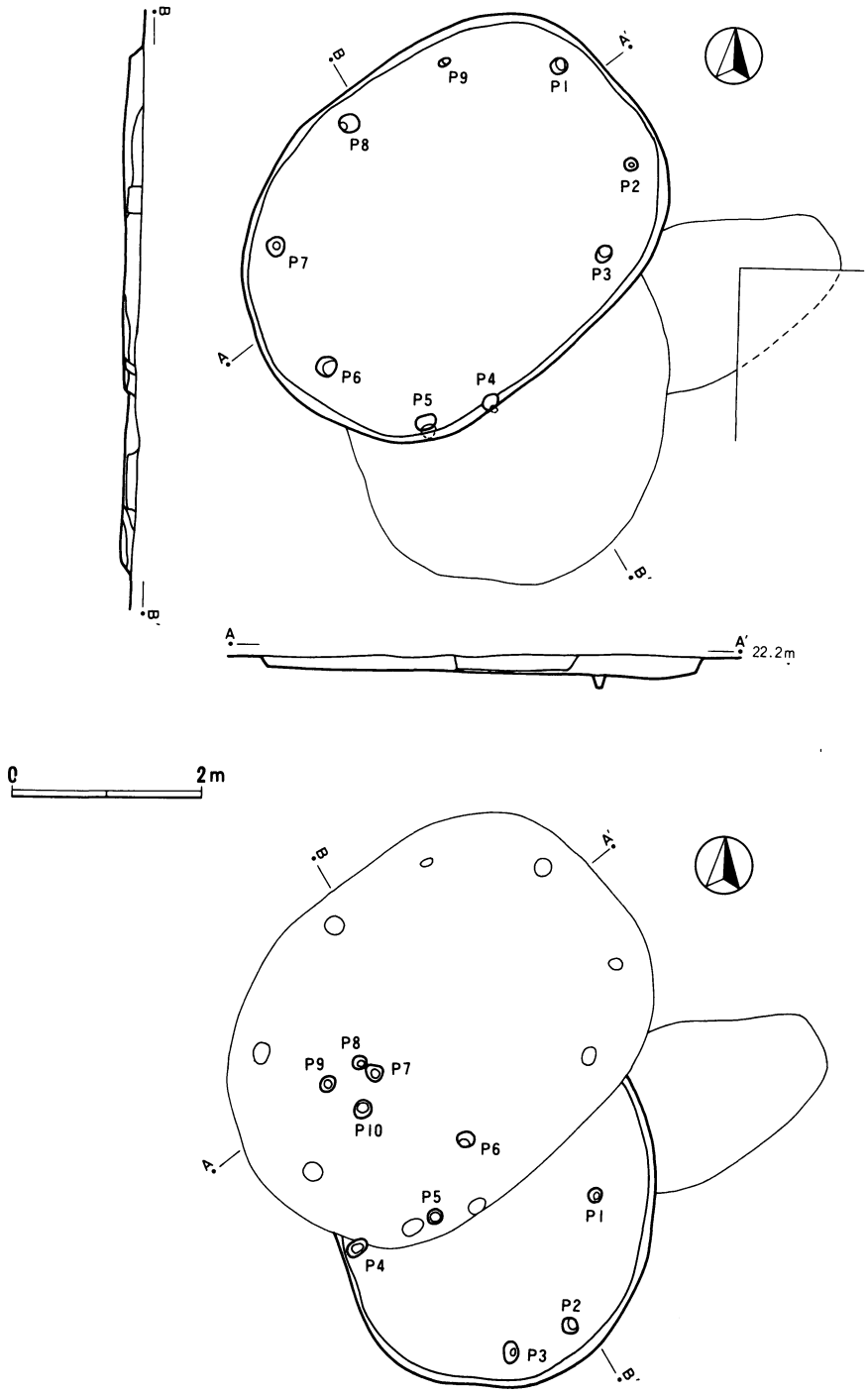
2 竪穴遺構・炉穴群

ＳＩ-017（第14図・図版５－１）　縄文時代遺構群の南東寄り、Ｌ24－09・10区に位置する竪穴遺構。竪穴遺構ＳＩ-018、炉穴ＳＫ-024、ＳＫ-027と重複し、ＳＩ-018を切るが、他の２基との新旧関係は明確ではない。掘り上がった平面形は楕円形を呈し、竪穴建物様であるが、調査時には土色の相違が微妙で果たして正確なプランを摑み得たか疑問もあり、それ故竪穴遺構と呼称する。長軸長4.80m、短軸長3.63m、検出面からの深さは0.1～0.2m。壁際には壁柱穴状に小ピットが巡る。ピットは径７～24cmと小径で、床面からの深さはＰ１：30cm、Ｐ２：22cm、Ｐ３：13cm、Ｐ４：18cm、Ｐ５：23cm、Ｐ６：17cm、Ｐ７：17cm、Ｐ８：16cm、Ｐ９：12cmを測る。炉等は検出されていない。縄文土器が多数出土している。

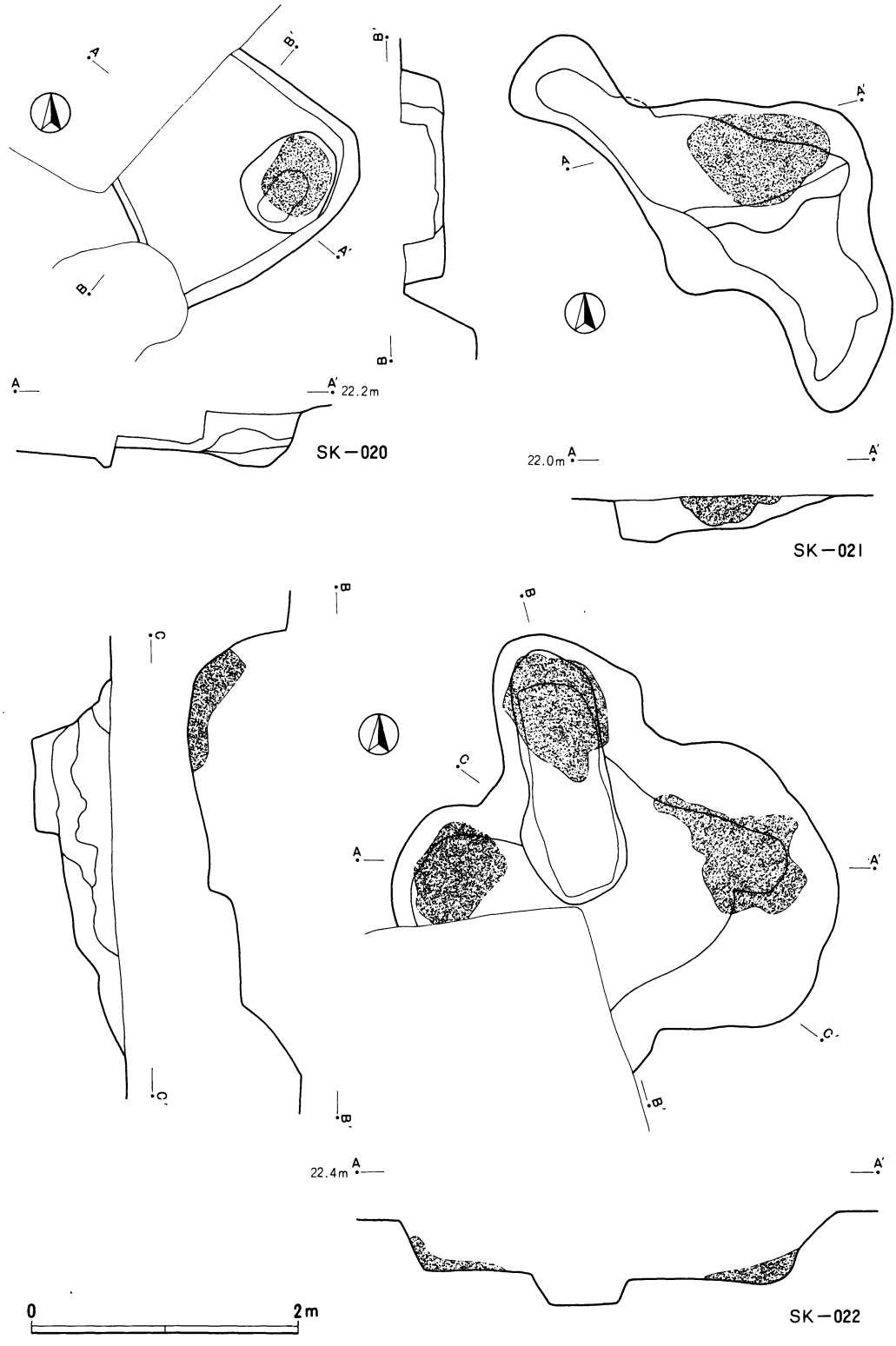
ＳＩ-018（第14図・図版５－２）　前記ＳＩ-017と同じくＬ24－09・10区に位置する竪穴遺構である。重複関係については前記のとおり。やはり楕円形を呈すると思われるが、北半が失われているため全体の形状は不詳である。短軸長3.35m、検出面からの深さは最大0.14m。こちらにも径16～23cmの小ピットがいくつか検出されているが、規則的な配列を示さない。床面からの深さは、Ｐ１：19cm、Ｐ２：13cm、Ｐ３：14cm、Ｐ４：17cm、Ｐ５：12cm、Ｐ６：22cm、Ｐ７：32cm、Ｐ８：21cm、Ｐ９：19cm、Ｐ10：14cmといずれも浅い。炉は検出されていない。遺物としては十数点の縄文土器が出土している。

ＳＫ-020（第15図・図版５－３）　縄文時代遺構群の東端、M23－21・M24－01区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-025、土坑ＳＫ-128に切られている。北西－南東方向に主軸方位を有していたと思われる。遺存部の最大幅1.67m、検出面からの深さ0.25～0.32mを測る。南東端に浅いくぼみを伴って火床部が検出された。遺物は出土しなかった。

ＳＫ-021（第15図・図版５－４）　M23－16・21区に位置する炉穴跡。重複関係はない。北



第14図　SI－017・SI－018 (1/80)



第15図　炉穴跡１（1/50）

西－南東方向に著しく長い不整形を呈し、長軸長3.44m、短軸長1.62mを測る。検出面からの深さは0.11～0.31m。中央で弱く犬脚状に屈曲するが、それより南側では段状に高くなる。火床は屈曲点の位置に検出された。遺物等は出土していない。

ＳＫ-022（第15図・図版６－１）　縄文時代遺構群の東端近く、Ｌ24－05・M24－01区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-023に切られる。形状は不整であるが、３か所に火床が認められ、ほぼ南北に主軸を持つもの、ほぼ東西に主軸を持つもの、北東－南西方向に主軸を持つものの３基の重複であろう。ただし新旧関係は明確に捉えられない。遺存部の南北長3.26m、東西長3.06mを測る。南北に主軸を持つものが最も深く掘り込まれ、検出面から0.74m、他は0.4～0.5m程度の深さを持つ。火床は北端、西端、東端にそれぞれ検出された。それらの配置は南側を基軸にして扇形に展開し、３基の炉穴が全く無関係に営まれたものではないことを示唆していよう。遺物として縄文土器43点が出土している。

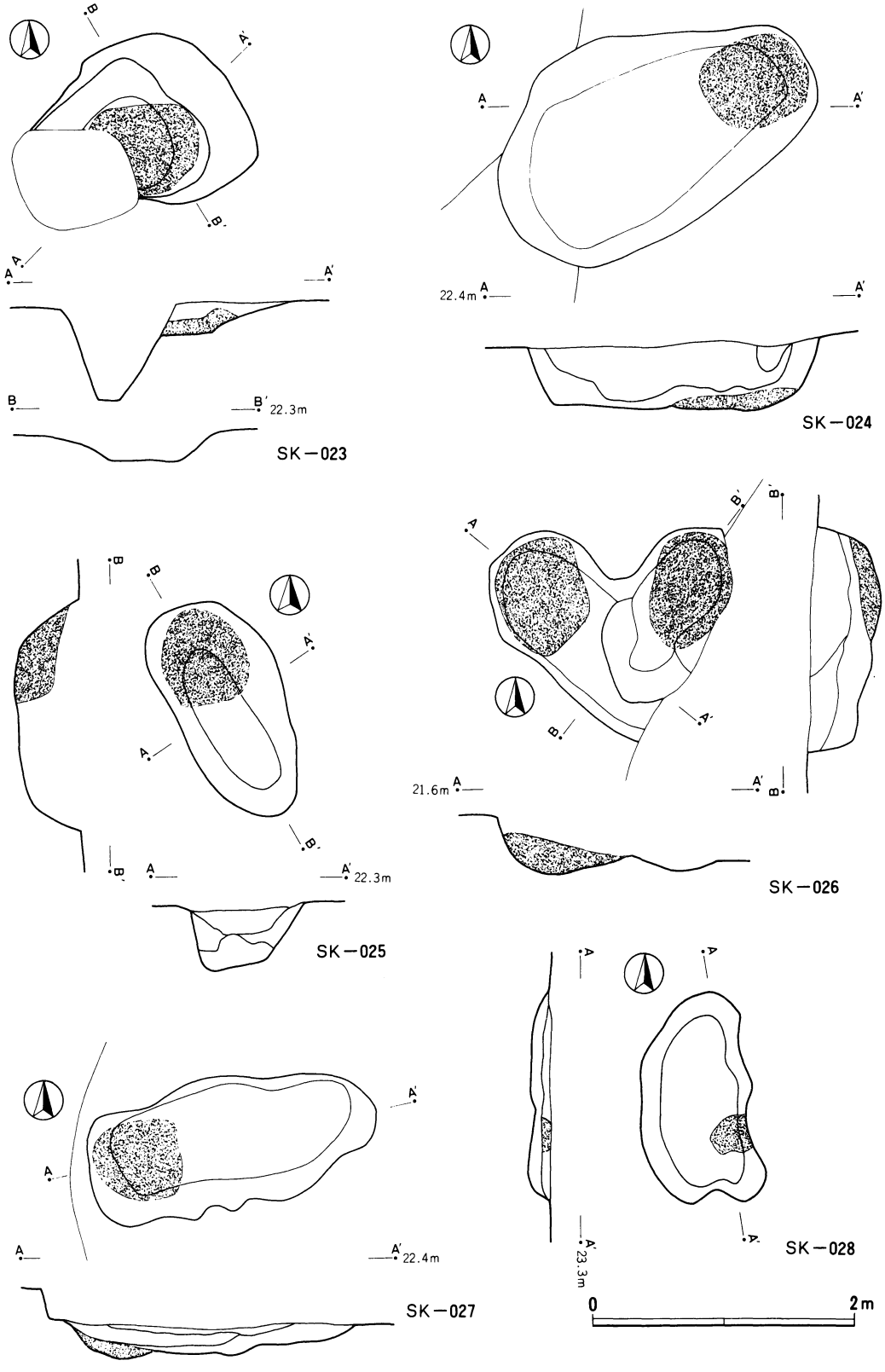
ＳＫ-023（第16図・図版６－２）　Ｌ24－10・M24－06区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-023に切られる。一部はＳＩ-023の柱穴によって完全に失われ、全体の形状は不詳であるが、不整楕円形を呈したようである。しかしこれも上部を破壊された結果かもしれない。遺存部の東西長1.75m、深さ0.23mを測る。中央に火床部が検出された。少量の縄文土器片を出土している。

ＳＫ-024（第16図・図版６－３）　Ｌ24－10区に位置する炉穴跡。ＳＩ-017及びＳＩ-018と重複するが、新旧関係は把握されない。北東－南西方向に主軸方位を持つ。長楕円形を呈し、長さ2.62m、幅1.62m。底面は比較的平坦で、検出面からの深さは0.4～0.5m。火床部は北東端に検出されている。数点の縄文土器片が出土したのみ。

ＳＫ-025（第16図・図版６－４）　縄文時代遺構群の南東端、M24-06区に位置する炉穴跡。北西－南東方向に主軸を持ち、長楕円形を呈する。長さ1.56m、幅0.86m。検出面からの深さは0.4～0.5m。底面に凹凸はない。火床部は北西端に検出された。遺物は縄文土器１点のみ。

ＳＫ-026（第16図・図版６－５）　縄文時代遺構群の北端、Ｌ23－14区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-022に切られる。そのため全体の形状は判らないが、少なくとも北東－南西方向、北西－南東方向の直交する主軸を持つ２基の重複である。新旧関係は判断されない。北西－南東方向の遺存長1.73m、北東－南西方向の遺存長1.66m、検出面からの深さは0.3～0.5mで、北東－南西に主軸を持つものの方がやや深く掘り込まれている。火床は北東端と北西端の２か所に検出された。少量の縄文土器が出土している。

ＳＫ-027（第16図・図版６－６）　Ｌ24－09区に位置する炉穴跡。ＳＩ-017と完全に重複するが、前述のように新旧関係は不明。ほぼ東西に主軸を置く不整長楕円形で、長さ2.25m、幅0.99m、深さ0.11～0.27mを測る。火床は西端にごく浅い窪みを伴って検出された。４点の縄文土器片が出土している。



第16図　炉穴跡２（1/50）

ＳＫ-028（第16図）　Ｌ24－10区に位置する炉穴跡。ＳＩ-018と重複するが、これについても新旧関係は判断されない。ほぼ南北に主軸を置いている。不整長楕円形を呈し、長さ1.50m、幅0.82m、検出面からの深さ0.14mを測る。南寄りに焼土が認められたが、火床はその位置かと思われる。縄文土器片23点が出土した。

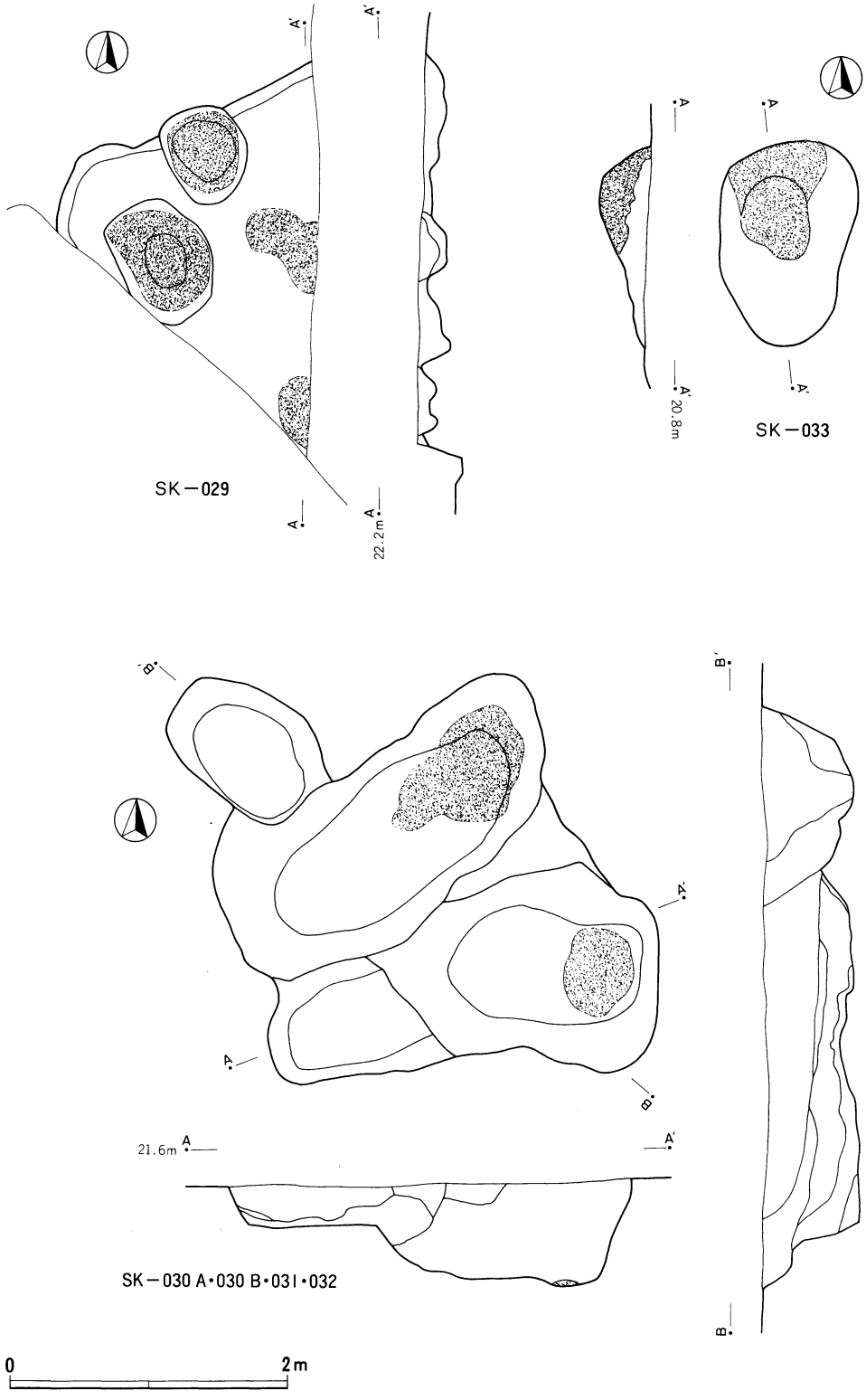
ＳＫ-029（第17図）　M23－21区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-025に切られ、さらに東側を撹乱坑によって破壊されて本来の形状は不明。遺存部分の最長2.54m、検出面からの最深0.21mを測る。火床は４か所に認められたが、どのような位置関係の重複なのかは判断できない。少量の縄文土器片が出土している。

ＳＫ-030Ａ・030Ｂ・031・032（第17図・図版６－７）　Ｌ23－16・21区に位置する炉穴跡。不整楕円形、不整長楕円形を呈する炉穴４基の重複と考えられ、火床を遺存しないＳＫ-030ＡとＳＫ-031が古く、ＳＫ-030ＢとＳＫ-032が新しい可能性が考えられるが、土層断面観察の結果からは明確に判断されない。ＳＫ-030Ｂの長さ2.34m、幅1.60m、ＳＫ-032の長さ1.87m、幅1.53m、深く掘り込まれたこの２基の最深は0.7m前後である。ＳＫ-030Ｂでは北東端、ＳＫ-032では東端に火床が検出された。主として火床を遺存する２基から多数の縄文土器が出土している。

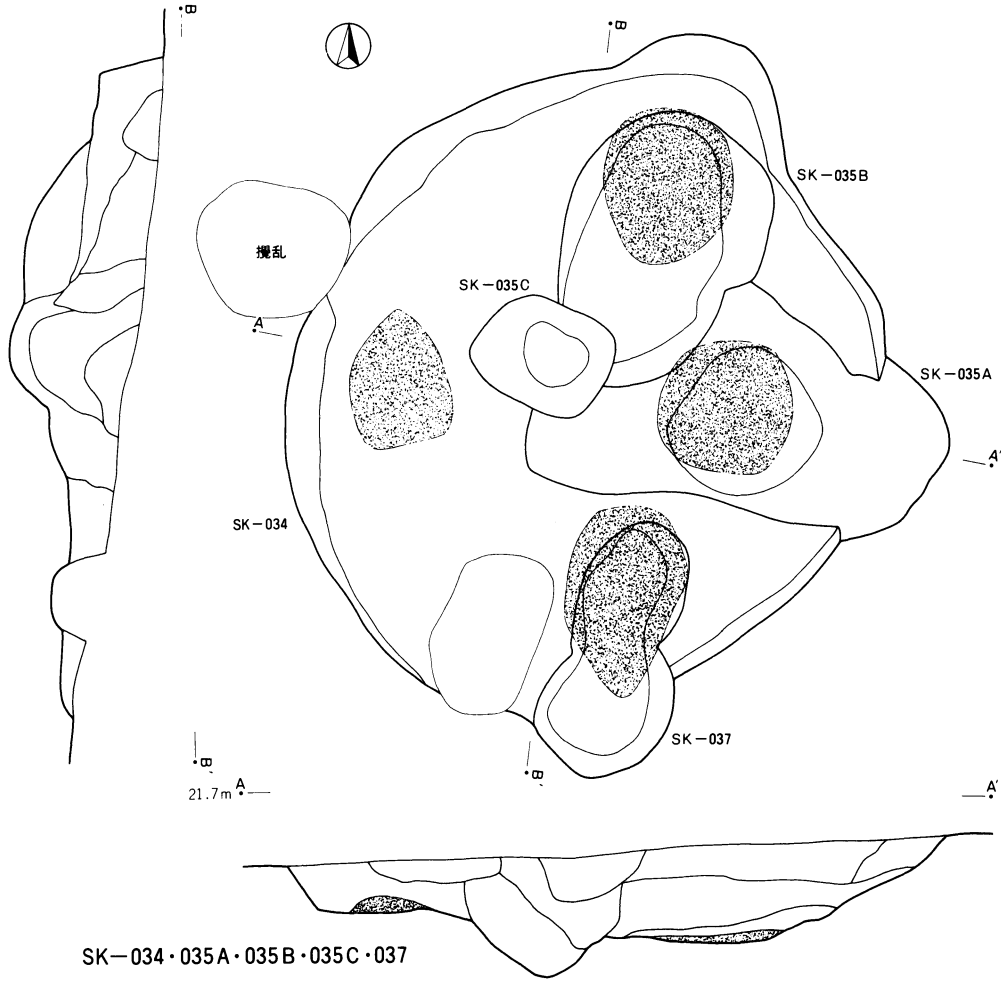
ＳＫ-033（第17図）　K24－05区に位置する炉穴跡。ほぼ南北に主軸を置く不整楕円形を呈し、長さ1.47m、幅0.94mを測る。底面は北に向かって傾斜し、北端に火床が認められた。検出面からの最深は0.23m。縄文土器１点が出土している。

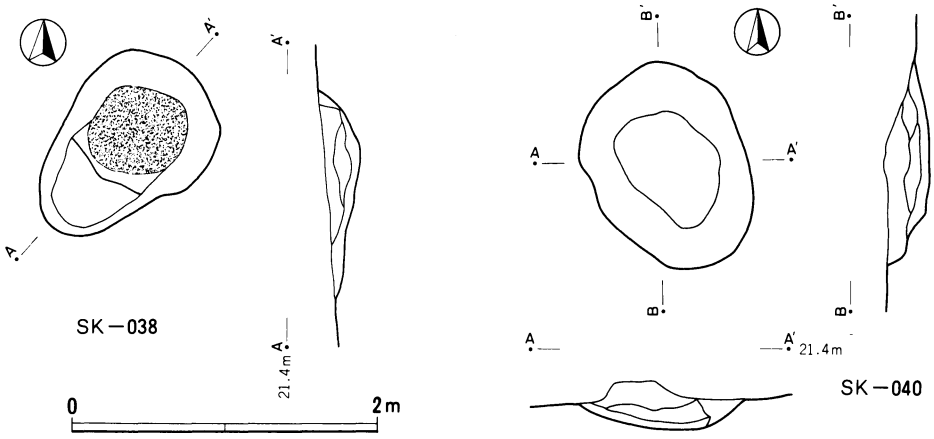
ＳＫ-034・035Ａ・035Ｂ・037（第18図・図版７－１・３）　縄文時代遺構群の南端、K24－13区に位置する炉穴跡。４基の重複と考えられる。ＳＫ-034は大きな楕円形の掘り込みとして把握されている。長径4.57m、短径3.87mで、最深0.51m。火床は西壁近くにあるものが該当するか。ＳＫ-035Ａ・ＢはＳＫ-034の東寄りに重複する一群で、ＳＫ-035Ａは不整長楕円形を呈し、ほぼ東西に主軸を置く。遺存長2.20m、幅1.12mで深さは0.60m。中央に火床を持つ。ＳＫ-035Ｂはほぼ南北に主軸を置く楕円形のもので、遺存長1.56m、幅1.32m、深さ0.42m、北端に火床を持つ。ＳＫ-037はＳＫ-034の南端に重複するもので、ほぼ南北方向に主軸を置く瓢形を呈し、遺存長1.71m、幅0.60m、検出面からの深さ0.23mを測る。火床は北側に認められた。なおこれらの炉穴群からは多数の縄文土器が出土している。

ＳＫ-036（第19図・図版７－２）　Ｌ24－03・08区に位置する炉穴跡。多数の炉穴の重複であり、複雑に掘り方が交錯する。ここでは任意にＳＫ-036Ａ～Ｇの番号を与えるが、勿論７基の重複であるかどうかは明確ではない。ＢとＦを結ぶ長軸長5.09m、ＡとＣを結ぶ短軸長3.90mを測る。土層断面より最も新しく掘り込まれていると判断されるのがＡである。西端に火床を持つ。ＣはＡに切られるが、Ｂよりは新しい。東端に火床を持つ。南側のＤ～Ｇの一群は土層断面からは新旧関係が判断されない。連続的、継起的に営まれ続けたものか。Ｆの火床はＥ



第17図　炉穴跡3 (1/50)





第18図　炉穴跡４（1/50）

の掘り方に切られ、またEの火床が失われていることからおそらくDに切られている。南西縁にある火床はDのそれであろうか。これらの炉穴群からも多数の縄文土器が出土している。

ＳＫ-038（第18図・図版７－４）　Ｌ24－07区に位置する炉穴跡。北東－南西方向に主軸を置き、小規模な不整楕円形を呈する。長さ1.35m、幅0.94m、検出面からの深さは0.27mを測る。掘り込みは北東側が深く、そこに火床が設けられている。出土遺物はない。

ＳＫ-039（第19図・図版８－１）　Ｌ24－02区に位置する炉穴跡。ほぼ東西方向に主軸を置く歪な瓢形を呈する。長さ2.90m、幅2.47m、検出面からの深さ0.6～0.7mを測る。底面は比較的平坦で、火床は東端に設けられている。遺物としては縄文土器20点程が出土した。

ＳＫ-040（第18図・図版８－２）　Ｌ24－12区に位置する炉穴跡。南北にやや長い楕円形を呈し、長軸長1.33m、短軸長1.04m、検出面からの深さ0.22mを測る。火床は明確ではなかったが、炉穴跡に通有の焼土を混入した暗黄褐色の覆土を持ち、縄文土器（個体番号29）がまとまって出土している。

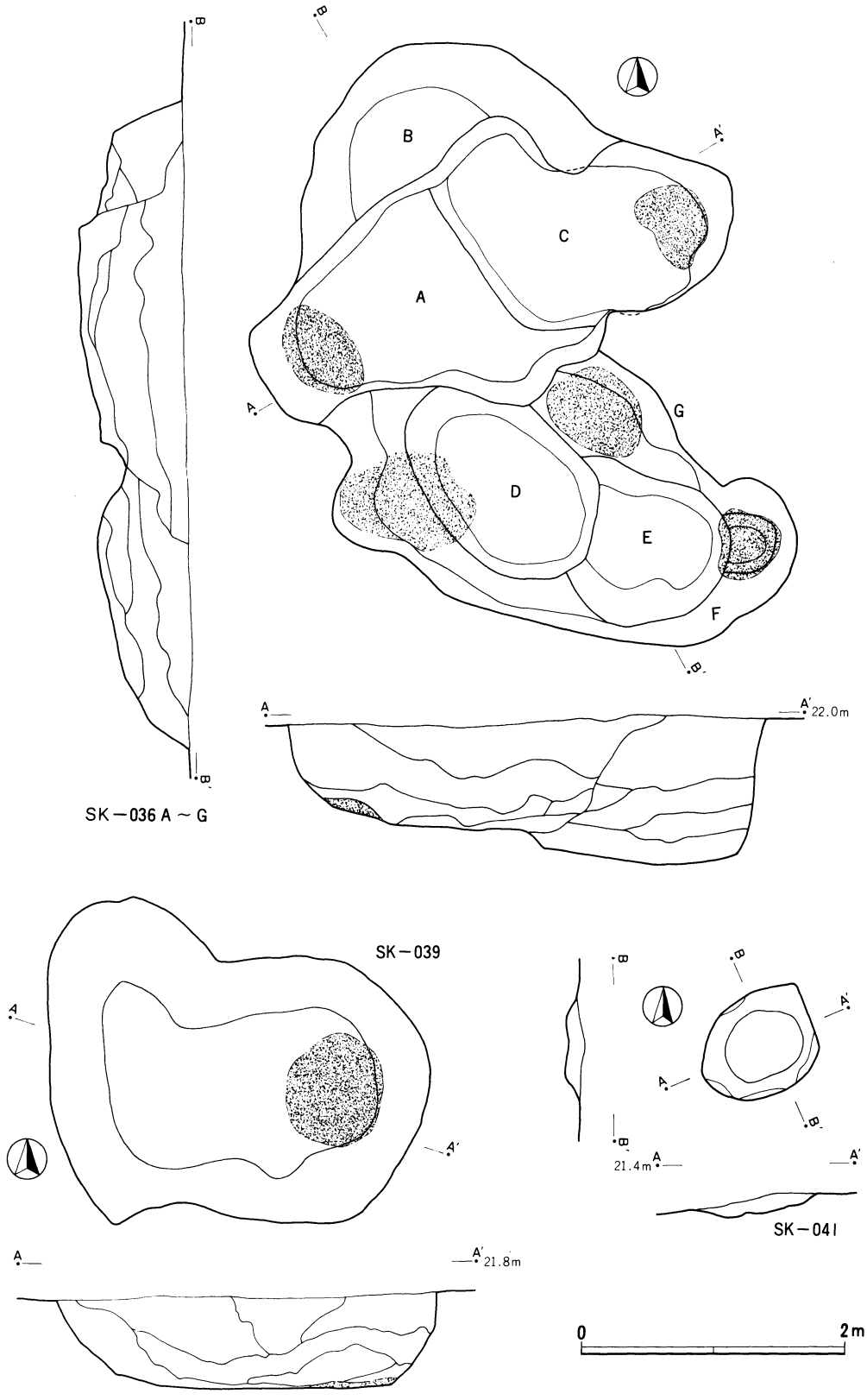
ＳＫ-041（第19図・図版８－３）　Ｌ24－06区に位置する炉穴跡。小規模な楕円形を呈し、長軸長0.93m、短軸長0.75m、検出面からの深さ0.27mを測る。この遺構も火床は明確ではないが、覆土が炉穴跡に通有のもので、少量の縄文土器が出土している。

ＳＫ-042（第20図・図版８－４）　Ｋ23－25・Ｋ24－05区に位置する炉穴跡。複雑な形状を示すが、４基前後の炉穴の重複であろうと思われる。西側のほぼ南北に主軸を持つもの、東側のほぼ東西に主軸を持つ２基の計３基の存在は明らかで、東からＳＫ-042Ａ・Ｂ・Ｃとする。新旧関係は明確には判断されないが、Ｃが最も古い可能性がある。それぞれに２か所の火床が認められ、また全体は扇形に展開しており、ある程度の期間営まれ続けた結果の姿か。多量ではないが、やはり縄文土器がまとまって出土している。

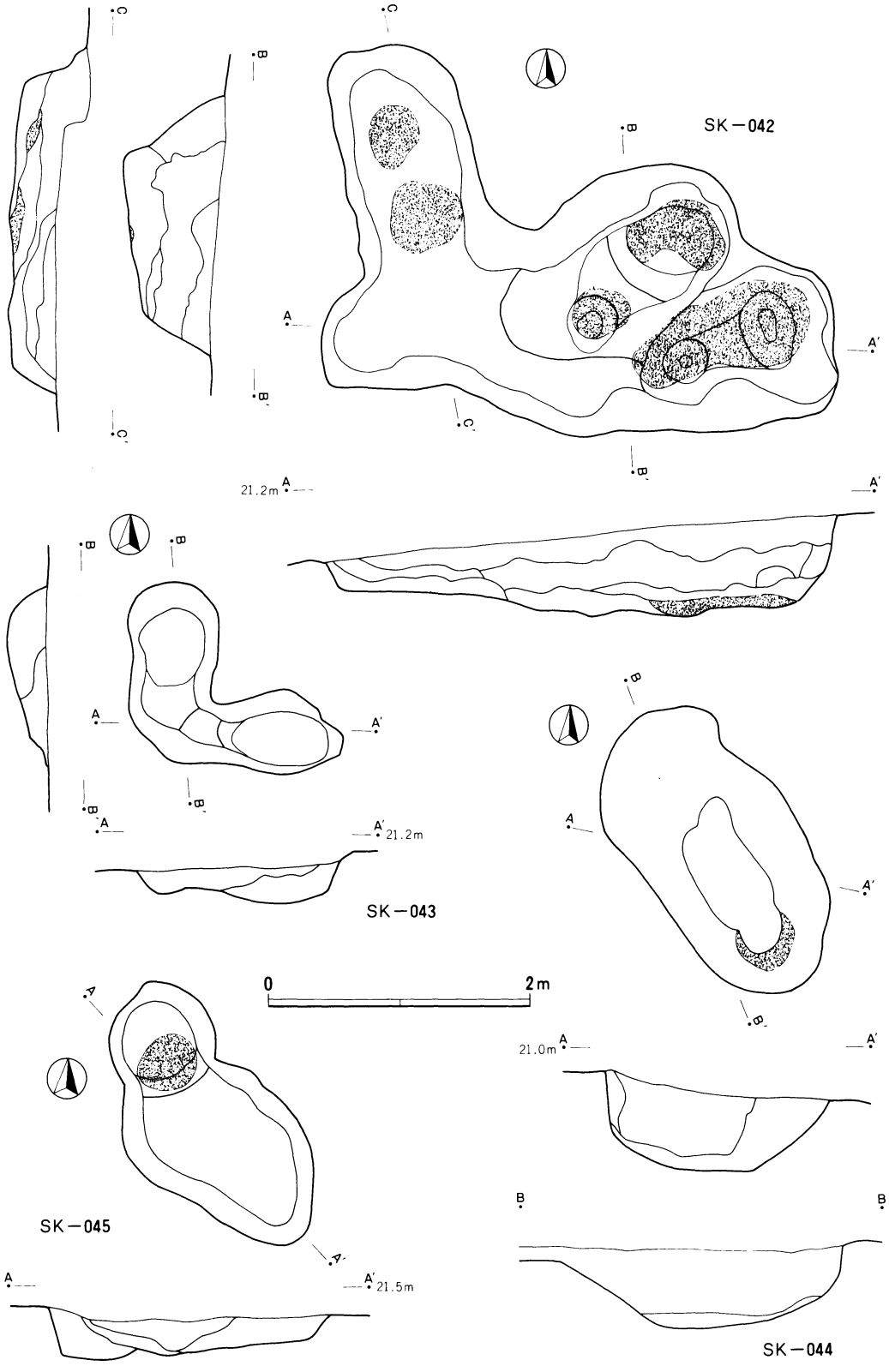
ＳＫ-043（第20図・図版８－５）　Ｋ23－20区に位置する炉穴跡。「く」字形に屈曲する形状を持つが、おそらく南北に主軸を置くものと東西に主軸を置くものの重複の結果であろう。南北長1.36m、東西長1.67m、検出面からの最深は0.33mを測る。平面プラン自体北側と東側に膨らみを有するが、その部分が深く掘り込まれており、明確な痕跡こそ残さないものの、火床の位置を示すものであろう。遺構内での遺物出土量は少ない。

ＳＫ-044（第20図・図版８－６）　Ｋ23－19・20区に位置する炉穴跡。北西－南東方向に主軸を置く不整長楕円形を呈し、長さ2.18m、幅1.21m、検出面からの深さ0.80mを測る。火床は南東端に認められた。遺物量は少なく、縄文土器１点と黒曜石剝片等が出土している。

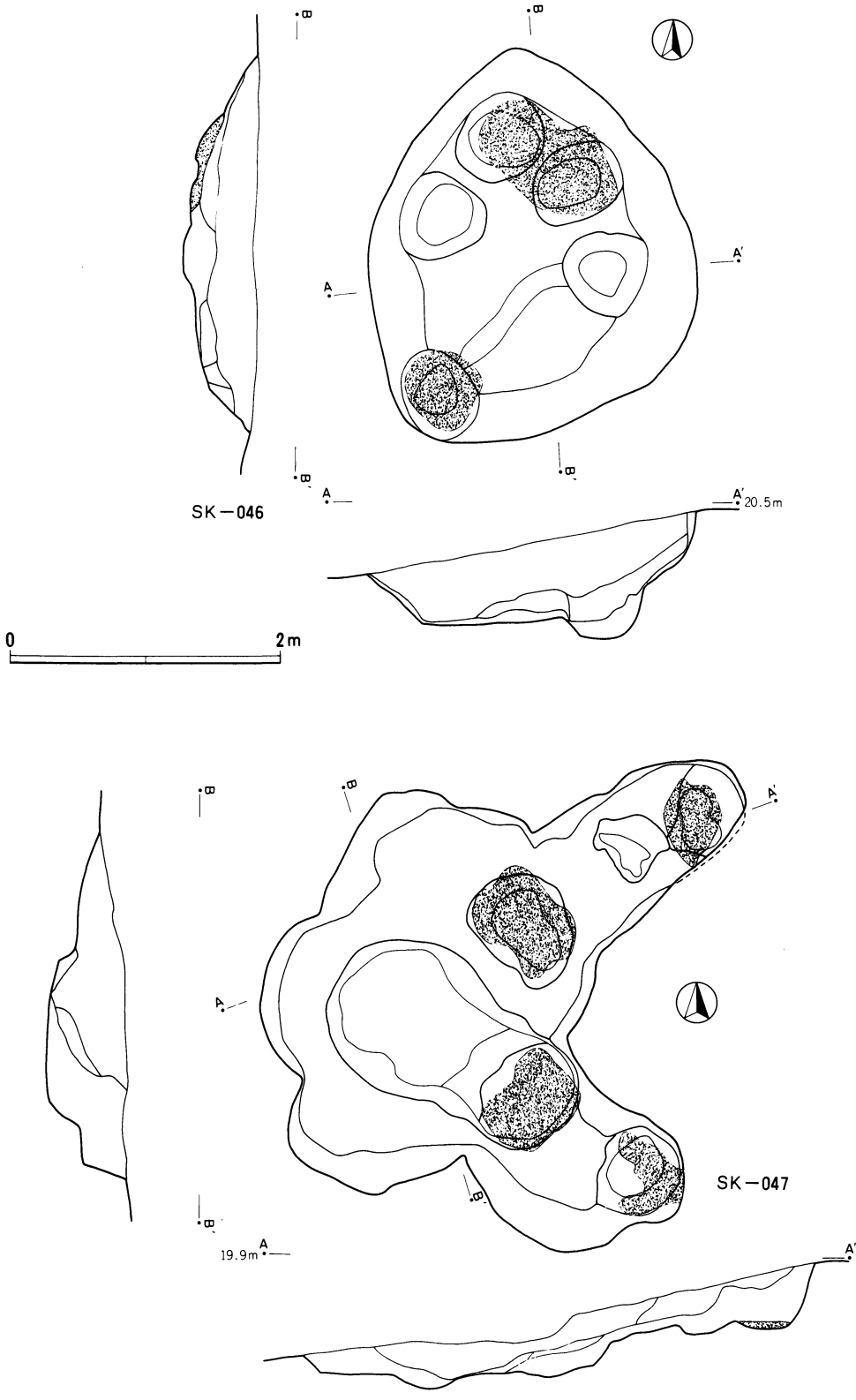
ＳＫ-045（第20図・図版８－７）　Ｌ23－21区に位置する炉穴跡。北西－南東方向に主軸を置く不整長楕円形を呈する。長さ2.20m、幅1.14m、検出面からの深さ0.2～0.4m。北西端に若干深く掘り込まれた部分があり、そこに火床が認められた。遺構内からは遺物は出土していないが、土器、石器等の分布域のほぼ中央に位置する。



第19図　炉穴跡５（1/50）



第20図　炉穴跡６（1/50）

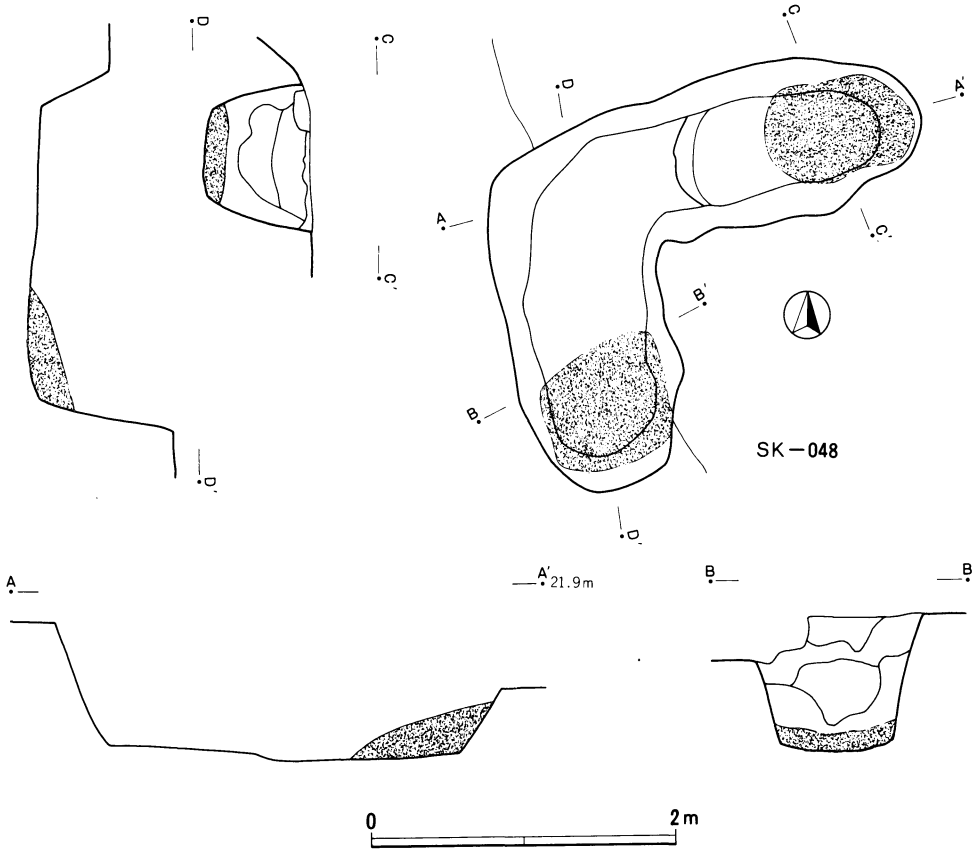


第21図　炉穴跡７（1/50）

ＳＫ-046（第21図・図版８－８）　K23-19区に位置する炉穴跡。南側でＳＫ-047と接する。全体は不整楕円形を呈し、長軸長2.94m、短軸長2.46m、検出面からの最深は0.95mを測る。底面には５か所に浅い窪みがあり、南側の窪みと北側の二つの窪みに跨がって火床が２か所に認められた。遺物量は多くはないが、縄文土器、黒曜石製の剝片等が出土している。

ＳＫ-047（第21図・図版８－９）　K23－19区に位置する炉穴跡。全体は「く」字形に屈曲する形状を示すが、４基の炉穴の重複の結果と考えられる。火床も４か所にあり北東－南西方向に主軸を持つ２基と北西－南東方向に主軸を持つ２基が存在、ただ土層断面等からは新旧関係の判断はできない。北東－南西方向の長さ4.30m、北西－南東方向の長さ3.54m、検出面からの最深は0.60mを測る。遺構内からは多量の遺物が出土しており、特に中央から南東寄りに土器が集中した。

ＳＫ-048（第22図・図版８－10）　L23－17区に位置する炉穴跡。古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-035及び土坑ＳＫ-119に切られる。形状は「く」字形に屈曲しており、ほぼ東西に主軸を持つものとほぼ南北に主軸を持つものの支点を同じくした重複であろう。新旧関係は判断されず、連続的に営まれていたものと思われる。東西長2.99m、南北長2.31m、検出面からの最深0.93



第22図　炉穴跡８（1/50）

mを測る。２基の間に掘り込みの深さの差は基本的にない。火床は東端と南端に認められた。少量の縄文土器片が出土した。

3　遺物の分布

土器の分布（付図２・第23図～第25図）　土器片の出土量は多い。当遺跡の中心的な時期である鵜ガ島台～茅山下層式土器と判断される破片のうち、胴部下半の破片や文様を持たない土器の胴部破片など（むしろそれらが膨大な量になるが）は個体識別から除外せざるをえない。ここでは文様を持つ土器と条痕だけを施された土器で大きく復原されるものや口縁部破片を対象として個体識別を行い、それらの分布を図上に示した。

炉穴群の分布を見ると、K23区南東隅・L23区南西隅からL24区北半部にかけての台地南西縁に沿うように最も多くの遺構が並び、調査区の中央にあたるM23区からM24区に６基、調査区の北部にあたるL23区の南寄り央部に２基が分布する。付図２を見れば明らかなように、鵜ケ島台～茅山下層式土器の分布は遺構群の分布と相関関係を有することは疑いえない。土器の濃密な分布域はやはり遺構が多く分布する台地南西縁に存在するうえ、遺構内あるいは遺構周辺に集中分布する個体もかなりの数にのぼる。土器の集中分布が見られる遺構を列挙するとつぎのとおりである。

ＳＫ-022、ＳＫ-027およびＳＩ-017、ＳＫ-030・031・032、ＳＫ-035、ＳＫ-036、ＳＫ-039、ＳＫ-040、ＳＫ-047

他にも台地南西縁に分布する遺構には数点の土器が出土しているものがある。しかしM23区からM24区に分布する炉穴跡のうちＳＫ-022を除く５基、L23区央部の２基とその付近の土器の分布は希薄かまたは殆ど分布せず、少なくとも個体識別の対象になった土器は遺構内から出土していない。むしろ遺構分布の空白域であったL23区の南東部に若干の土器片が分布していた。ここで遺構内に集中分布した土器の個体番号を遺構毎に列挙しておく。

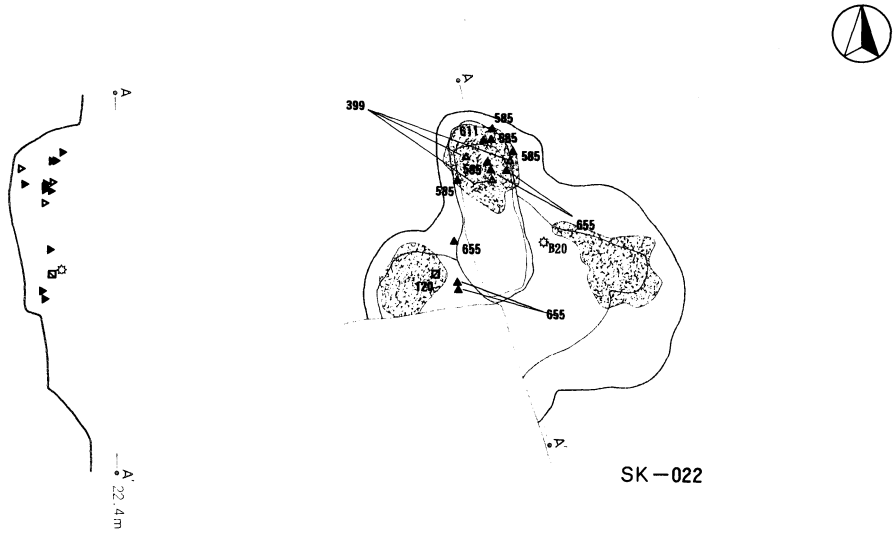
ＳＫ-022：120、399、585、611、655、B20、これらは遺構の南寄りからＳＩ-023に切られた部分にかけて出土した

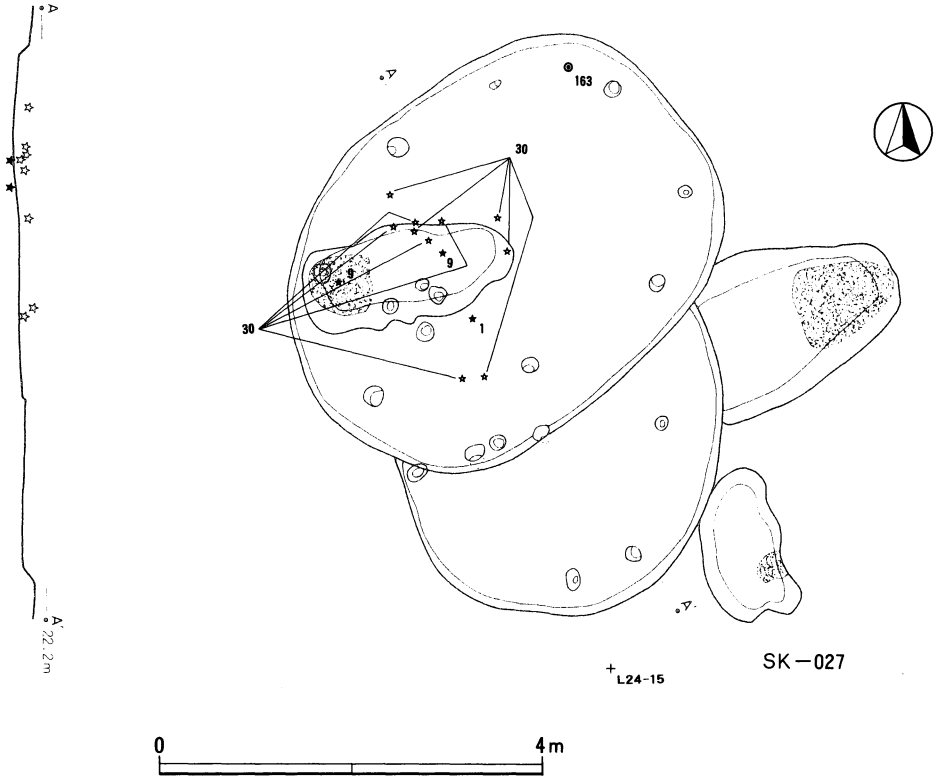
ＳＫ-027・ＳＩ-017：９、30

ＳＫ-030・031・032：ほぼ中央、ＳＫ-030BからＳＫ-032にかけて非常な密度で土器が分布、35、68、84、103、104、116、130、131、151、166、190、195、215、229、253、265、287、301、304、357、402、404、445、450、467、487、504、540、583、586、591、656、658、B12、B14、B15、B23が出土した

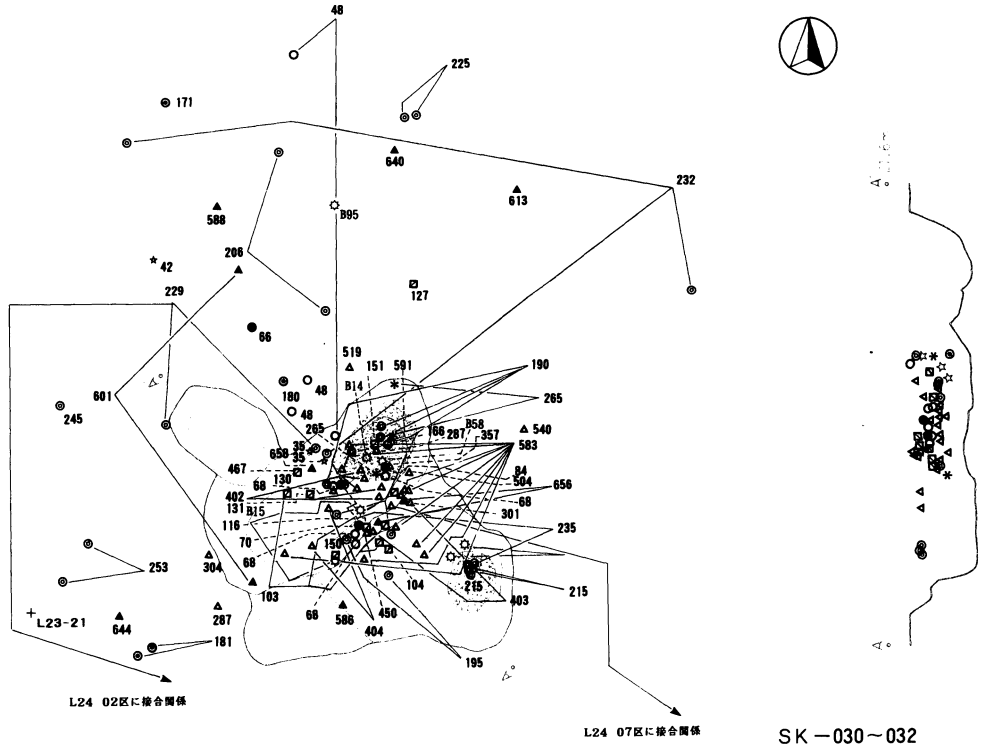
ＳＫ-035：401、420、これらはＳＫ-035Bから出土した

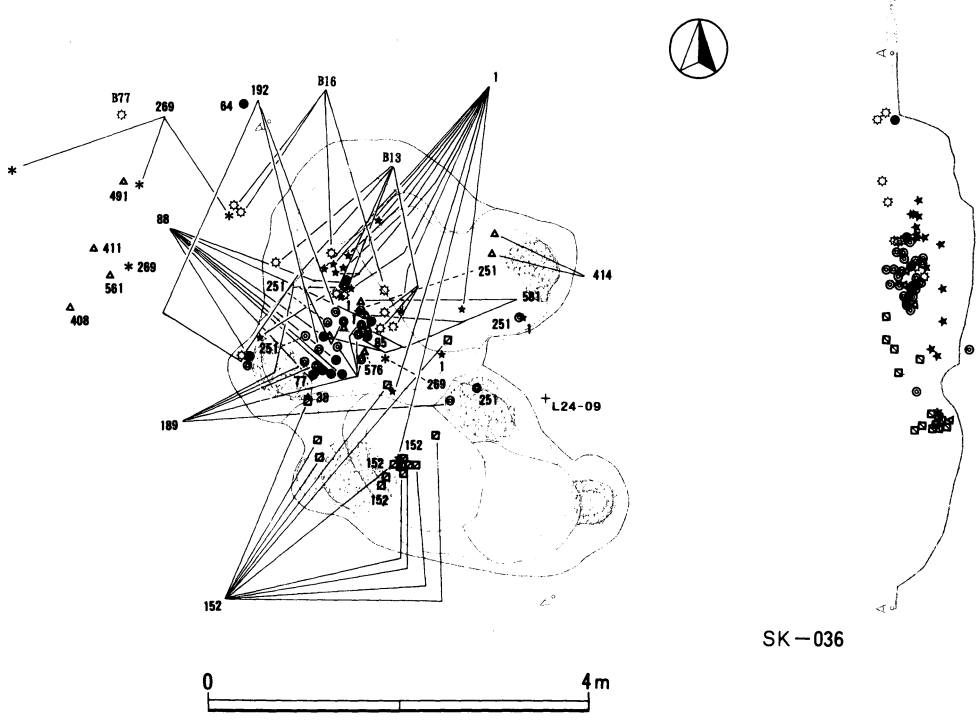
ＳＫ-036：最も新しく掘り込まれていると考えられるＳＫ-036Aに最も集中し、１、38、88、189、192、251、269、657、B13、B16が出土、これらのうち269とB16が



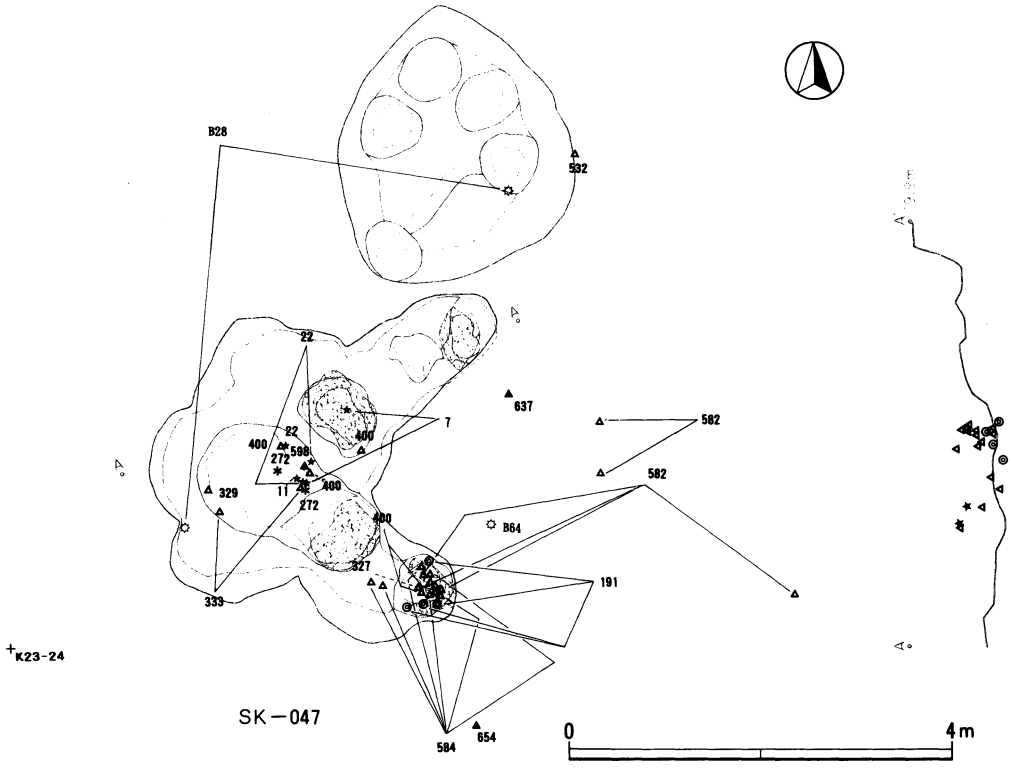


第23図　炉穴内遺物出土状況１(1/80)





第24図　炉穴内遺物出土状況２(1/80)



第25図　炉穴内遺物出土状況３(1/80)

遺構外にも分布し、また036Ｃには414、Ｂ55が、036Ｄには152が分布した

ＳＫ-039：28、154、285、325、これらのうち28以外は遺構外に接合関係があり、また当遺構からの出土ではないが、北側には286が拡散していた

ＳＫ-040：29、122

ＳＫ-047：南東端の火床付近に191、327、400、582、584、中央付近に７、11、22、272、329、333、598、B28、これらのうち400は南東端と中央部に接合関係があり、またＢ28はＳＫ-046との間に接合関係がある

中には炉穴の火床で用いられたと思われる出土状態を示すものがあるが、ＳＫ－030～032やＳＫ-036のようにきわめて多数の個体が集中している場合、すべてが炉穴内において使用されていた状態で出土したとは考え難い。いずれにしても台地南西縁の土器集中域は、後述する石器、礫の分布と合わせ、集落廃絶前後に遺物廃棄空間として機能したと考えることが可能であろう。なお、出土遺物の項で説明する土器の分類毎に分布を見ても、特定の分類の土器が特徴的な分布傾向を示すことはなかった。

最後に鵜ガ島台～茅山下層式土器以外の土器の分布について列挙しておく。早期撚糸文土器がＫ23区南東隅、子母口～野島式土器の可能性がある無文の土器がＫ23－25区とＬ24－06区の２か所を中心に、野島式土器がＬ23－13区に１点とＳＩ-030及びＳＫ-058の覆土中から、浮島

式土器がK23区・L23区の南部からK24区・L24区の北部にかけて、縄文中期の土器がK24－5・10区からそれぞれ出土した。

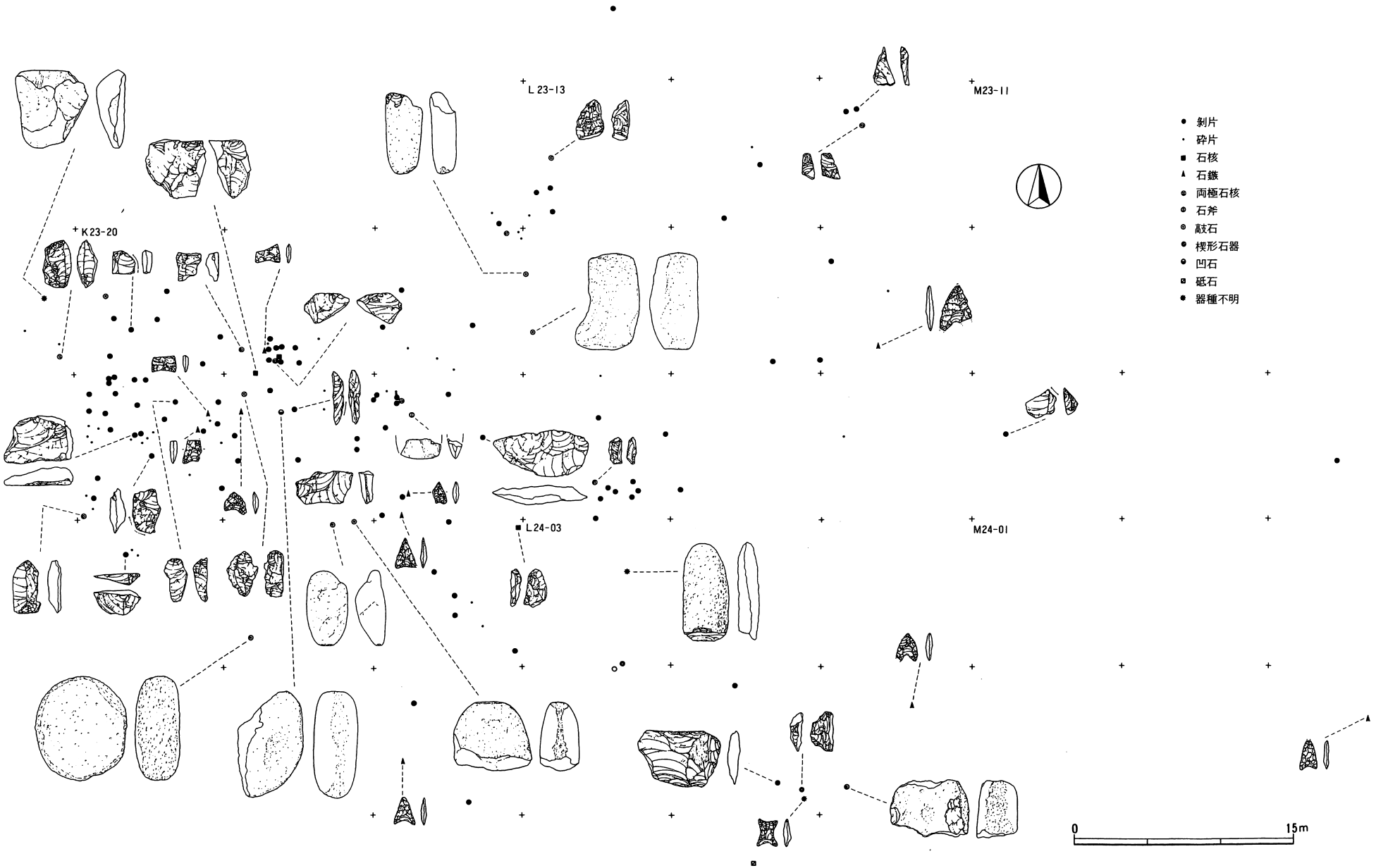
石器・礫の分布（第26図～第27図）　石器の分布もK23区南東隅からL24区北半にかけて濃密に分布し、土器の分布と概ね合致する傾向を見せる。勿論遺物の性格上、特定の炉穴跡に集中することはあまりない。そのなかでSK－030～032にだけは石鏃1点及び黒曜石製剝片等が集中しており、炉穴廃絶後に廃棄行為が行われたことを示している。したがって全体の分布傾向とも併せ、遺跡に残された石器の多くの帰属時期は炉穴群や土器と同時期ということになろう。遺物自身についてはまた後に触れるが、当遺跡出土石器の多くを占めるのが、黒曜石を素材とした剝片等である。石核、両極石核なども含まれ、それら総体としては剝片石器生産の産物としての可能性が強い。しかしそれら剝片、砕片、石核等が特に顕著な集中地点を形成してはおらず、定型的な石器としての石鏃の未製品と判断されるものがわずか1点しかないことなどから、遺跡内に石器生産の場を特定することはできない。もし当遺跡で剝片石器生産が行われたとしても、それは遺跡廃絶直前ではないことは明らかであろう。また剝片石器以外の、石斧、凹石、敲石などの分布も炉穴群、土器の分布と一致するが、逆に特徴的な分布傾向も認められない。なお黒曜石製の石器については、いずれも比較的良質のよく似た黒曜石を使用しており、母岩別分類が困難なため断念した。

当遺跡の遺物包含層の特徴の一つとして、多量の礫・礫片（それも過半が焼礫）が分布していることが挙げられる。それらの濃密な分布域がやはり土器や石器のそれと合致するのは一目瞭然である。集計表において集計の対象とした礫638点のうち、368点が肉眼的に被熱痕の明瞭なものであった。実際に火熱を受けている割合はより多いと思われる。しかし礫の場合も、分布域の広大さに対して集中分布と言える程の箇所はなく、辛うじてSK－030～032とL23－23区の北部がそれに該当するかと言える程度である。しかもSK－030～032については石器の分布で見たように遺構廃絶後の廃棄行為による可能性が強い。よってこれらの礫の分布についても火熱を伴う使用の原位置を保つものではないと判断する。尤もこれらが他所から搬入されていることは考え難いから、いかなる生活行為の産物であるにせよ縄文時代早期後半の集落の占地の際に使用されたものであることも確かであろう。

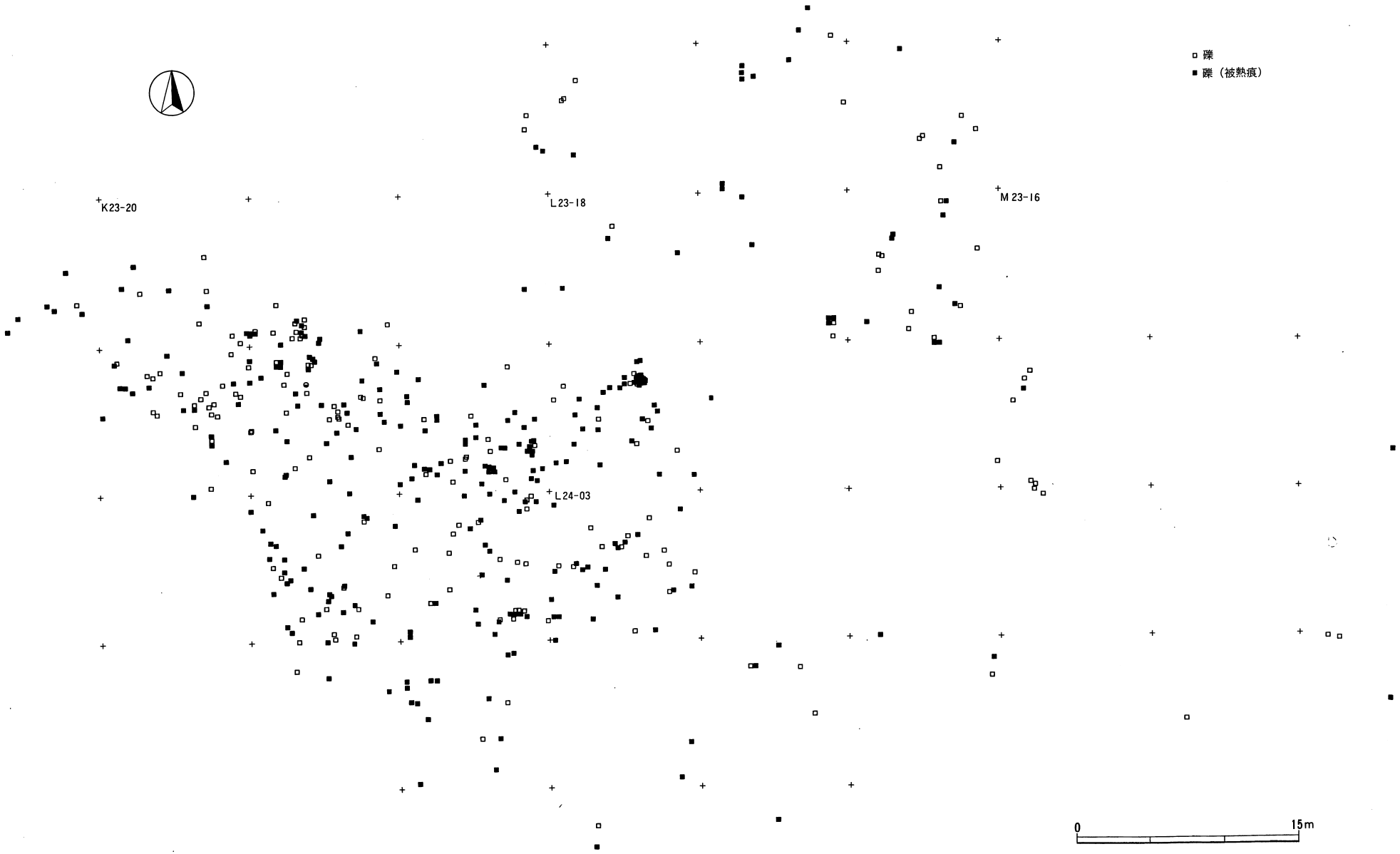
4　出土遺物

縄文土器（第28図～第45図・図版9～15）　出土土器は整理箱約50箱分である。大半は鵜ガ島台～茅山下層式土器のいわゆる条痕文系土器であり、それらを先に提示し、他については一部時期が前後するが後に一括して示すことにする。

条痕文系土器はすべて深鉢形土器によって構成される。器形は有段のもの（段が1段のものと2段のもの）とそうでないものがあるが、破片では全体の器形を想定できないものも多く、



第26図　縄文時代石器分布（1/300）



第27図　縄文時代礫・礫片分布（1/300）

ここでは文様による分類にしたがって記述する。なお既成の土器研究により細分された編年序列はあえて度外視して分類する。分類基準は以下のとおり。

A類　…　斜格子文を施す土器

A－1類：基本的に斜行する沈線のみによって文様を構成する

A－2類：斜行沈線の交差部分に竹管または貝殻による円形文を加えるもの

B類　…　沈線・連続刺突等と円形文・充塡文を組み合わせて文様を構成する土器

B－1類：斜行沈線と連結部の円形文により幾何学的区画文様を描き、沈線・刺突等の充塡文様を持つもの

B－2類：文様構成要素は1類と同様であるが、意匠はより自由で曲線も組み合わせる

B－3類：1類の区画沈線が細隆起線に置き換わったもの

B－4類：沈線ではなく連続刺突と円形文・充塡文を組み合わせるもの

B－5類：沈線あるいは連続刺突と円形文のみによって文様が構成され、充塡文を持たないもの

C類　…　沈線・連続刺突等と充塡文を組み合わせて文様を構成し、円形文を持たない土器

C－1類：沈線と充塡文により文様が構成されるもの

C－2類：連続刺突と充塡文により文様が構成されるもの

C－3類：連続刺突のみによって文様が構成されるもの

D類　…　沈線のみによって文様を構成する土器

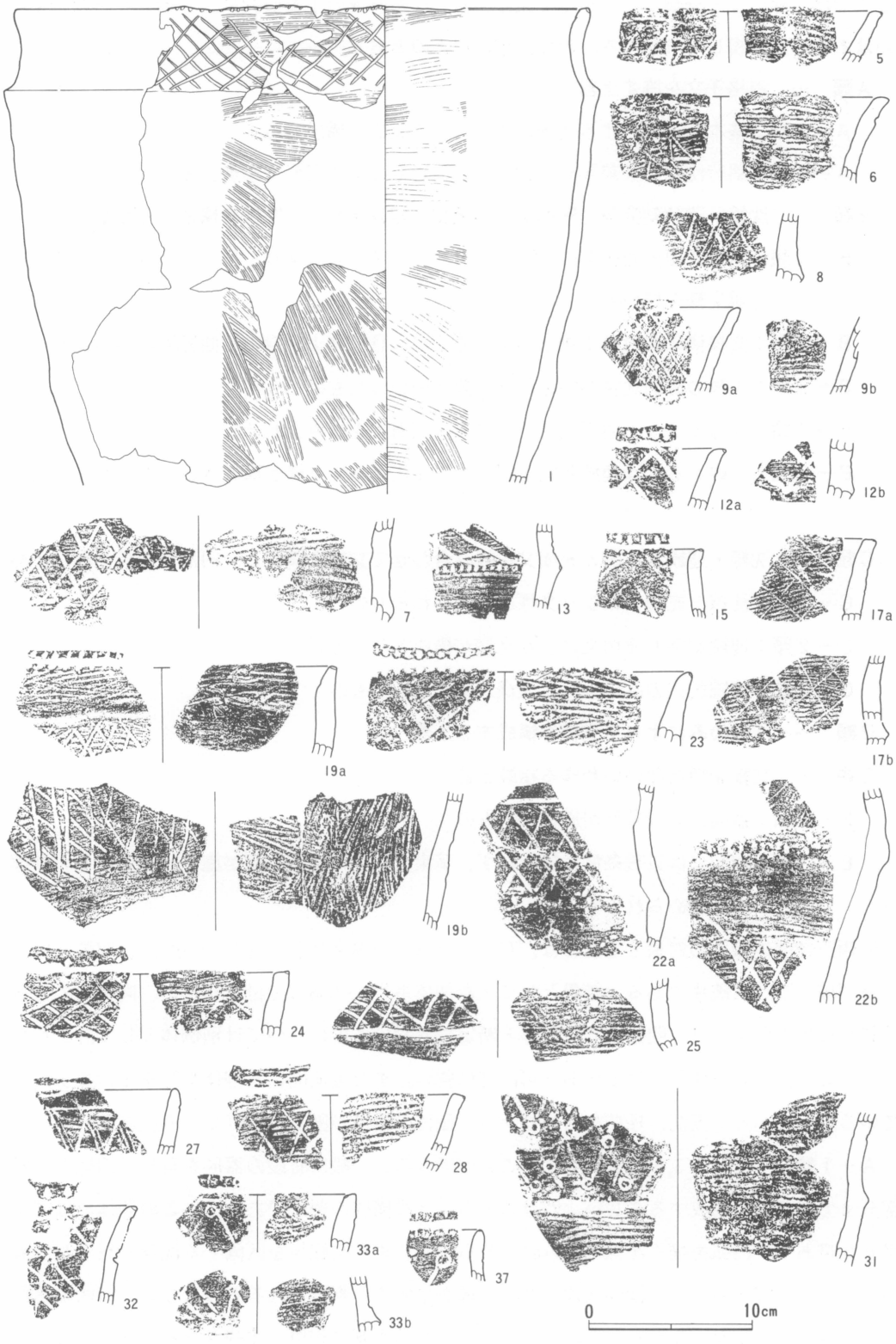
E類　…　文様を持たないいわゆる粗製土器

E－1類：器面に貝殻条痕が施されるもの

E－2類：器面には貝殻条痕は施されず、茎束状原体による条痕が施されるかあるいは擦痕が認められるもの

分類及び個体識別の対象としたのは、有文の土器片の過半(細かい破片を除く)、粗製土器の口縁部破片及び大破片である。結果として土器個体番号1～658まで付されたが、肉眼による個体識別には限界があり、明確に同一個体と断定できないものについては別個体として計上しているため、実際の個体数とは差がある可能性は強い。また実測図にも個体番号をそのまま付している。したがって実測、採拓を行わなかった個体の番号が図上で欠けている。為念。

A－1類(1～28)　1を典型例とすることができる。一般に有段の器形を有し、口縁部～段部分まで文様帯を構成するらしい。22はおそらく2段構成の器形であろう。この個体には文様帯も2帯あり、円弧を描く沈線も組み合わせられる。また文様帯を区画する沈線が見られるものに22、25、27がある。口縁部破片で波状口縁を呈すると判断されるものはない。口縁の端部はやや内そぎ状に面とりされたものが多く、殆どが外面側に刻目を連続させる。また段の屈曲部上にも13、22のように刻目を施す例がある。これらの土器は沈線のみによって文様を構成す



第28図　縄文土器１(1/4)

るという点ではD類と同じであるが、もしD類に含めた場合にはA－2類と全く異なる類型に属することになり、また斜格子文を施す土器が該期土器群の中で確固たる位置を占めることから独立した類型とした。

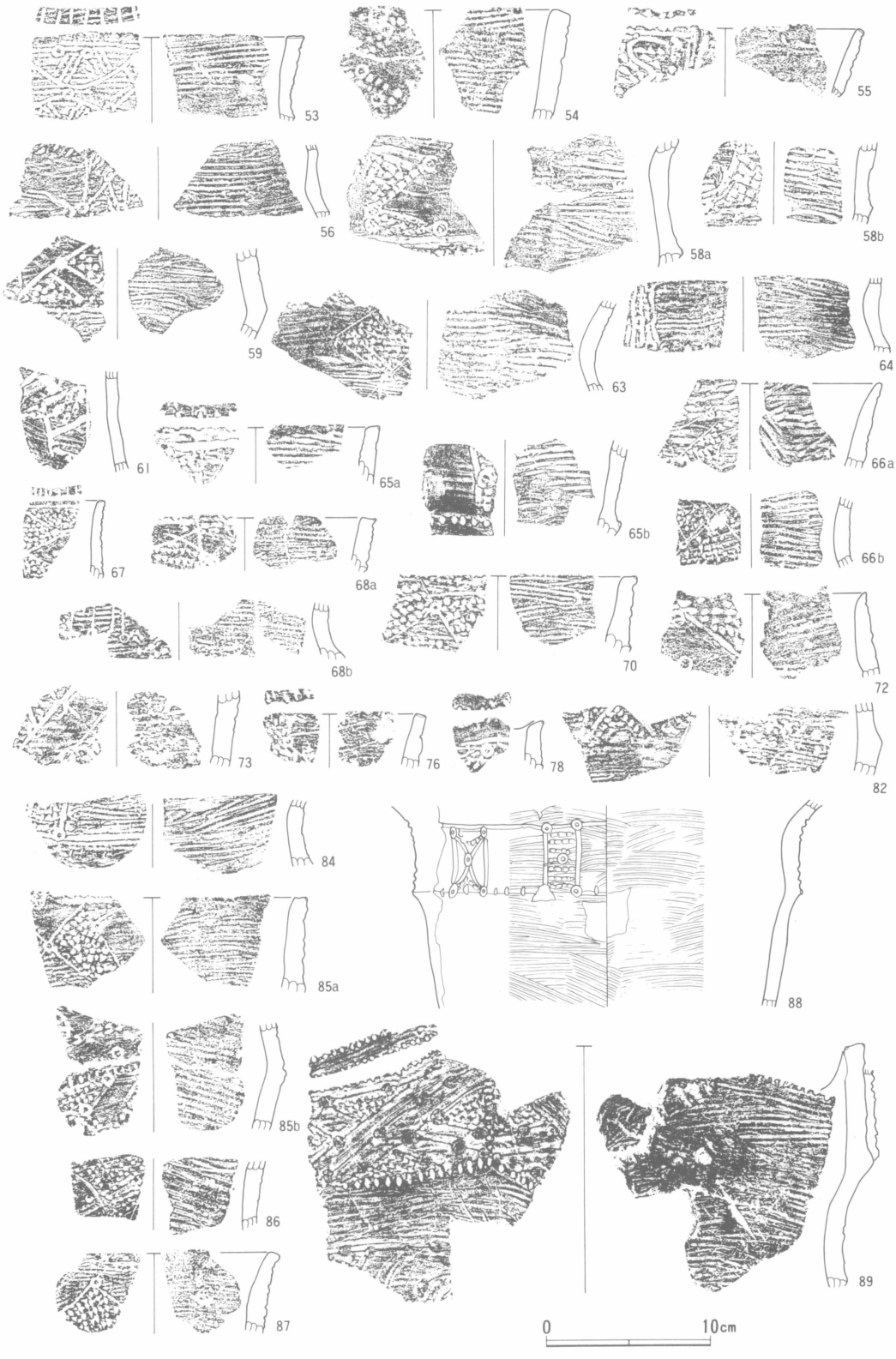
A－2類（29～44）　基本的にはA－1類に円形文を付加させたものと言える。器形がある程度復原されるものに29、30があるが、29は段を持たない単純な深鉢形で、文様も少し崩れている。また30はきわめて緩やかではあるが波状口縁を持ち、文様の単位も大きく、A－1類の斜格子文を祖型とすれば、これについても文様が変化していると言えよう。波状口縁を持つ個体には44もある。やはり一般的に口縁端部には刻目が施されるが、全般に見て器形、文様のバラエティーの振幅が大きく、また装飾的要素もやや多いと言えようか。

B－1類（45～49・59・68・73）　個体数は多くなく、また48以外は小片のみである。48は鵜ガ島台式土器の典型と言われるもので、緩やかな波状口縁と2段の屈曲を持ち、器形に対応した2帯の文様帯を有する。上下の文様帯に共通して、波頂部の下に縦位の沈線が4条走り、それ以外の場所には斜行する沈線による幾何学的区画文が描かれ、区画内を一つおきに沈線によって充塡する。沈線の連結部には竹管状工具を用いた円形文が施される。やはり口縁端部の外側には刻目が連続する。他の個体では47、49では沈線充塡であるが、45、46では刺突充塡が用いられている。

B－2類（50～58・60～67・69～72・74～88）　やはり沈線区画、円形文、充塡文によって文様が構成されるが、意匠は自由でバラエティーに富む。縦位に文様帯を横断する沈線の存在が明確でない。大きく見て3種を挙げることができる。第1は斜行沈線による区画の配置がより自由になるもの。三角形や方形の区画であることは変わらない。63、70、85など。第2は文様帯を縦位に横断する2条の沈線を描き、一部には中に「x」字状の沈線などを加えて充塡文を施すもの。56、64、84、88など。第3に弧文、鋸歯状文など曲線を交えた比較的自由な文様を描き、充塡文を施すもの。50～53など。50を見ると、沈線の描き方はかなり自由であるが、文様帯を斜行して横断する2条の沈線が定期的に現れるようであり、その点の原則は崩していない。器形は2段の屈曲を持つものが多いと思われる。小片が多いため明確に波状口縁を呈すると判断されるものが乏しい。これらB－2類はB－1類を祖型として派生した一群であることは明らかであろう。

B－3類（89）　1個体のみ。振幅の大きい波状口縁を持ち、2段の屈曲を有する。B－1類の沈線が細隆起線で表現されるもの。隆起線連結部等の円形文は竹管状工具ではなく、貝殻によって施される。口縁端部は内外面側双方に刻目を連続させ、文様帯下端の屈曲部にも刻目を持つ。上位の文様帯においては波頂部下には上に刻目を持つ隆帯があり、それを対称軸とする文様構成をとる。また下位の文様帯の波頂部下においては円弧状の隆起線で文様が描かれるらしい。

第29図　縄文土器２(1/4)



第30図　縄文土器 3 (1/4)

B－4類（90～102）　区画沈線が竹管状工具による押引状連続刺突となるものである。やはり2段の屈曲を持つ器形が多いと思われるが、大破片が少なく明断はできない。大きな波状口縁を有する90は波頂部下に円弧文を施す。上下の文様帯間の無文帯がほとんどなくなり、また口端に刻目を持たない。小さな波状口縁を持つ102は、波頂部下に3条の縦位連続刺突を施し、B－1類に共通する文様構成を見せる。充塡文は当然ながら刺突のみ。

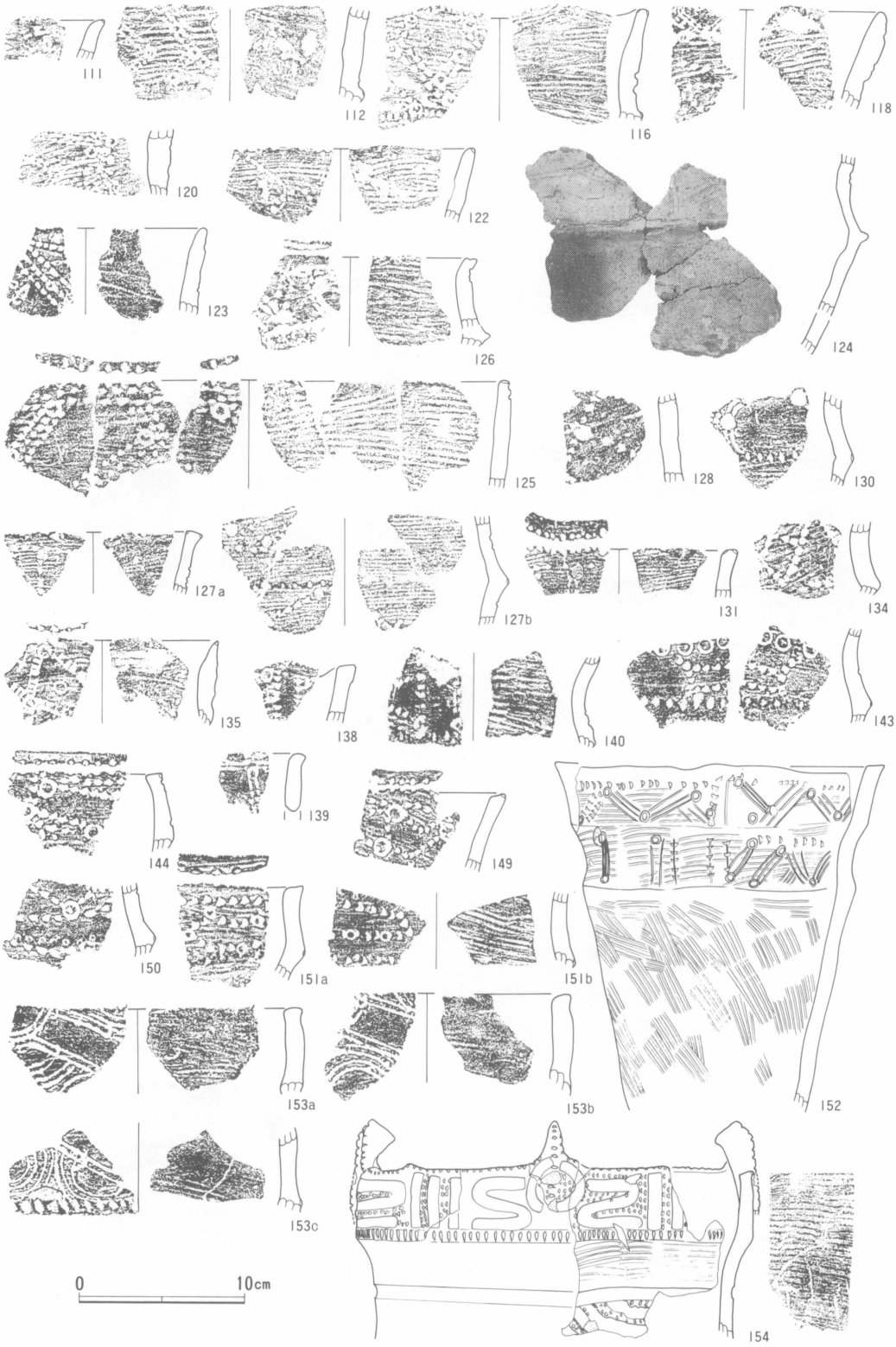
B－5類（103～153）　充塡文を持たないもの。器形としてはやはり2段の屈曲を持つものが一般的と思われる。口縁端部の形状も平坦か内そぎ状に面とりされたものが多く、大半は外面側に刻目を連続させるが、内面側にも刻目を持つものがある。ある程度器形が復原されている103、104、また小片ながら127に見られるように、上下位の文様帯間には殆ど無文帯がない。これらの中では沈線を用いて文様を描くものは希で、多くが連続刺突を用いて文様を描いている。104の場合、下位の文様帯は竹管状工具による円形文を随所に施しているのみである。152は3条を単位とする繊細な沈線と竹管による連続刺突を組み合わせる土器で、文様構成は単純であるが少々規則性に欠ける。153は半截竹管状工具による沈線で文様を描くやや特異なもの。文様帯の下端に刻目を施している。

C－1類（154～169）　沈線と充塡文を用いて文様を描く土器であるが、154、155の二者は幅広の沈線を用いる点に特徴がある。154は4単位の鶏冠状把手を持ち、把手の下部に円弧を、把手と把手の中間に縦位の3条の沈線を描き、さらにその間に「S」字状の沈線を描く。沈線間は刺突充塡で埋め尽くされ、文様帯下端に刻目が連続する。曲線文様が描かれるらしい下位の文様帯との間は幅広い無文帯がある。156以下についてはB－1、B－2類、特にB－2類とは円形文の有無を除いて酷似している。器形はおそらく2段の屈曲を持つものが一般的であろうが、ここでは小片が多く断言できない。169の屈曲は1段であるが、おそらく小型品であるためであろう。

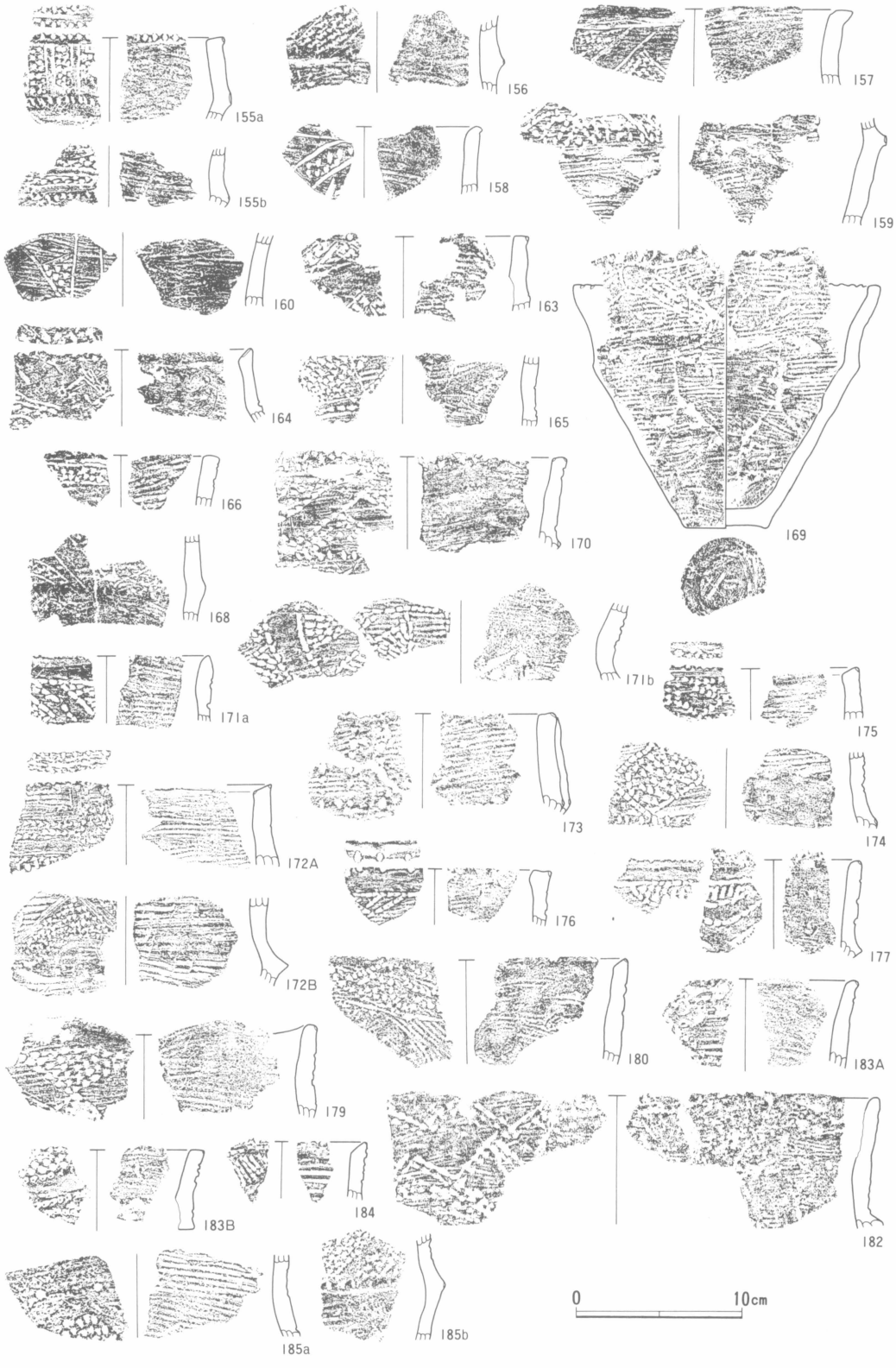
C－2類（170～188）　C－1類が沈線を用いたものであるのに対し、本類は連続刺突と充塡文により文様が描かれる。170、171のように斜行連続刺突による幾何学的文様を描くもの、182のように鋸歯状の文様を描くもの、183のように弧線を用いるものなどのバラエティーがあるが、それらの構成は既出の各類と基本的に共通するものである。器形についても181、188などから2段の屈曲をもつものが一般的と考えられ、口端や屈曲部上に刻目が施される点も同様である。

C－3類（189～262）　押引状の連続刺突のみによって文様が構成されるものである。やはり多くは2段の屈曲を有する器形であろう。文様は多様で、比較的個体数も多い。189は1段の屈曲を持つ器形で、文様は幅の狭い篦状工具によって縦横に連続刺突が施されている。また口端に刻目を持ち、屈曲部上にはない。この土器は251と共に、器形の上からはA－1類の1などに共通するように思える。また193、200は連続刺突が斜格子状をなしているようで注目される。

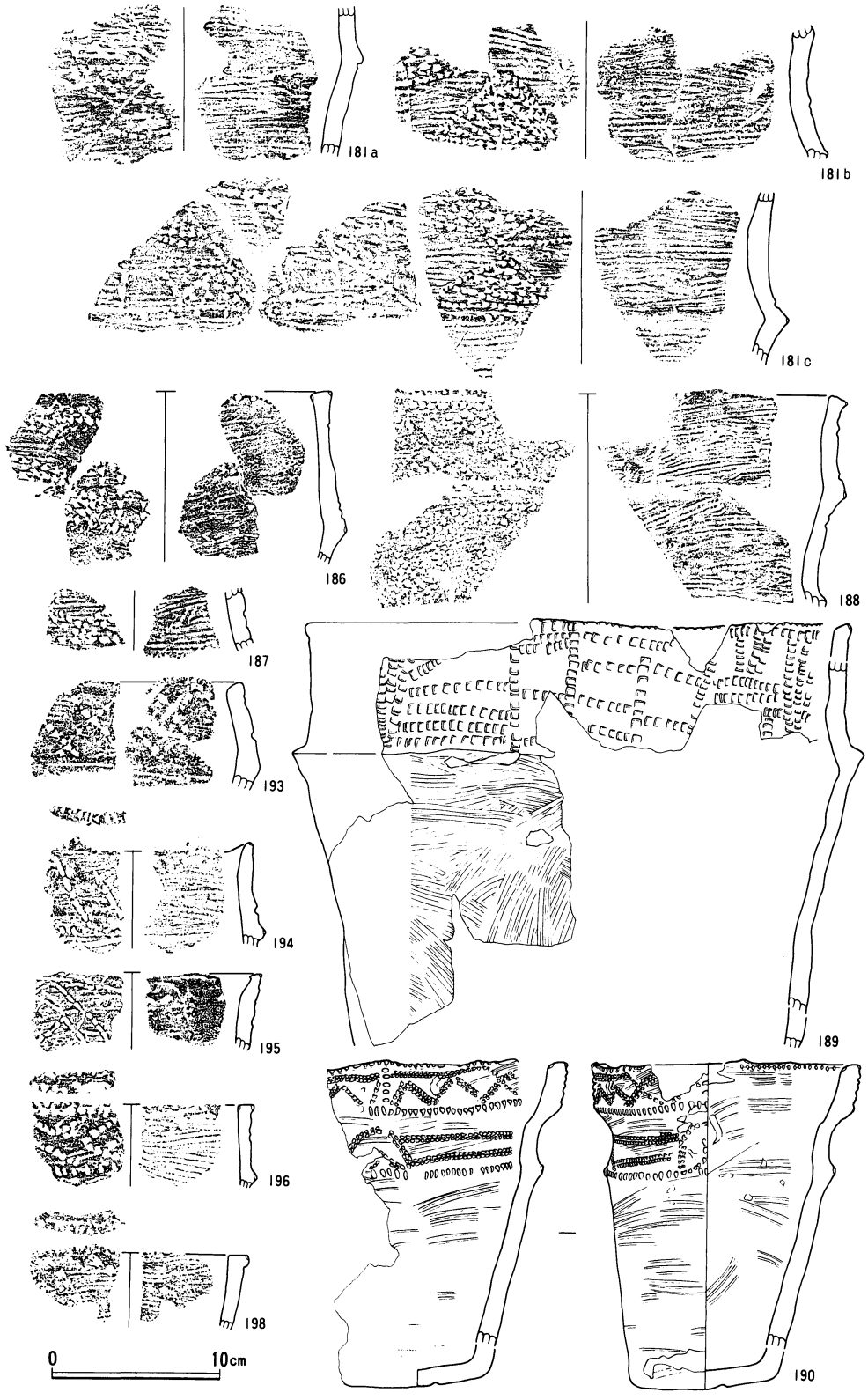
第31図　縄文土器 4 (1/4)



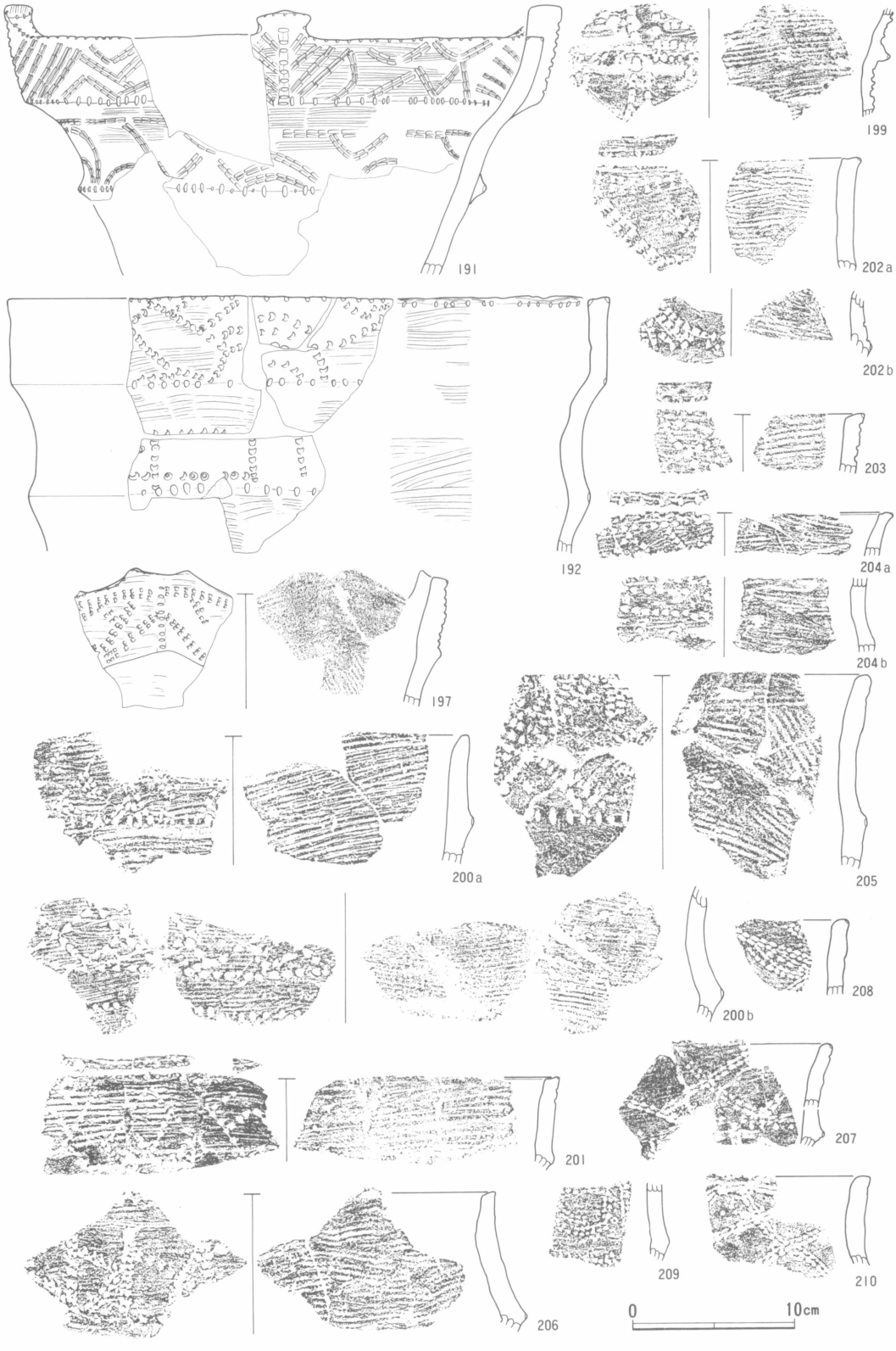
第32図　縄文土器 5 (1/4)



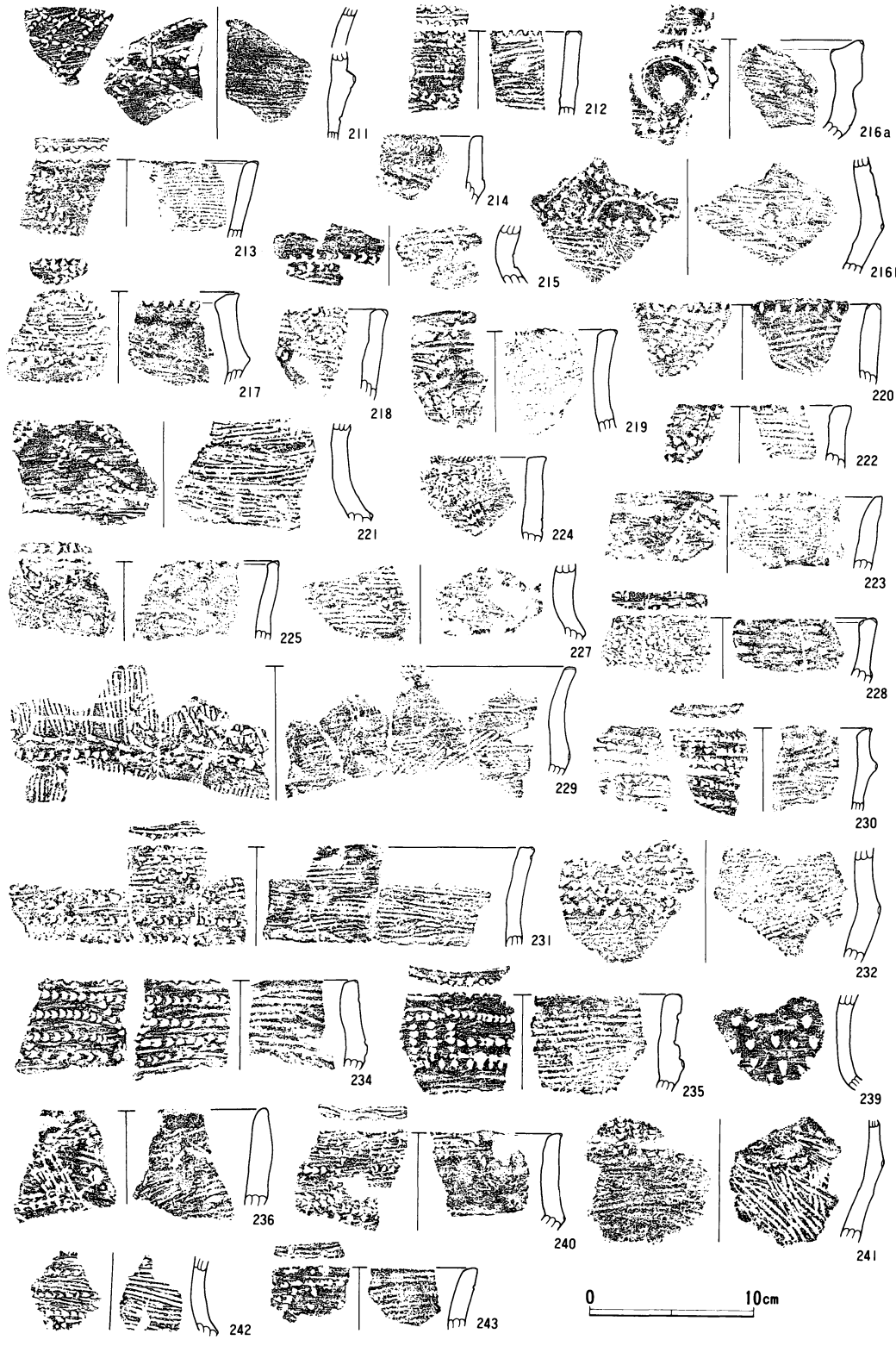
第33図　縄文土器 6 (1/4)



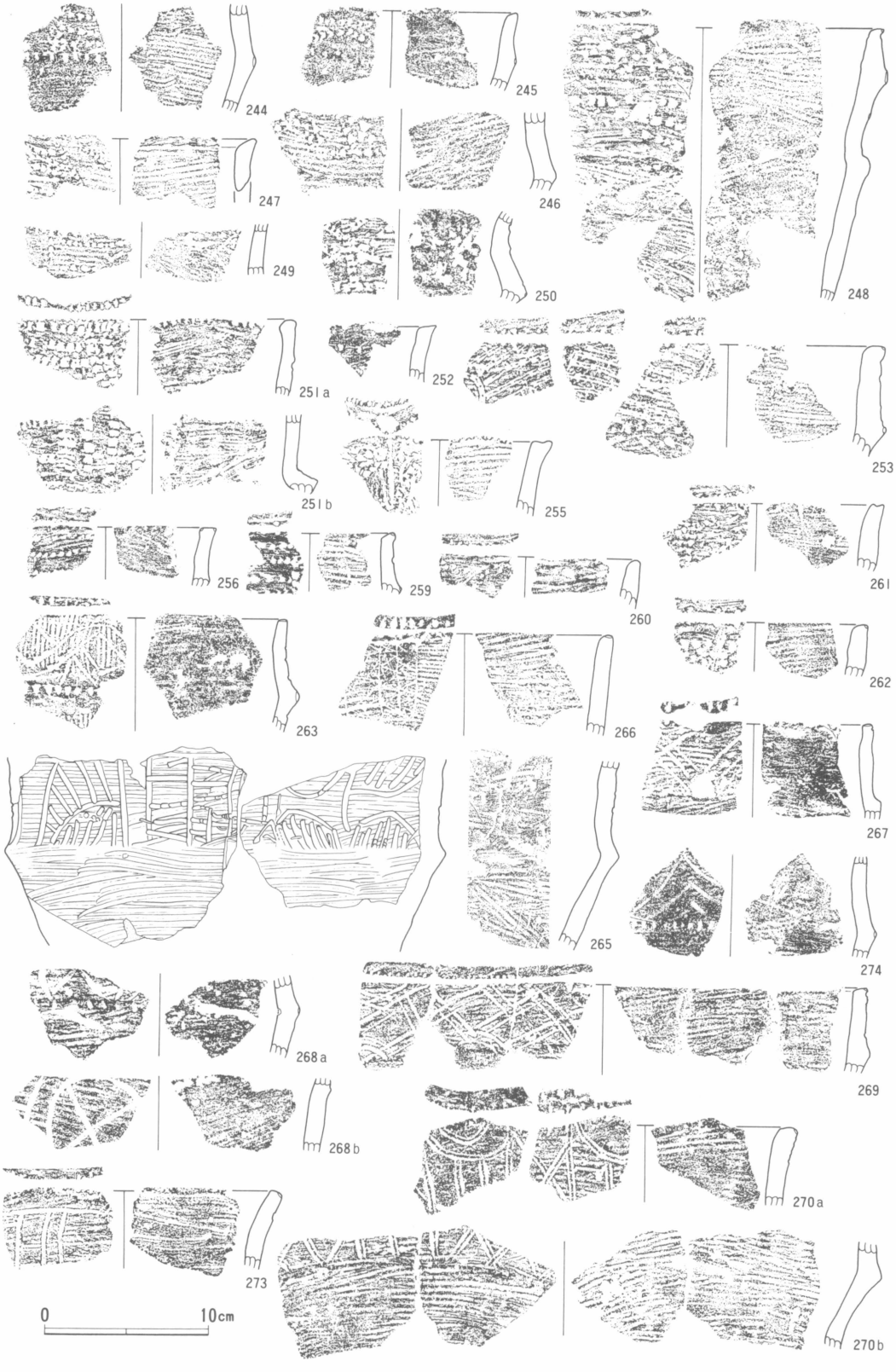
第34図　縄文土器 7 (1/4)



第35図　縄文土器 8 (1/4)



第36図　縄文土器 9 (1/4)

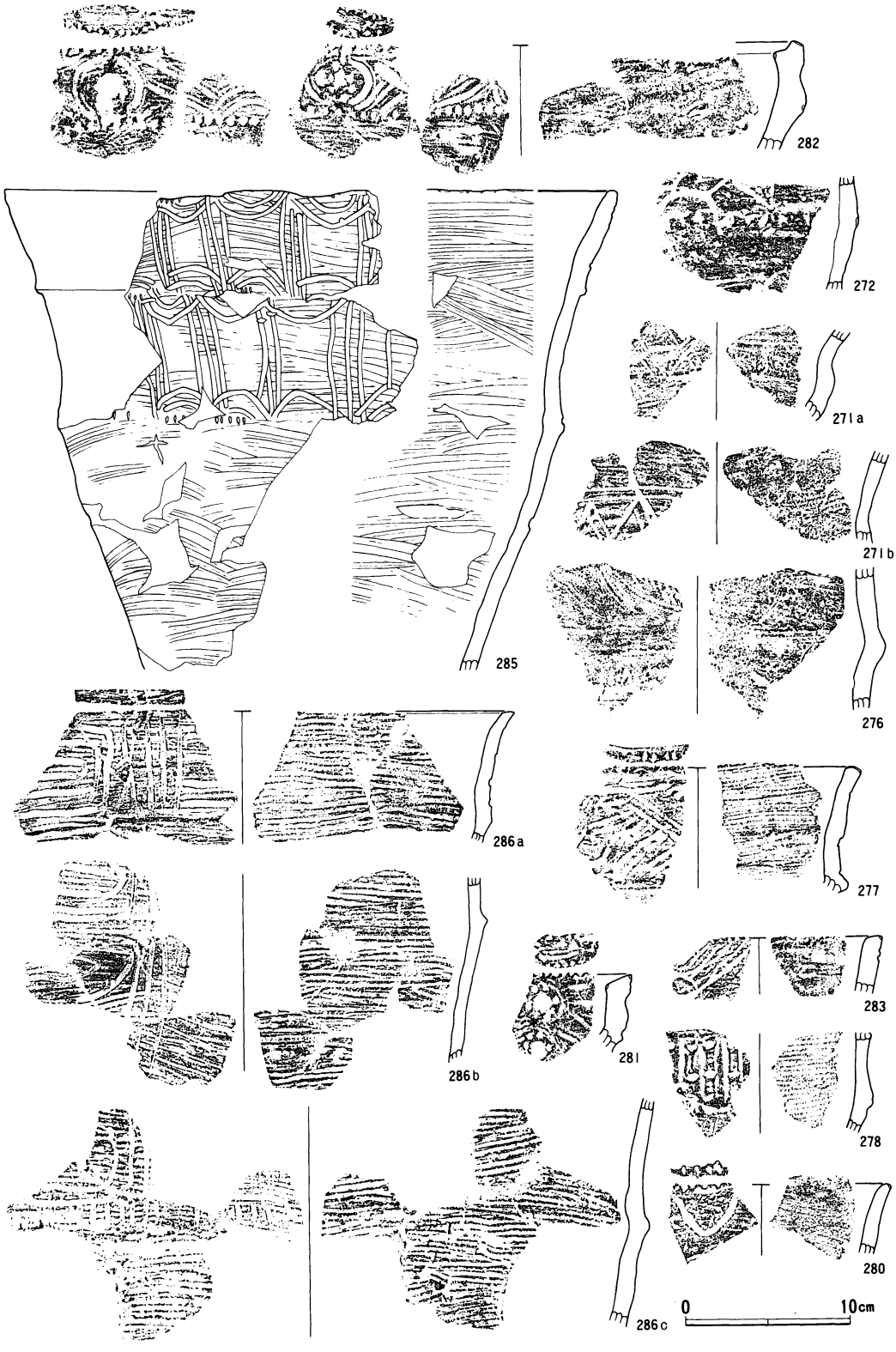


第37図　縄文土器10（1/4）

194～196や221などは斜行する連続刺突による幾何学的区画文である。230～235などは横位に連続する刺突を多用する。他の個体についてはB－2類に共通するような区画文や弧文によって文様を構成しているものが多い。191は4単位の把手を有する土器である。器形は2段の屈曲を持つように見えるが、2段目は高い突帯を貼りつけるもので、屈曲して成形されたものではない。上位の文様帯においては、把手の下に縦位の突帯が貼りつけられて稜線上に刻目が施され、主として斜行する半截竹管状工具を用いた連続刺突（押引）で文様を構成する。この施文方法は253にも共通している。

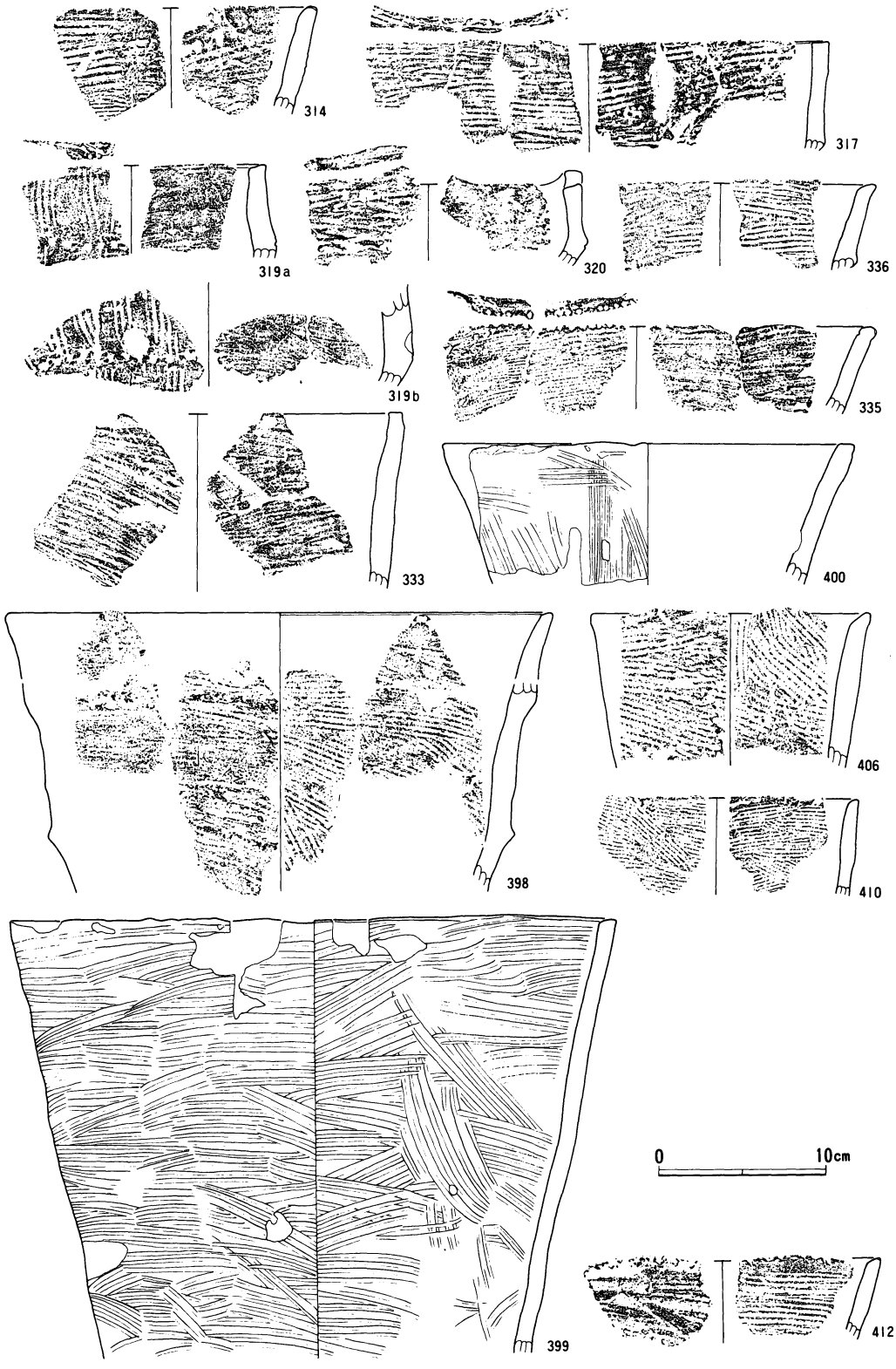
D類（263～286）　沈線のみによって文様が構成される土器である。やはり2段の屈曲を持つものが一般的であろう。しかし285、286については屈曲の度合いが弱い傾向がある。この両者は265と共に沈線がやや幅広で浅く、文様帯を横断する縦位の沈線と弧線等の組み合わせで文様が構成される。原体は竹管または半截竹管状工具の端部を立てて用いているか。また半截竹管状工具によって意識的に2条の沈線を引く例も目立つ存在である。269は斜格子状沈線と弧文の組み合わせ、270は265や285と似た縦位の沈線と弧線の組み合わせである。282は規則的に口縁部が肥厚し、その直下には円弧が描かれている。268にも円弧は用いられ、斜交する沈線と共に描かれる。

E－1類（287～584・655～658）　文様を持たず、器面に貝殻条痕が施される一群で、口縁部破片を中心に掲載した。当然ながら最も個体数が多い。分類、個体識別を口縁部破片を主体に行ったため対象とならなかった土器片も多量にあり、本書に示した個体数がそのまま土器組成を示すものとは言えない。有文の土器の器形が文様の多彩さに拘わらず共通性が強かったのとは逆に、むしろ無文の土器には器形の差があり、屈曲部を有する有段のものとそうでないものに分けられる。明確に有段の器形を有する個体の場合、296のように波状口縁を呈するものが含まれ、口縁端部ははっきりと面とりされて刻目を持ち、また屈曲部上にも刻目を連続させる例がある。無段の器形を持つ個体として明確なものに399、400、406、407、583があるが、399と400は口端が面とりされているものの刻目を有さず、407などは薄くつまみ上げたような形状をなしており、また他のいずれにも刻目は施されない。398は2段の屈曲を持つが、その度合いは弱く、285、286に共通する要素と言えようが、285の刻目はあまり正確に連続せず、286には刻目がない。398にも刻目は施されておらず、器種としては同種のものであった可能性もある。一概に刻目の有無が器形に対応するとも言えないが、粗製土器として一括されがちなこれらの土器にも装飾性の違いが傾向として認められることになる。この点は重要であろう。なお小型の583は尖底である。581～584のような条痕を施す土器は、単体で出土した場合茅山上層式土器に比定されることがある。しかしここではそれは考え難い。582と584は胴径を復原した際に全く異なった数値を得たので一応別個体として実測したが、実際は同一個体である可能性が濃厚である。

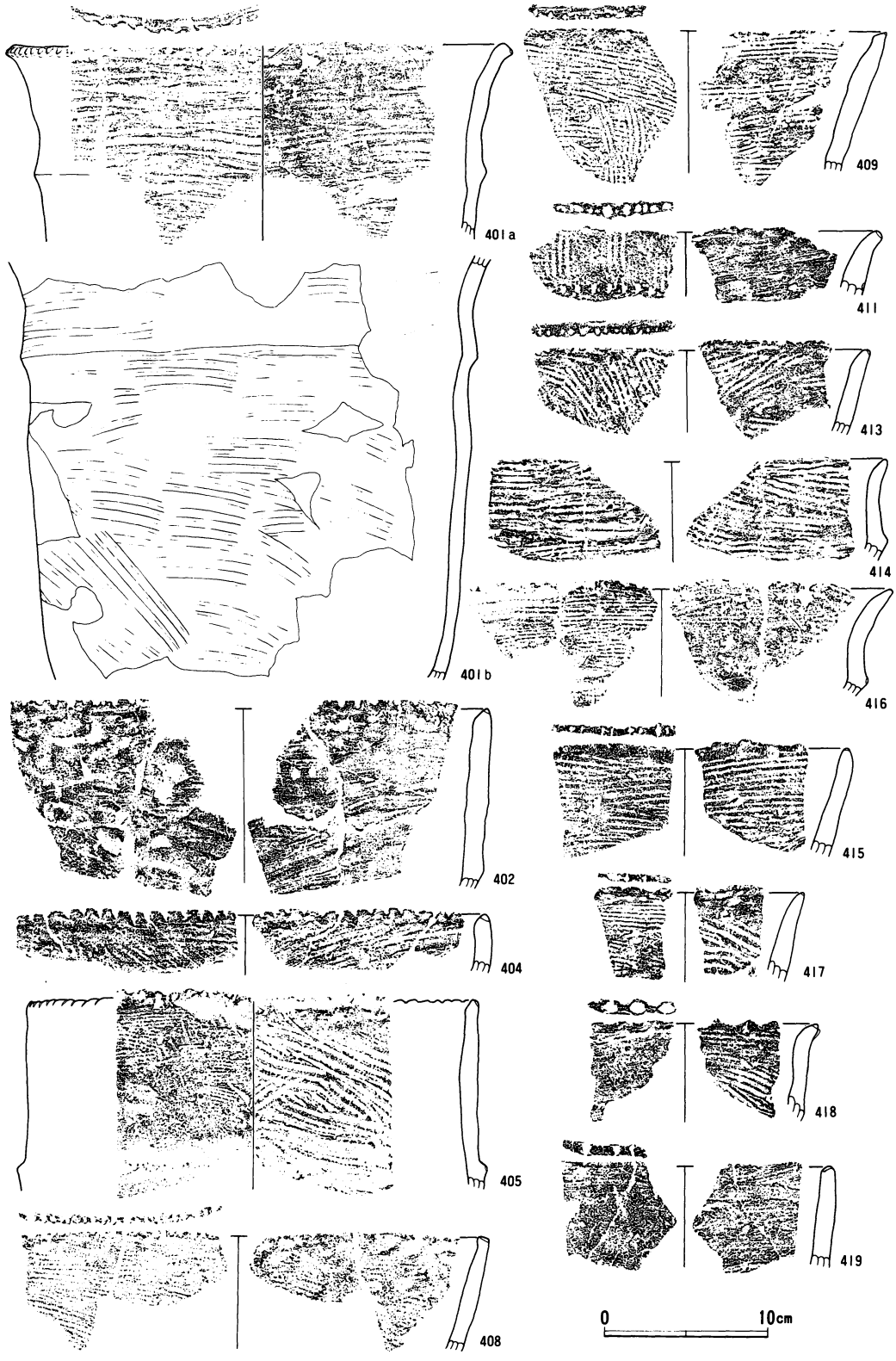


第38図　縄文土器11（1/4）

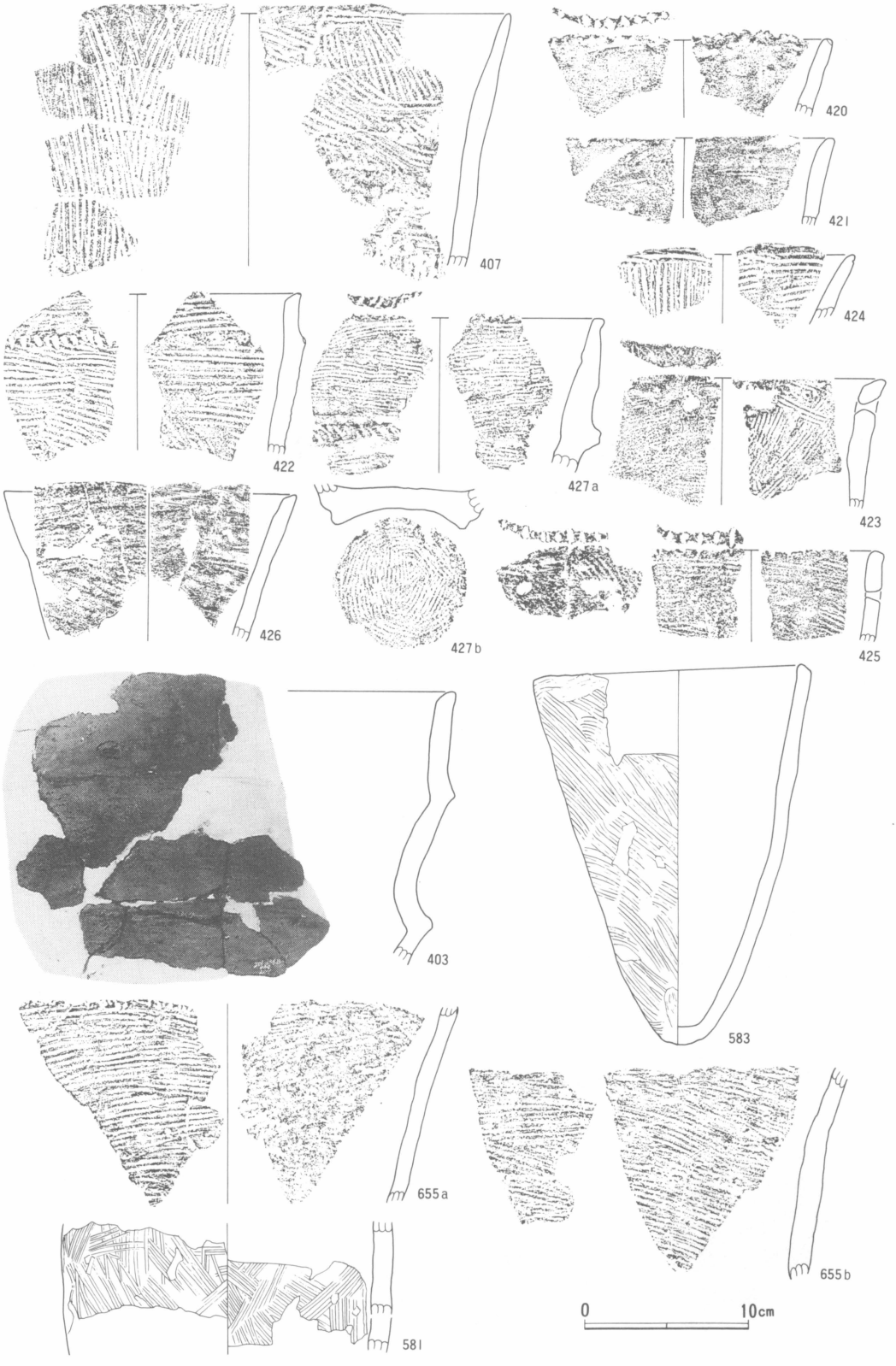
第39図　縄文土器12（1/4）



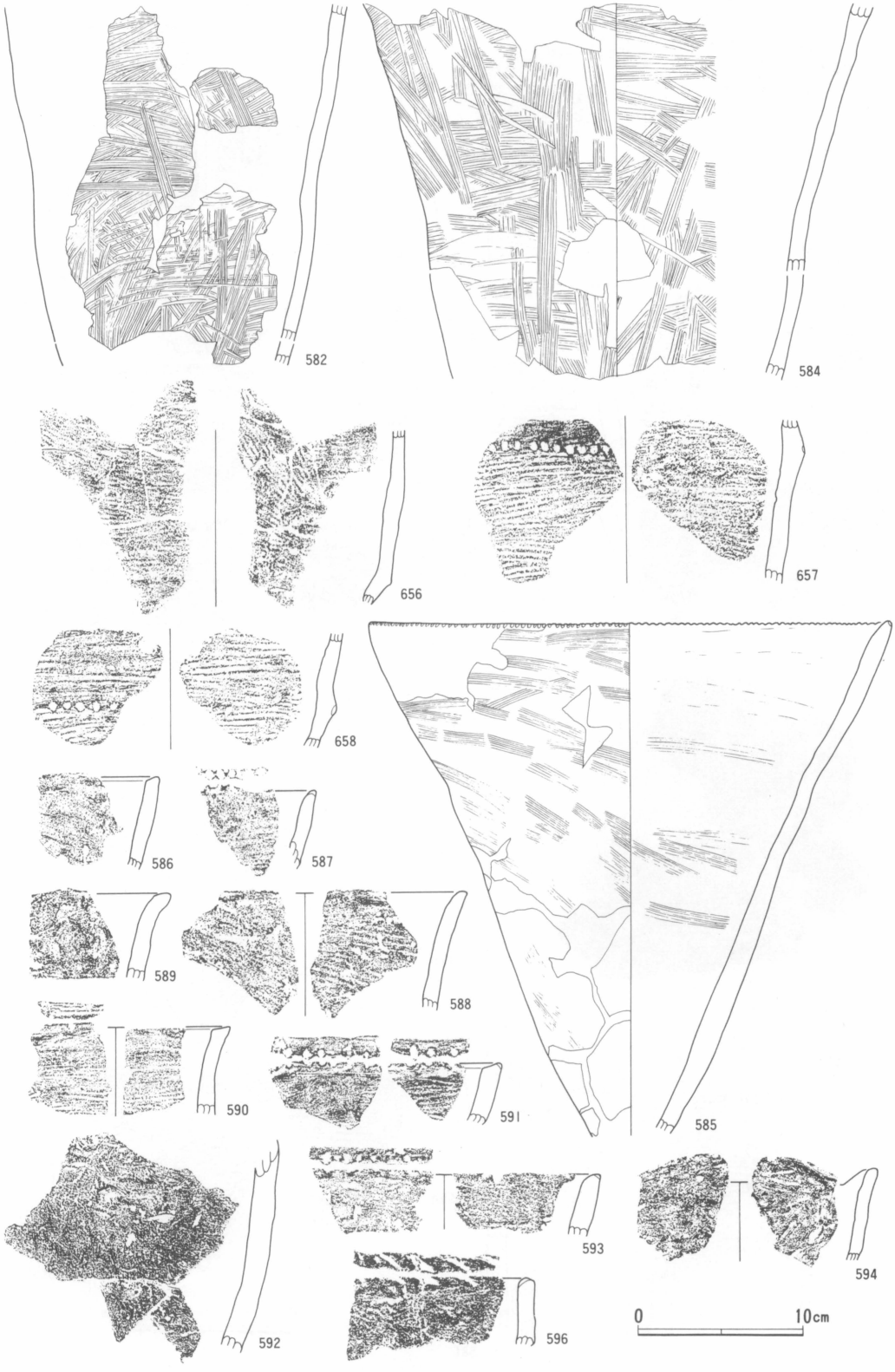
第40図　縄文土器13（1/4）



第41図　縄文土器14（1/4）



第42図　縄文土器15（1/4）



第43図　縄文土器16（1/4）

Ｅ－２類（585～654）　貝殻条痕が施されない一群である。器形については前記Ｅ－１類と同様のことが言える。585については、どのような工具で器面を調整しているか不詳であるが、尖底の土器と思われ、口縁部には刻目が連続する。595、598、599などは茎束状原体で器面を掻いていると思われる。

底部（Ｂ１～Ｂ124）　底部破片、あるいはきわめて底部に近い部位の破片として124個を抽出し、代表的な18個を掲載した。Ｂ１～Ｂ７は尖底底部、あるいは底部に近い破片である。明確に尖底と言えるのはＢ１～Ｂ８の８個で、前記583と585を合わせても遺跡全体で10個しかない。これらは多くが明瞭に貝殻条痕を残しており、鵜ガ島台～茅山下層式土器に比定されることは疑いあるまい。他は平底である。底面に条痕を施す例も多い。ただしＢ９やＢ10などは正置した場合きわめて不安定である。

他の時期の土器（001～022）　001は無文の土器である。同一個体と思われる破片が計39点あるが、殆ど接合せず底部もない。胎土には繊維が含まれるが含有量は少なく、器面には擦痕が認められる。そういった特徴から子母口～野島式土器に比定される可能性がある。しかし鵜ガ島台式土器に伴う可能性も捨て切れない。

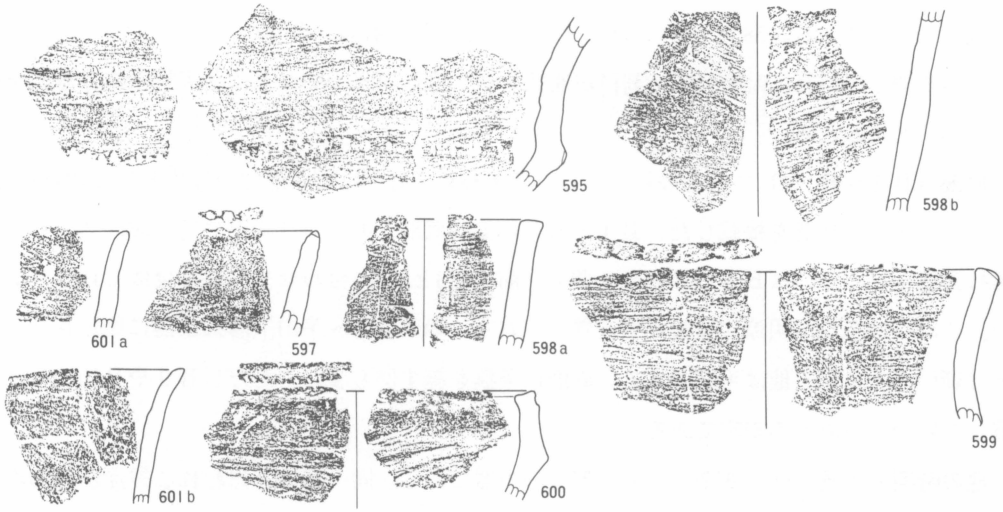
002～005は野島式土器である。全点掲載した。002は波状口縁を持ち、口縁部下には微隆起線による鋸歯状文が描かれている。003も弱い波状口縁を持っており、口縁直下の文様帯として２条の横位の微隆起線を巡らせ、その間を縦位の微隆起線で繋ぐ。微隆起線の下位には斜位の沈線を密に施す。また地文としての条痕が認められる。002、003の口端には斜行する沈線（刻目）が施されている。004は003と同一個体の可能性があるもので、横位の微隆起線が巡り、その上位に斜位の密な沈線がある。やはり地文として条痕が施されている。005は刻目を伴う突帯が巡るものである。

006～019は縄文時代前期、浮島式土器である。この時期の土器は計80点が出土している。006は半截竹管状工具を刺突して器面を抉り、その部分の粘土を隆起させる手法で文様を施文するもの。007は上位には半截竹管状工具の押引、下位には同じ工具による沈線を施す。008は非常に幅の広い半截竹管状工具を横に細かく押引きすることにより文様を描く。009は三角文、010は半截竹管状工具による沈線を施す土器片。011以下は縄文が施文される土器で、019には横位の結び目縄文（綾絡文）が見られる。

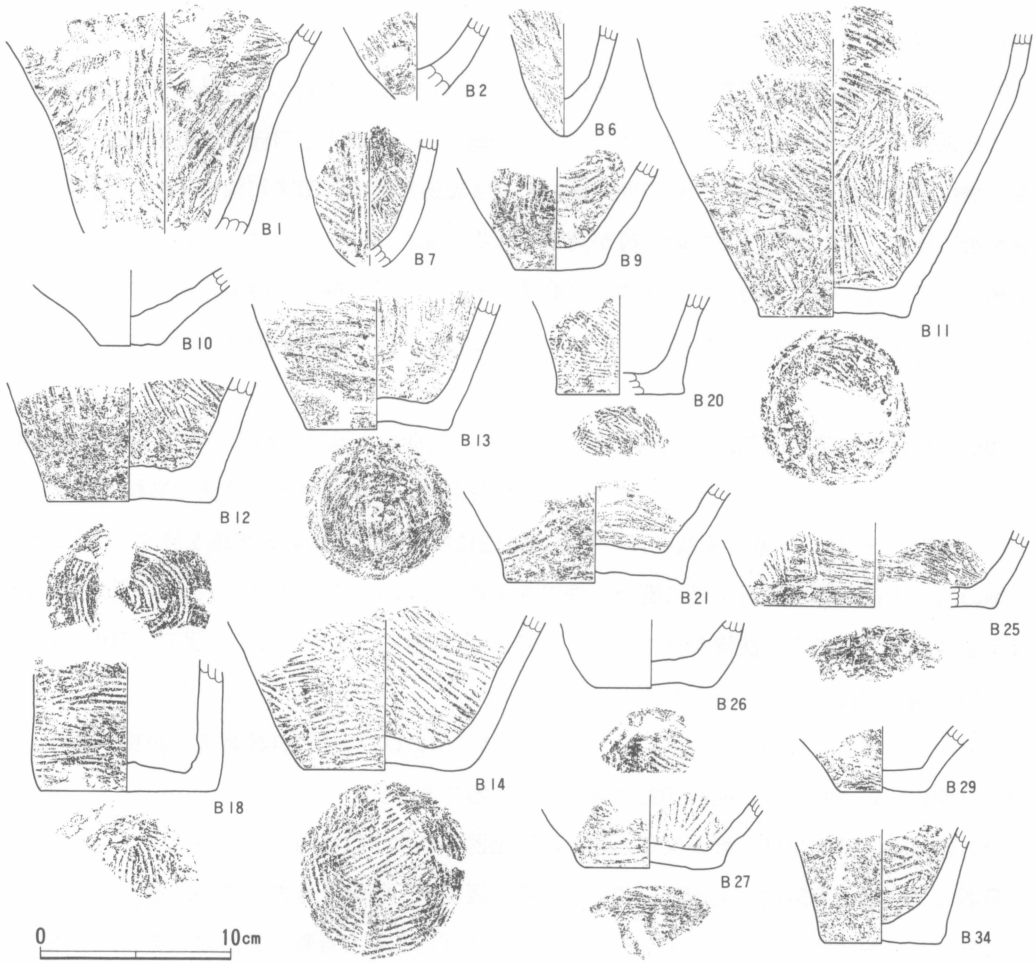
020～022は縄文時代中期の土器である。020には縦位の結び目縄文（綾絡文）が認められ、五領ケ台期に比定されよう。021と022は阿玉台式土器である。

なお他に縄文時代早期、撚糸文期と思われる土器の小片が数点出土している。

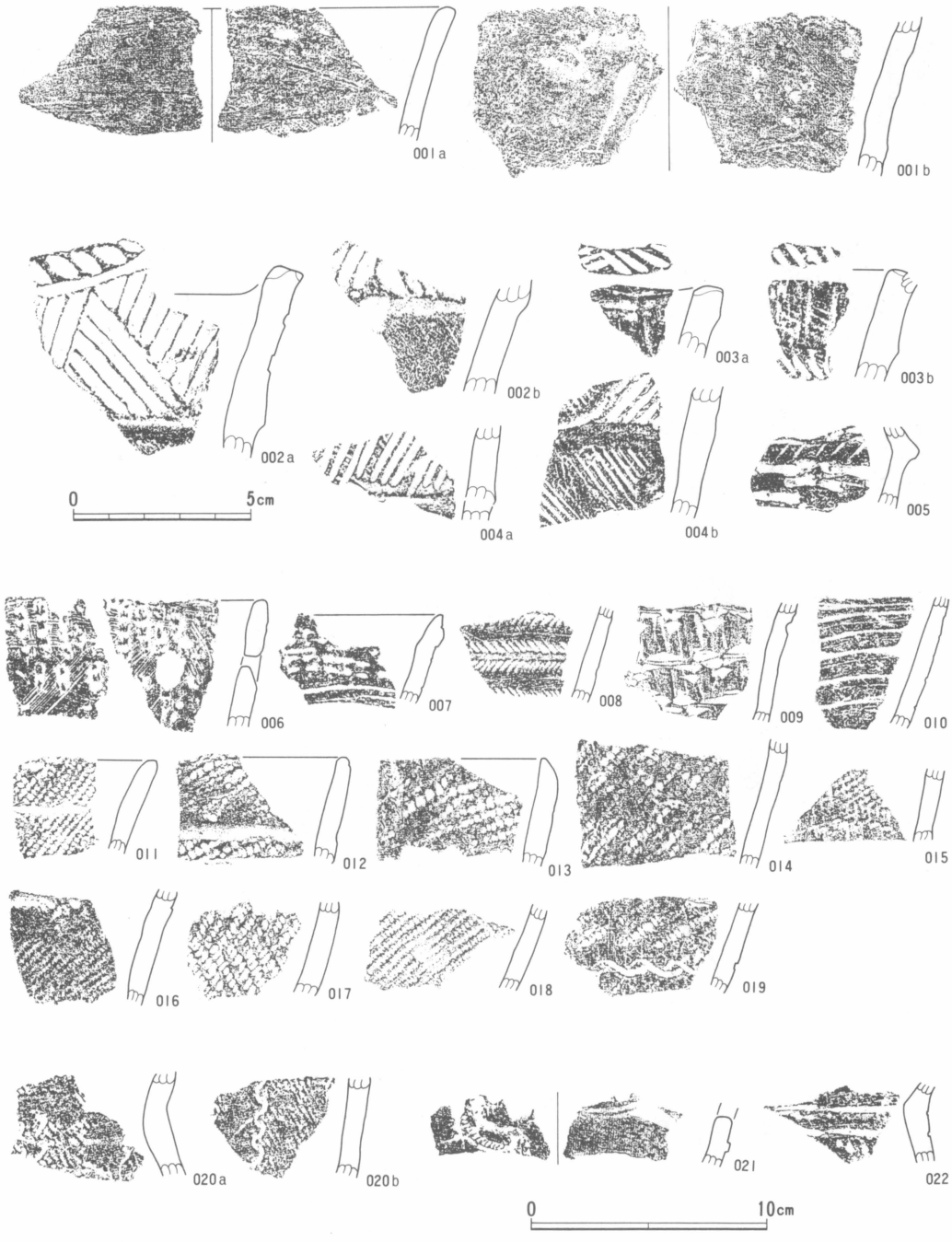
石器（第46図～第51図・図版16～17）　背腹の区別が不明瞭なものは実測図左をＡ面、同右をＢ面として説明する。１は「糸巻形石器」とも呼ばれる安山岩製の異形の石器。上下端とも石鏃の基部のような加工が施されており、特に上端のそれは丁寧である。４か所の突出部のう



（以上　番号は個体番号）

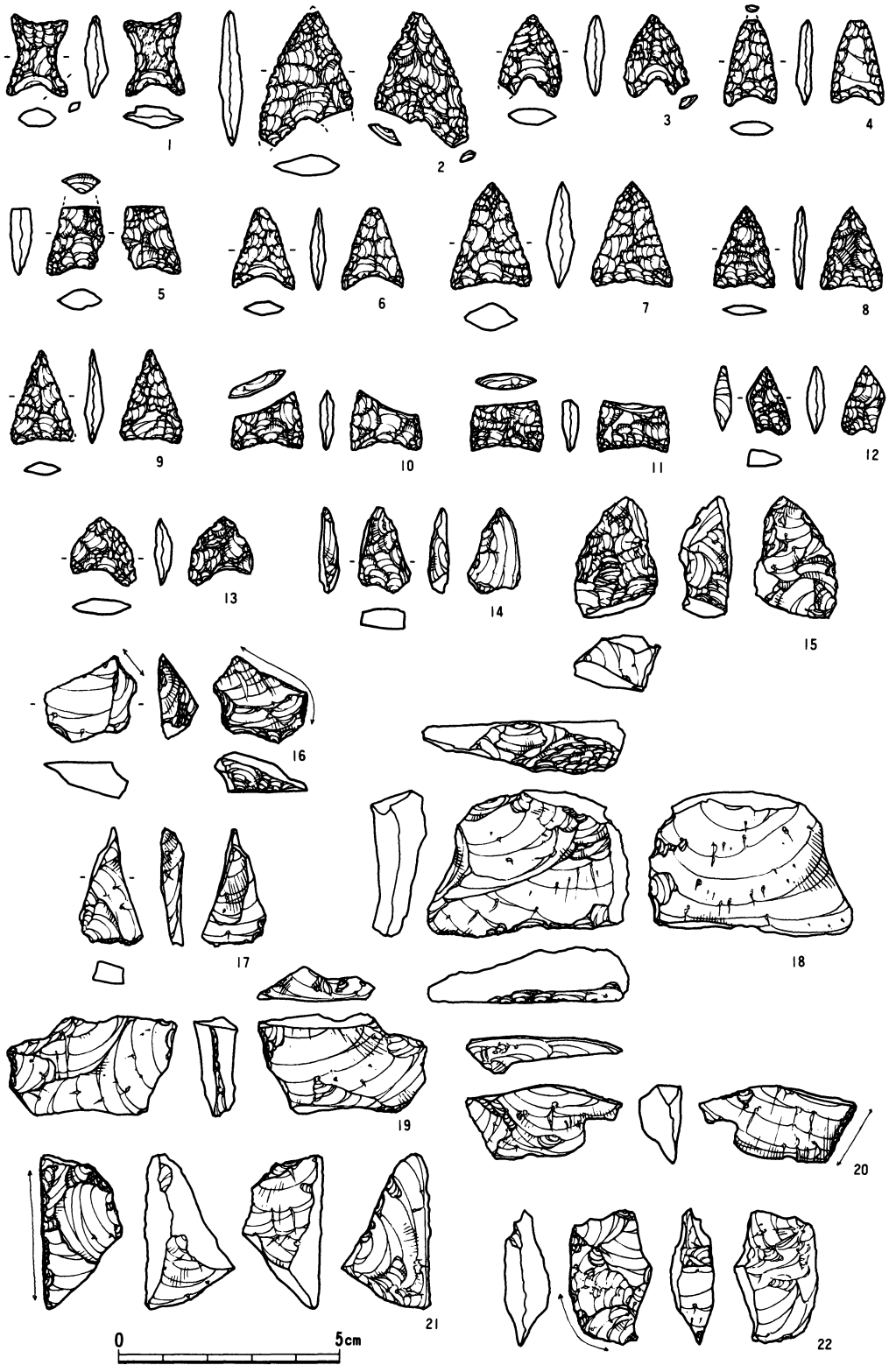


第44図　縄文土器17（1/4）



第45図　縄文土器18（002～005：1/2，他：1/3）

ち、A面左上と右下のそれは鋭い尖頭部を形成するものの、勿論石鏃のような機能は想定できない。敢えて機能を想定するとすればA面右下の突出部を用いる石錐であろうか。2～13は石鏃である。2は脚の比較的長いもので当遺跡としてはやや大ぶりの石鏃。先端、基部とも欠損する。黒曜石製。3も基部の抉りが比較的深い小型品。チャート製。4以下は基部の抉りが浅



第46図　縄文時代の石器 1 (2/3)

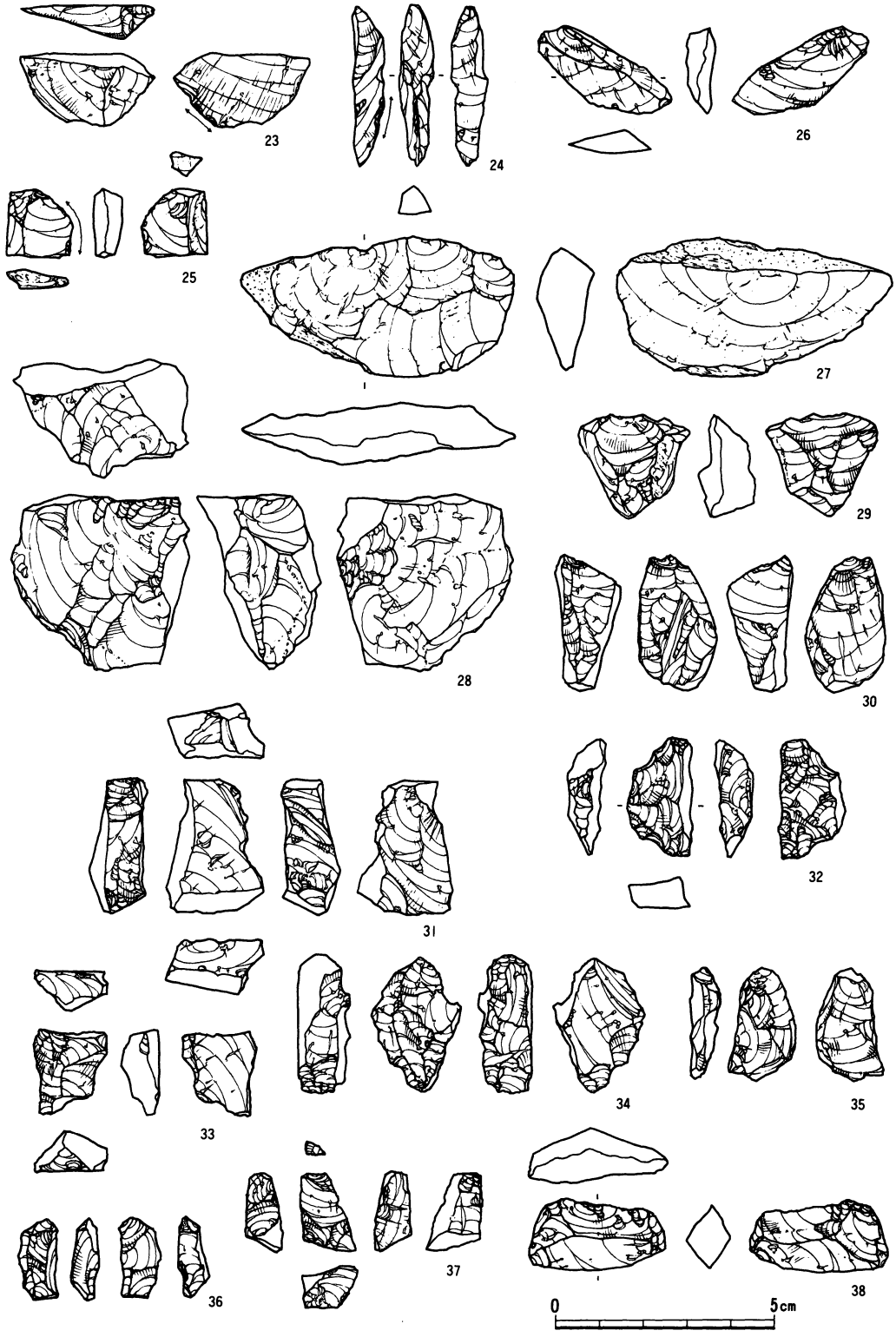
いものか平基に近い石鏃。4は粘板岩製で、先端を欠損するものの長幅比が大きい。主要剝離面を一部残している。7は尖頭部のみ両側縁が屈曲して五角形を呈する。先端が僅かに欠損した後の再調整も考えられるが、ＡＢ両面とも右側縁に最終的な調整が加えられている点が全体に共通しており、本来この形状を持ったものであろうか。12、13はとりわけ小型の石鏃である。12はＡ面左側縁全体に折れ面が覆うが、基部の抉りの位置から判断すれば、使用中あるいは加工途中に欠損して、折れ面を生かしたままさらに調整を加えられたものと想定される。13はＡ面右側の脚部が長いアンバランスな形状を有する。14は石鏃未製品である。黒曜石製で、剝片軸を横に用い、頭部側、末端側双方を折断することによって形状を整え、細かい調整を加え始めている。15は両極石核であるが、厚みが大きいものの石鏃の素材となりうるとも思われるのでここに示した。

16～20は二次的な剝離痕を有する剝片で、意図的な調整である可能性を持つものを集めた。16は腹面の末端及び左側縁にナイフ形石器の刃潰し加工のような急斜な調整を施すもので、調整のない部分は鋭利な刃部をなし、微細な刃こぼれ状の剝離が連続的に観察される。17については意図的な調整でない可能性の方が強いが、末端に細かい連続的な剝離が認められる。18は大ぶりでやや厚みのある剝片の末端に二次剝離が連続する。削器であろうか。19と20は折断されたと思われる剝片（いずれも尾部）の側縁に連続的な細かい剝離が連続するもの。この両者は共通する機能を持った石器の可能性がある。上記はいずれも黒曜石。

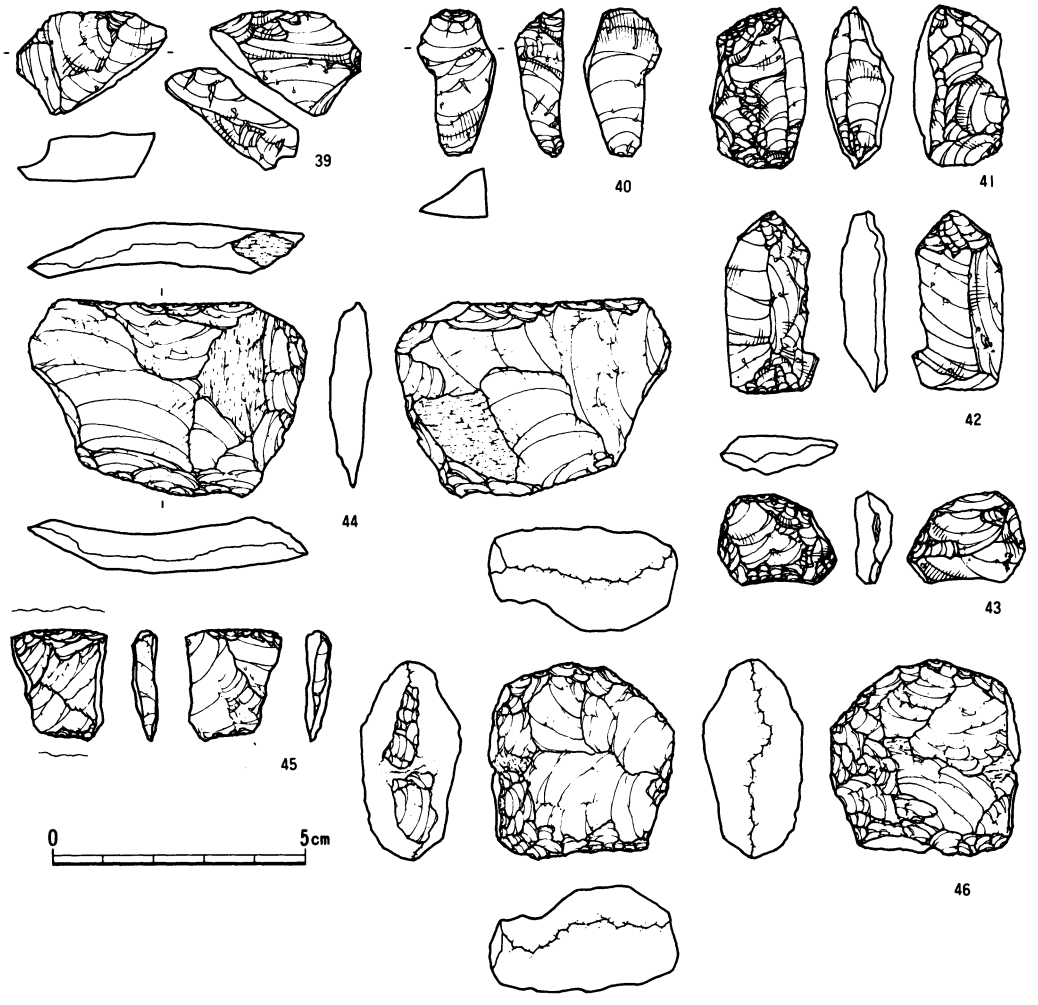
21～25には刃こぼれ状の微細剝離痕が観察されるものである。21は石核であるが、比較的急斜な角度を持つ一端に微細剝離痕が連続する。削器的な使用の痕跡か。22は両極剝離でえられた剝片の側縁から末端の一部に、23は折断剝片の末端の一部に、24は相対的に背の高い背稜上の一部に、25は側縁部にそれぞれ微細剝離痕が観察されるものである。いずれも対辺は鋭利でない面が構成され、刃器としての性格を持つものであろう。25がチャートである他は黒曜石。26は両極剝離による剝片で、これも前記のような使用が可能であるが特にその痕跡は見られない。27は砂岩製の大ぶりな剝片で、横位に用いれば尖頭状となるが、そのための調整等は認められない。

28～40は石核、両極石核、両極剝片である。30と40が両極剝片。縄文時代の剝片生産は粗雑な両極打撃に依存することが多いが、当遺跡もその例に漏れない。28、29、31については両極石核とは言えないが、両極剝離痕は小型の石核ほど残ることは明らかで、特に29、31は両極打撃が行われていることは歴然である。逆に36、37に例示したような両極石核（他にも数例存在する）は目的的な剝片が生産されたとも思えず、他の目的で両極打撃が行われている可能性も想定すべきであろうか。

41～43も両極石核としたが、勿論これらは楔形石器としてもよい。黒曜石製で、楔形石器とも言いうる石器はこの3点のみである。44は粘板岩製の、45はチャート製の楔形石器である。



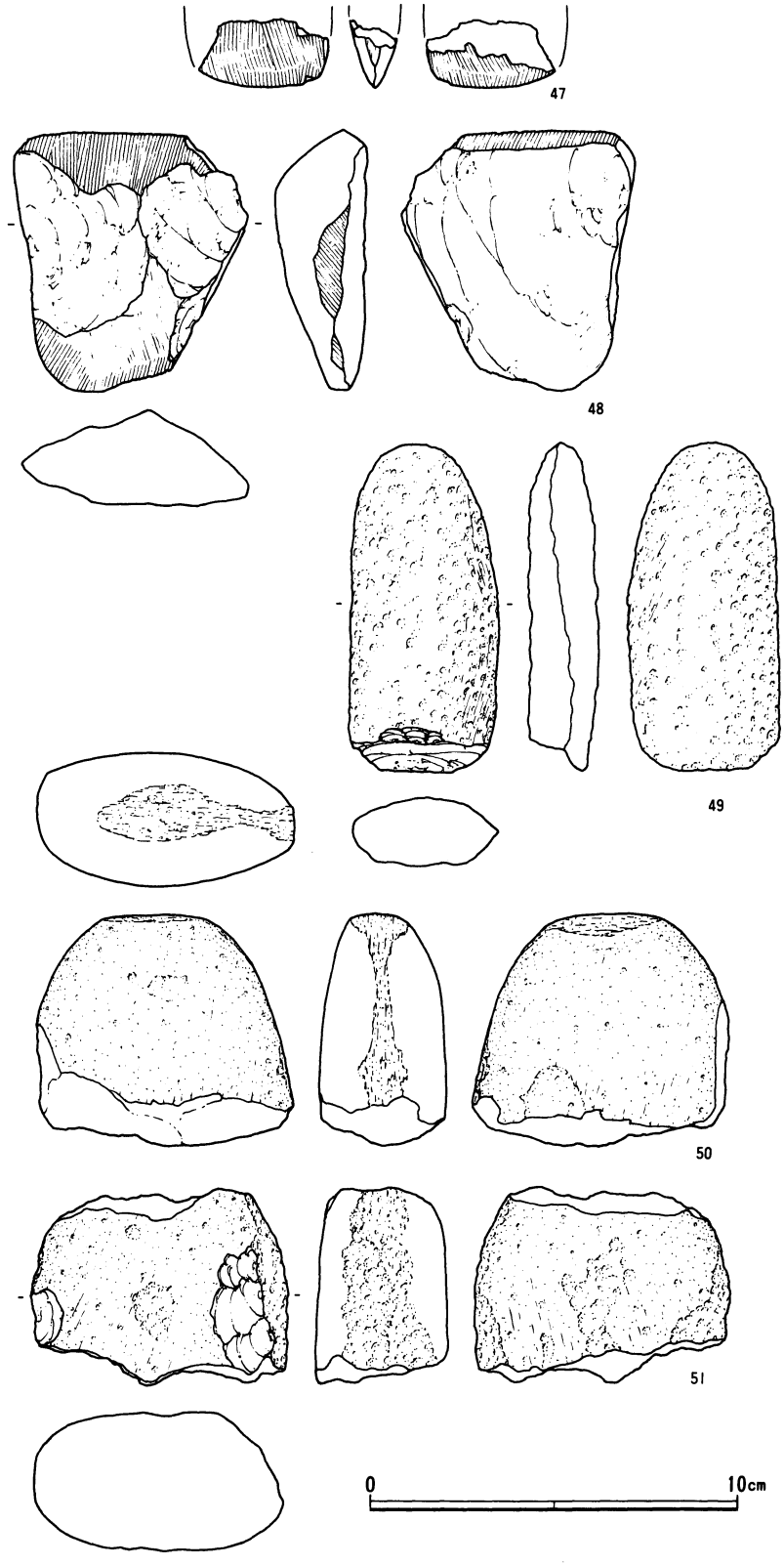
第47図　縄文時代の石器 2 (2/3)



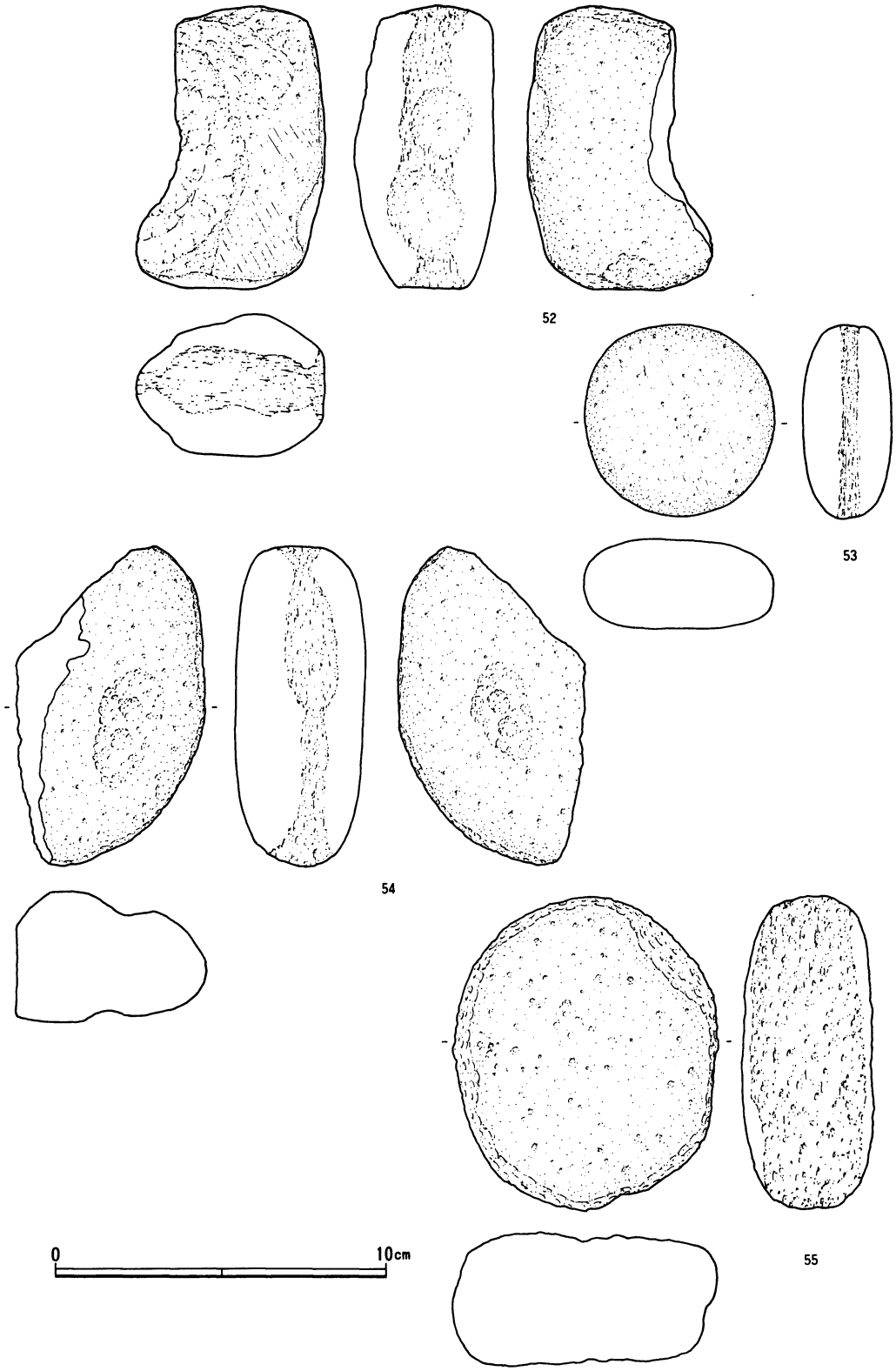
第48図　縄文時代の石器 3 (2/3)

46は石英製で、四周に顕著な潰れが巡る。潰れは非常に鈍いもので、弱い直接的な打撃を繰り返し行ったものと考えられる。

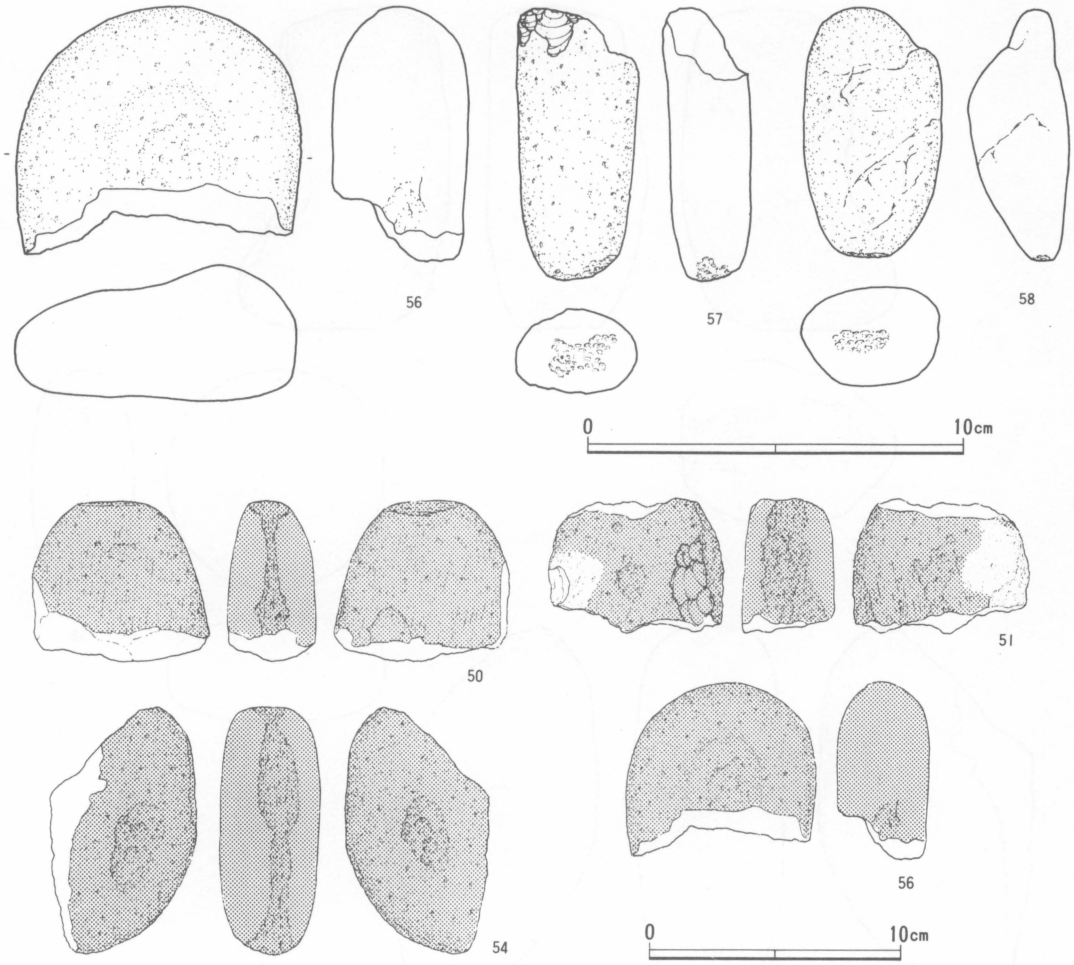
47は凝灰岩製の磨製石斧刃部破片である。各面とも刃部研磨時の擦痕が顕著に残る。48は用途不明の石器。剝離面以外には粗い擦痕が残されているが、砥石とも考えられない。49も用途不明。粘板岩を起源とするホルンフェルス製で、表面は風化によると思われる凹凸が著しい。実測図下方からの加撃による折れが認められ、またA面右縁（B面左縁）には擦痕が観察されて、鈍いが刃部様に作られているふしがある。50～52は礫の周囲に敲打痕が巡る敲石である。しかし敲打痕がない平坦面には原礫面としては考えられない光沢を帯びた平滑さを持ち、磨痕と考えられる。複合機能を持った石器であることは明らか。55も周囲に敲打痕を持つ敲石であるが、これには磨痕はない。54も類似の石器であるが、ＡＢ両面に逆円錐状の窪みがあり、凹石としておく。53は磨石である。56は片面の中央に敲打痕が残り、台石としておく。57、58は



第49図　縄文時代の石器 4 (1/2)



第50図　縄文時代の石器５(1/2)



第51図　縄文時代の石器 6 (1/2)・同被熱痕のあるもの (1/3)

長楕円礫の一端を用いる敲石である。なお上記に説明した石器のうち、50、51、54、56に明瞭な被熱痕が観察された。これらの石器が石器として用いられなくなって後に他の礫と共に被熱したのであろうか。いずれも表面だけではなく割れ口にも被熱痕が明らかであった。

5　小結

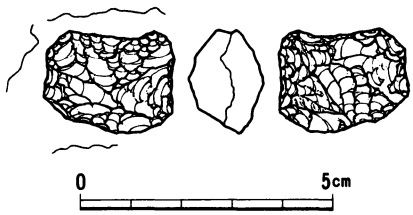
以上述べてきたことからも明らかなように、当遺跡は台地南西縁を中心として、縄文時代早期、鵜ガ島台～茅山下層期の拠点的な生活空間であった。遺構や遺物の分布から集団内の生活単位の抽出等を行うことはまず不可能に近い。しかし多くの炉穴跡の存在などからいくつかの生活単位の集合体であったろうことは推測できる。問題はこれらの遺構群、遺物包含層がどれほどの時間幅を以て形成されたかである。

再三述べているように、当遺跡が鵜ガ島台～茅山下層期に形成されたことを疑うことはできない。遺跡からは野島式土器もごく少量出土している。しかし野島式土器に直接後続するよう

な古い段階の鵜ガ島台式土器は全くと言ってよいほど出土しておらず、鵜ガ島台式土器でも新相を示す土器と茅山下層式土器が主体となっている。ところで、これまで無前提に鵜ガ島台式土器と茅山下層式土器という呼称を用いてきたが、その両者の関係、その変遷の大枠については疑問の余地はないものの、両者を決定的に区分する指標は今日まで明確に検証された形では提示はされておらず、何を以て鵜ガ島台式土器とし、何を以て茅山下層式土器とするかはその境界線付近においては不明瞭である。当遺跡出土土器の大半はおそらくその境界線付近に位置付けられ、あまり大きな時間幅を持たないのではないかと思われる。この問題については後に補論で少しく検討したい。

補記

昨年度刊行した『千葉市地蔵山遺跡(1)』において、遺跡A区から出土した遺物の遺漏があったため、ここで提示することにする。遺物は石英製の楔形石器で、縄文時代早期の遺物包含層から出土したものである。長さ、幅に比べて厚みの大きいもので、四周に細かい剝離痕が残る。出土グリッドはN22—01区、遺物番号はN22—01—91。計測値は、最大長19.7㎜、最大幅26.4㎜、最大厚13.5㎜、重量7.37ｇを測る。



第４表　縄文時代石器計測表（１）

挿図番号	遺物番号	器種	石質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕の有無	被熱痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	K23-19-45	砕片	黒曜石	8.5	8.5	0.9	0.04	−	−	−	−
	K23-19-52	剝片	黒曜石	8.0	14.5	4.7	1.02	−	−	−	−
	K23-19-64	砕片	黒曜石	7.5	8.0	1.3	0.06	−	−	−	−
41	K23-19-68	両極石核	黒曜石	32.2	18.8	14.2	8.70	−	−	−	−
	K23-19-105	剝片	黒曜石	17.3	12.5	5.9	1.06	−	−	−	−
	119-2a	剝片	黒曜石	17.0	21.5	5.2	1.55	−	−	−	−
	119-2b	剝片	黒曜石	16.0	12.5	10.5	1.28	−	−	−	−
	122-9	剝片	黒曜石	17.5	14.3	6.7	1.14	−	−	−	−
14	K23-20c-2	石鏃未製品	黒曜石	19.5	12.0	4.5	0.97	−	−	−	−
	K23-20-211	剝片	黒曜石	25.5	10.5	7.2	0.84	−	−	−	−
	K23-20-219	剝片	黒曜石	17.0	20.4	3.4	0.94	−	−	−	−
	K23-20-234	剝片	黒曜石	12.3	13.6	7.2	0.83	−	−	−	−
25	K23-20-270	剝片	チャート	15.6	14.6	7.2	1.78	+	−	+	−
	K23-20-278	剝片	黒曜石	18.9	11.1	10.2	1.32	−	−	−	−
	K23-20-283	剝片	黒曜石	16.4	7.6	3.8	0.43	−	−	−	−
31	K23-20-291a	石核	黒曜石	28.9	22.2	11.1	6.66	−	−	−	−
38	K23-20-291b	両極石核	黒曜石	31.2	16.3	12.1	4.82	−	−	−	−
	K23-20-291c	剝片	黒曜石	30.4	22.0	6.7	2.80	−	−	+	−
	K23-20-291d	剝片	黒曜石	15.7	19.9	6.5	1.91	−	−	−	−
29	K23-20-291e	石核	黒曜石	22.6	26.3	12.0	4.81	−	−	−	−
	K23-20-291f	剝片	黒曜石	18.5	13.3	5.3	1.13	−	−	−	−
	K23-20-291g	剝片	黒曜石	26.9	11.6	8.2	2.43	−	−	−	−
	K23-20-291h	剝片	黒曜石	15.2	15.9	9.9	1.72	−	−	−	−
	K23-20-291i	剝片	黒曜石	21.3	12.9	4.6	1.08	−	−	−	−
	K23-20-291j	剝片	黒曜石	15.5	14.9	3.1	0.74	−	−	−	−
	K23-20-291k	剝片	黒曜石	9.9	12.4	2.0	0.26	−	−	−	−
	K23-20-291l	砕片	黒曜石	7.5	9.4	2.0	0.15	−	−	−	−
	K23-20-291m	砕片	黒曜石	7.3	7.8	3.7	0.16	−	−	−	−
	K23-20-291n	砕片	黒曜石	9.0	4.9	1.7	0.08	−	−	−	−
	K23-20-291o	砕片	黒曜石	9.9	7.9	0.9	0.07	−	−	−	−
8	K23-20-291p	石鏃	黒曜石	19.2	14.0	3.0	0.68	−	−	−	−
	K23-20-338	剝片	黒曜石	9.8	28.0	13.0	1.64	−	−	−	−
	K23-20-397a	剝片	黒曜石	11.9	7.5	5.3	0.54	−	−	−	−
	K23-20-397b	剝片	黒曜石	8.3	13.4	1.7	0.20	−	−	−	−
	111-2a	剝片	黒曜石	17.0	8.1	4.5	0.57	−	−	−	−
	111-2b	剝片	黒曜石	16.0	10.6	2.8	0.51	−	−	−	−
	111-2c	剝片	黒曜石	15.9	11.1	3.3	0.45	−	−	−	−
	K23-25-10	剝片	黒曜石	22.7	14.5	4.7	1.00	−	−	−	−
	K23-25-30	砕片	黒曜石	8.9	6.3	2.2	0.11	−	−	−	−
	K23-25-43	砕片	黒曜石	6.0	5.6	2.3	0.07	−	−	−	−
42	K23-25-52	両極石核	黒曜石	34.0	10.2	5.5	5.40	−	−	−	−
	K23-25-54	砕片	黒曜石	7.1	10.0	2.0	0.14	−	−	−	−
	K23-25-55	剝片	黒曜石	35.7	19.2	9.8	0.50	−	−	−	−
	K23-25-56	剝片	黒曜石	18.6	13.1	6.0	1.11	−	−	−	−
	K23-25-71	砕片	黒曜石	12.9	7.8	1.7	0.13	−	−	−	−
	K23-25-75	砕片	黒曜石	5.9	7.6	1.6	0.07	−	−	−	−
	K23-25-79	剝片	黒曜石	12.6	15.2	2.9	0.62	−	−	−	−
	K23-25-99	剝片	黒曜石	19.3	18.5	5.4	1.10	−	−	−	−
	K23-25-124	剝片	黒曜石	14.6	23.9	5.1	1.56	−	−	−	−
	K23-25-131	剝片	黒曜石	17.1	16.1	5.2	1.50	−	−	−	−
	K23-25-160	剝片	黒曜石	22.0	22.5	10.2	4.55	−	−	−	−
22	K23-25-192	剝片	黒曜石	30.1	19.3	10.3	4.69	+	−	−	−
	K23-25-213	砕片	黒曜石	13.6	6.3	0.9	0.13	−	−	−	−
	K23-25-301	砕片	黒曜石	12.3	9.4	1.4	0.15	−	−	−	−
	K23-25-332	剝片	黒曜石	16.4	24.9	5.2	1.38	−	−	−	−
40	K23-25-363	剝片	黒曜石	28.8	16.6	9.0	3.11	−	−	−	−
	K23-25-393	剝片	黒曜石	22.5	6.9	4.4	0.59	−	−	−	−

第５表　縄文時代石器計測表（２）

挿図番号	遺物番号	器種	石質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕の有無	被熱痕の有無	折断の有無	欠損の有無
11	K23-25-401	石鏃	黒曜石	11.4	16.3	3.5	0.73	－	－	－	＋
	K23-25-402	砕片	黒曜石	9.4	7.7	1.3	0.05	－	－	－	－
	K23-25-428	剝片	黒曜石	16.9	8.3	9.5	0.93	－	－	－	－
5	K23-25-429	石鏃	黒曜石	15.4	10.6	4.9	0.83	－	－	－	＋
	K23-25-449	剝片	黒曜石	14.2	7.5	3.0	0.23	－	－	－	－
	K23-25-506	砕片	黒曜石	10.6	6.6	1.4	0.09	－	－	－	－
18	K23-25-507	加工痕のある剝片	黒曜石	32.6	46.6	10.9	14.39	－	－	－	－
	K23-25-508	剝片	黒曜石	9.3	12.6	2.0	0.18	－	－	－	＋
	K23-25-521	剝片	黒曜石	14.6	21.1	4.6	1.11	－	－	－	－
	K23-25-533	剝片	黒曜石	19.5	14.0	3.4	0.74	－	－	－	－
	K23-25-535a	剝片	黒曜石	10.9	6.1	5.6	0.46	－	－	－	－
	K23-25-535b	剝片	黒曜石	11.4	6.0	5.4	0.38	－	－	－	－
	K23-25-543	剝片	黒曜石	14.1	19.7	3.3	0.75	－	－	－	－
	K23-25-560	砕片	黒曜石	8.4	6.6	1.1	0.06	－	－	－	－
	K23-25-567	砕片	黒曜石	5.6	7.1	1.0	0.04	－	－	－	－
	K23-25-581	砕片	黒曜石	7.5	7.3	1.0	0.05	－	－	－	－
	K23-25-654	砕片	黒曜石	8.8	5.7	0.7	0.04	－	－	－	－
	K23-25-697	剝片	黒曜石	16.1	32.5	6.5	2.82	－	－	－	－
	K23-25-704a	剝片	黒曜石	13.0	21.0	2.8	0.64	－	－	－	－
	K23-25-704b	剝片	黒曜石	19.6	9.9	7.2	1.13	－	－	－	－
20	K23-1a	加工痕のある剝片	黒曜石	17.1	36.1	9.0	4.05	－	－	＋	－
21	K23-1b	石核	黒曜石	35.2	18.4	19.7	8.33	＋	－	－	－
	K23-1c	剝片	黒曜石	13.7	5.3	4.4	0.39	－	－	－	－
	K23-1d	剝片	黒曜石	12.5	18.1	2.6	0.58	－	－	－	－
7	K23-表採a	石鏃	チャート	23.7	18.0	6.0	1.70	－	－	－	－
	K23-表採b	砕片	黒曜石	11.6	7.4	2.2	0.18	－	－	－	－
23	K24-05-46	剝片	黒曜石	15.5	30.6	8.8	2.44	＋	－	＋	－
	K24-05-52	砕片	黒曜石	8.5	3.0	1.1	0.03	－	－	－	－
	K24-25-53	剝片	黒曜石	8.0	12.5	2.7	0.27	－	－	－	－
	L23-9-23	剝片	石英	9.1	14.7	4.8	0.65	－	－	－	－
	L23-12-3	剝片	黒曜石	9.6	10.7	2.2	0.17	－	－	－	－
	L23-12-27	砕片	黒曜石	10.3	7.7	1.5	0.11	－	－	－	－
	L23-13-1	砕片	黒曜石	10.7	6.5	1.2	0.09	－	－	－	－
	L23-13-6	剝片	黒曜石	21.5	9.1	8.9	1.06	－	－	－	－
	L23-13-8	剝片	黒曜石	12.6	13.2	2.7	0.45	－	－	－	＋
	L23-13-13	剝片	黒曜石	19.4	9.0	5.6	0.73	－	－	－	－
15	L23-13-49	両極石核	黒曜石	28.5	16.5	10.8	4.90	－	－	－	－
	L23-14-41	砕片	黒曜石	8.3	5.2	1.1	0.05	－	－	－	－
	L23-14-42	剝片	チャート	17.9	12.5	3.2	0.56	－	－	－	－
	011-20	剝片	黒曜石	16.6	16.3	4.3	0.77	－	－	－	＋
37	L23-15-22	両極石核	黒曜石	17.5	11.5	7.8	1.44	－	－	－	－
	L23-15-27	剝片	黒曜石	22.5	11.8	3.6	0.75	－	－	－	－
17	L23-15-32	加工痕のある剝片	黒曜石	25.5	13.9	4.9	1.16	＋	－	－	－
33	L23-16-25	両極石核	黒曜石	18.6	15.9	7.9	2.02	－	－	－	－
10	L23-16-74	石鏃	黒曜石	12.3	16.2	3.1	0.55	－	－	－	＋
	L23-16-81	剝片	黒曜石	11.0	12.2	2.6	0.28	－	－	－	－
	L23-16-115	剝片	黒曜石	20.0	26.1	7.3	3.23	－	－	－	－
	L23-16-125	砕片	黒曜石	10.5	4.3	2.2	0.08	－	－	－	－
30	055-1	剝片	黒曜石	30.0	20.1	13.8	6.59	－	－	－	－
	060-31	剝片	黒曜石	12.7	12.2	1.2	0.27	－	－	－	＋
	060-32	砕片	黒曜石	8.4	5.5	4.6	0.13	－	－	－	－
	060-40	剝片	黒曜石	14.4	13.6	2.6	0.44	－	－	－	－
	060-76	剝片	黒曜石	35.2	14.9	5.8	2.02	－	－	－	－
	060-171	石核	黒曜石	23.1	19.4	5.5	1.70	－	－	－	－
39	060-172	両極石核	黒曜石	30.9	18.7	10.5	5.53	－	－	－	－
	060-202	剝片	黒曜石	15.7	14.0	1.2	0.24	－	－	－	－
	060-257	剝片	黒曜石	12.3	10.8	2.6	0.29	－	－	－	－

第6表　縄文時代石器計測表(3)

挿図番号	遺物番号	器種	石質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕の有無	被熱痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	060-258	剝片	黒曜石	20.7	7.2	6.3	0.87	−	−	−	−
	060-291	砕片	黒曜石	9.1	8.0	1.4	0.10	−	−	−	−
	060-292	剝片	黒曜石	13.1	17.6	7.0	1.63	−	−	−	+
	060-331	剝片	黒曜石	26.3	9.4	2.2	0.44	−	−	−	−
	L23-17-9	剝片	黒曜石	12.2	20.7	6.7	1.47	−	−	+	−
	L23-17-10	砕片	黒曜石	13.8	9.0	1.6	0.14	−	−	−	−
	L23-17-11	砕片	黒曜石	5.3	5.1	0.9	0.03	−	−	−	−
	L23-17-12	砕片	黒曜石	11.6	7.7	1.5	0.06	−	−	−	−
	L23-17-13	剝片	黒曜石	14.4	12.4	3.2	0.55	−	−	−	−
	L23-17-14	剝片	黒曜石	14.3	9.0	3.7	0.43	−	−	−	+
	L23-17-18	両極石核	黒曜石	24.4	15.0	8.8	2.85	−	−	−	−
	L23-17-19	砕片	黒曜石	14.1	4.7	2.2	0.09	−	−	−	−
	L23-17-20	砕片	黒曜石	11.6	6.7	2.0	0.13	−	−	−	−
26	L23-17-23a	剝片	黒曜石	13.4	32.6	6.3	2.03	−	−	−	−
	L23-17-23b	剝片	黒曜石	19.3	11.8	3.8	1.08	−	−	−	+
46	L23-19-1	?	石英	37.0	36.0	18.6	28.08	−	−	−	−
	L23-19-16	剝片	黒曜石	21.4	18.6	7.8	2.26	−	−	−	−
	L23-20-22	剝片	黒曜石	13.3	6.5	3.9	0.16	−	−	−	−
2	L23-20-25	石鏃	黒曜石	31.4	21.8	4.8	2.08	−	−	−	+
	L23-20-43	砕片	黒曜石	10.3	6.8	2.4	0.08	−	−	−	−
	L23-20-60	剝片	黒曜石	16.4	10.8	5.2	0.73	−	−	−	+
	L23-20-116	剝片	黒曜石	20.4	8.8	2.8	0.49	−	−	−	−
	L23-20-171	砕片	黒曜石	7.5	4.8	0.9	0.01	−	−	−	−
	L23-20-172	剝片	黒曜石	14.3	35.1	8.3	3.22	−	−	−	−
	L23-20	剝片	石英	17.9	12.4	7.1	1.54	−	−	−	−
34	L23-21-3	両極石核	黒曜石	30.5	22.0	10.9	7.00	−	−	−	−
13	L23-21-8	石鏃	黒曜石	13.8	15.4	3.7	0.68	−	−	−	−
	L23-21-228	剝片	黒曜石	32.9	10.0	6.9	1.44	−	−	−	−
	L23-21-241	剝片	黒曜石	29.0	15.7	7.2	2.81	−	−	−	−
19	L23-21-356	加工痕のある剝片	黒曜石	38.3	22.2	7.7	6.34	−	−	+	−
	L23-21-399	剝片	黒曜石	13.1	17.6	4.7	0.83	−	−	−	−
24	L23-21-430	剝片	黒曜石	36.5	9.5	7.1	1.47	+	−	−	−
28	L23-21-627	石核	黒曜石	42.7	42.3	20.3	33.59	−	−	−	−
	L23-21-718	砕片	黒曜石	9.0	7.8	1.5	0.13	−	−	−	−
	L23-21-737	砕片	黒曜石	7.4	7.7	1.5	0.11	−	−	−	−
	L23-21-753	剝片	黒曜石	49.3	55.2	25.1	42.39	−	−	−	−
	L23-21-804	剝片	チャート	16.8	8.5	2.7	0.29	−	−	−	−
	L23-22-5	砕片	黒曜石	9.0	7.0	1.9	0.11	−	−	−	−
	L23-22-7a	剝片	黒曜石	26.2	24.4	8.6	5.15	−	−	−	−
	L23-22-7b	両極石核	黒曜石	30.5	21.9	16.5	9.43	−	−	−	−
	L23-22-7c	剝片	黒曜石	19.9	10.2	6.0	0.83	−	−	−	−
	L23-22-7d	砕片	黒曜石	5.9	5.6	1.3	0.06	−	−	−	−
	L23-22-7e	砕片	黒曜石	4.9	4.0	3.9	0.10	−	−	−	−
	L23-22-126	剝片	黒曜石	16.0	7.4	2.4	0.21	−	−	−	−
12	L23-22-130	石鏃	黒曜石	14.9	7.8	3.7	0.43	−	−	−	+
	L23-22-265	剝片	黒曜石	15.6	17.8	6.8	1.13	−	−	−	−
27	L23-22-389	剝片	砂岩	61.8	31.0	12.1	23.01	−	−	−	−
	L23-22-450	剝片	黒曜石	20.0	17.7	6.1	1.55	−	−	−	−
9	L23-22-484	石鏃	チャート	20.3	13.8	4.2	0.72	−	−	−	+
	L23-22-502	剝片	黒曜石	9.4	12.6	2.1	0.13	−	−	−	+
	L23-22-506	剝片	黒曜石	15.1	8.7	5.2	0.63	−	−	−	+
	L23-22-507	剝片	黒曜石	19.0	12.5	6.8	1.15	−	−	−	+
36	L23-23-111	両極石核	黒曜石	17.7	7.9	6.2	0.97	−	−	−	−
	L23-23-119	剝片	黒曜石	15.3	7.3	3.2	0.26	−	−	−	−
	L23-23-149	剝片	黒曜石	15.1	8.1	3.7	0.52	−	−	−	−
	L23-23-202	剝片	黒曜石	14.9	7.8	4.9	0.55	−	−	−	−
	L23-23-204	剝片	黒曜石	20.1	12.7	6.5	1.58	−	−	−	−

第７表　縄文時代石器計測表（４）

挿図番号	遺物番号	器種	石質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕の有無	被熱痕の有無	折断の有無	欠損の有無
	L23-23-208	剝片	黒曜石	18.0	19.8	7.9	1.97	−	−	−	−
	L23-23-263	剝片	黒曜石	32.6	16.9	7.6	3.38	−	−	−	−
	L23-24-4	剝片	黒曜石	19.5	13.9	5.0	0.95	−	−	−	−
	027-51	剝片	黒曜石	12.2	8.0	5.4	0.52	−	−	−	−
	L23-25-5	砕片	頁岩	7.6	16.1	2.3	0.06	−	−	−	−
	L24-02-2	剝片	黒曜石	32.7	8.3	6.7	1.81	−	−	−	−
	L24-02-82	砕片	黒曜石	6.4	5.5	1.6	0.04	−	−	−	−
	L24-02-150	剝片	黒曜石	13.4	9.5	2.7	0.36	−	−	−	−
	L24-02-162	砕片	黒曜石	5.5	4.1	0.9	0.03	−	−	−	−
	L24-02-331	剝片	黒曜石	18.7	8.6	4.6	0.65	−	−	−	−
	L24-02-358	剝片	黒曜石	11.0	18.0	2.6	0.44	−	−	−	−
35	L24-02-406	石核	黒曜石	24.9	14.2	6.2	2.03	−	−	−	−
	L24-02-517	剝片	黒曜石	14.6	15.2	3.0	0.63	−	−	−	−
	L24-03-58	両極石核	黒曜石	9.8	12.7	7.9	1.11	−	−	−	−
	L24-07d-22	剝片	黒曜石	24.3	17.4	3.7	1.48	−	−	−	−
	L24-07-128	剝片	黒曜石	14.9	14.7	7.0	1.05	−	−	−	−
6	L24-07-155	石鏃	安山岩	18.9	14.1	3.4	0.62	−	−	−	−
	022-50	剝片	安山岩	24.9	17.6	4.2	1.57	−	−	−	−
44	047-15	楔形石器	粘板岩	38.5	54.0	8.3	20.61	−	−	−	−
1	047-63	石鏃	安山岩	18.1	13.5	5.0	0.99	−	−	−	−
32	048-14	両極石核	黒曜石	26.4	13.7	7.9	3.03	−	−	−	−
	094-49	剝片	黒曜石	19.0	12.0	4.2	0.71	−	−	−	−
3	012-196a	石鏃	チャート	18.5	14.3	3.9	0.86	−	−	−	+
45	012-215a	楔形石器	チャート	20.8	18.8	4.2	2.23	−	−	−	−
	012-215b	剝片	チャート	21.7	19.0	10.2	5.06	−	−	−	−
	L24-15c-4	剝片	黒曜石	15.6	19.2	4.1	0.70	−	−	−	−
43	L23-22表採	両極石核	黒曜石	23.0	18.0	7.2	2.70	−	−	−	−
	010-31	剝片	黒曜石	16.5	10.9	3.7	0.70	−	−	−	−
16	014-18	加工痕のある剝片	黒曜石	21.3	13.9	9.2	2.49	+	−	−	−
4	017-125	石鏃	粘板岩	19.5	12.2	3.5	0.88	−	−	−	+
47	L23-22-236	磨製石斧	凝灰岩	19.5	25.0	14.2	7.40	−	−	−	+
48	K23-19-100	?	閃緑岩	69.8	60.9	24.5	111.46	−	−	−	−
49	L24-03-85	?	粘板岩質ホルンフェルス	87.0	41.0	19.3	98.57	−	−	−	−
50	L24-01-420	敲石	砂岩	63.0	70.0	35.9	224.31	+	+	−	+
51	050-2	敲石	砂岩	51.5	69.1	35.6	187.39	+	+	−	+
52	104-17	敲石	砂岩質ホルンフェルス	86.4	51.6	42.8	295.16	+	−	−	+
53	表面採集e	磨石	流紋岩	58.1	57.5	27.5	122.34	+	−	−	−
54	L23-21-155	凹石	砂岩	99.7	55.9	39.2	271.73	+	+	−	+
55	L24-01-356	敲石	安山岩	93.3	78.7	40.3	464.48	+	−	−	−
56	L24-10c-35	台石？	砂岩	70.6	73.8	35.7	222.18	+	+	−	+
57	104-33	敲石	流紋岩	72.4	32.0	21.0	74.31	+	−	−	+
58	L24-01-422	敲石	砂岩	67.0	36.3	25.6	81.23	+	−	−	−

第８表　縄文時代礫集計表（１）

	砂岩	チャート	流紋	安山	頁岩	泥岩	粘板	ホルンフ	礫岩	片岩	閃緑	凝灰	花崗	石英	瑪瑙	アプライ	浮岩	不明	被熱痕	計
K23−19 （百分率）	5 41.7	3 25.0	1 8.3	1 8.3							1 8.3							1 8.3	7 58.3	12
K23−20 （百分率）	3 23.1	3 23.1	1 7.7	1 7.7	1 7.7				1 7.7	1 7.7		1 7.7						1 7.7	5 38.5	13
K23−24 （百分率）			1 100.0																1 100.0	1
K23−25 （百分率）	13 28.9	16 35.6	8 17.8	2 4.4			1 2.2					2 4.4						3	23 51.1	45
K23表採 （百分率）	1 100.0																		1 100.0	1
K23区計 （百分率）	22 30.6	22 30.6	11 15.3	4 5.6	1 1.4		1 1.4		1 1.4	1 1.4	1 1.4	3 4.2						5 6.9	36 50.0	72
K24−05 （百分率）		1 33.3	2 66.7																2 66.7	3
K24−10 （百分率）		2 50.0	1 25.0					1 25.0											1 25.0	4
K24区計 （百分率）		3 42.9	3 42.9					1 14.3											3 42.9	7
L23−08 （百分率）	1 100.0																		1 100.0	1
L23−09 （百分率）	1 20.0	2 40.0	1 20.0															1 20.0	3 60.0	5
L23−12 （百分率）	1 25.0	1 25.0		1 25.0														1 25.0	2 50.0	4
L23−13 （百分率）	4 40.0	4 40.0	1 10.0															1 40.0	3 30.0	10
L23−14 （百分率）	6 54.5	2 18.2			2 18.2													1 9.1	9 54.5	11
L23−15 （百分率）	4 25.0	6 37.5	1 6.3	1 6.3						1 6.3								3 18.8	6 37.5	16
L23−16 （百分率）	6 25.0	8 33.3	1 4.2	1 4.2			1 4.2					1 4.2						6 25.0	13 54.2	24
L23−18 （百分率）	2 33.3	1 16.7	1 16.7	2 33.3															5 83.3	6
L23−19 （百分率）	1 14.3	6 85.7																	4 57.1	7
L23−20 （百分率）	8 30.8	7 26.9	2 7.7	1 3.8	1 3.8					1 3.8								6 23.1	8 30.8	26
L23−21 （百分率）	25 44.6	21 37.5	1 1.8	4 7.1												2 3.6		3 5.4	32 57.1	56
L23−22 （百分率）	17 27.0	31 49.2	5 7.9	5 7.9	1 1.6	1 1.6			1 4.6		1 1.6							1 4.6	51 81.0	63
L23−23 （百分率）	26 37.7	20 29.0	7 10.1	5 7.2				2 2.9		1 1.4				2 2.9			1 1.4	5 7.2	47 68.1	69
L23−24 （百分率）	1 10.0	7 70.0		1 10.0														1 10.0	6 60.0	10
L23−25 （百分率）	2 50.0	2 50.0																	3 75.0	4
L23区計 （百分率）	105 33.7	118 37.8	20 6.4	21 6.7	4 1.3	1 0.3	1 0.3	2 0.6	1 0.3	3 1.0	1 0.3	1 0.3		2 0.6		2 0.6	1 0.3	29 9.3	193 61.9	312
L24−02 （百分率）	29 43.9	17 25.8	4 6.1		3 4.5			1 1.5				2 3.0		1 1.5				9 13.6	36 54.5	66
L24−03 （百分率）	13 25.0	27 51.9	9 17.3							1 1.9		1 1.9						1 1.9	31 59.6	52
L24−04 （百分率）	2 16.7	6 50.0	1 8.3									2 16.7			1 8.3				3 25.0	12
L24−05 （百分率）	1 50.0	1 50.0																	1 50.0	2

第9表　縄文時代礫集計表(2)

	砂岩	チャート	流紋	安山	頁岩	泥岩	粘板	ホルンフ	礫岩	片岩	閃緑	凝灰	花崗	石英	瑪瑙	アプライ	浮岩	不明	被熱痕	計
L24−06	9	7	3																10	19
(百分率)	47.4	36.8	15.8																52.6	
L24−07	11	5	1				2					1	1				1	2	20	24
(百分率)	45.8	20.8	4.2				8.3					4.2	4.2				4.2	8.3	83.3	
L24−08		2	2																4	4
(百分率)		50.0	50.0																100.0	
L24−09	3	4	1							1									6	9
(百分率)	33.3	44.4	11.1							11.1									66.7	
L24−10	3	1	1					1				1							5	7
(百分率)	42.9	14.3	14.3					14.3				14.3							71.4	
L24−12			1																1	1
(百分率)			100.0																100.0	
L24−13	1	1																	1	2
(百分率)	50.0	50.0																	50.0	
L24−14	1	4	1										1						1	7
(百分率)	14.3	57.1	14.3										14.3						14.3	
L24区計	73	75	24		3		2	2		2		7	2	1	1		1	12	119	205
(百分率)	35.6	36.6	11.7		1.5		1.0	1.0		1.0		3.4	1.0	0.5	0.5		0.5	5.9	58.0	
M23−18		2	1									1						1	2	5
(百分率)		40.0	20.0									20.0						20.0	40.0	
M23−21	6	7	3															2	10	18
(百分率)	33.3	38.9	16.7															11.1	55.6	
M23−23			1																1	1
(百分率)			100.0																100.0	
M23区計	6	9	5									1						3	13	24
(百分率)	25.0	37.5	20.8									4.1						12.5	54.1	
M24−01		2	2	1															0	5
(百分率)		40.0	40.0	20.0															0.0	
M24−02				1														1	1	2
(百分率)				50.0														50.0	50.0	
M24−03		1																	1	1
(百分率)		100.0																	100.0	
M24−07	1	3																	0	4
(百分率)	25.0	75.0																	0.0	
M24−08		3		1			1												2	5
(百分率)		60.0		20.0			20.0												40.0	
M24−09																		1	0	1
(百分率)																		100.0	0.0	
M24区計	1	9	2	3			1											2	4	18
(百分率)	5.5	50.0	11.1	16.7			5.5											11.1	22.2	
総　計	207	236	65	28	8	1	5	5	2	6	2	12	2	3	1	2	2	51	368	638
(百分率)	32.4	37.0	10.2	4.4	1.3	0.2	0.8	0.8	0.3	0.9	0.3	1.9	0.3	0.5	0.2	0.3	0.3	8.0	57.7	

註　数字は点数。重量等は計上しない。被熱痕欄は、グリッド毎の合計のうち火熱を受けた礫点数を示す。

ホルンフ：ホルンフェルス Hornfels。砂岩起源のもの、粘板岩起源のものを含む。

片岩：緑泥片岩、雲母片岩、石墨片岩等を含む。

アプライ：アプライト Aplite。半花崗岩。

V　古墳時代

1　梗概

今回報告する遺跡南半部（B区）では計13棟の竪穴建物跡が検出され、台地央部にまんべんなく分布している。うちカマドを持たない建物跡が3棟、カマドを持つ建物跡が10棟認められるが、時期的に見れば5世紀後半から6世紀前半までの建物群はほぼ連続性を持っている。遺跡北半部（A区）で検出された古墳時代建物群は、殆どが5世紀後半から6世紀前半のもので構成されていた[1]が、B区では帰属時期のばらつきは大きい。A区では7世紀代に帰属する例はＳＩ-002の1棟のみであったが、B区では可能性を含めて複数の建物が営まれており、該期の集落はB区を中心に展開したようである。古墳時代の遺構は基本的には竪穴建物跡だけであると言えるが、他に古墳時代の遺物を出土したものとして2基の土坑がある。ただしそれら土坑の性格は不明瞭であり、また確実に古墳時代の所産であると明断することも躊躇されるため、後に他の土坑とともに報告することにする。以下、遺構毎に詳細を報告するが、ここでは小期毎に分割せず、遺構番号順に記述を進めたい。

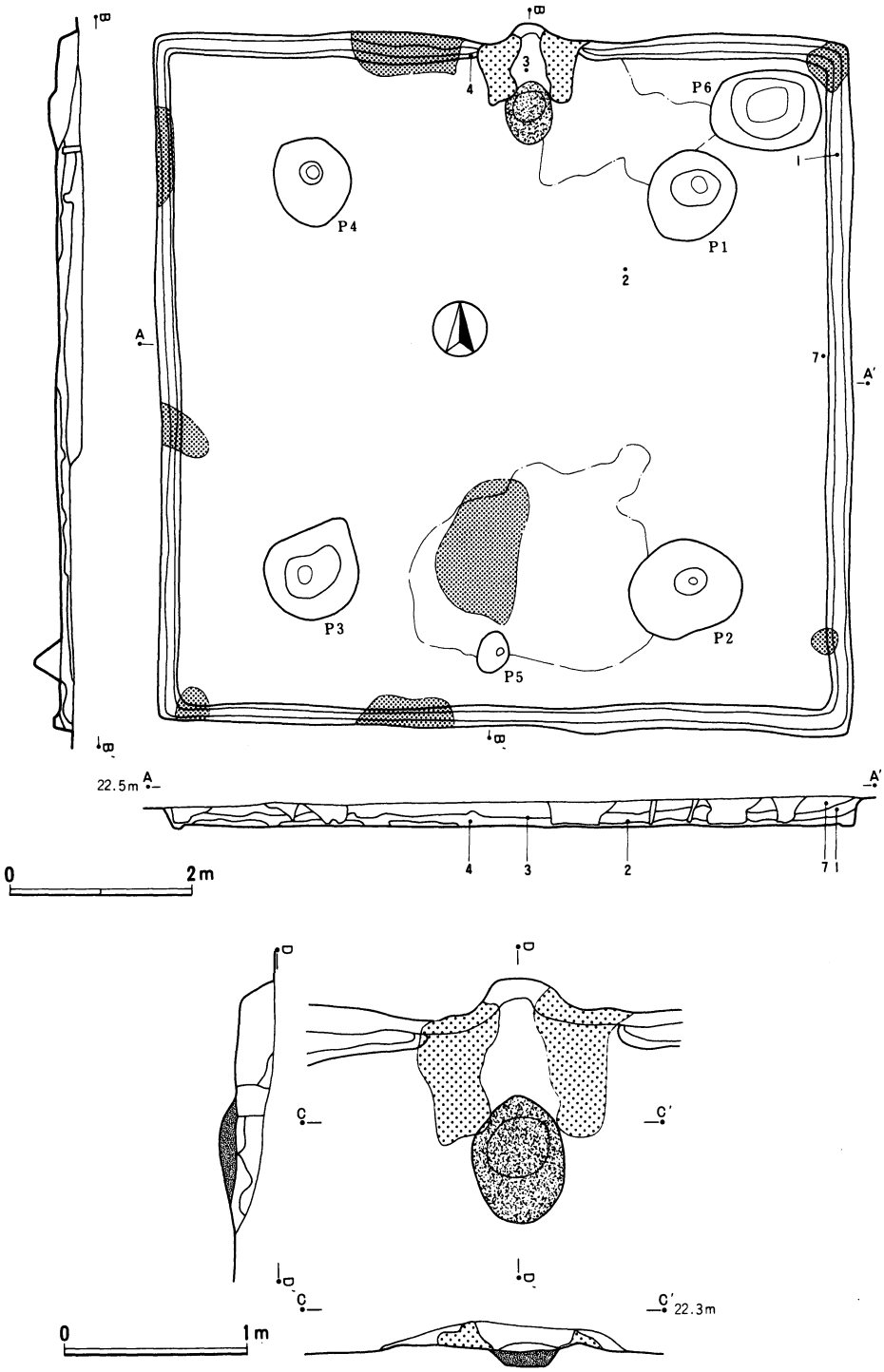
2　ＳＩ－021（第52図・第53図・図版18－1）

位置・形状　調査区の東端近く、M23－23区に位置する竪穴建物跡。主軸方位を北－南方向に置く。ほぼ正確な正方形を呈し、各辺ともおよそ7.6mを測る。検出面からの深さは、深い箇所で0.3m、浅いところでは0.1mに満たない。

付帯施設・床面　主柱穴は4か所に検出されている。配置はほぼ正方形で、壁面からの距離も概ね一定している。いずれも掘り込みは深く大径で、直径は1m前後、床面からの深さはＰ1が100cm、Ｐ2が131cm、Ｐ3が114cm、Ｐ4が102cm。南辺のおおよそ中央の壁際にＰ5があり、入口ピットと考えられる。深さは47cmを測る。北東コーナーには貯蔵穴と考えられるＰ6がある。120×90cmの隅丸長方形を呈し、掘り込みは70cmとかなり深い。カマドが北辺ほぼ中央に位置する。検出面から浅いため、遺存度は悪い。火床は遺存した袖部よりも前面にあり、非常によく焼けている。壁周溝は全周するが、カマド下は掘られていない。上記諸施設の位置関係は古墳時代後期の規範的なものと言える。

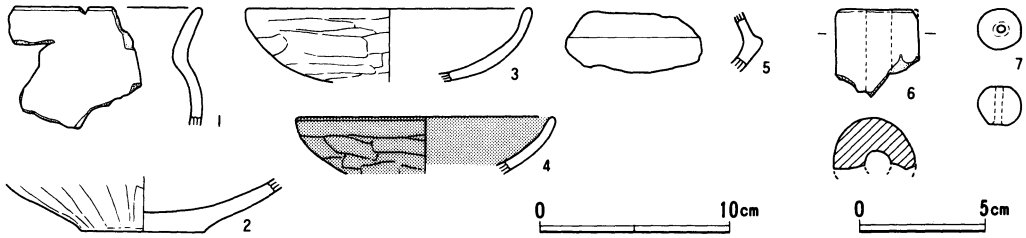
床面の硬化は入口ピットの前面及びカマドと貯蔵穴の間に顕著に観察されている。床面の中央部では踏み締め痕はあまりはっきりしなかった。

遺物等出土状況　遺物量は少ない。出土位置としては西辺側、南辺側には殆ど見られず、床面中央、カマド周辺、東辺側に散漫に分布する。壁際の遺物はかなり浮いて出土したものが多く、いずれも遺構の埋没過程で混入したものであろう。



第52図　SI－021（1/80・カマド1/40）

出土遺物　1は甕形土器の口縁部破片で、胴径に比して口径の大きなものである。2は甕形土器の底部であろうが、1と異なり球胴を呈するものであろうか。3～5は坏形土器である。



第53図　ＳＩ－021出土遺物（1～5：1/4・6～7：1/3）

3、4は肩部のかえりを持たない浅い器形を呈するもので、4の全面に赤彩の痕跡がある。5は肩部の小片で、口縁部はかなり内傾する。6は管玉状の土錘、7は小型の土玉である。

3　ＳＩ－022（第54図・第55図・図版17－2）

位置・形状　古墳時代の遺構群の最も北東よりに並ぶ竪穴建物跡の一つ。L23－14・19区に位置し、北西－南東方向に主軸方位を置いている。形状は概ね正方形と言えるが、やや歪で、北西辺4.6m、北東辺4.8m、南東辺4.8m、南西辺4.5mを測る。検出面からの深さは0.3～0.5m。

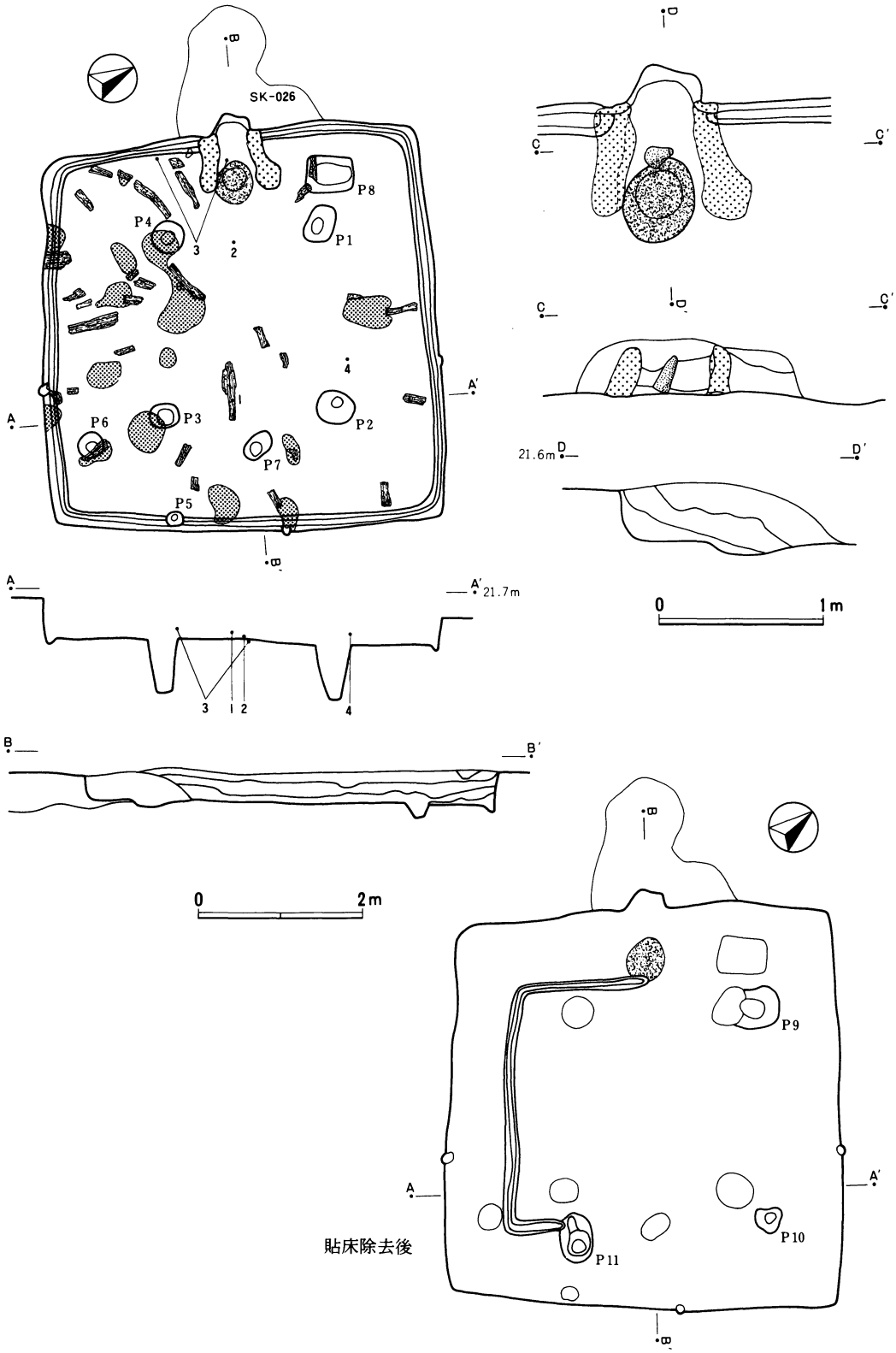
重複関係　北西側でＳＫ-026（炉穴）と重複する。言うまでもなく当建物跡が新。

付帯施設・床面　主柱穴が4か所に穿たれている。若干主軸方向に長い長方形配置で、遺構全体からすれば、やや内側に入った位置にある。床面からの深度はＰ1が57cm、Ｐ2が68cm、Ｐ3が62cm、Ｐ4が70cmを測る。他に南東辺壁際にＰ5が、南コーナー近くにＰ6が認められたが、いずれも浅く性格は不明。南東辺側中央にあるＰ7は、深さ15cmと小規模であるが入口ピットと考えられる。カマドは北西辺中央に設けられている。谷旬の分類[2]によるB_2類に相当する。火床奥には支脚が立ったまま遺存した。カマドの右手には貯蔵穴と考えられるＰ8がある。60×43cmの長方形で、掘り込みは26cmと浅い。壁周溝はカマド下を除いて全周する。

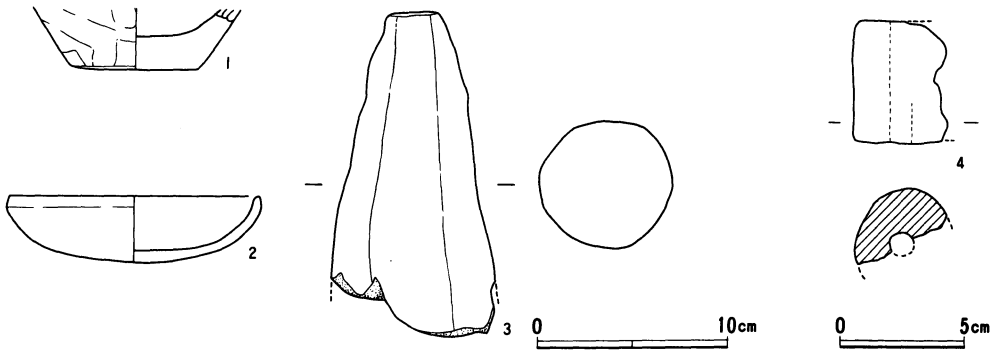
当建物跡では踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。貼床を除去した下には3か所のピット及び周溝状の溝が検出された。ピットの深さはＰ9が59cm、Ｐ10が38cm、Ｐ11が70cmあって、配置も柱穴状であり、遺構の改築前の柱穴である可能性がある。溝は主軸に対して左半分に「コ」字形に巡るが、壁よりもかなり内側であり、床面の区画に関係するものである可能性が指摘されようか。

遺物等出土状況　遺物量は少なく、遺構全体に散漫に分布するに過ぎない。また床面上には炭化材及び焼土ブロックが放射状に分布した。放射状の炭化材は屋根部材の崩落を示すものであろうか。

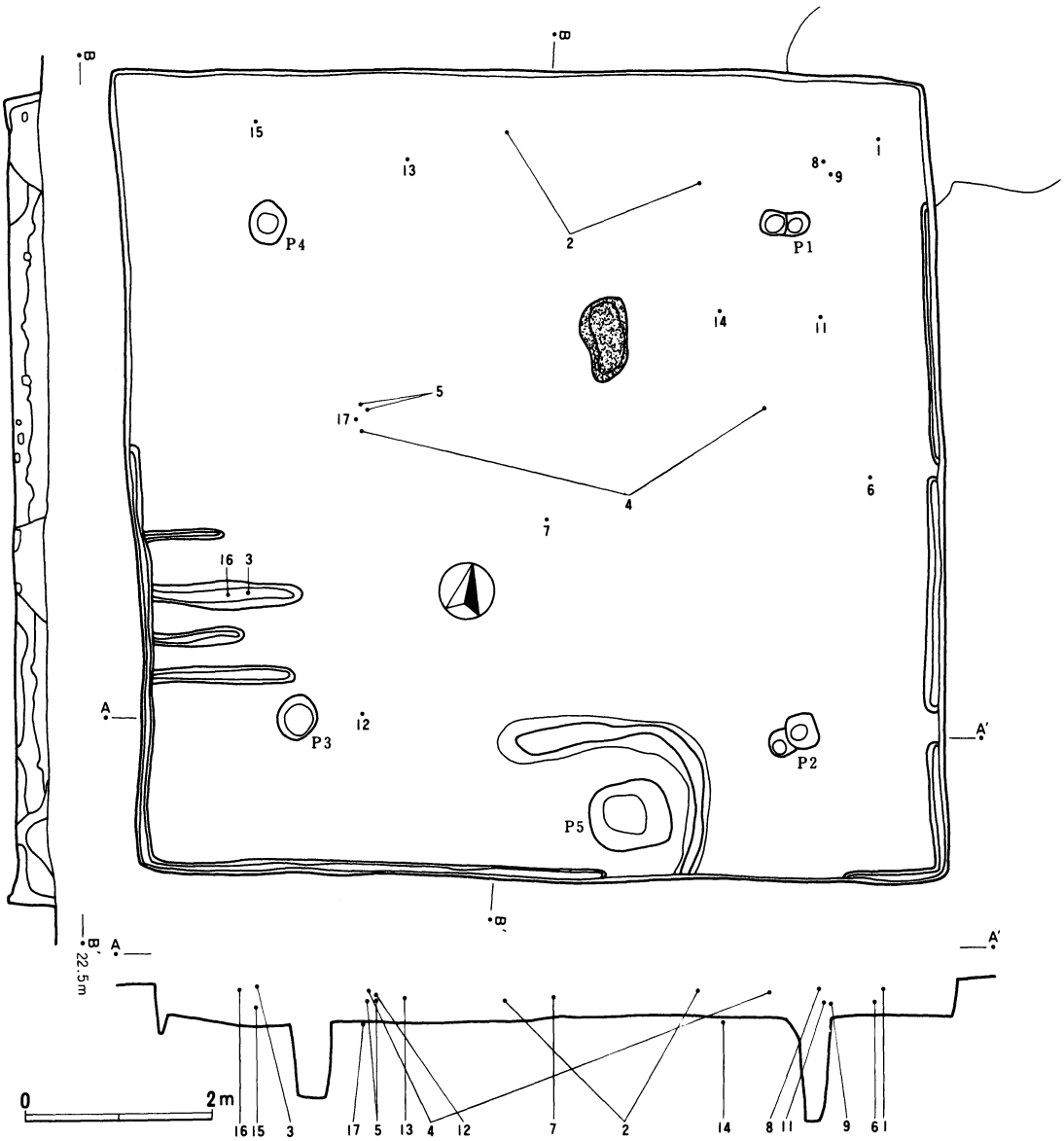
出土遺物　1は甕形土器の底部。2は坏形土器、口縁部外面がわずかに内傾し、直下に稜を持つものである。3はカマド内に遺存した支脚、4は管玉状の土錘である。



第54図　SI－022（1/80・カマド1/40）



第55図　ＳＩ－022出土遺物（1～3：1/4・4：1/3）



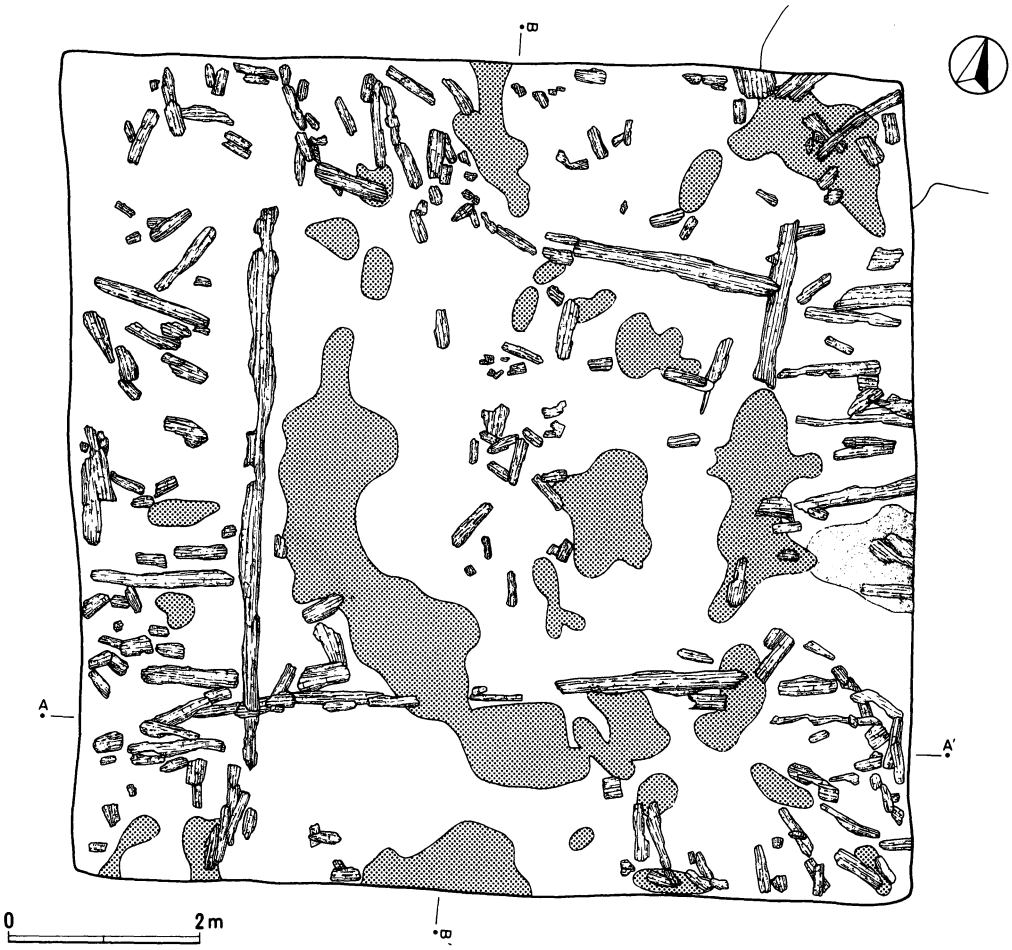
第56図　ＳＩ－023（1/80）

4　ＳＩ－023（第56図～第58図・図版18－２・３）

位置・形状　古墳時代遺構群のほぼ中央、Ｌ24－05・10区に位置する竪穴建物跡。ほぼ南北方向に主軸方位を置く。僅かに歪ではあるが、概ね正方形を呈し、北辺8.8m、東辺8.5m、南辺8.7m、西辺8.6mを測る。検出面からの深さは0.4～0.5mであった。

重複関係　北東コーナーでＳＫ-022、南東コーナーでＳＫ-023（いずれも炉穴）と重複するが、述べるまでもなく当建物跡が新である。

付帯施設・床面　主柱穴は４か所にあり、ほぼ正方形配置をとっている。Ｐ１とＰ２は２つの柱穴が連接した形態を示し、Ｐ１東側が38cm、西側が73cm、Ｐ２東側が110cm、西側が44cmの深さを持つ。Ｐ３が77cm、Ｐ４が94cmの深さを有するため、組み合わせとしてはＰ１西とＰ２東が相当するか。炉は浅い窪みを持つ地床炉で、床面中央のやや北東寄りに設けられる。南辺側の壁際東寄りには貯蔵穴と考えられるＰ５があり、炉と貯蔵穴とは正対することになる。Ｐ５は89×74cmの隅丸長方形で、深さは73cm。貯蔵穴の周囲には馬蹄形を呈する土堤状の高まり



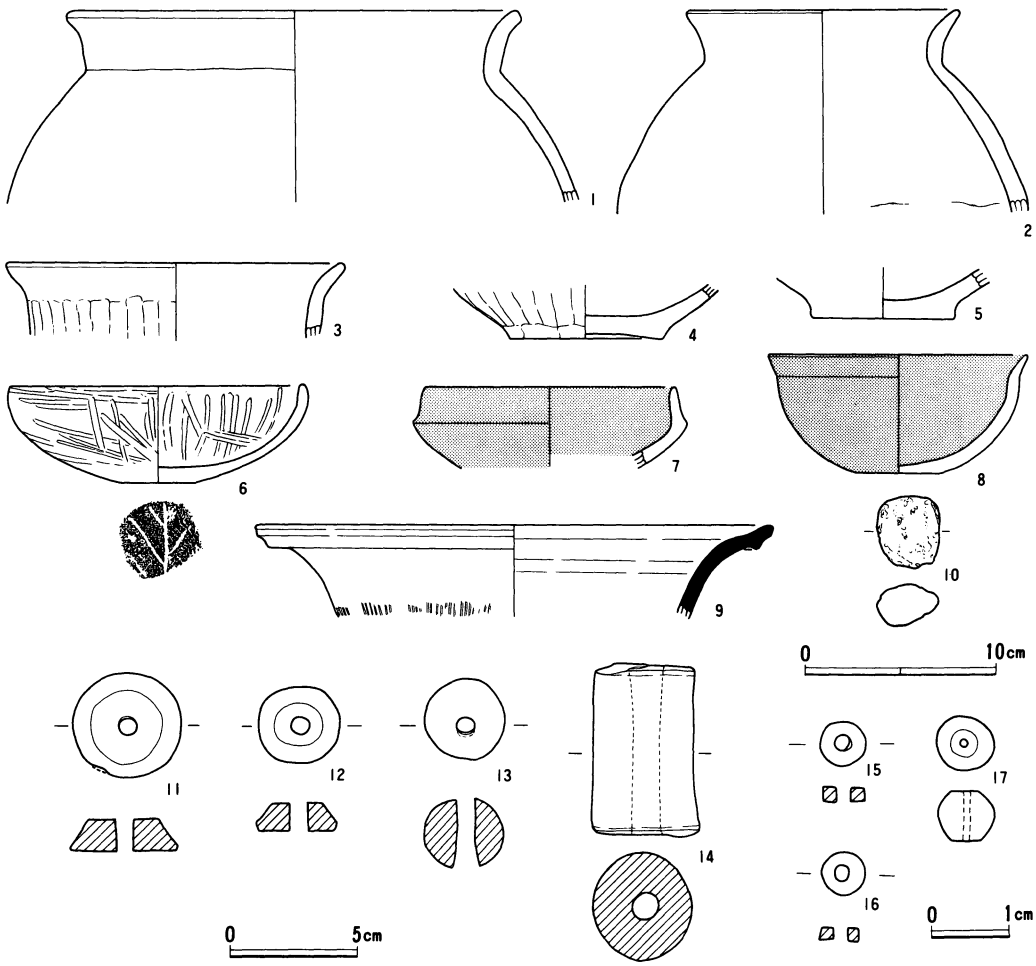
第57図　ＳＩ－023炭化材・焼土ブロック検出状況（1/80）

があり、そこに入口施設があったことは疑いない。壁周溝は認められるものの全周はせず、東辺、南辺、西辺の一部に断続的に巡る。また西辺側では周溝から短い溝が4条伸びている。

当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　遺構自体が大規模なためにさほど濃密な分布ではないが、全体からほぼ均等に200点余りの遺物が出土している。それらは床面からかなり浮いて出土したものが多く、時期幅も認められる。また床面上からは炭化材及び焼土ブロックが濃密に検出されている。人為か、非人為かに拘わらず、当建物跡は火災を受けたものと考えられる。炭化材は各辺に平行なものと放射状のものの二者があり、それぞれ梁・桁部材、屋根部材と見てよいであろう。

出土遺物　1、2は甕形土器の破片である。ともに口縁部が外反し、球胴をなすもの。3は甑か。4、5は甕形土器の底部である。6は口縁部が丸みを帯びて僅かに内弯気味になる坏形土器で内面には放射状の磨きが認められる。また底部は小さな平底で、木葉痕が残る。7も坏形土器であるが、口縁部下に稜を持つもので内外面とも赤彩されている。8は椀形土器で口縁



第58図　SI－023出土遺物（1～10：1/4・11～14：1/3・15～17：1/1）

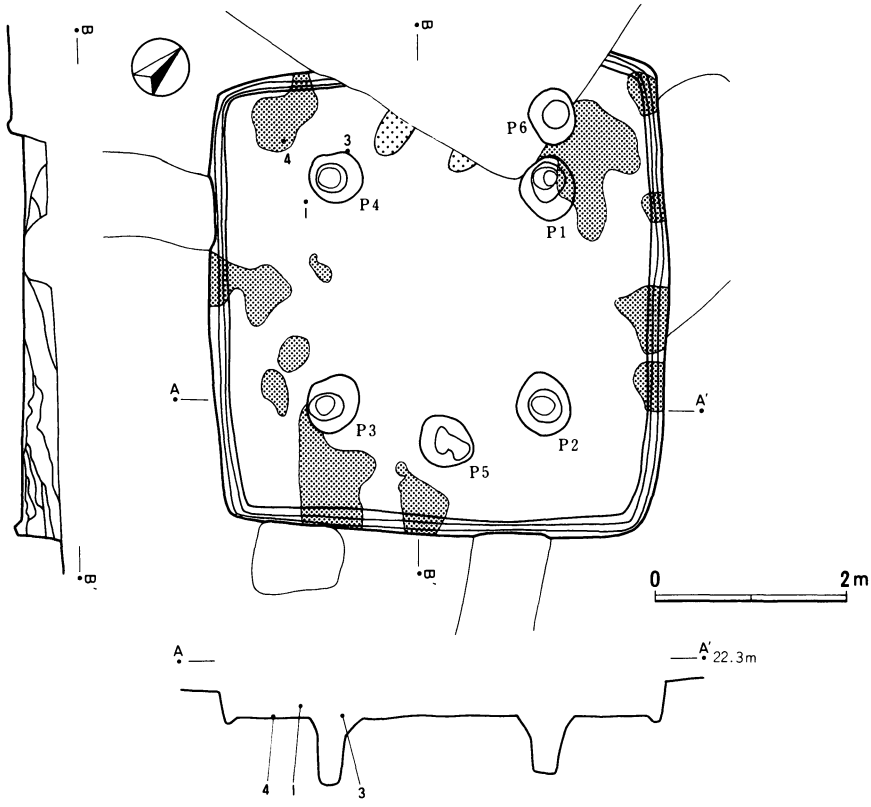
部が短く外反し、底部は平底である。これも内外面とも赤彩される。9は須恵器甕の口縁部である。以上の土器の中で、少なくとも7、9は遺構の時期から降るものであろう。10は軽石。11、12は石製紡錘車で上下面は丁寧に研磨されているが、側面は粗く成形された跡が残る。13は土玉、14は管玉状の土錘である。15、16は滑石製臼玉、17は石製丸玉である。

5　ＳＩ－025（第59図・第60図・図版18－４）

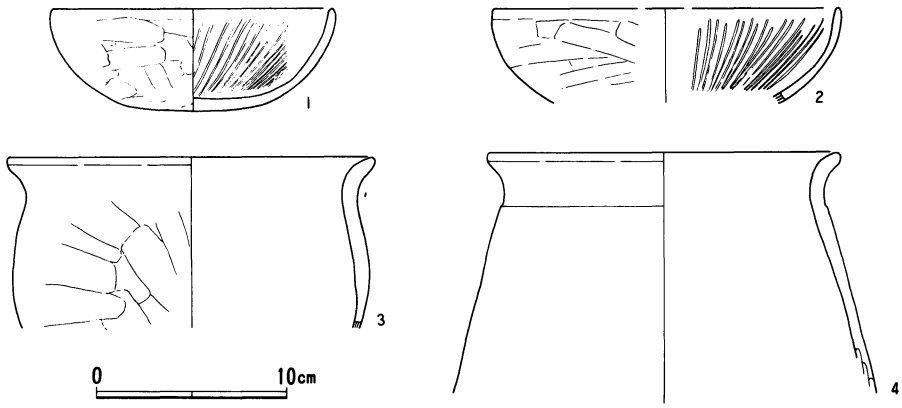
位置・形状　古墳時代の遺構群のほぼ中央、M23－21区に位置する竪穴建物跡。北西－南東方向に主軸方位を置いている。ほぼ正方形を呈し、北西辺4.7m、北東辺4.8m、南東辺4.6m、南西辺4.5mを測る。検出面からの深さは0.2～0.4m。

重複関係　炉穴ＳＫ-029、竪穴建物跡ＳＩ-024、古墳ＳＸ-005と重複している。新旧関係はＳＫ-029より新、ＳＩ-024、ＳＸ-005よりも古。

付帯施設・床面　主柱穴は４か所に認められ、ほぼ正方形配置をとる。床面からの深さはＰ１が77cm、Ｐ２が59cm、Ｐ３が70cm、Ｐ４が80cm。南東辺側中央にはＰ５があり、入口ピットと考えられる。ほぼ直立で径は柱穴と同程度、掘り込みの深さは34cmを測る。Ｐ１の北側にはＰ６があり、ほぼ円形で掘り込みも82cmと深いものの、位置関係から貯蔵穴と見るべきであろ



第59図　ＳＩ－025（1/80）



第60図　ＳＩ－025出土遺物（1/4）

うか。ＳＩ-024に切られて袖部の一部しか遺存しないが、北西辺中央にはカマドが設けられている。壁周溝は遺存部分で見る限り全周する。

当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

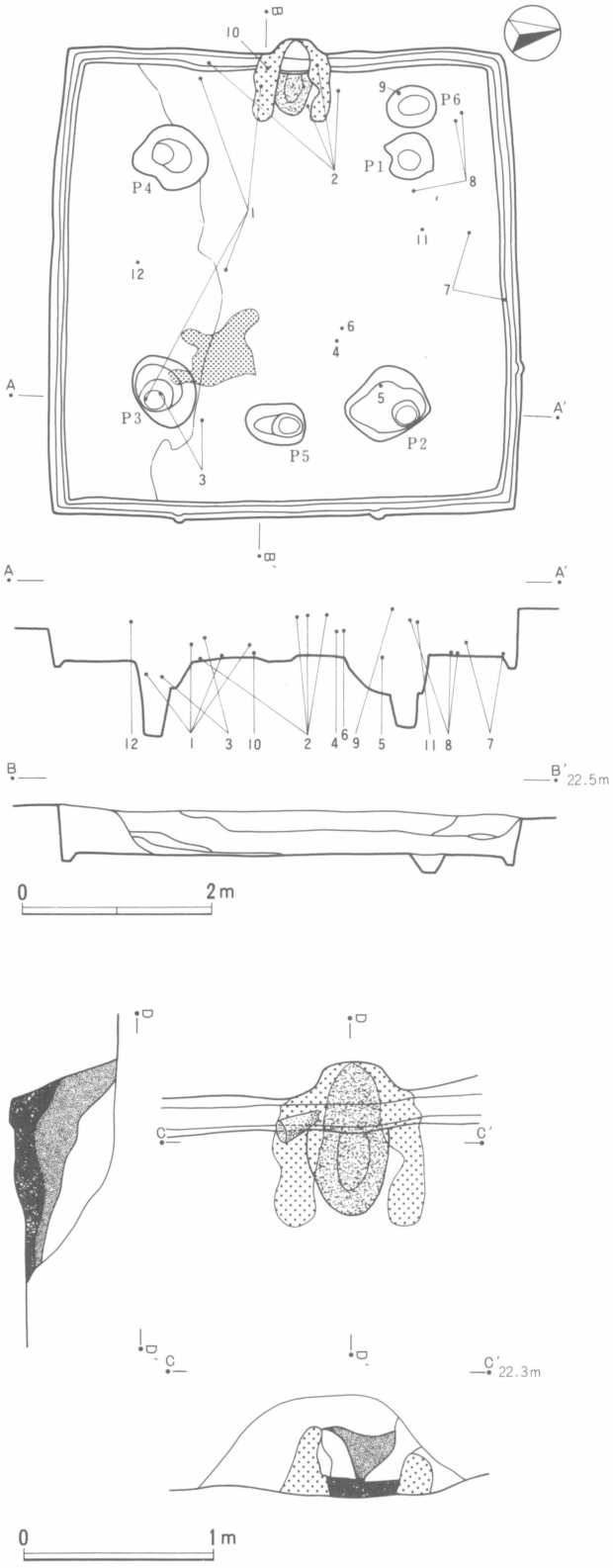
遺物等出土状況　遺物点数は22点ときわめて少ない。中央付近からは全く遺物は出土しておらず、いずれも周縁部からの出土であるが、Ｐ４付近に約半数が集中した。また床面周縁部には焼土ブロックが随所に認められた。

出土遺物　１、２は坏形土器である。この二者は口径の違いを除けばきわめて類似したもので、体部は丸みを帯びて口縁部がほぼ直立して終わり、内面には丁寧な磨きのうえに放射状の暗文が施される。外面は口縁端部のみ横方向になで、以下は篦削り。３、４は甕形土器で、４は肩部の張りがなく胴部の遺存部分は直線的で、かなり長胴の器形を呈するものであろうか。両者とも胴部に篦削りを施した後に器面をなでている。

6　ＳＩ－026（第61図・第62図・図版19－１）

位置・形状　古墳時代の遺構群の南縁、Ｌ24－09・14区に位置する竪穴建物跡。ほぼ東西方向に主軸方位を置いている。概ね正方形を呈し、西辺4.7m、北辺4.9m、東辺4.8m、南辺4.9mを測る。検出面からの深さは0.3～0.5m。

付帯施設・床面　４か所に主柱穴が検出されている。床面からの深さはＰ１が65cm、Ｐ２が72cm、Ｐ３が75cm、Ｐ４が74cmを測る。西辺中央にはカマドが設けられる。カマドは谷分類のB_2類に分類されるもので、火床がかなり壁に近接した位置で検出されている。火床上には灰が厚く堆積していた。また左袖上から支脚が出土した。カマドに対置される東辺側中央には入口ピットと見られるＰ５がある。その深さは31cm。カマドの右手、Ｐ１の西に接するようにＰ６が穿たれているが、これはその位置関係から貯蔵穴と考えるべきであろう。Ｐ６は52×42cmの楕円形で床面からの掘り込みは51cm。壁周溝は全周し、カマド下にも巡っている。

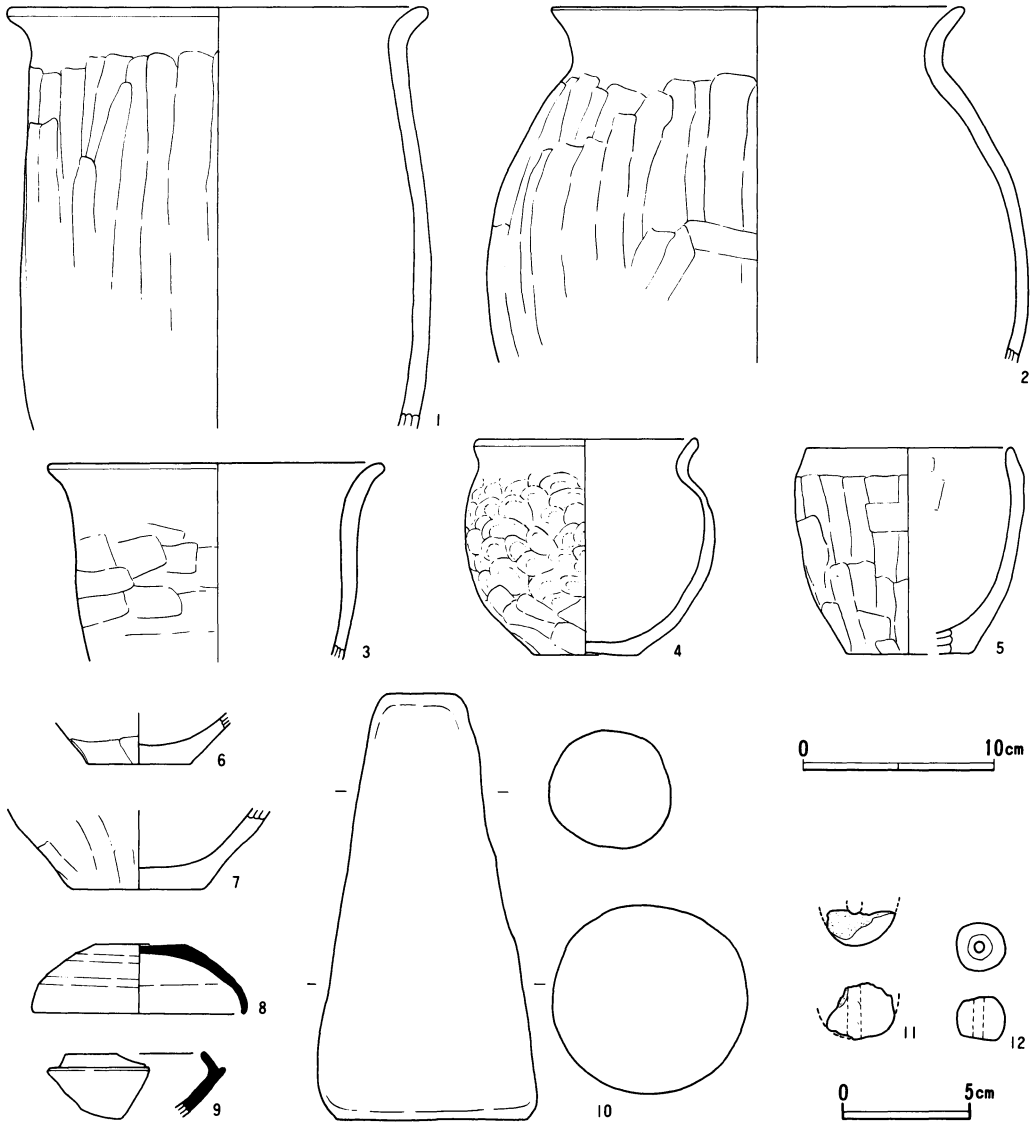


第61図　ＳＩ－026（1/80・カマド1/40）

床面は南側の柱間外が軟質で、床面中央から北側は硬化していた。

遺物等出土状況　遺物は遺構南半に少なく、Ｐ３付近に少量まとまっていただけなのに対して、北半からは相対的に多量の遺物が出土している。それらは床面付近よりも覆土中～上位に包含されるものが多い。当建物は集落の南縁に位置しており、主たる生活空間はこの北側に展開していたはずで、したがってここに見る遺物の偏在は、建物廃絶後の遺物の投棄方向を示すものであろう。

出土遺物　１、３は胴部の張らない甕または甑形土器である。１が縦位の篦削りが施されているのに対し、３は横位の篦削りが施される。２は球胴の甕形土器である。口頸部直下から縦位の篦削りによって調整される。４は小型の甕形土器。底部近くが篦削りによって調整されているものの、胴部の過半に指で押さえた圧痕が顕著に残される。５は小型の鉢形土器である。内面及び口縁部外面はかなり丁寧な横位のなでが施される。６、７は甕形土器の底部。８、９は須恵器坏蓋及び坏身である。蓋の上面は刷毛目状の調整痕を残すが、その外周までは回転篦削りが及び、その後全体にヨコナデが施される。身は口頸部が短く著しく内傾するもの。10は支脚。11は土玉、12は石製丸玉である。



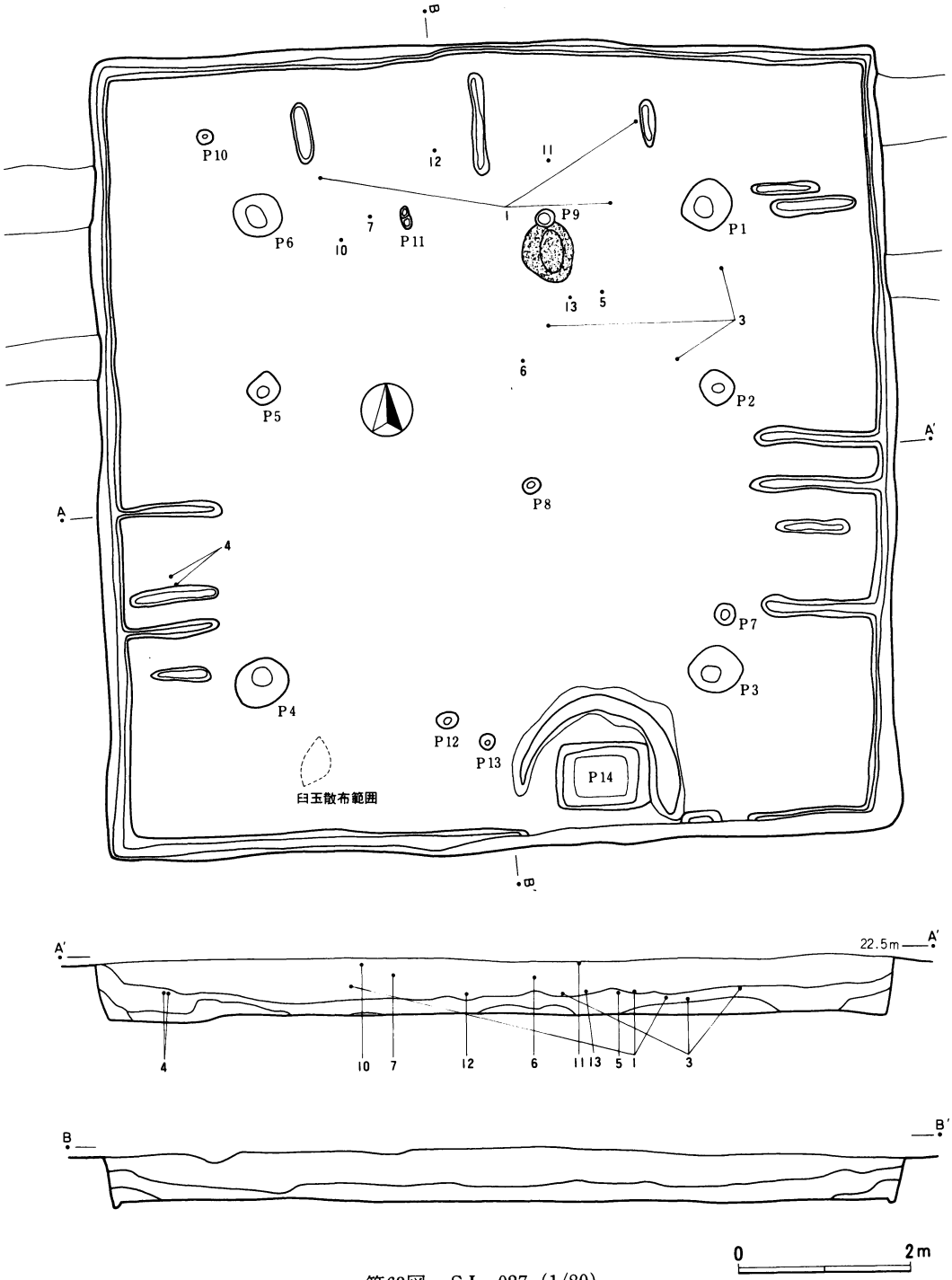
第62図　ＳＩ－026出土遺物（1～10：1/4・11～12：1/3）

7　ＳＩ－027（第63図～第66図・図版19－２・３）

位置・形状　古墳時代遺構群の東端、M24－03・08区に位置する竪穴建物跡。遺跡内で最も大型の正方形の建物跡で、南北方向に主軸方位を置く。北辺9.3m、東辺9.2m、南辺9.2m、西辺9.3mを測る。検出面からの深さは0.5～0.7m。

重複関係　溝状遺構ＳＤ-006及びＳＤ-007と重複する。新旧関係は当建物跡が古。

付帯施設・床面　規則的な配列のピットがＰ１～Ｐ６の６か所にあり、それらを主柱穴と考える。勿論Ｐ２、Ｐ５は相対的に補助的なものであろう。床面からの深度はＰ１が126cm、Ｐ２が110cm、Ｐ３が137cm、Ｐ４が134cm、Ｐ５が31cm、Ｐ６が128cmとＰ５だけが極端に浅い。ま



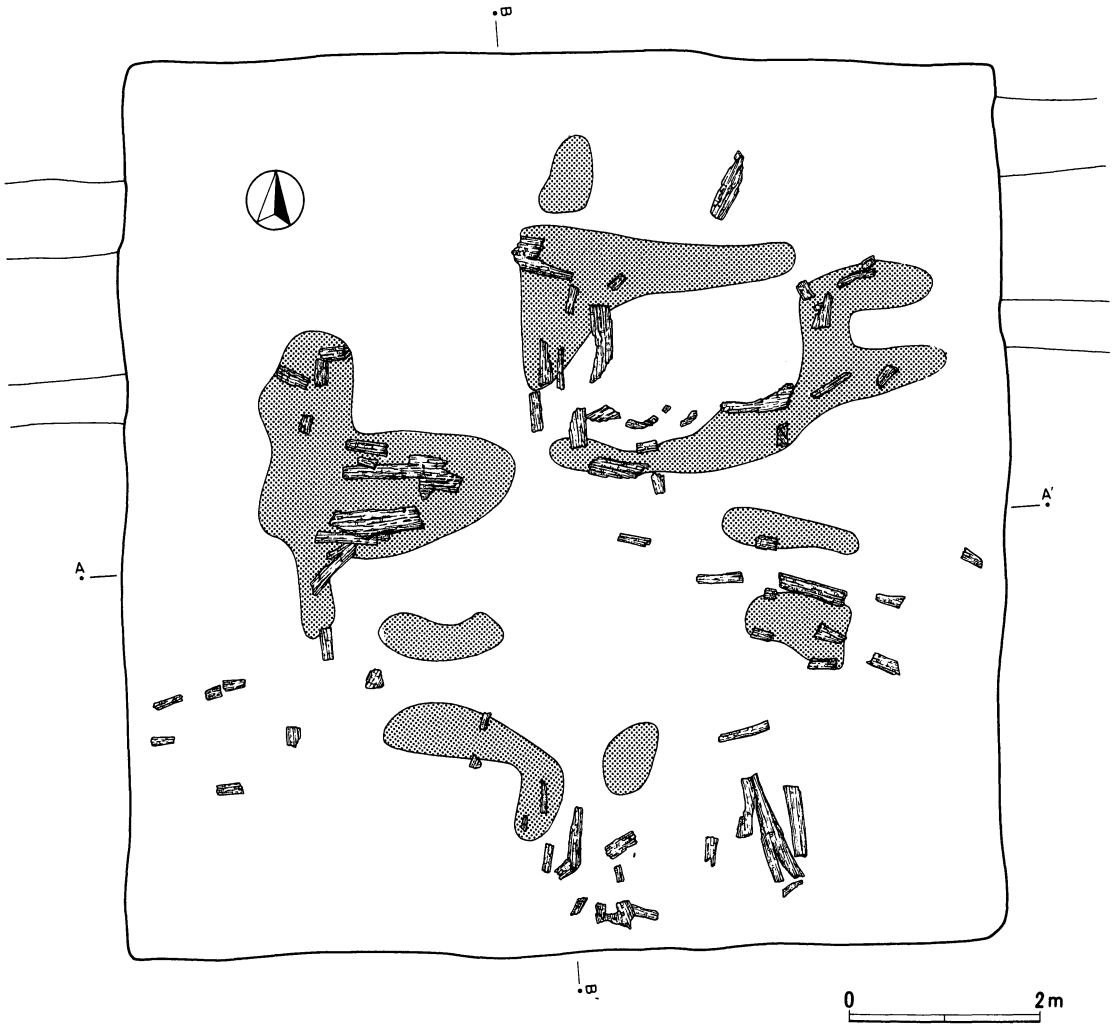
第63図　ＳＩ－027（1/80）

たＰ１とＰ６の間にはＰ９とＰ11が、Ｐ３とＰ４の間にはＰ12とＰ13が、床面中央にはＰ８があるが、Ｐ12とＰ13がそれぞれ37cm、32cmとやや深いほかはいずれも10cm余りで性格は判然としない。炉が北側、Ｐ１とＰ６の間のやや東寄りに、浅い地床炉として設けられている。その

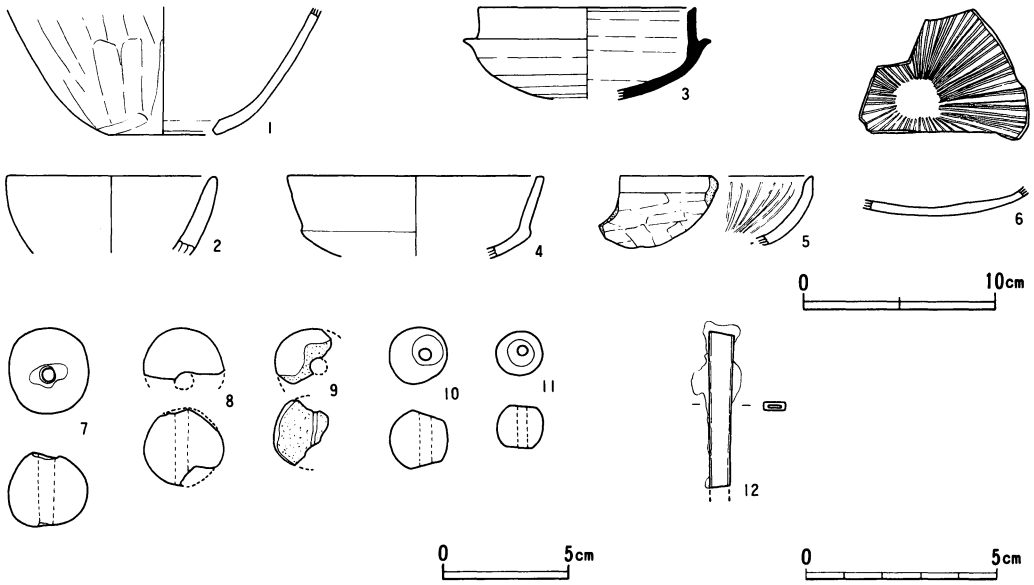
対辺の南辺東寄りにP14とそれを囲むように馬蹄形の土堤状の高まりが検出されている。P14は貯蔵穴と推定され、土堤状の高まりの存在から貯蔵穴の上部に入口施設が設けられていたと考えたいが、P12及びP13が入口施設に関係するピットである可能性も全く否定はできない。ただ該期のとくに大型建物では炉と入口が対称軸よりも左右どちらかに寄っているのが普通である。壁周溝は概ね全周するが、P14の外側だけは途切れており、この点はそこに入口施設を考定する根拠となろう。当建物の外区（柱間外）には各辺と直交する小溝が多く検出されている。北辺側にある3本や、P1の東側及びP7の東側にあるものなどは間仕切り溝と捉えてよいかと思われるが、西辺、東辺側に見られる比較的密に連続するものはまた別の性格を想定すべきであろう。

当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　出土遺物点数は200点余りで、遺構の規模からすれば決して多いとは言えな



第64図　SI－027炭化材・焼土ブロック検出状況（1/80）



第65図　ＳＩ－027出土遺物１(1～6：1/4・7～11：1/3・12：1/2)

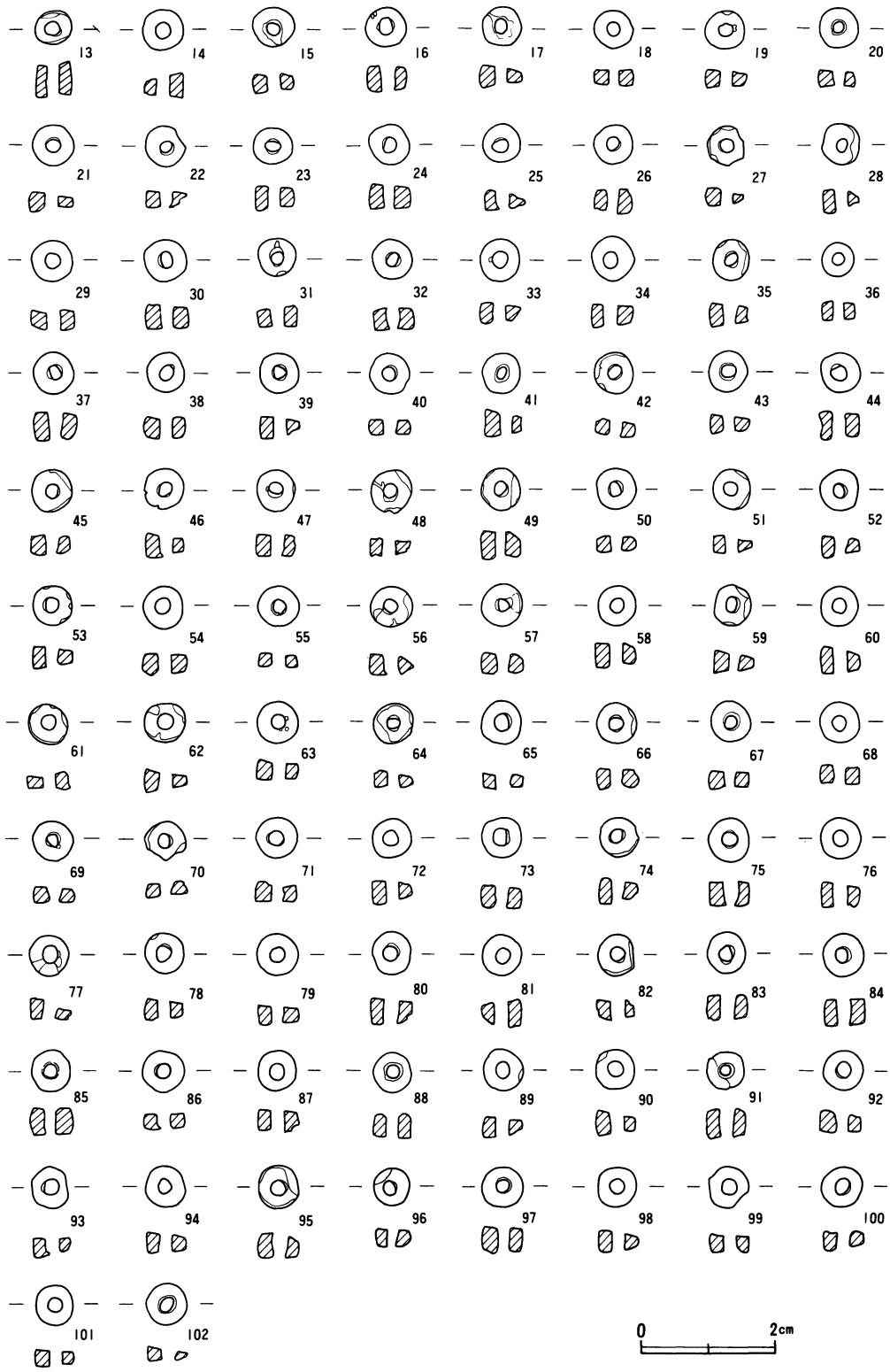
い。土器片の分布はとくに偏在する傾向もなく散漫に出土している。また床面からかなり浮いて出土したものが多い。ただ南辺西寄りの床面上で滑石製臼玉92点が集中して出土した箇所がある。また当建物跡の床面上にはＳＩ-023と同様焼土ブロックと炭化材が検出されている。しかしここではあまり良好に遺存せず、断片的なものが概ね放射状に見られただけである。

出土遺物　１は甑形土器の破片である。外面は縦位の篦削り、内面は横位の篦なでにより調整される。２は鉢形土器と思われるもので、口径に比して厚みがありやや粗雑な作り。３は須恵器坏身である。口縁部はほぼ直立し端部は非常に鋭く面取りされている。また受け部の抉りも深く鋭い。４は土師器坏形土器であるが、口端の面取りは非常に明確で、これは須恵器の坏蓋を模倣して製作されているようである。５、６は坏形土器片であるが、内面に放射状の暗文を施すものであり、時期が異なる混入品であろう。７～11は土玉。12は鉄鏃片と想定される鉄製品である。13以下は集中地点から出土した滑石製臼玉である。それらの計測値は別表に示しておく。

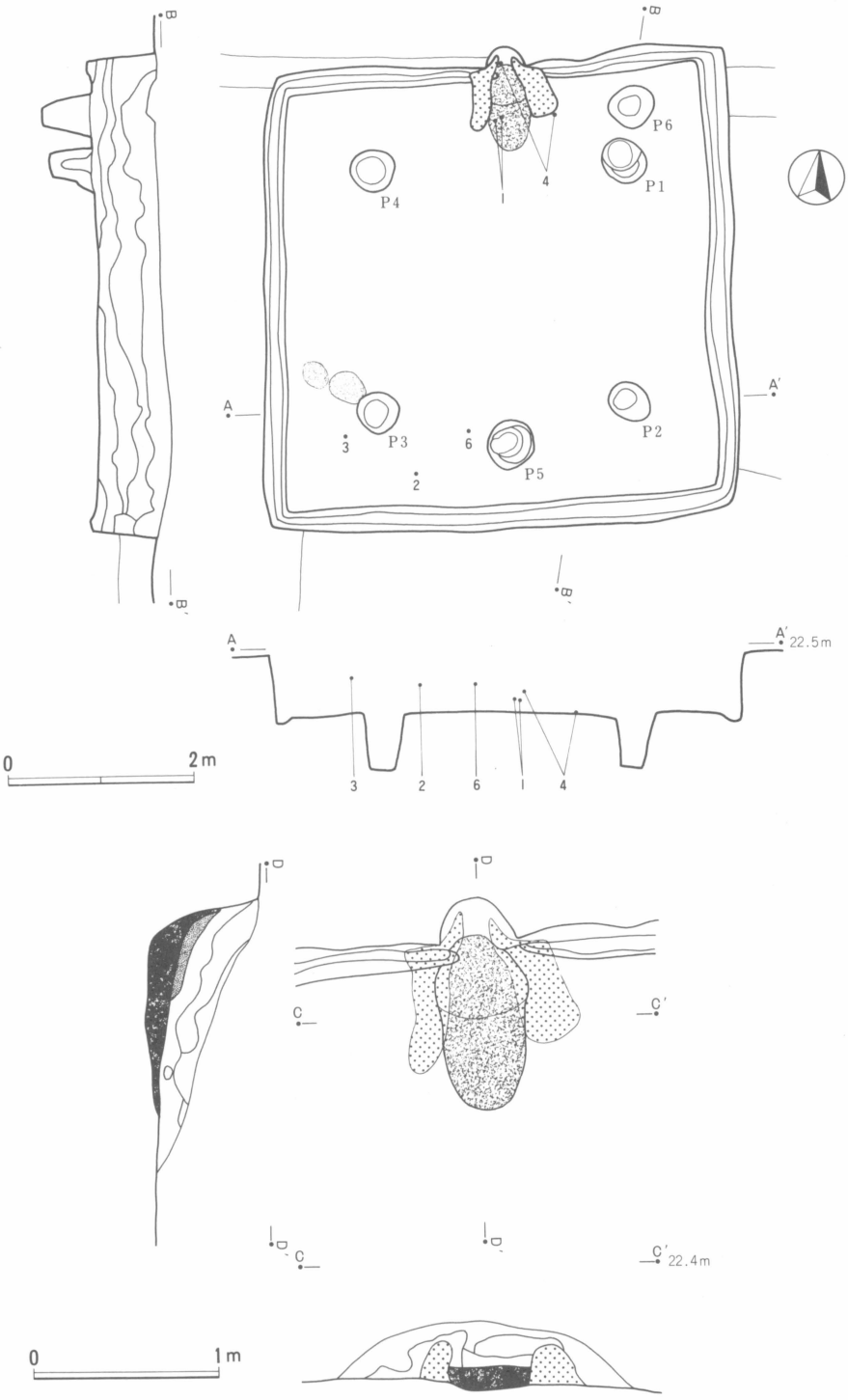
8　ＳＩ－028（第67図・第68図・図版19－４）

位置・形状　ＳＩ-023とＳＩ-027の中間、M24－07区に位置する竪穴建物跡。ほぼ南北方向に主軸方位を置く。平面形状はほぼ正方形で、北辺5.0m、東辺5.0m、南辺4.9m、西辺4.9mを測る。検出面からの深さはおよそ0.5～0.8m。

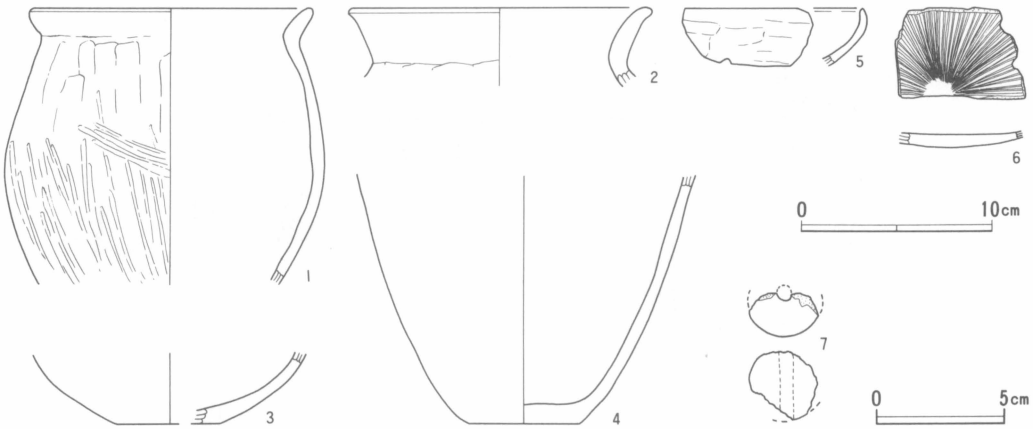
重複関係　南側でＳＩ-029と、北側でＳＤ-006と重複する。新旧関係については、ＳＩ-029より新、ＳＤ-006より古。



第66図　ＳＩ－027出土遺物２(1/1)



第67図　ＳＩ－028（1/80・カマド1/40）



第68図　ＳＩ－028出土遺物（１～６：1/4・７：1/3）

付帯施設・床面　主柱穴と考えられるピットはＰ１～Ｐ４の４か所に検出されている。ほぼ正方形配列を示し、床面からの深さはＰ１が49cm、Ｐ２が56cm、Ｐ３が57cm、Ｐ４が74cm。北辺中央にカマドが設けられている。谷分類によるB_2類に相当。火床はきわめて浅い窪みを呈しており、非常に厚く灰が堆積している。カマドの対辺側中央にＰ５があって入口ピットと考えられる。掘り込みはほぼ垂直で深さは29cm。カマド右手、Ｐ１の北側に接するようにＰ６が検出されている。径約50cmの円形プランで深さは53cm。貯蔵穴と考える。この建物跡に類した平面構成をとる建物跡は遺跡内に多い。壁周溝は全周するが、カマド下は掘られていない。

当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　出土遺物点数は30点足らずで乏しい。分布は一様ではなく、南西コーナー寄りとカマドの内外に集中している。南西コーナー寄りから出土したものは床面から浮いていたものが多い。なおＰ３の西脇には粘土ブロックが見られたが、その性格は不明。

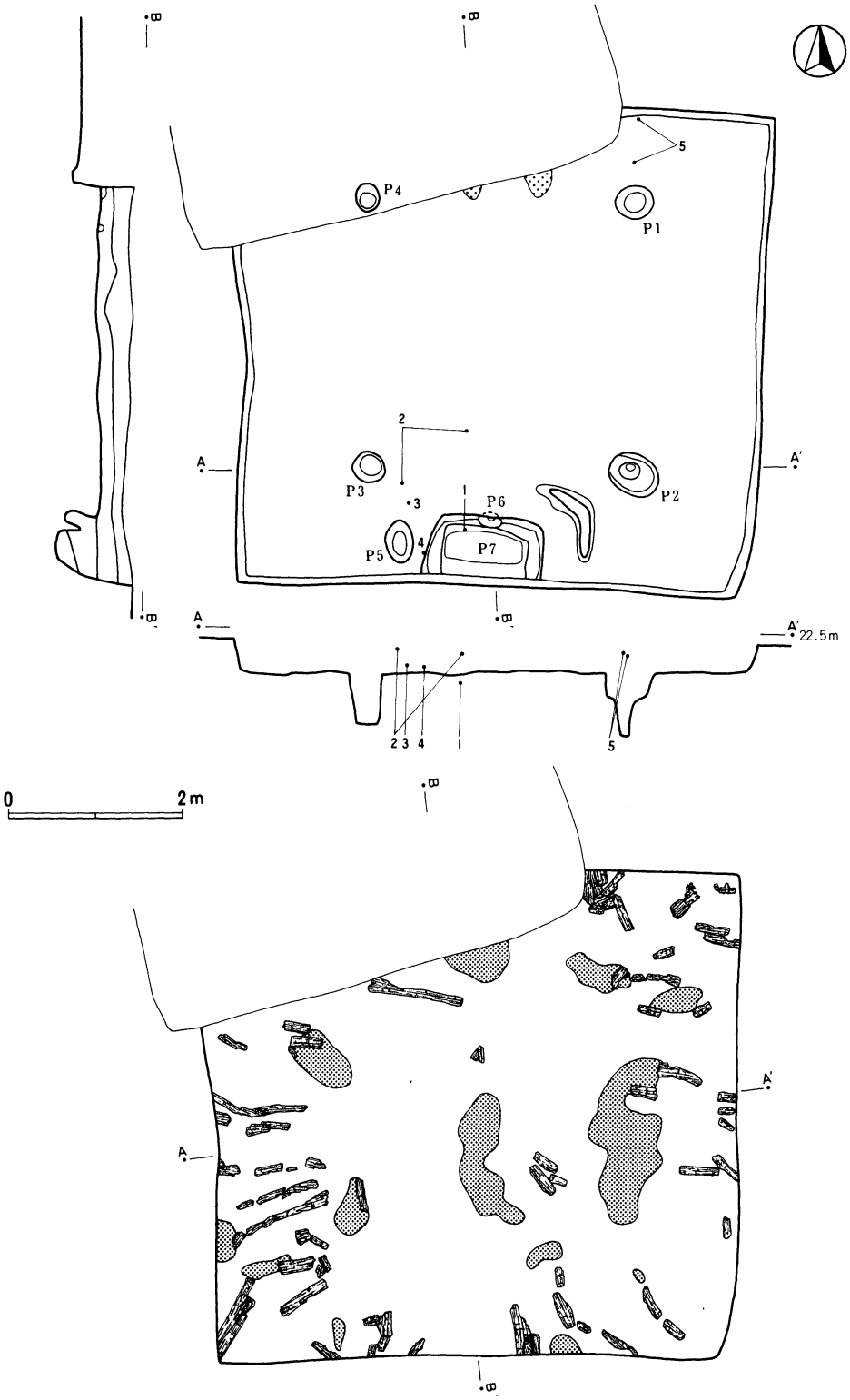
出土遺物　１～４は甕形土器である。形態が判断できない２、３は別として、１、４は胴部の張りが少なく、長胴気味の器形を持つ。５、６は坏形土器である。５は比較的浅い器形を有すると思われるもので口縁部は僅かに内傾気味。６は内面に放射状の暗文を施すもので、遺跡内に類例が多い。７は土玉片である。

９　ＳＩ－029（第69図・第70図・図版20－１）

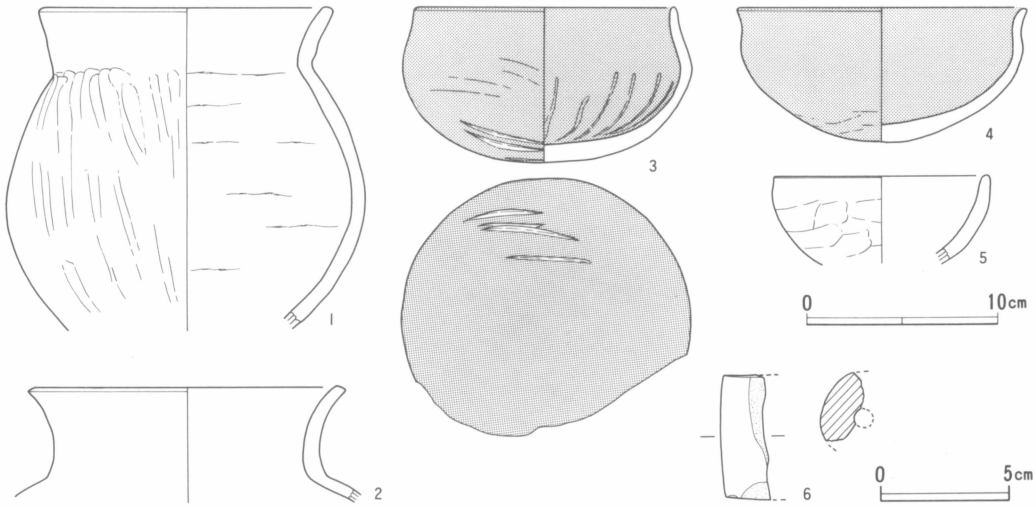
位置・形状　古墳時代遺構群の南東縁、M24－07区に位置する竪穴建物跡。南北方向に主軸方位を置く。平面形状は僅かに東西方向に長い長方形を呈し、東辺5.6m、南辺6.0mを測る。検出面からの深さは0.3～0.4m。

重複関係　ＳＩ-028と重複しており、当建物跡が古。そのため北側の一部が失われている。

付帯施設・床面　主柱穴は４か所に正方形配置をとって検出されている。床面からの深さは



第69図　ＳＩ－029 (1/80)



第70図　ＳＩ－029出土遺物（1～5：1/4・6：1/3）

Ｐ１が78cm、Ｐ２が68cm、Ｐ３が61cm、Ｐ４はより低位にあるＳＩ-028床面からの計測であるが45cmを測る。北辺中央にはカマドが設置されていたが、ＳＩ-028により大部分が破壊され、袖部の一部が痕跡的に残るのみである。南辺中央には方形のＰ７があり、明らかに貯蔵穴と考えられる。これは南壁に接して設けられ、135×68cmの長方形を呈し、深さは50cmを測るが、比高20cm程の段が認められ、そこに板状の蓋があったことを想定させる。中段面の北側にはＰ６が穿たれるが、これについては入口ピットと考えるべきであろう。深さ43cm。それらの北東側には土堤状の高まりがあるが、Ｐ７の周囲を巡るわけではない。またＰ７の西側にＰ５が穿たれる。このピットは60cmと深く掘り込まれるが、いかなる機能を持つものであろうか。なお壁周溝は全く掘られていない。

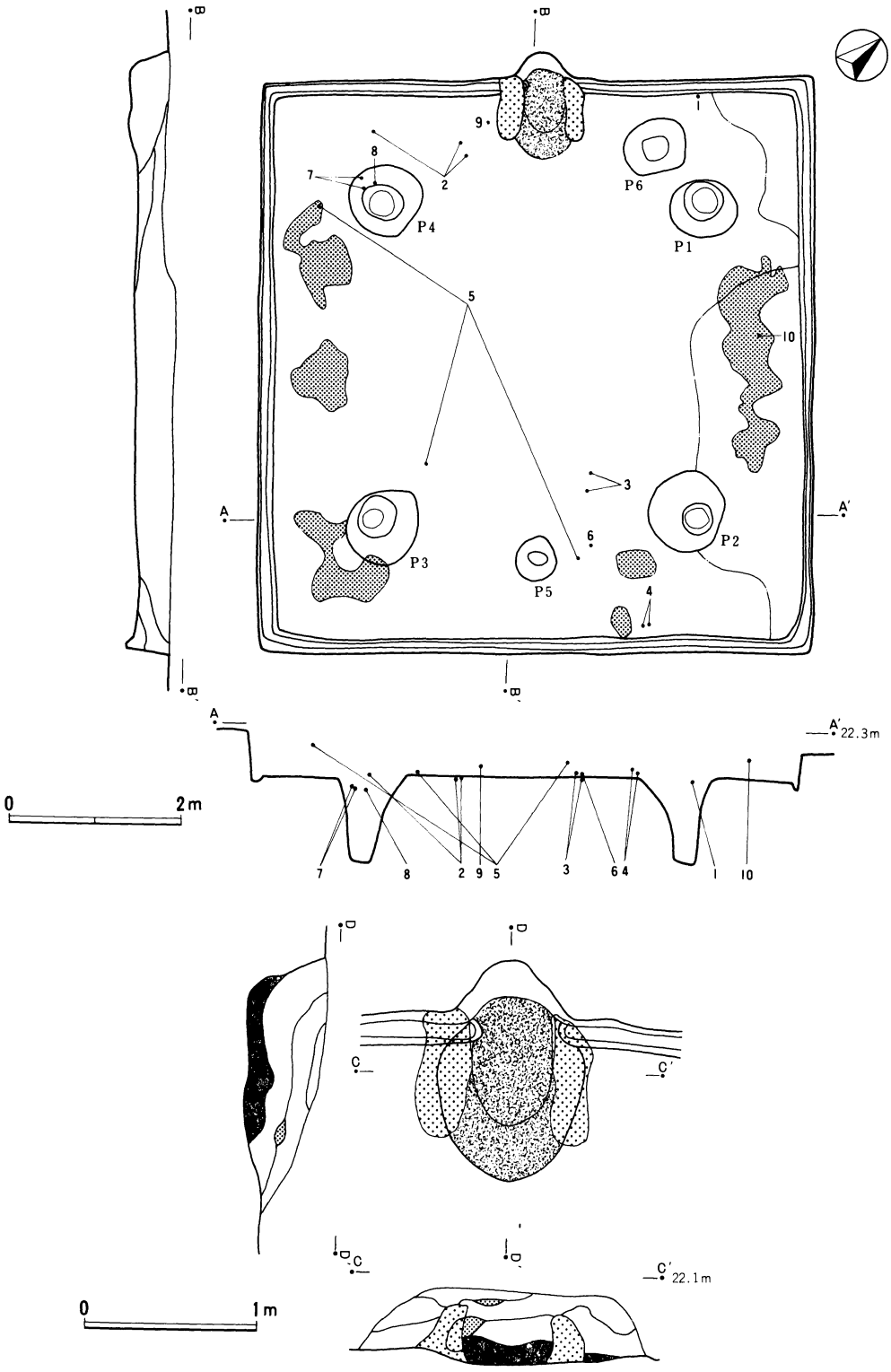
当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　遺物量はきわめて少ない。分布は貯蔵穴からＰ３の周辺にやや偏在すると言える。床面上には焼土ブロックと炭化材が多く検出されている。炭化材は周縁部に多く、放射状に並ぶ。

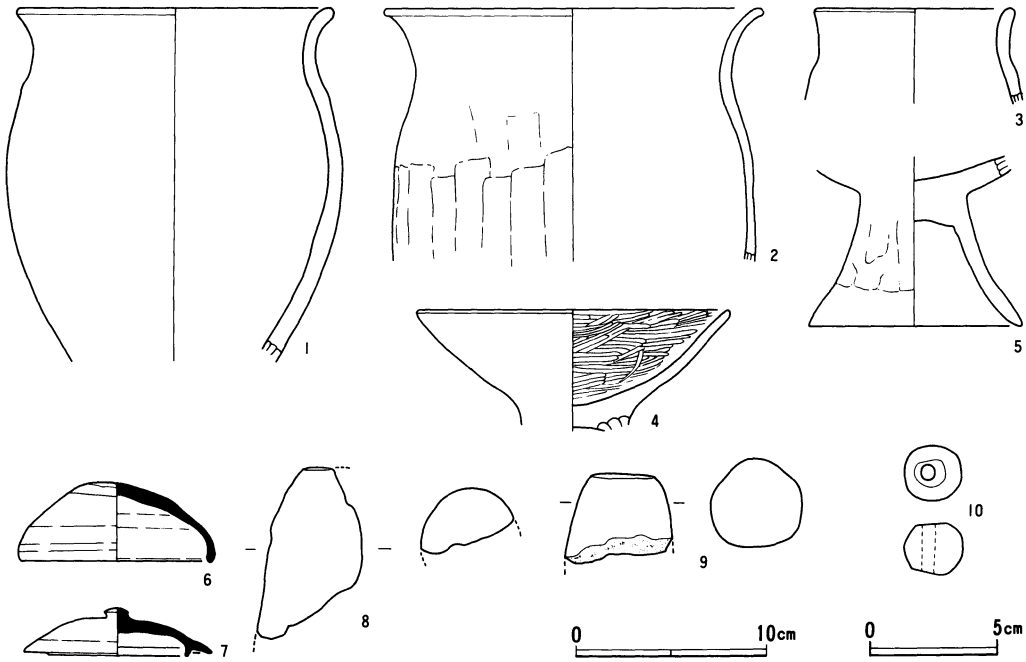
出土遺物　１、２は甕形土器である。１の外面には縦位のなで調整が見られる。２は肩の張る球形の胴部を持つものであろう。３は椀形土器とする。内外面とも丁寧に磨かれ、全面が赤彩されている。また内面には暗文様の磨きが見られる。４は坏形土器である。口縁部下が弱く屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。底部外面に篦削りの痕跡が残るものの、全体に丁寧に調整され、全面が赤彩される。５は小型の坏形土器で、作りはやや粗雑。６は管玉状の土錘。

10　ＳＩ－030（第71図・第72図・図版20－２）

位置・形状　古墳時代の遺構群の中央南寄り、ＳＩ-023の西方、Ｌ24－04・09区に位置する



第71図　ＳＩ－030（1/80・カマド1/40）



第72図　ＳＩ－030出土遺物（1～9：1/4・10：1/3）

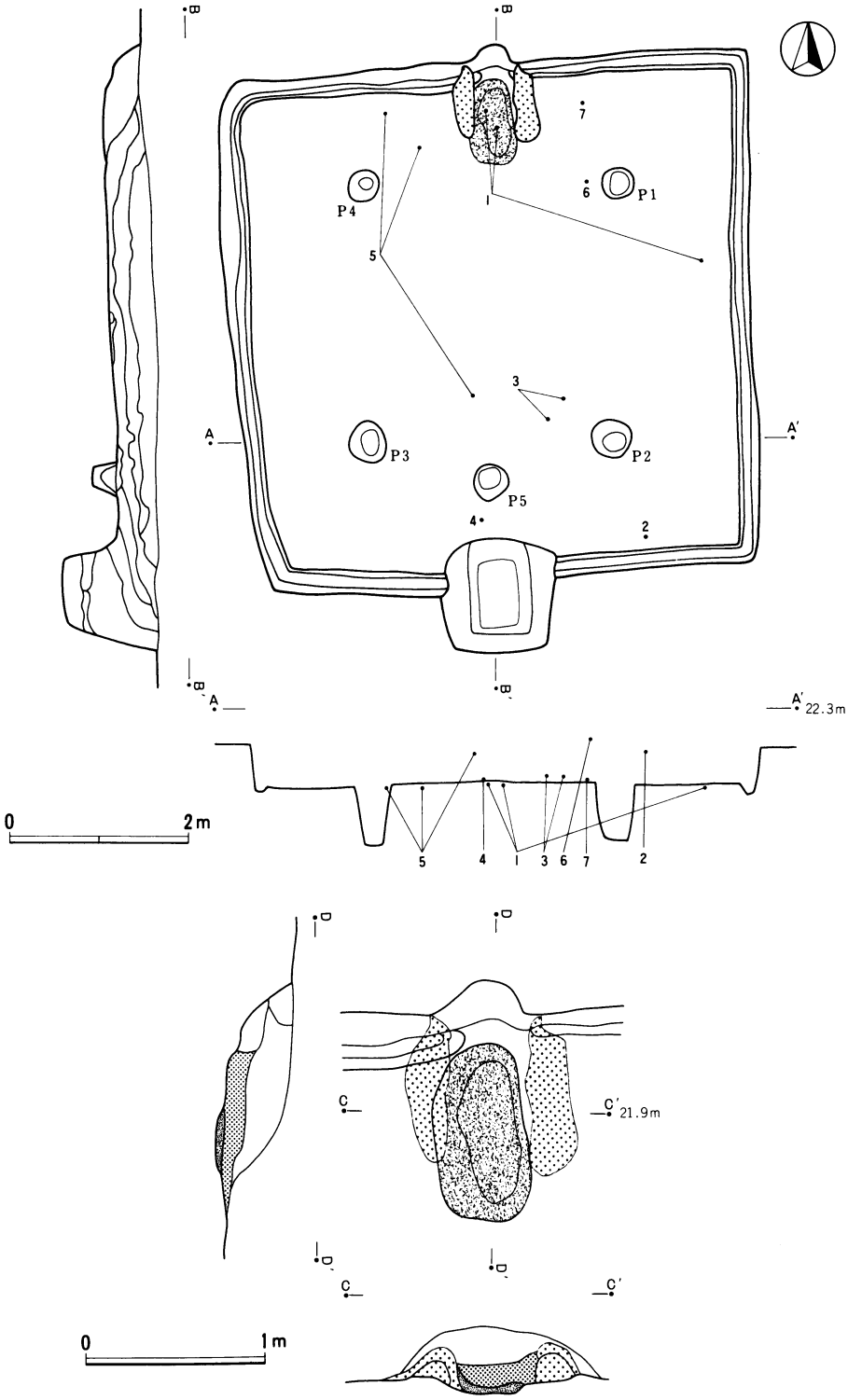
竪穴建物跡。北西－南東方向に主軸方位を置く。ほぼ正方形で、北西辺6.4m、北東辺6.7m、南東辺6.5m、南西辺6.6mを測る。検出面からの深さは0.3～0.5m。

付帯施設・床面　主柱穴はＰ１～Ｐ４の４か所に検出されている。床面からの深さはＰ１が87cm、Ｐ２が85cm、Ｐ３が103cm、Ｐ４が115cmを測り、整った正方形配列をとる。カマドは北西辺中央に配される。谷分類によるB_2類に相当しよう。火床の上には灰が厚く堆積した。カマドの対辺、南辺側の中央に入口ピットと推定されるＰ５が検出されている。垂直に掘られ、深さは35cm。カマドの右脇にはＰ６があり、貯蔵穴と考えられる。74×63cmの隅丸長方形を呈し、掘り込みは102cmと非常に深い。壁周溝はカマド下を除いて全周する。

床面は北東辺側の外区が相対的に軟質であった。

遺物等出土状況　出土遺物量は僅少で、偏在傾向もない。ただ遺構内に四散した遺物の多くが接合関係を持ち、図化可能となった。また建物跡外区の随所に焼土ブロックが検出された。

出土遺物　１～３は甕形土器である。うち３は小型品で口縁部の外反の度合いが少ないという違いはあるが、いずれも胴部の張りがあまりなく口径と胴径の差が小さいものである。４、５は高坏である。４の坏部は内面が丁寧に研磨されているが、外面のなで調整は粗雑で一部には輪積痕が残る。６、７は須恵器坏蓋である。６については、外面の天井部径４cm程に回転篦削り痕が残り、他はヨコナデ調整。７は蓋受けのタイプで宝珠つまみが付く。外面には自然釉が顕著にかかる。８、９は支脚片でともに頭部の破片、９はカマド左脇からの出土であるが、８はＰ４内覆土上位の出土である。10は土玉。



第73図　ＳＩ－031（1/80・カマド1/40）

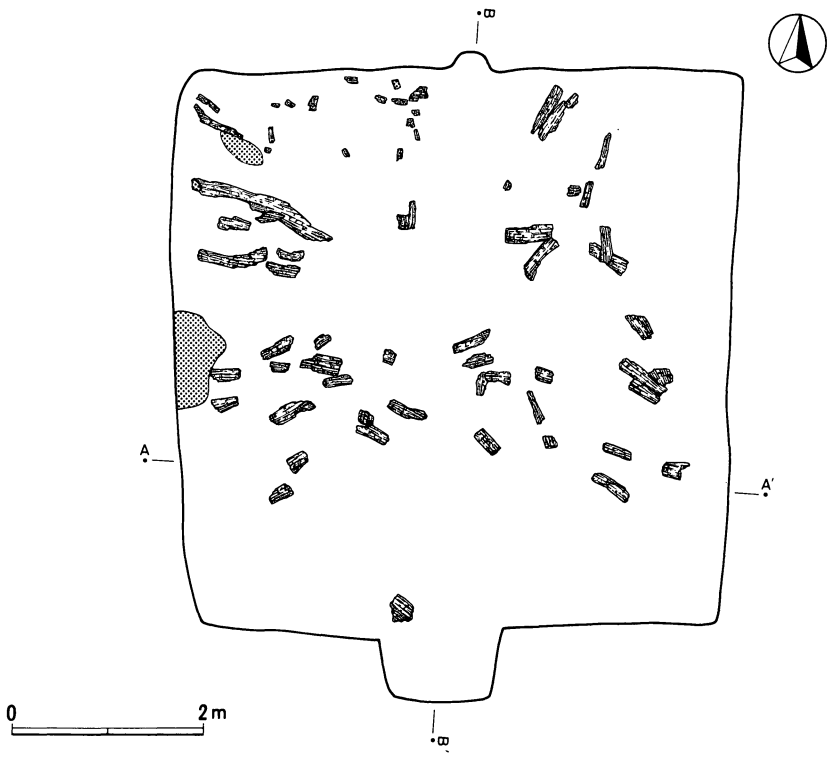
11　ＳＩ－031（第73図～第75図・図版20－３）

位置・形状　古墳時代遺構群の北西寄り、Ｌ23－23・24区に位置する竪穴建物跡。ほぼ南北方向に主軸方位を置く。概ね正方形のプランであるが、南側には張り出し部を持つ形態。北辺5.9m、東辺5.8m、南辺5.9m、西辺5.7mを測る。張り出し部は南壁からおよそ0.7m突出する。検出面からの深さは0.4～0.5m。

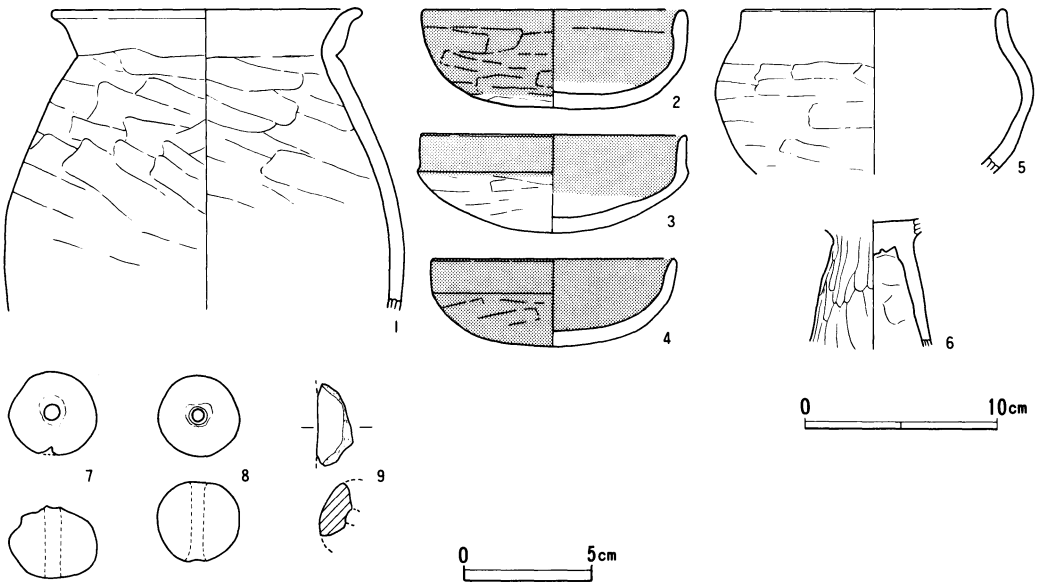
付帯施設・床面　主柱穴と考えられるピットが４か所に検出されている。ほぼ正方形配置。床面からの深さはＰ１が62cm、Ｐ２が63cm、Ｐ３が64cm、Ｐ４が60cmと非常によく揃う。北辺中央にはカマドを配置する。谷分類によるB_2類に相当。その対辺、南壁の中央から張り出し部があって貯蔵穴と考えられるＰ６となっている。Ｐ６は張り出し部上端から計測して126×124cmの隅丸方形で、深さは102cm、床面からの深さは62cm。Ｐ６の内側、カマドと張り出し部を結んだ軸上にはＰ５が穿たれ、入口施設に関係したピットと考えられる。床面からの深さは26cm。壁周溝はカマド下を除いて全周する。

当建物跡では踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　出土遺物点数は80点余りと多くはなく、顕著な偏在傾向も窺えない。当建物跡では断片的ながら炭化材が広範に検出されている。大方は放射状の分布を示し、屋根部材



第74図　ＳＩ－031炭化材・焼土ブロック検出状況（1/80）



第75図　ＳＩ－031出土遺物（1～6：1/4・7～9：1/3）

の崩落と考えてよいかと思われる。また焼土ブロックも検出されたが、西辺に僅かに見られただけであった。

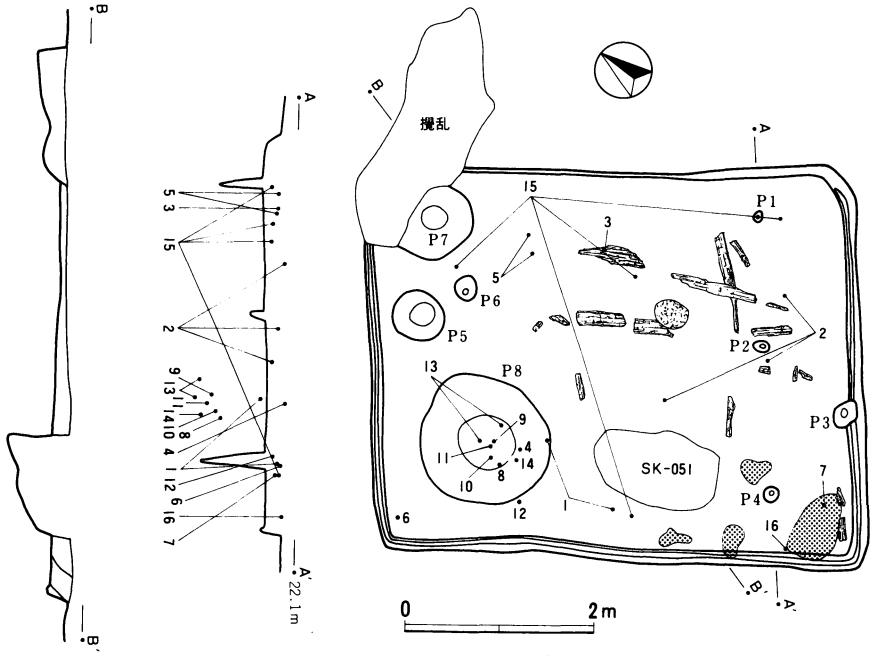
出土遺物　1が甕形土器である。肩部の張りが少ない器形で、胴部には斜位の篦削りが施される。2～5は坏形土器である。3のみ口縁部下の稜が明確である。いずれも内面は平滑に仕上げられ、赤彩が施されている。2、3については底部は内外面とも赤彩されていない。5は甕形土器とするが、胴径に比して口径が広く、口縁部が外反せずにほぼ直立して終わる。外面の調整は篦削りの後になでているが、1などより明らかに丁寧である。別器種とすべきかもしれない。6は高坏形土器脚部の破片である。7～9は土玉。

12　ＳＩ－032（第76図・第77図・図版21－1）

位置・形状　古墳時代の遺構群の西端近く、Ｌ23－23・Ｌ24－03区に位置する竪穴建物跡。主軸方位は明確ではない。南東－北西方向かもしれない。著しい長方形を呈する建物跡で、北東辺（推定）5.2m、南東辺4.1m、南西辺5.2m、北西辺（推定）4.1mを測る。検出面からの深さは0.1～0.2mと浅い。

重複関係　有天井土壙墓ＳＫ-051と重複する。新旧関係は当建物跡が古。

付帯施設・床面　主柱穴と考えられるピットは検出されていない。周縁部にはＰ１～Ｐ４、Ｐ６といった小ピットが検出されているが、それらの深さは16cm～67cmまでのばらつきがあってしかも非常に小径のものが多い。北西辺中央からやや北寄りにあるピットは、径54～56cmで深さが37cmある。Ｐ７とＰ８は貯蔵穴と考えたい施設である。Ｐ７は一部撹乱によって破壊さ



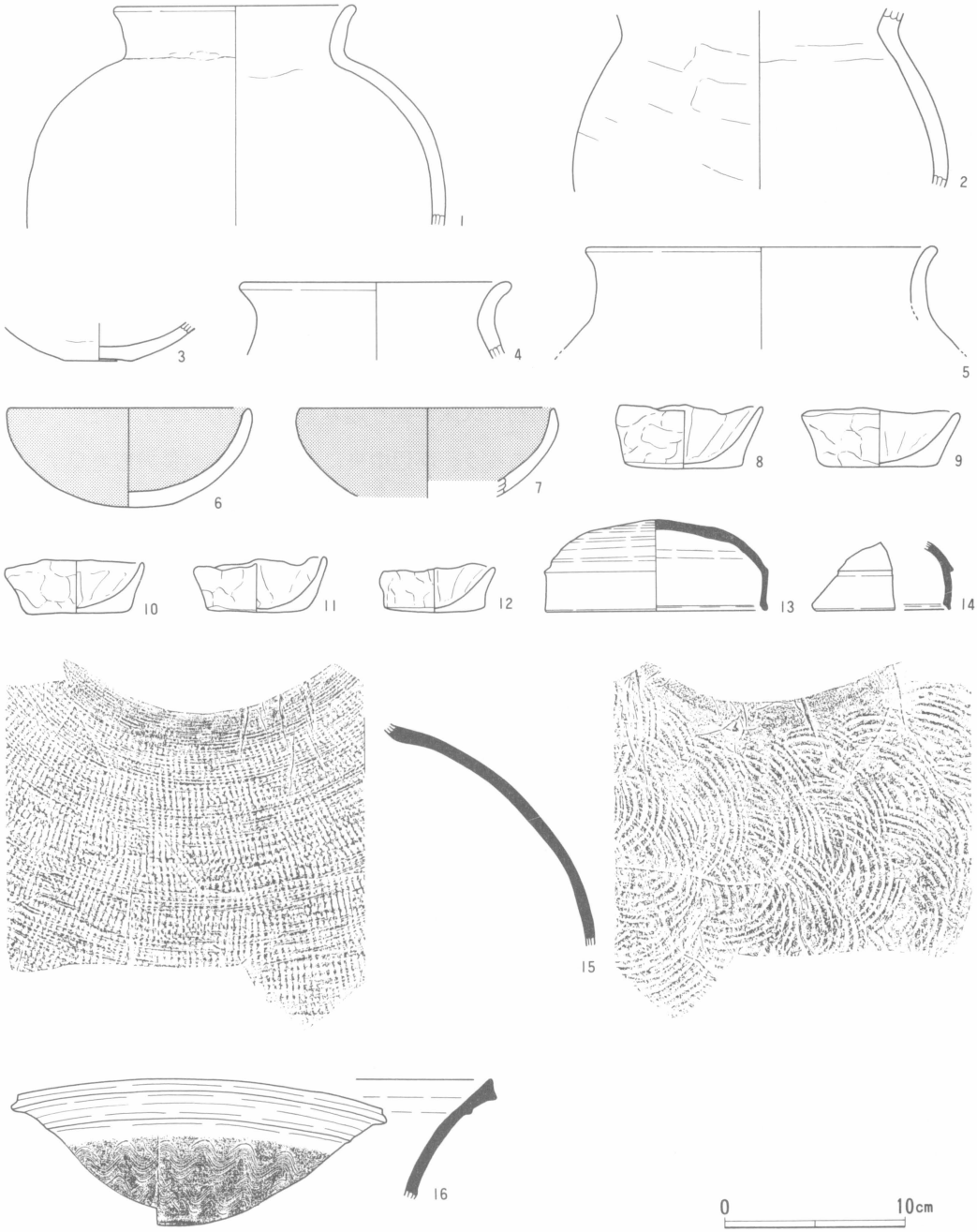
第76図　ＳＩ－032（1/80）

れているが、遺存部の径83cm、深さは41cm、Ｐ８は138×128cmのほぼ円形で、深さ79cmと大規模である。Ｐ８の底面近くから遺物が多く出土している。床面中央からやや東寄りに炉が検出されている。掘り込みを持たない小規模な地床炉である。さてこれらの位置関係からＰ５が入口ピットとも考えられる。しかしその場合には入口が北を指向することになり、些か躊躇を覚える。壁周溝は北東辺を除いて「コ」字形に巡っている。

当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　遺物量は多くはない。しかしそれらの分布は、３か所にまとまる傾向を見せた。最も多くの遺物を出土したのはＰ８内である。それもその底面付近に集中的に認められている。さらにＰ８から出土した遺物を見ると、須恵器坏と袖珍土器（１点はピットの上端に接するように出土）のすべてが含まれ、器種の偏りがあると言えるであろう。他には炉の南側と炉の北側にやや遺物がまとまった場所があった。当建物跡でも焼土ブロックと炭化材が検出されているが、焼土ブロックは南コーナー付近に少量が集中するのみで、炭化材も断片的なものであった。

出土遺物　１～５は甕形土器である。１は口縁部があまり外反せず、肩が張って胴径の大きなものである。２は逆に肩の張りが小さいもの。６、７は坏形土器である。ともに丸みを帯びて口縁部が直立気味になったところで終わるもので、６については丸底である。いずれも全面が赤彩されている。８～12は俗に袖珍土器とも呼ばれるもの。すべてＰ８内の出土である。いずれも底部円盤に１～２段の粘土紐を付加して作られた浅い小鉢形を呈し、外面には指で押さ



第77図　ＳＩ－032出土遺物（1/4）

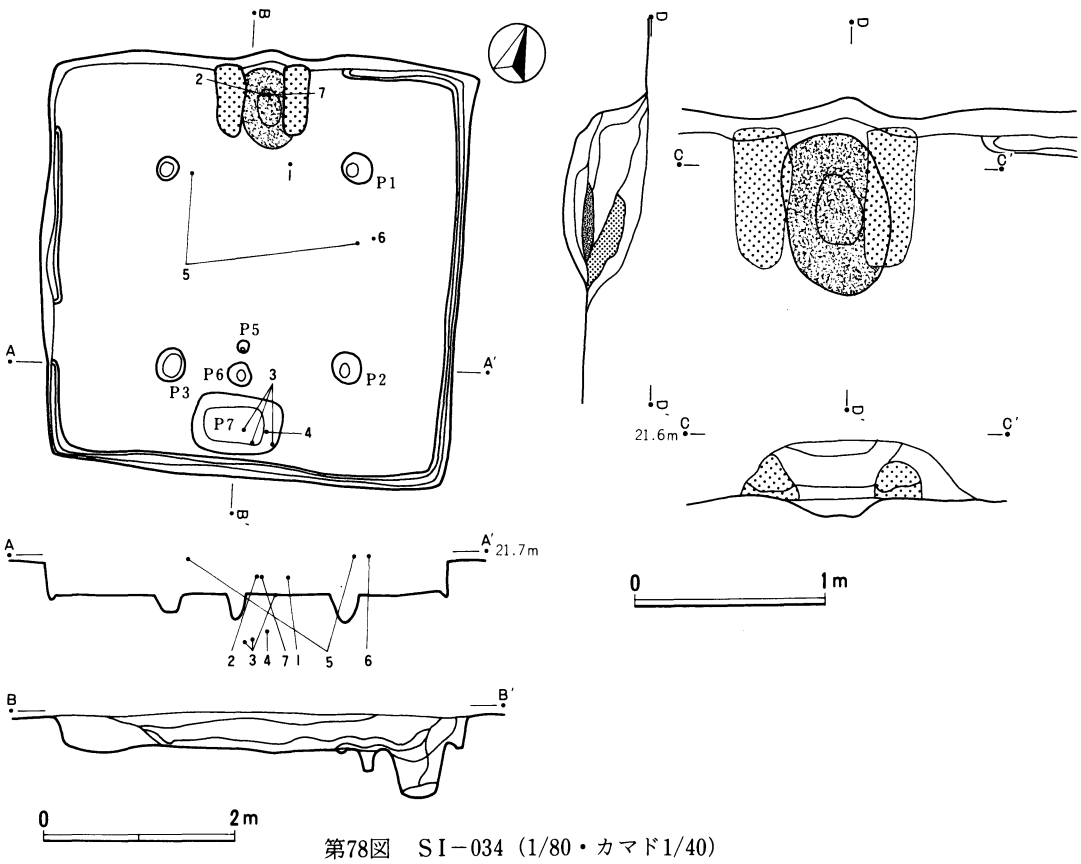
えて成形した痕跡が明瞭に残されているのに対し、内面は篦状工具により比較的丁寧に調整されている。13、14須恵器坏蓋である。いずれも口胴界の稜が鋭く、口端の面取りは段状になされている。15、16は須恵器のいわゆる「大甕」で、両者は別個体である。15は胴部上半の破片で、外面に叩き目(格子状に見えるがそうではない)、内面に当て具による青海波が観察される。外面は叩き調整の後、描き目が施される。16は口縁部破片で、口縁部直下に断面が鋭い三角形

状を呈する突帯が巡り、その下には数段の櫛描波状文が施されている。

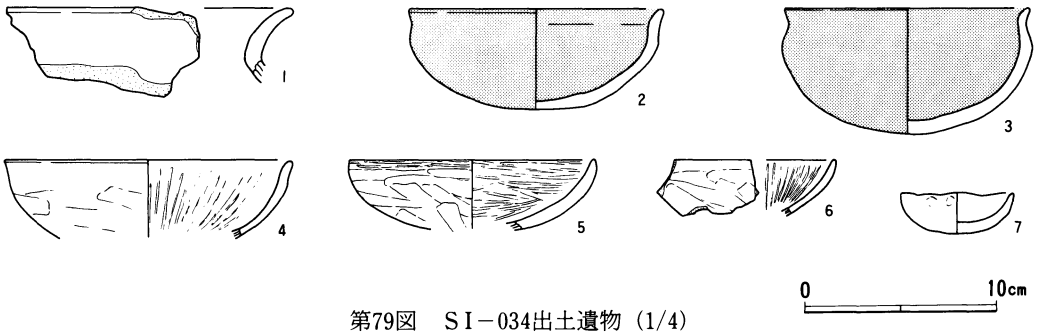
13　ＳＩ－034（第78図・第79図・図版21－２）

位置・形状　古墳時代の遺構群の北西端に並ぶ竪穴建物跡の一つで、Ｌ23－13・18区に位置する。ほぼ南北方向に主軸方位を置く。平面形状は概ね正方形を呈し、北辺4.3m、東辺4.2m、南辺4.3m、西辺4.2mを測る。検出面からの深さは0.3～0.4m。

付帯施設・床面　４か所に主柱穴と考えられるピットが検出されている。それらはほぼ正方形配列をとり、床面からの深さはＰ１が18cm、Ｐ２が30cm、Ｐ３が15cm、Ｐ４が22cmといずれも浅い。カマドは北辺中央にあり、谷分類によるB_2類に相当する。最終的な火床は概ね平坦であるが、その下には皿状の窪みがあり、当初の火床が掘り込みを伴ったものであったか、灰等の掻き出しによって窪んだかのいずれかであろう。南辺中央には95×61cmの長方形を呈するＰ７があり、貯蔵穴と考える。床面からの深さは53cm。カマドとＰ７を結んだ軸上、Ｐ７の内側にはＰ５とＰ６が並ぶ。Ｐ５は径13cmときわめて小径で深さも11cmと浅い。Ｐ６は径27cm、深さ30cm。これらの二者を入口ピットと考えたい。入口施設は貯蔵穴（蓋を伴う）の上に架構されることになるが、当建物跡のような例では一本梯子の使用は考えられない。６世紀以降の竪



第78図　ＳＩ－034（1/80・カマド1/40）



第79図　ＳＩ－034出土遺物（1/4）

穴建物跡では一般的に入口ピットは直立するが、４世紀以前に一般的な一本梯子とは異なった入口施設の検証が必要であろう。壁周溝については東辺と南辺は全周するが、西辺では途切れる箇所があり、北辺ではカマド周辺を含めて西側２／３には掘られていない。

当建物跡では踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　やはり遺物量は多くはない。西半での出土が乏しいことを除けばあまり顕著な傾向を見いだせないが、貯蔵穴内の底面付近でやや集中的に遺物が認められている。

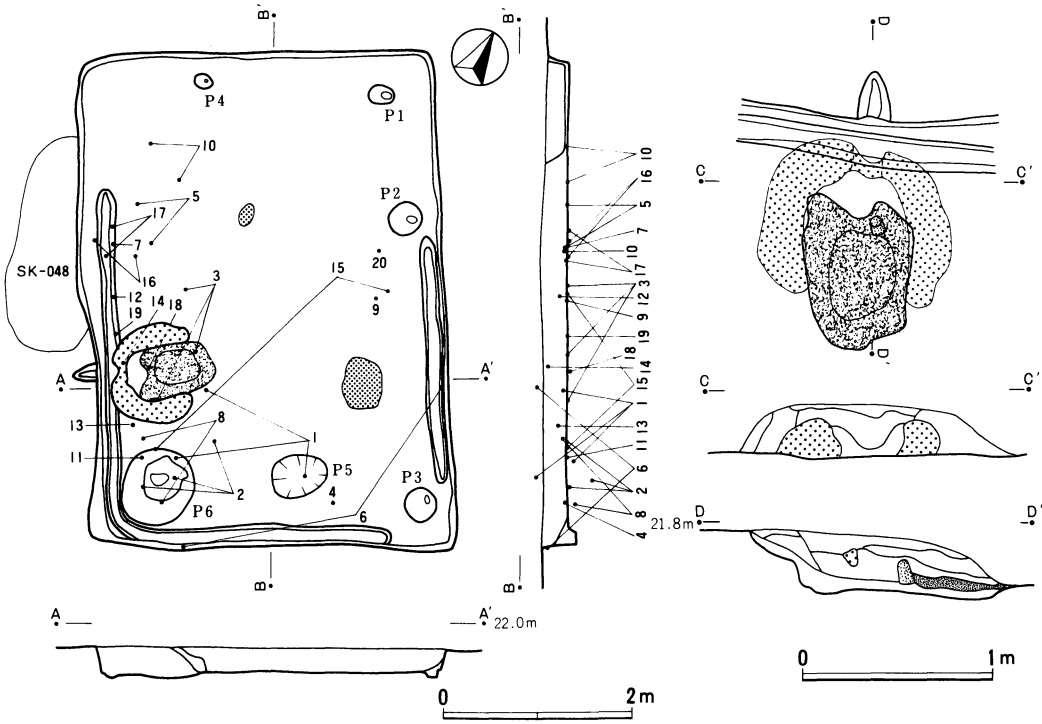
出土遺物　１は甕形土器の口縁部破片である。２～６は坏形土器であるが、２、３は口縁部が外反してその下に弱い稜を有するもので、内外面とも全面赤彩されている。４～６は器高の低い口縁部下に稜を持たないものであるが、４、６の内面には放射状の暗文が施される。７は手捏によって作られたごく小型の坏形の土器。

14　ＳＩ－035（第80図～第82図・図版21－３）

位置・形状　古墳時代の遺構群の北西端、Ｌ23－17・18区に位置する竪穴建物跡。北西－南東方向に主軸方位を置く。著しい長方形を呈する建物跡で、北西辺3.8m、北東辺5.2m、南東辺3.8m、南西辺5.2mを測る。検出面からの深さは0.2～0.3m。

重複関係　南西辺においてＳＫ-048（炉穴）と重複する。新旧関係は当建物跡が新。

付帯施設・床面　主柱穴と考えられるピットは検出されていない。北東壁に沿ってＰ１～Ｐ３の小ピットが穿たれている。床面からの深さはＰ１が16cm、Ｐ２が29cm、Ｐ３が34cm。これらが上屋構造を支えるものであったとしても、対辺側には同様のピットがなく、むしろ補助的なものであったと考える。また北西辺側にあるＰ４はごく小径のピットであるが、深さは29cmある。カマドは南西辺南寄りに設けられる。カマド構築材が検出されたのは壁よりも若干内側であるが、壁の上位には煙道の切り込みがあり、構造としては谷分類のB_1類に相当すると言えよう。カマドの左脇、南コーナーには85×77cmのやや楕円形を呈するＰ６があるが、これを貯蔵穴と考えて間違いないであろう。深さは46cmを測る。Ｐ６の東、南東辺側ほぼ中央にはＰ５が検出されている。57×42cmの楕円形で平面プランはやや大ぶりであるが、深さは11cmと浅い。



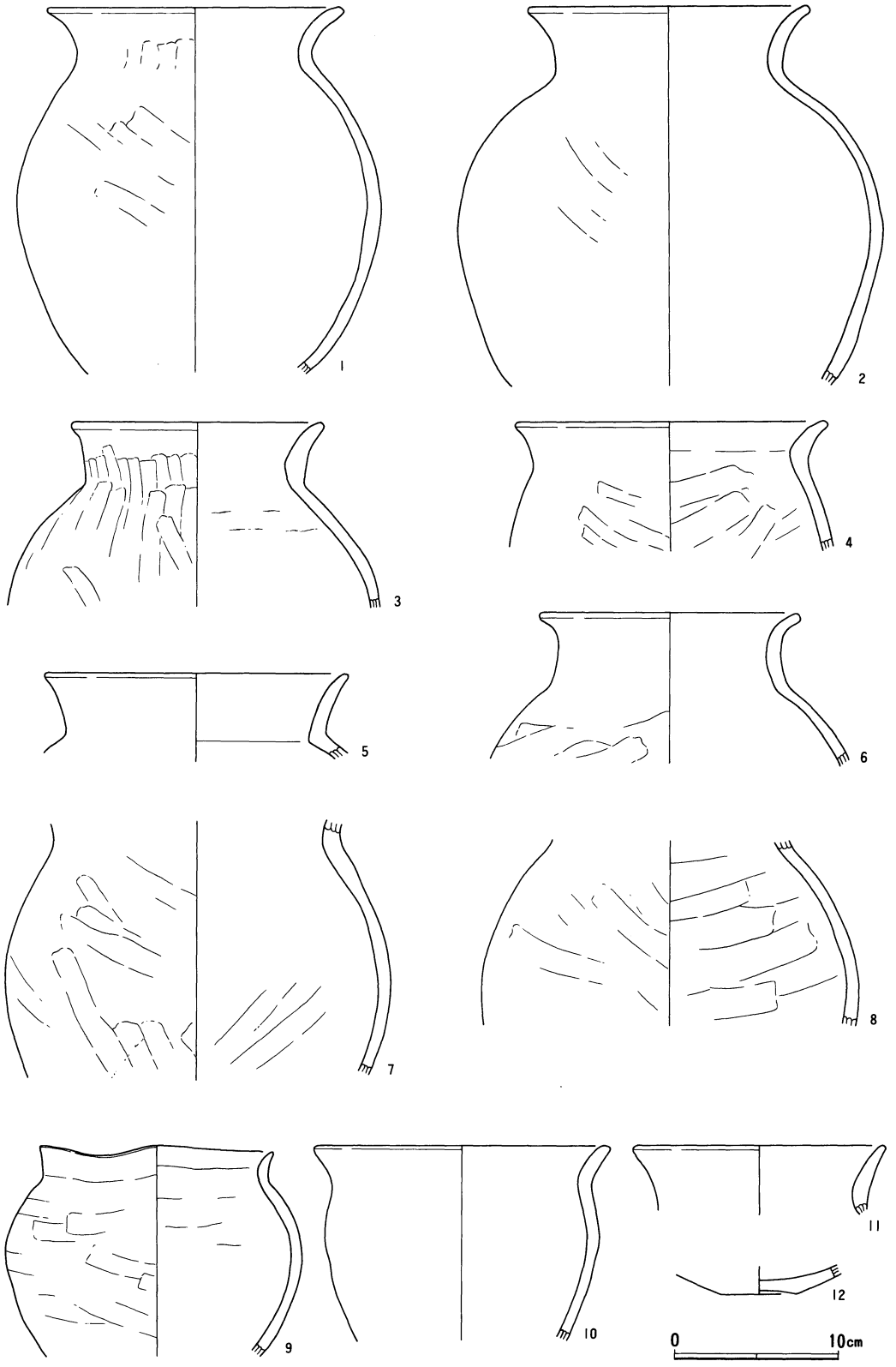
第80図　ＳＩ－035（1/80・カマド1/40）

しかしこれは他施設との位置関係から入口ピットと考えてよいであろう。当建物跡の主軸方位の推定も勿論このピットの存在による。壁周溝はあるが全周はしない。殊に北西側１／３には全く掘られていない。またＰ３のある東コーナーも周溝が途切れる。

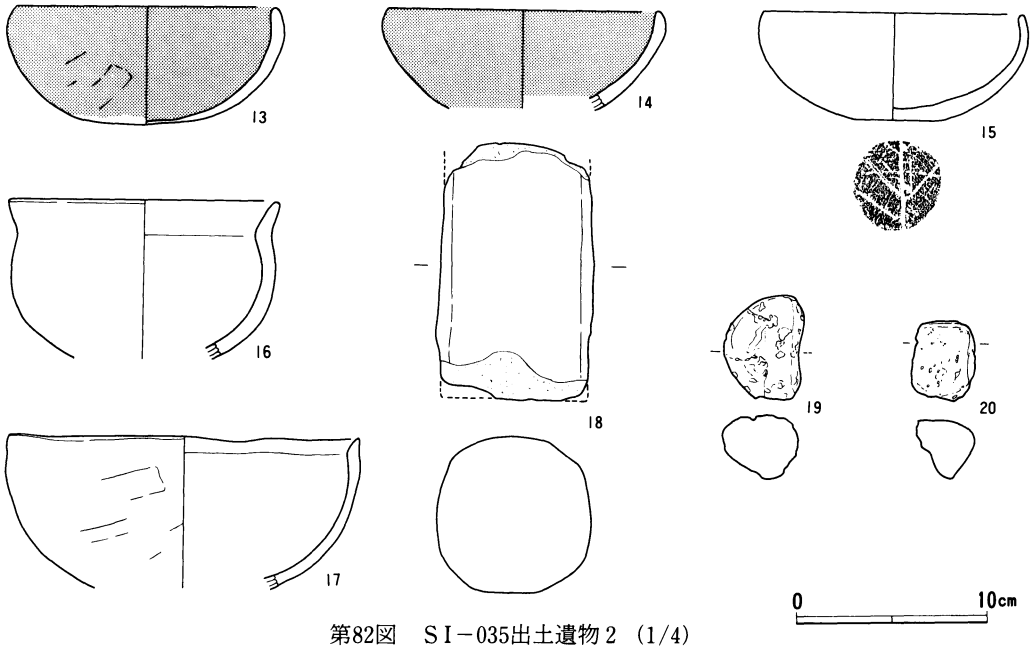
当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　遺物点数は決して多いとは言えないが、他遺構に比べて大破片が多く、接合関係も豊富であった。またここでは貯蔵穴からカマドの右脇にかけての範囲に遺物が集中する傾向があった。

出土遺物　完形品はないが、甕形土器が多く出土している。１～５、10、11は単純に口頸部が外反するもの、６は頸部が直立気味で口縁端部が外反するもので、胴部は球状をなすものが多い。４、10は胴部の張りが少ないものである。９は比較的小型の甕形土器で、口頸部が短い例である。13～15は坏形土器である。器形はほぼ共通しているが、13が丸底なのに対して15は木葉痕を残す平底である。また13、14は赤彩されている。16、17を椀形土器とする。16は短い口縁部が外傾し、やや深い器形を持つが、17は大径ではあるがやや浅く、口縁部は単純な直口である。また口縁端部の内面がそがれて薄く仕上げられている。18はカマド内から出土した支脚の部分。19、20は軽石。



第81図　ＳＩ－035出土遺物１（1/4）



第82図　ＳＩ－035出土遺物２（1/4）

15　小結

以上、地蔵山遺跡Ｂ区で調査された13棟の古墳時代の竪穴建物跡についての報告を終える。ここでそれらの建物群の形成過程を追って古墳時代のまとめとしておきたい。

13棟の建物跡の中で５世紀代（あるいは６世紀初頭）の遺物を出土したものにはＳＩ-023、ＳＩ-027、ＳＩ-029、ＳＩ-032、ＳＩ-034、ＳＩ-035の６棟がある。ＳＩ-023とＳＩ-027はいわゆる「和泉期」に通有の大型建物跡である。それらの実年代は５世紀の後半に含まれることは確実である。ＳＩ-027の場合、第65図５、６のように７世紀代の遺物が含まれるが、同図３の須恵器を年代比定の根拠として問題あるまい。ＳＩ-032とＳＩ-035についてはともに小型の長方形建物跡であるが、ＳＩ-035の方にはカマドが設けられている。しかし両者の間には、少なくとも出土遺物を見る限り時期差を考える必要はない。また前記２棟の大型建物跡との時期差も殆どないといってよい。同時併存の可能性も充分であろう。しかし残る２棟、ＳＩ-029とＳＩ-034は、基本的には須恵器模倣坏出現以前の段階であろうが、他の４棟とは少し段階差があり、５世紀の末葉～６世紀初頭の年代を与えておきたい。

６世紀代の遺物を出土した建物跡はＳＩ-031の１棟だけである。この建物跡は張り出し部を有する地蔵山遺跡唯一のもので、時期判断の指標となる遺物が些か零細ではあるが、６世紀前半のうちに収まるか。地蔵山遺跡Ａ区を含めて見ると、ＳＩ-008やＳＩ-015Ｂと近い年代が与えられよう。ここまでの遺構群についてはある程度の連続性を以て営まれている。

上記で述べた以外の建物跡についてはすべて７世紀代の所産であると考えられる。多量の遺

物を出土した例がないため、年代比定は難しいものがあるが、概ね7世紀半ば前後の集落と考えてよいのではないか。当遺跡では放射状暗文を有する坏形土器が、古い遺構への混入を含めて多く出土しているが、ＳＩ-025、ＳＩ-028についてはそれらによって7世紀中葉以降になるのは確実であろう。またＳＩ-026、ＳＩ-030の2棟については、出土した須恵器坏によってやはり7世紀中葉前後に位置付けられよう。ＳＩ-021の場合、須恵器模倣坏が出土していることにより他よりも一段階古い可能性がある。地蔵山遺跡Ａ区ではＳＩ-002が報告書（註1文献）第26図9～11の須恵器からやはり7世紀中葉の所産と思われ、これらの遺構群はほぼ年代的にまとまることになる。

さて地蔵山遺跡Ｂ区の建物跡で竪穴建物構造の変遷は追えるであろうか。Ｂ区では初現期のカマドを持つ建物跡はＳＩ-035のみであった。この建物跡は小型長方形のプランを持つ変則的なものであるが、入口、貯蔵穴、カマドの位置関係はＣ型で、筆者のかつての想定[3]を裏付けている。その次段階の建物跡はＳＩ-029、ＳＩ-034で、いずれもＦｉ型である。次にはＦａ型のＳＩ-031が認められる。しばらくの断絶の後に営まれた7世紀の建物跡ではＳＩ-021がＦII型、他の5棟がＦIII型でやはり筆者の想定は蓋然性を持つことになる。

以上のように遺跡Ｂ区で検出された遺構群も5世紀後半～6世紀前半と7世紀の大きく二期に分けて把握することが可能で、Ａ区で検出された遺構群と併せてその集落構成が検討されなければならない。

註1　渡辺修一『千葉市地蔵山遺跡(1)』（財）千葉県文化財センター　1992

2　谷旬「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要7』（財）千葉県文化財センター　1982

3　渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌11』（財）千葉県文化財センター　1985

第10表　古墳時代竪穴建物跡出土玉類・紡錘車・土錘計測表

挿図番号	遺物番号	器種	最大径 mm	最大厚 mm	孔径 mm	重量 g
ＳＩ－021（旧遺構番号：010）						
6	010－37	土錘	－	32.2	－	21.38
7	30	土製丸玉	17.8	15.8	3.5	5.10
ＳＩ－022（旧遺構番号：011）						
4	011－37	土錘	－	47.8	－	51.56
ＳＩ－023（旧遺構番号：012）						
11	012－214	紡錘車	41.5	12.5	7.2	32.64
12	78	紡錘車	30.5	11.5	7.2	16.58
13	23	土玉	30.5	26.5	10.5	23.98
14	101	土錘	38.5	64.8	17.5	125.47
15	118	臼玉	5.4	2.0	2.0	0.11
16	176	臼玉	5.1	1.5	2.0	0.08
17	32	石製丸玉	7.2	5.8	0.9	0.32
ＳＩ－026（旧遺構番号：016）						
11	016－28	土玉	－	－	－	6.13
12	57	土玉	18.2	15.5	4.5	7.48
ＳＩ－027（旧遺構番号：017）						
7	017－43	土玉	32.8	26.5	6.5	25.62
8	165	土玉	－	－	－	13.64
9	167	土玉	－	－	－	6.78
10	41	土玉	21.8	19.0	5.2	9.93
11	22	土玉	17.8	14.8	4.0	5.28
13	017－71	臼玉	4.9	4.1	2.0	0.19
14	157	臼玉	5.8	2.8	2.0	0.17
15	200	臼玉	5.7	2.6	1.5	0.15
16	201	臼玉	5.5	3.2	1.5	0.20
17	202	臼玉	5.5	2.9	1.5	0.14
18	203	臼玉	5.4	2.2	1.5	0.13
19	177	臼玉	5.4	2.8	2.0	0.13
20	184	臼玉	5.4	2.4	1.5	0.14
21	235	臼玉	5.4	1.8	1.5	0.17
22	235	臼玉	5.6	1.8	1.5	0.12
23	238	臼玉	5.5	2.8	2.0	0.17
24	238	臼玉	5.3	3.2	1.0	0.22
25	238	臼玉	5.4	2.6	1.0	0.15
26	238	臼玉	5.2	2.6	2.0	0.15
27	238	臼玉	5.3	2.1	1.5	0.08
28	238	臼玉	5.4	3.0	1.5	0.15
29	235	臼玉	5.3	2.4	2.0	0.16
30	235	臼玉	5.4	3.2	1.5	0.20
31	235	臼玉	5.2	2.8	1.5	0.18
32	235	臼玉	5.2	2.7	1.5	0.18
33	235	臼玉	5.4	2.3	1.5	0.15
34	191	臼玉	5.6	3.0	2.0	0.19
35	212	臼玉	5.5	3.0	1.0	0.15
36	236	臼玉	4.4	2.0	1.0	0.08
37	226	臼玉	5.6	3.4	2.0	0.24
38	227	臼玉	5.5	2.9	1.5	0.17
39	228	臼玉	5.4	2.7	1.5	0.16
40	229	臼玉	5.4	2.1	1.5	0.13
41	230	臼玉	5.7	3.2	1.5	0.18
42	231	臼玉	5.5	1.8	1.5	0.12
43	232	臼玉	5.5	2.3	1.5	0.12
44	235	臼玉	4.9	3.0	1.5	0.19
45	233	臼玉	5.5	2.3	1.5	0.14
46	234	臼玉	5.3	3.4	1.5	0.18
47	235	臼玉	5.4	2.7	1.5	0.18
48	235	臼玉	5.6	2.0	1.5	0.13
49	235	臼玉	5.5	3.7	1.5	0.23
50	185	臼玉	5.4	1.9	1.0	0.13
51	193	臼玉	5.4	2.2	1.5	0.12
52	017－205	臼玉	5.5	2.7	1.5	0.15
53	181	臼玉	5.3	3.2	1.5	0.15
54	235	臼玉	5.4	2.3	1.5	0.10
55	235	臼玉	5.2	1.4	1.5	0.09
56	235	臼玉	5.3	2.6	1.5	0.17
57	235	臼玉	5.5	2.3	1.5	0.14
58	213	臼玉	5.7	3.4	2.0	0.20
59	189	臼玉	5.6	3.1	1.5	0.16
60	178	臼玉	5.4	3.8	2.0	0.16
61	211	臼玉	5.2	2.2	1.5	0.13
62	225	臼玉	5.4	3.0	1.5	0.16
63	219	臼玉	5.7	2.9	2.0	0.16
64	222	臼玉	5.2	2.2	1.0	0.11
65	215	臼玉	5.7	2.0	1.5	0.13
66	197	臼玉	5.7	2.8	1.5	0.14
67	198	臼玉	5.5	2.6	1.5	0.15
68	195	臼玉	5.5	2.5	1.5	0.14
69	204	臼玉	5.5	2.2	1.5	0.12
70	180	臼玉	5.4	1.7	1.5	0.08
71	192	臼玉	5.6	2.7	1.5	0.17
72	190	臼玉	5.5	2.8	2.0	0.16
73	235	臼玉	5.2	2.9	1.5	0.20
74	199	臼玉	5.6	3.4	1.5	0.18
75	221	臼玉	5.6	3.2	1.5	0.21
76	206	臼玉	5.6	2.8	1.5	0.18
77	209	臼玉	5.3	2.6	2.0	0.12
78	218	臼玉	5.5	2.9	1.5	0.17
79	223	臼玉	5.5	2.3	1.5	0.15
80	210	臼玉	5.5	3.2	2.0	0.20
81	175	臼玉	5.8	3.5	2.0	0.19
82	214	臼玉	5.7	2.8	1.5	0.14
83	207	臼玉	5.5	3.3	1.5	0.20
84	238	臼玉	6.5	3.6	2.0	0.26
85	196	臼玉	5.8	3.9	1.5	0.22
86	238	臼玉	5.4	1.6	1.0	0.12
87	217	臼玉	5.6	2.2	1.5	0.17
88	194	臼玉	5.5	3.0	2.0	0.18
89	187	臼玉	5.3	2.8	1.5	0.14
90	188	臼玉	5.6	3.2	1.0	0.17
91	208	臼玉	5.6	4.5	1.5	0.25
92	220	臼玉	5.7	2.7	1.5	0.15
93	216	臼玉	5.6	2.2	1.5	0.12
94	176	臼玉	5.5	2.5	2.0	0.15
95	224	臼玉	5.7	3.0	1.5	0.21
96	183	臼玉	5.0	2.8	1.0	0.11
97	179	臼玉	5.6	3.4	1.5	0.19
98	186	臼玉	5.5	2.9	1.5	0.15
99	238	臼玉	5.2	2.0	1.5	0.13
100	182	臼玉	5.5	3.0	1.5	0.13
101	238	臼玉	5.4	1.8	1.5	0.12
102	238	臼玉	5.5	1.5	1.5	0.08
ＳＩ－028（旧遺構番号：020）						
7	020－32	土玉	－	－	－	8.11
ＳＩ－029（旧遺構番号：021）						
6	021－31	土錘	－	46.5	－	28.59
ＳＩ－030（旧遺構番号：022）						
10	022－7	土玉	21.5	19.5	5.5	8.95
ＳＩ－031（旧遺構番号：027）						
7	027-69•70	土玉	32.5	26.8	6.5	25.60
8	88	土玉	31.5	31.0	7.5	30.15
9	70	土錘	－	－	－	8.77

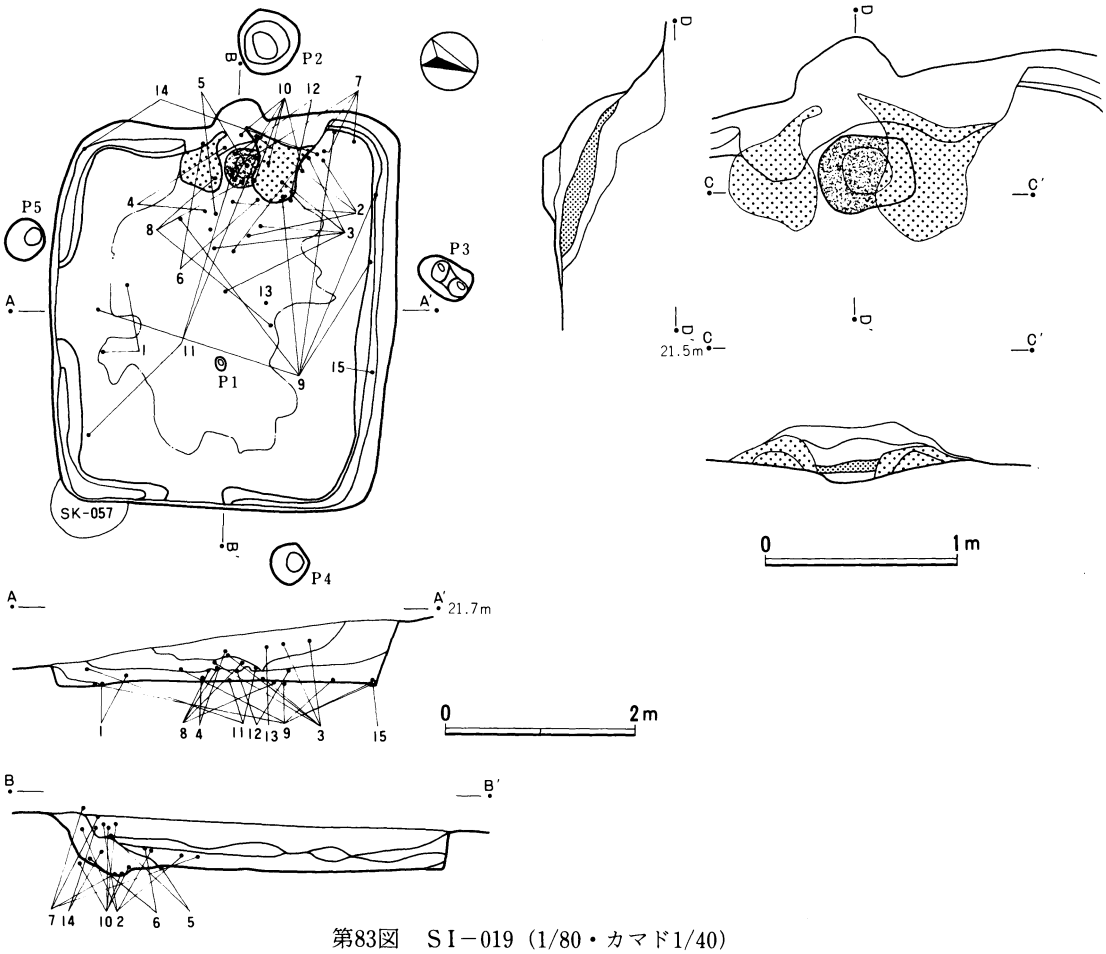
Ⅵ 古　　代

1　梗概

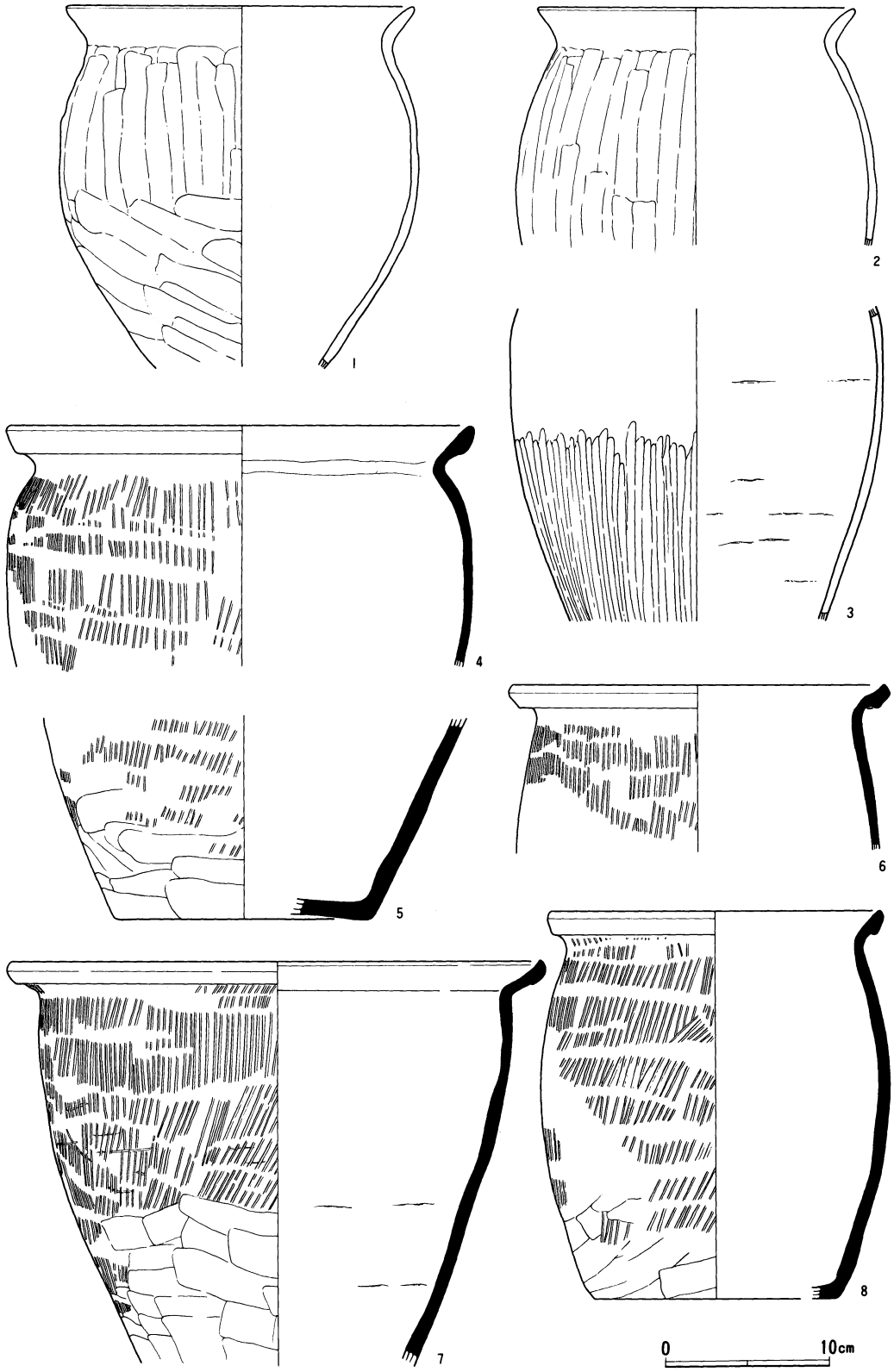
古代、いわゆる奈良時代から平安時代にかけての遺構は、竪穴建物跡４棟と、古墳１基、土壙墓３基が検出されている。竪穴建物跡のうち１棟は８世紀初頭に位置付けられるもので、他とは時期の隔たりがあると言えよう。Ａ区（遺跡北半部）においては竪穴建物跡１棟と古墳４基、火葬墓が検出されており、既に報告されている。墳墓群について見れば、Ａ区の一群のすぐ南側が主要地方道千葉•大網線によって削られ、また民家が現存する調査区域外であるため、遺構群の分布が十分に把握されないのが惜しまれる。以下、各遺構毎に詳細を報告する。

2　ＳＩ－019（第83図～第85図・図版27－２）

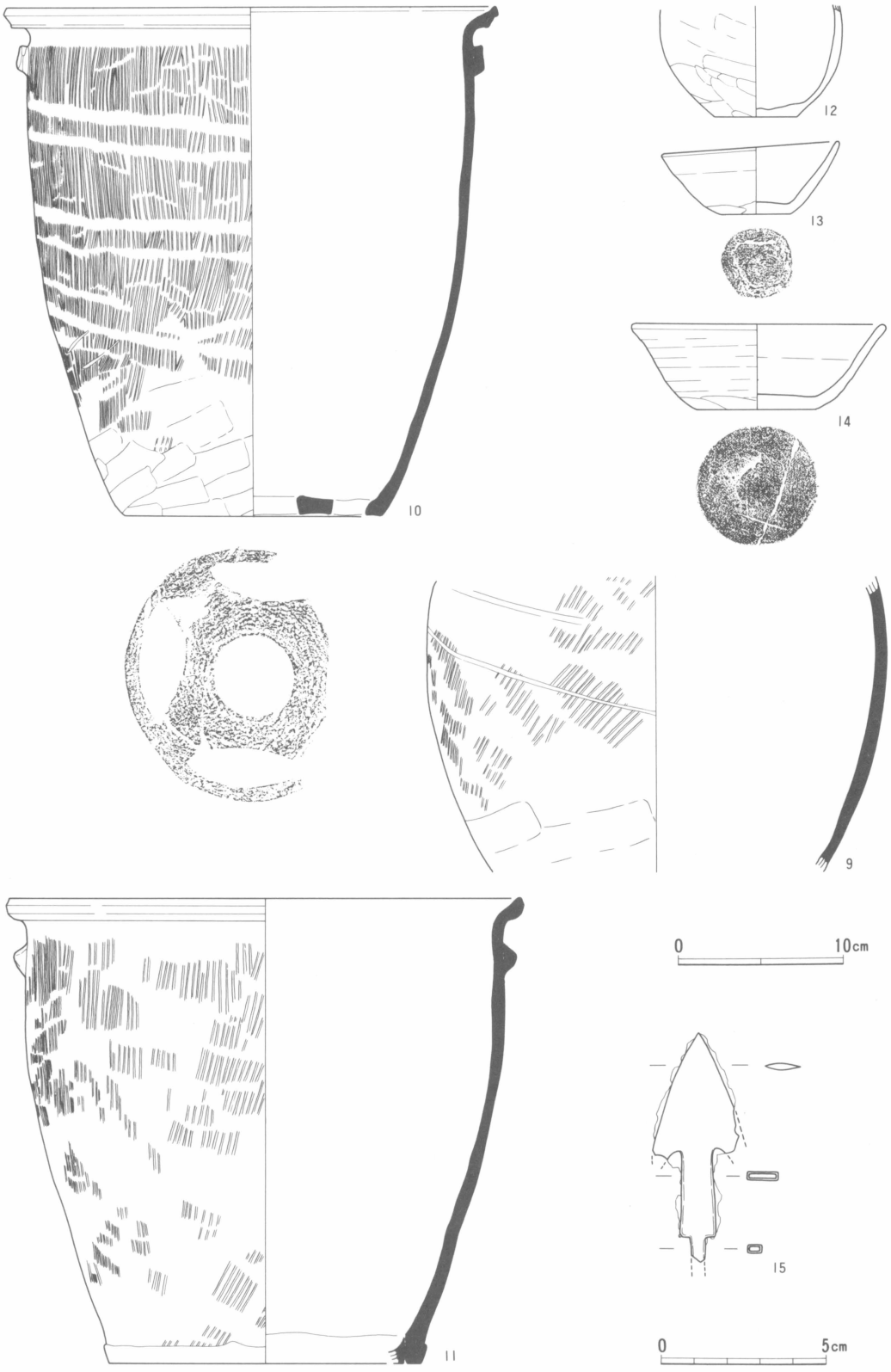
位置・形状　調査区の南東端の緩やかな斜面、M24－13・14区に位置する竪穴建物跡。入口



第83図　ＳＩ－019（1/80・カマド1/40）



第84図　ＳＩ－019出土遺物１（1/4）



第85図　ＳＩ－019出土遺物２（9～14：1/4・15：1/2）

位置が特定できないため主軸方位は不詳である。西南西－東北東方向にやや長い隅丸長方形を呈し、西辺3.5m、北辺4.0m、東辺3.4m、南辺3.9mを測る。斜面上に営まれているため、検出面からの深さは0.2～0.7mと差が大きい。

付帯施設・床面　竪穴内には小ピットが1基（P1）検出されたのみである。床面中央のやや東寄りに掘り込まれ、径15cm、深さ18cmときわめて小規模。カマドは西辺中央に設けられている。谷旬の分類[1]によるB_2類に相当しよう。壁周溝は竪穴の大半に巡っているが、カマドの下は掘られておらず、また東辺中央と南辺中央に途切れる箇所がある。当然、意図的なものであろう。竪穴の外側には各辺に接近して4か所にピットが検出されている。P2～P5がそれで、それらの位置関係から柱穴と考える。P2はカマド煙道の外側に穿たれたもので、検出面からの深さは24cm。以下それぞれの深さはP3が27cm、P4が13cm、P5が26cmを測るが、本来はさらに深かったことは言うまでもない。またP5が斜面下位に設けられたものであるにもかかわらず、他のピットと比較して検出面から決して浅くはなく、当建物跡が営まれた当時から緩斜面であったと推定することができる。さらに言えばこれらの柱穴の存在によって、当建物跡の範囲は竪穴の外側に大きく及んでいたことになる。

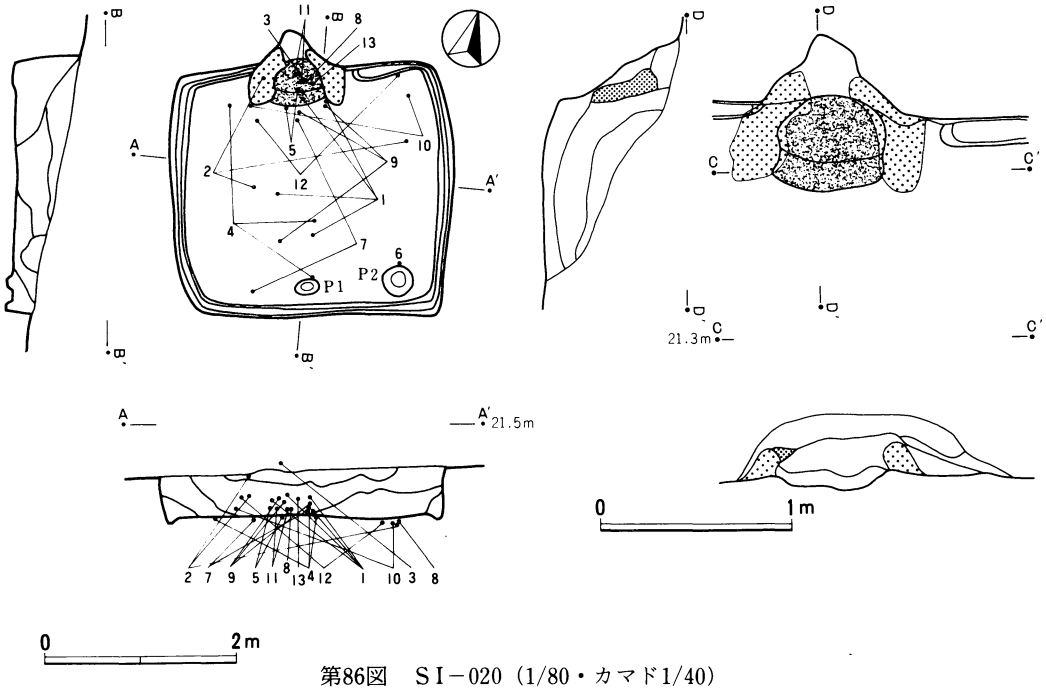
床面中央、およそ2×2.5mの範囲は踏み締められて硬化面を形成していた。

遺物等出土状況　250点弱の遺物が出土している。それらはカマド内とその周辺に著しく偏在し、その対辺側である遺構東半の遺物点数は非常に少なかった。カマド内には大破片が集中したが、カマド内外の接合関係もあり、また周辺の遺物を含めて接合関係は豊富で、復原された土器点数も多かった。

出土遺物　1～3は土師器甕である。1、2は「く」字形に口縁部が外反するもので、胴部上半には縦位の篦削り、下位には斜位の篦削りが施される。3は胴部中位以下の破片で、その下位には縦位の粗い磨きが施されている。4～9は須恵器甕である。赤褐色～灰褐色の色調を示すものが多い。口縁部が「く」字形に折れて開き、端部は肥厚した複合口縁。いずれも胴部には縦位の叩き目が観察され、下位の底部付近に篦削りが施される。10～11は甑である。口縁部形状、胴部調整は甕と共通。10の底部は中央に円孔、周縁に4つのレンズ状孔を持つ。12は土師器の小型甕で、底部外面に顕著な二次的吸炭現象が観察される。13～14は土師器坏である。13は底径の小さな小型品で、底部には回転糸切り痕が残り、体部外面底部近くに篦削り痕が観察される。14の底部は手持ち篦削りが施される。15は鉄鏃である。

3　SI－020（第86図・第87図・図版28－1）

位置・形状　調査区の南東端、前記SI-019の南西、M24－13・17・18区に位置する竪穴建物跡。北々西－南々東方向に主軸方位を置く。遺跡内で最も小型の建物跡で、概ね正方形を呈し、北辺2.7m、東辺2.7m、南辺2.7m、西辺2.5mを測る。やはり斜面部に営まれているため、



第86図　ＳＩ－020（1/80・カマド1/40）

検出面からの深さには0.2～0.7mの差がある。

付帯施設・床面　主柱穴は認められない。北辺中央にはカマドが設けられている。谷旬分類によるＣ類に相当する。カマドの対面、南辺中央にはＰ１が検出されている。その位置からすれば入口ピットと考えるべきであるが、径23cmと小径で、床面からの深さは８cmしかなく疑問が残る。南東コーナーには径33cmのほぼ円形を呈するＰ２がある。これも深さ14cmと浅く、性格は判然としない。壁周溝はカマド下を除いて全周する。

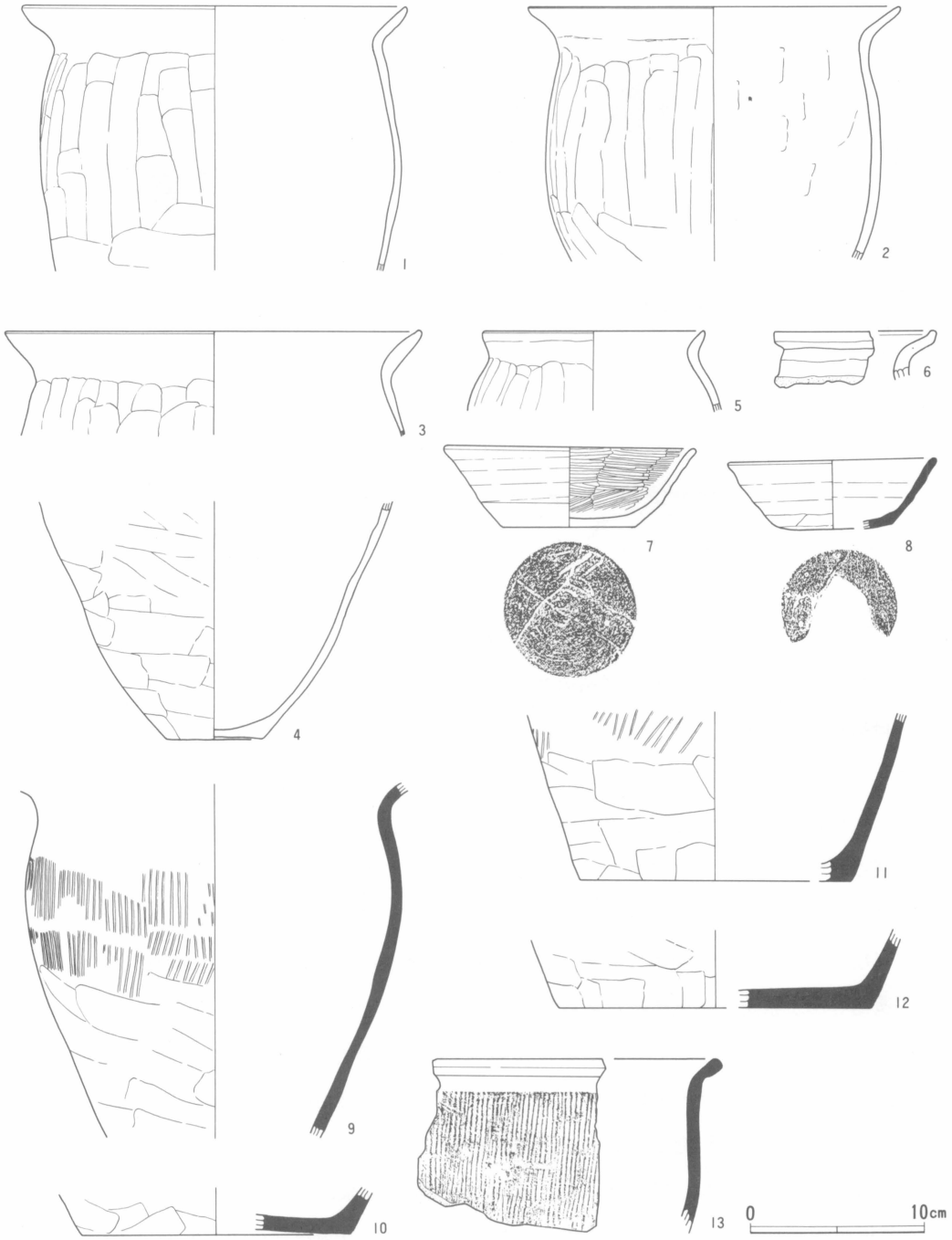
当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

遺物等出土状況　出土遺物点数は100点弱であるが、比較的大破片が多い。やはりカマド内とその周辺に遺物が集中する傾向が窺われた。また接合関係も豊富で、復原個体も多い。

出土遺物　１～６は土師器甕である。１～３については口径が胴径を上回るもので、胴部上位には縦位の篦削りが施されている。５はやや小型で、口頸部が短くあまり外傾しない。６は口縁端部が受口状をなしており、また外面に輪積痕が明瞭。７は土師器坏で、底部と体部下位には回転篦削り、内面には丁寧な磨きが観察される。８は須恵器坏で、底面は手持ち篦削り。９～13は須恵器甕である。胴部上～中位には叩き目、下位には篦削りが施される。

４　ＳＩ－024（第88図・第89図・図版28－２）

位置・形状　調査区中央やや東寄り、M23－21区に位置する竪穴建物跡。北々西－南々東方向に主軸方位を置く。やや歪ではあるが概ね正方形を呈し、北辺4.2m、東辺4.0m、南辺4.0m、

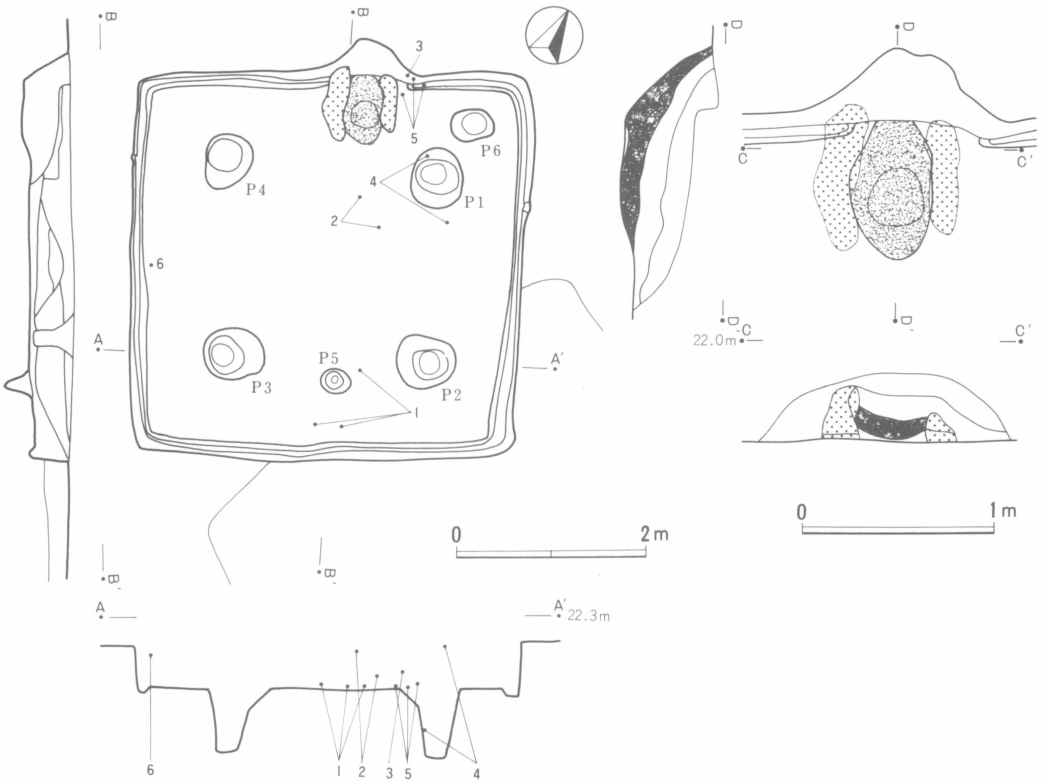


第87図　ＳＩ－020出土遺物（1/4）

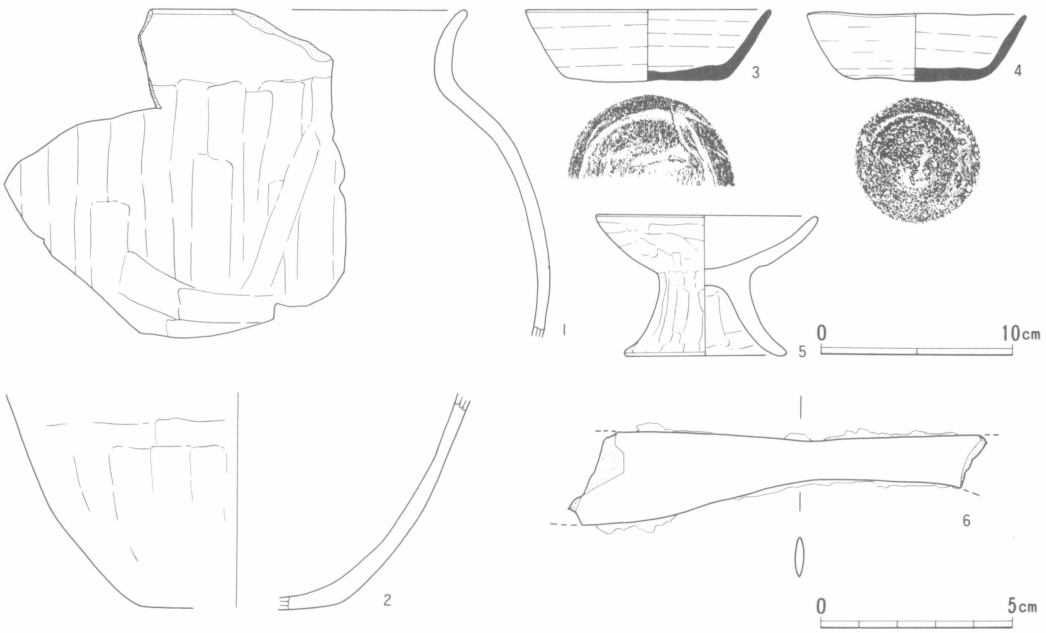
西辺3.9mを測る。検出面からの深さは0.4～0.5m。

重複関係　古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-025と重複する。言うまでもなく当建物跡が新。

付帯施設・床面　主柱穴はＰ１～Ｐ４までの４か所に検出された。概ね正方形配列をとり、床面からの深さはＰ１が83cm、Ｐ２が73cm、Ｐ３が67cm、Ｐ４が74cm。カマドは北辺中央の若



第88図　ＳＩ－024（1/80・カマド1/40）



第89図　ＳＩ－024出土遺物（1～5：1/4・6：1/2）

干東寄りに設けられる。谷旬の分類によるC類としてよいであろうか。火床上には灰が厚く堆積している。カマド対面の南辺側中央に小ピットＰ５が検出されている。径32×26cmで深さは33cm、入口ピットと判断される。カマドの右手、北東コーナーにはＰ６があって貯蔵穴と考えられる。45×32cmの楕円形を呈し、床面からの深さは38cmを測る。壁周溝はカマド下を除いて全周する。

当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

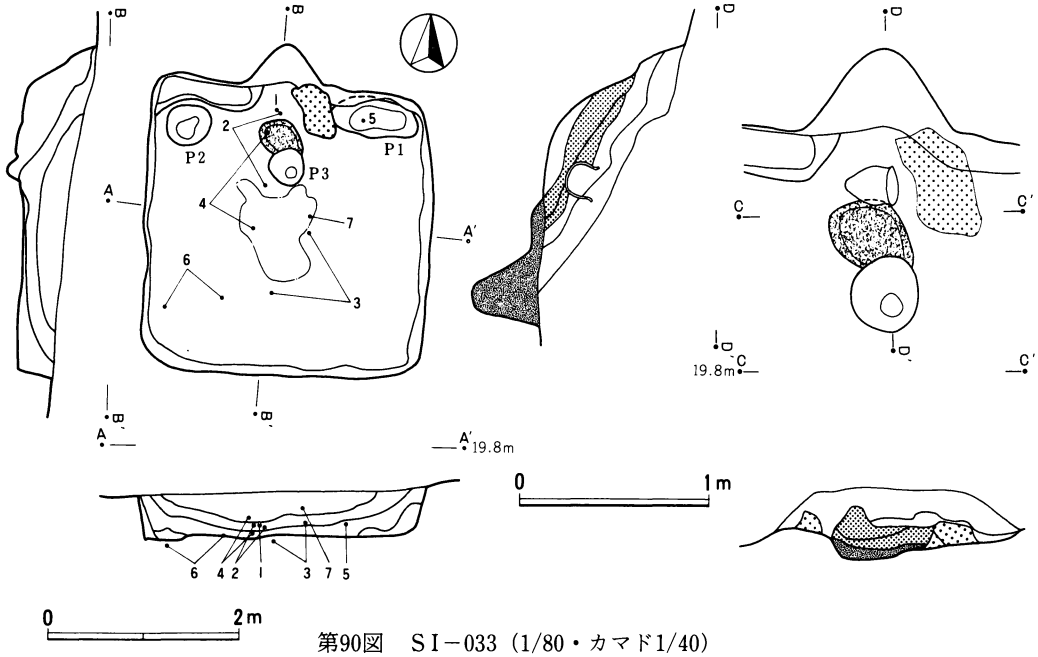
遺物等出土状況　遺物点数は約50点と多くはなく、とくに特徴的な分布傾向も示さない。

出土遺物　１、２は土師器甕である。１の口縁部は端部のみが小さく外反し、胴部の張りは強い。両者とも縦位の篦削りが顕著。３、４は須恵器坏である。３の胎土は緻密で明るい色調を示すが、４は暗青灰色で長石粒他の砂粒が目立ち、明らかに生産地は異なる。５は土師器高坏である。器高は低く、坏部は比較的直線的に開く。６は幅の狭い板状の鉄製品の断片で、鋭利な刃はなく、性格が不詳である。篦状の工具としておく。

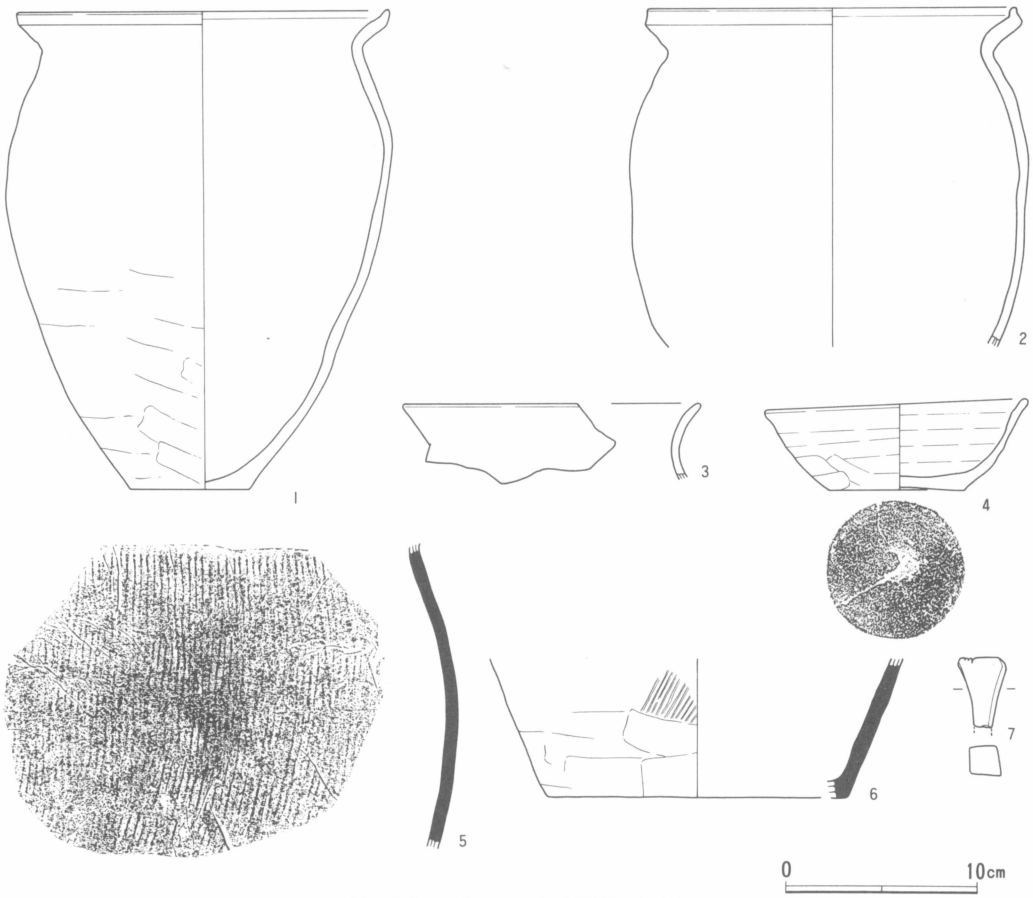
5　ＳＩ－033（第90図・第91図・図版28－３）

位置・形状　調査区南西部の外縁、Ｌ24－17区に位置する竪穴建物跡。入口位置が特定されないため主軸方位は不詳であるが、ほぼ南北方向と考えてよいか。ＳＩ-020と同様非常に小型で、大略正方形を呈し、北辺2.8m、東辺3.0m、南辺2.9m、西辺3.0mを測る。検出面からの深さは0.2～0.6m。

付帯施設・床面　主柱穴は検出されていない。カマドが北辺中央に設置されている。谷旬の



第90図　ＳＩ－033（1/80・カマド1/40）



第91図　ＳＩ－033出土遺物（1/4）

分類によるＣ類に相当すると思われるが、カマド自身の遺存度は不良で、左側は袖の大方が失われている。カマド側の左右コーナーにはＰ１とＰ２があり、ともに性格を明断することはできない。Ｐ１は溝状の窪みでむしろ周溝の一部と考えるべきかもしれない。Ｐ２は径49cmの円形で深さは34cm、貯蔵穴の可能性も指摘されようが、疑問も残る。またカマドの全面にはＰ３が掘られており、径38cm、深さ25cm。火床から連続して焼土が充塡しており、性格は不明。壁周溝はカマド左側のみ掘られているが、前述のとおりカマド右側のＰ１も壁周溝として捉えられるかもしれない。

床面観察では、中央の狭い範囲に踏み締めによる硬化面が認められている。

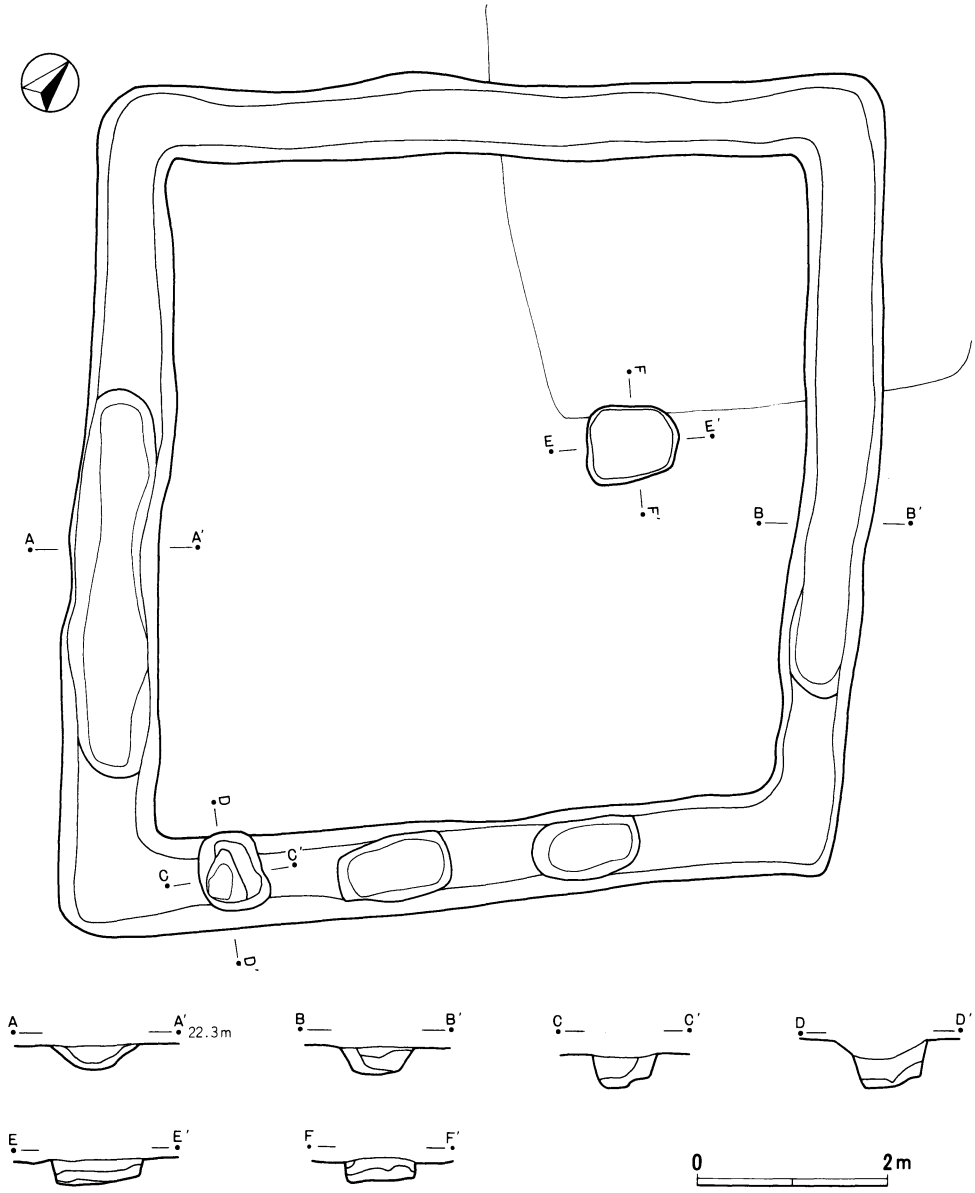
遺物等出土状況　遺物量はあまり多くはない。分布としては床面中央部から南寄りに多く出土している。またカマド内中央からは甕がほぼ原位置と思われる状態で出土している。

出土遺物　１～３は土師器甕である。１はカマド内、２はカマド内とＰ３脇との接合で、火熱の痕跡がきわめて顕著である。いずれも口縁部が「く」字形に屈曲し、端部がつまみ上げたように受口状をなしている。３は緩やかに外反する甕口縁部で、端部は粗縁。４は土師器坏で底部には手持ち篦削りが施されている。５、６は須恵器甕の破片。７は細粒砂岩製の砥石片。

6　ＳＸ－005（第92図・図版32－２～４）

位置・形状　調査区の東寄り、M23－21・M24－01区に位置する方墳。墳丘は遺存しない。各辺は経緯線とほぼ45°の角度を持つ。平面形状は歪な正方形を呈し、周溝外縁で計測して北西辺8.3m、北東辺8.3m、南東辺8.2m、南西辺8.8m、周溝内縁で北西辺6.8m、北東辺6.6m、南東辺6.6m、南西辺7.0mを測る。周溝の幅は1.0～0.7m。検出面からの深さは0.2～0.3m。

埋葬施設等　周溝内側方台部の北東寄りに土壙が検出されているが、積極的な根拠はないもののこれを埋葬施設と考える。土壙は100×83cmの隅丸長方形で底面は平坦、検出面からの深さ



第92図　ＳＸ－005（1/80）

は最大25cmを測る。また壁の立ち上がりはほぼ垂直である。これが埋葬施設であるとすれば土壙の規模から見て火葬であったことが想定される。また南東辺周溝には3基の周溝内土壙が並ぶ。うち南端のものは最も明確な掘り込みを有する。形状は81×71cmの隅丸長方形で、周溝底面からの深さは33cm。有段で、南側が一段深い。やはり明確な根拠はないが、火葬による埋葬施設か。中央のものと北端のものは深さ10cm余りと浅く、何らかの施設と考えることに躊躇を覚えるが、ここに埋葬が行われた可能性も決して否定はできまい。中央の土壙は120×68cm、北端の土壙は114×62cmの隅丸長方形乃至長楕円形を呈する。

遺物等出土状況　遺物は出土していない。

7　ＳＫ－049（第93図・図版32－５）

位置・形状　調査区の東端、M24－04区に位置する土壙墓。南北方向に主軸方位を置く。掘り方は隅丸長方形で、主軸長2.7m、最大幅2.1m、検出面からの深さは0.4mを測る。棺部はさらに深く掘り込まれ、主軸長1.71m、最大幅0.76m、掘り方からの深さは0.43m。底面には2条の横溝が掘られ、所謂横溝土壙墓、有溝土壙墓と呼ばれるものである。溝幅は10～16cm、溝の深さは６～８cm。

覆土の状況　土層断面では、棺部、裏込めが明瞭に把握されたが、しかし土質自体はさほど特徴的なものではなく、また粘土等も用いていない。棺部の覆土はローム粒を多く含むものであり、本来上位に被覆されていた土が落ちたものと考えられ、さらにその上位に黒褐色土が流れ込んでいる。

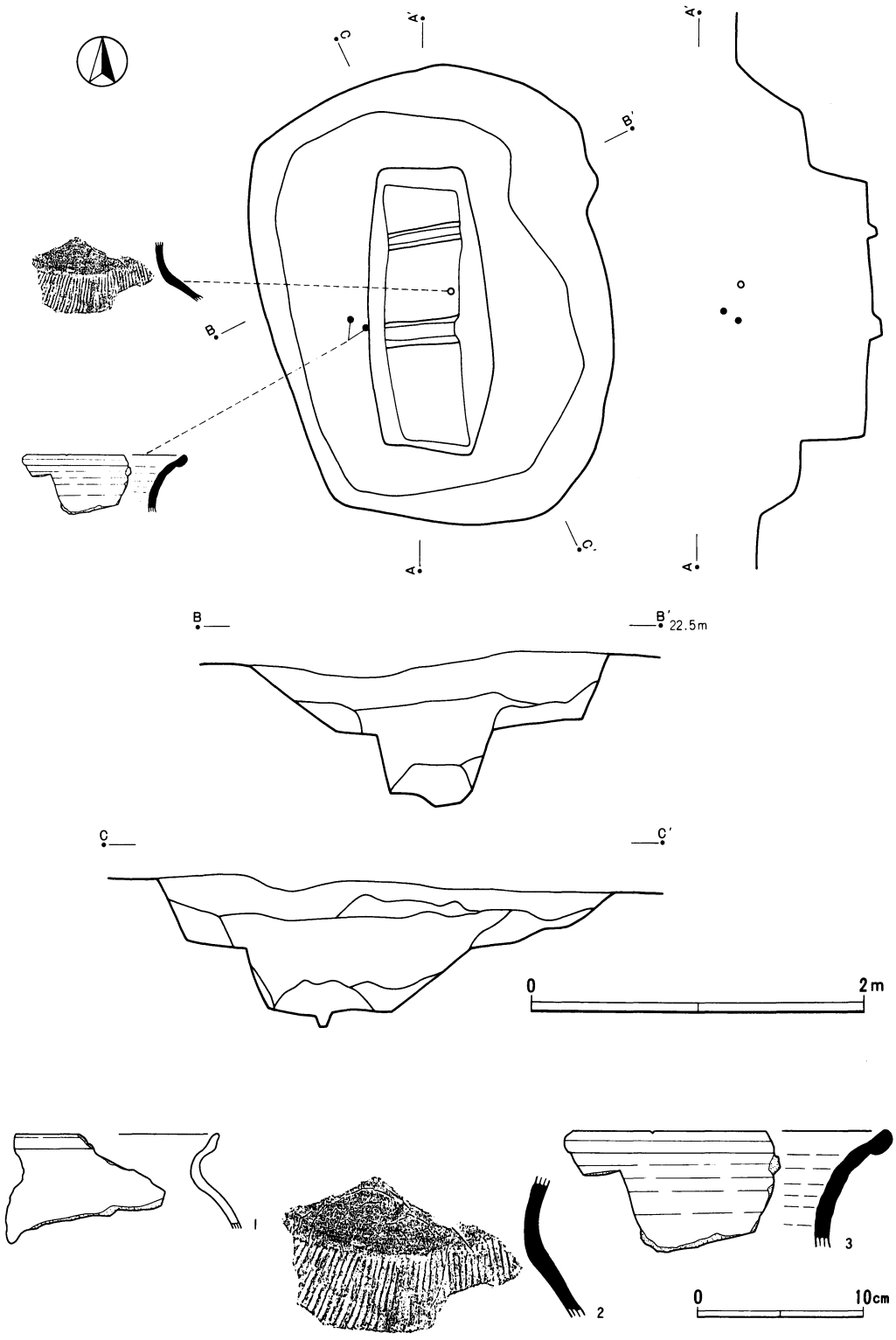
遺物等出土状況　ほぼ棺部中央付近の上、検出面近くで須恵器甕の破片が検出されている。かなり上位にある点については本来的に伴ったものかどうかの判断は難しいが、位置的に見て棺上に意識的に置かれていたと考えるのが自然であろう。

出土遺物　１は土師器の甕口縁部～肩部の破片である。原位置は不明。２、３は須恵器甕で同一個体の破片である。色調は茶褐色で、頚部直下から胴部は膨らみ、叩き目が施される。

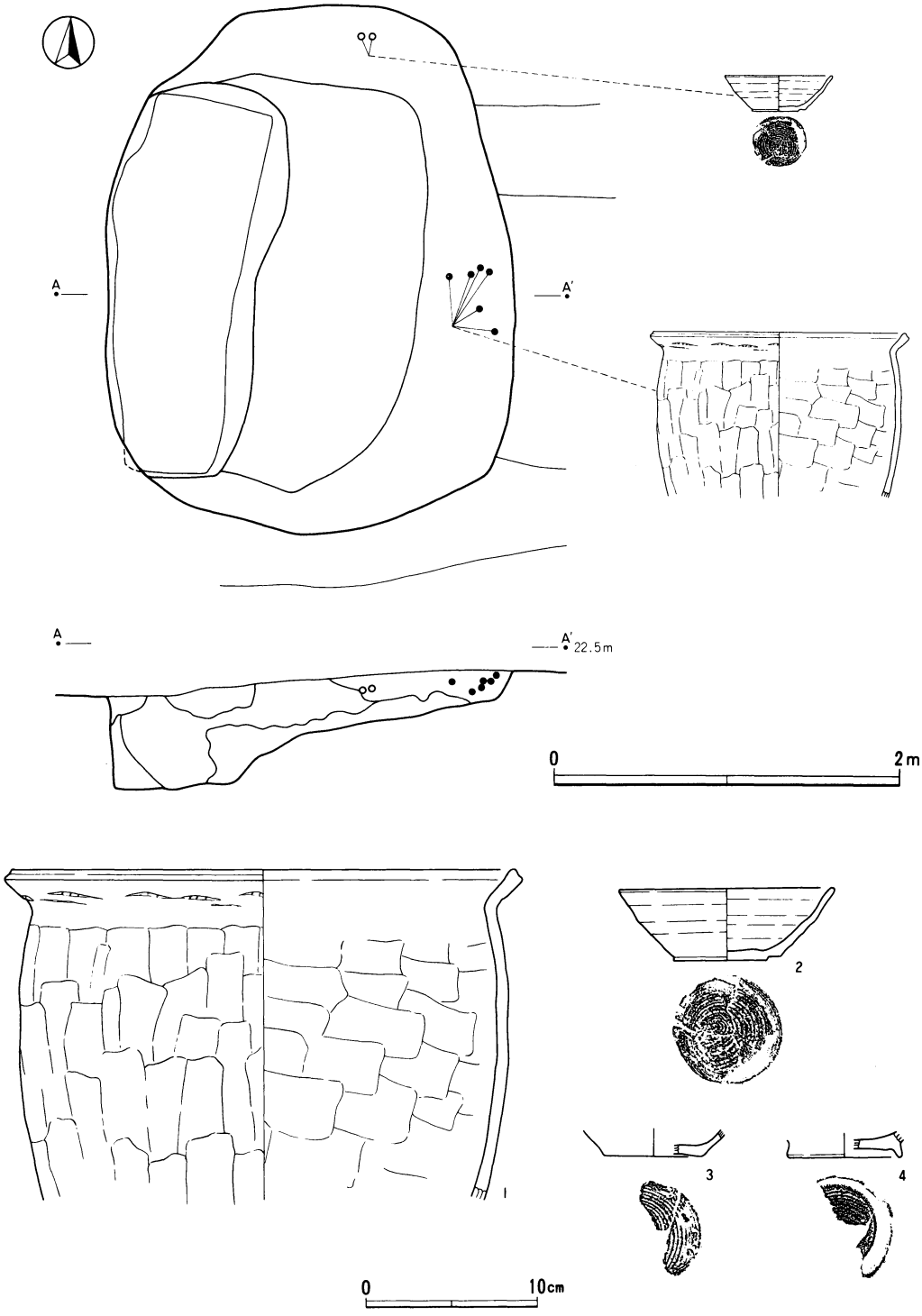
8　ＳＫ－050（第94図・図版32－６）

位置・形状　調査区の中央やや東寄り、M24－06区に位置する土壙墓。前記ＳＫ-049の西およそ30mを隔てる。棺部の長軸はほぼ南北方向である。遺構全体の平面形状は、長軸長3.1m、短軸長2.4mの不整隅丸長方形を呈するが、棺部は西側に一段低く掘り込まれており、天井部こそ失われていたものの、いわゆる有天井土壙墓である。掘り方（搬入部）は棺部に向かって若干傾斜しており、検出面からの深さは18～30cm。棺部は最大長231cm、最大幅100cmで、搬入部からの深さは32cmを測る。

重複関係　ＳＤ-006、ＳＤ-007と重複する。新旧関係は当遺構が古。



第93図　ＳＫ－049（1/40）・出土遺物（1/4）



第94図　ＳＫ－050（1/40）・出土遺物（1/4）

覆土の状況　覆土には棺部の壁際上位を除いて、とくに天井部の崩落土は認められない。また棺部の壁際下位にはローム粒が多量に含まれ、崩壊土が上位から徐々に流入したものであろう。粘土等は全く用いられていない。

遺物等出土状況　搬入部の周縁から遺物が出土している。北側縁では土師器坏が、東側縁では土師器甕が僅かに浮いた状態で出土した。

出土遺物　1は土師器甕である。口縁部が「く」字形に屈曲して外傾し、端部は面取りされてその中央が凹線状になでられる。胴部外面は縦位の篦削り、内面は横位の篦なで。2～4は土師器坏である。いずれの底部にも回転糸切り痕が残るが、2の場合削出しによって僅かに高台状に仕上げられ、4には貼付け高台が付く。

9　ＳＫ－051（第95図・図版33）

位置・形状　調査区中央西寄り、Ｌ24－03区に位置する土壙墓。当遺構については調査を担当した福田誠によって概要が報告されている[2]。前記ＳＫ-050と同じく有天井土壙墓で、長軸は北西－南東方向になり、棺部は掘り方（搬入部）の東側に設けられる。調査はＳＩ-032床面から行ったため遺存部のさらに上位を失ったことになるが、掘り込み自体深く、天井部の遺存も比較的良好であった。掘り方の形状は小規模な不整楕円形で長軸長1.34m、天井が遺存した位置までの幅は0.69m、ＳＩ-032床面からの深さは最大35cm。棺部の長軸長100cm、幅50cm、掘り方（搬入部）からの深さは17cmを測る。

重複関係　既に述べたように古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-032と重複し、当遺構が新である。従ってＳＩ-032の覆土を切って営まれているが、当初土壙を正確に認識することはできず、ＳＩ-032の調査の後に当遺構の調査を行った。

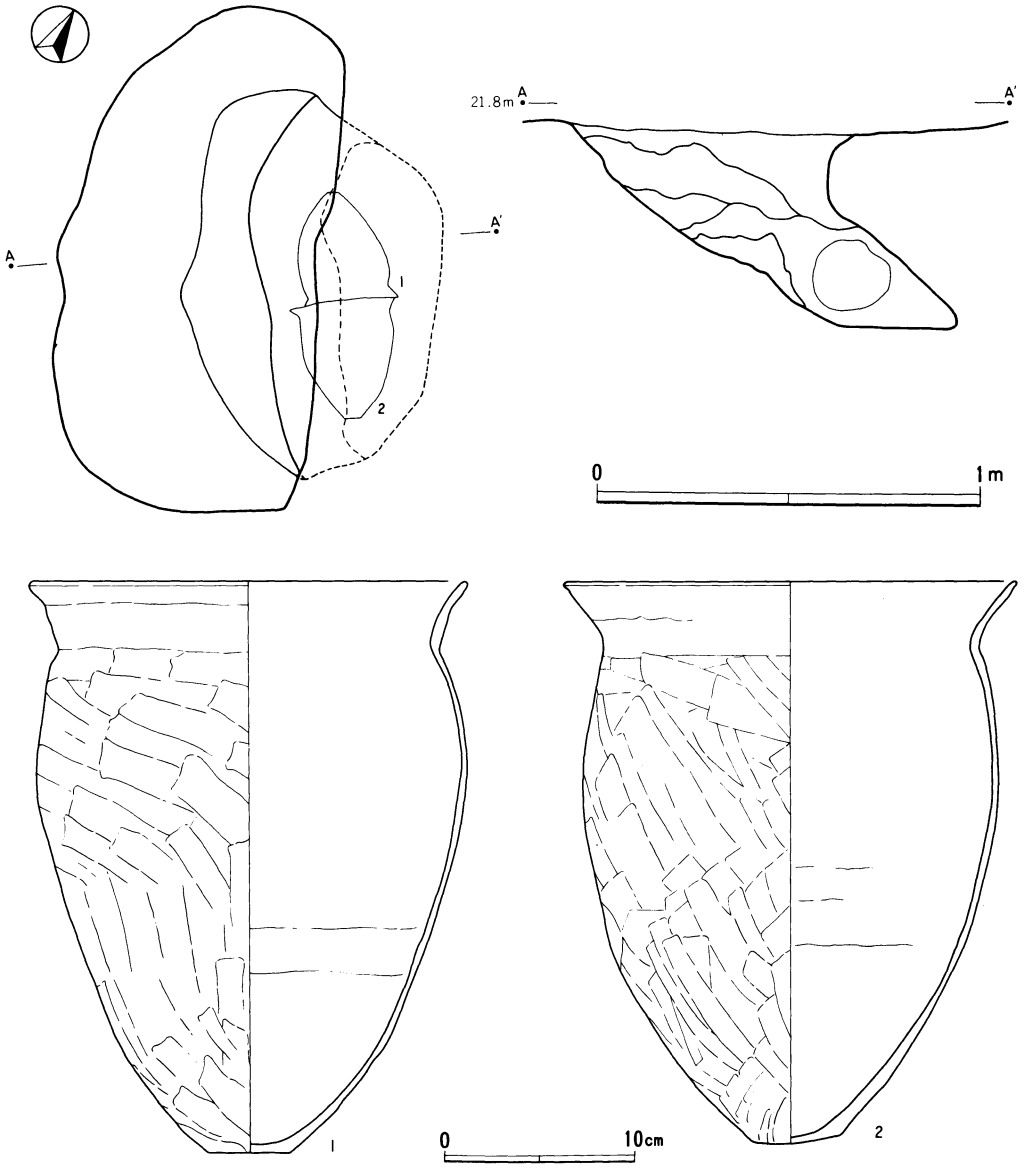
埋葬部　2個体の甕を合口にして横置した火葬墓と考えられる。しかし容器内には火葬骨等は遺存しなかった。また蔵骨器の外容器の痕跡もなかった。

出土遺物　蔵骨器となった甕2個体がある。両者とも頸部が「く」字形に屈曲して口縁部が外傾するが、1についてはさらに端部が開き、「コ」字形に近くなる。胴部には斜位～縦位の篦削りが施される。底部は小径できわめて不安定であり、明らかに当初から正置することは企図されていない。

10　小結

上記報告したように、この地蔵山遺跡Ｂ区の該期遺構群は建物跡4棟と墳墓4基によって構成されている。ただそれらにはかなりの時期幅が想定される。ここで出土遺物から判断される遺構群の形成過程を見ておきたい。

まず竪穴建物跡について。最も古く位置付けられるのがＳＩ-024であるのは明白である。8



第95図　ＳＫ－051（1/20）・出土遺物（1/4）

世紀初頭（７世紀末～）の年代が与えられる。このＳＩ-024はカマド右のコーナーに貯蔵穴を設けており、７世紀の建物構造を依然継承しているのは興味深い。他の３棟の竪穴建物跡は土師器甕の形態等にはそれぞれ様相の違いを見せているが、坏から判断する限りいずれも９世紀半ば（おそらく第２四半期）に位置付けられ、接近した時期の所産ということになる。地蔵山遺跡Ａ区で報告されたＳＩ-015Ａもまた９世紀半ば（やや遅れて第３四半期か）に営まれていると考えられるので、それを含めた４棟が９世紀の集落を構成していたとも見られる。

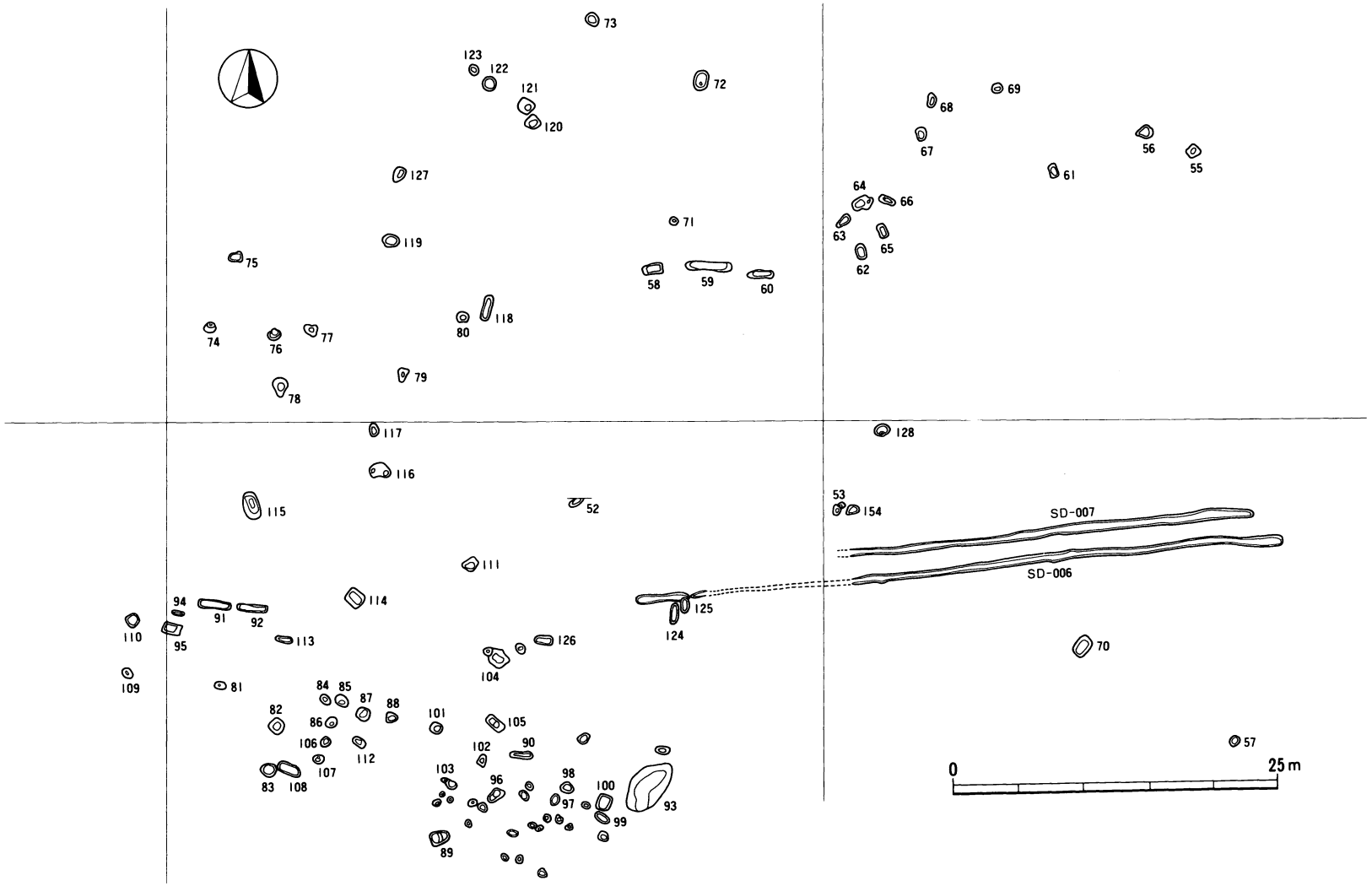
次に墳墓群について。ＳＸ-005は遺物を出土しておらず時期判断ができない。３基の土壙墓

のうち最も時期比定が容易なＳＫ-050は９世紀第４四半期の所産と見られる。他の２基は甕からのみの判断となるため細かい時期比定は不可能であるが、ＳＫ-051については８世紀末～９世紀初頭に位置付けられるのではないかと思われる。またＳＫ-049も９世紀末まで降ることはあるまい。いずれにしても遺跡Ｂ区における墳墓群の造営期間は100年近くに亙ることになる。

以上のことからここで報告した遺構群は、集落と墓域が同時に営まれ続けたものではなく、８世紀初頭に竪穴建物が１棟つくられてからしばらく時間をおいて墳墓群がつくられ、９世紀後半に再び集落が営まれて短期で廃絶した後、さらに墳墓がつくられていることになる。

註１　谷旬「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要７』（財）千葉県文化財センター　1982

２　福田誠「千葉寺地区鷲谷津遺跡Ｂ区において検出された合口甕棺墓について」『研究連絡誌』22（財）千葉県文化財センター　1988



第96図　土坑及び溝状遺構位置図（1/500）

Ⅶ　時期・性格不明の遺構

1　梗概

今回報告する地蔵山遺跡Ｂ区では、帰属時期が不明であったり、ある程度時期が推定できても性格が明確ではない土坑が77基、溝状遺構が２条検出されている。当遺跡には縄文時代早期の大規模な遺物包含層や古墳時代～平安時代の集落が存在しており、ここで報告する土坑の中には縄文時代あるいは古墳時代～平安時代のものも含まれていよう。殊に陥穴状土坑については縄文時代の所産であろうが、時期比定が困難なため本章で一括しておく。

2　土坑

ＳＫ-052（第97図）　Ｌ24－04区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長0.98m、短軸長0.64mを測る。壁面の立ち上がりは急斜で、底面は中央がやや低い。検出面からの深さは0.22～0.34m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-053（第97図）　Ｍ24－01区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.09m、短軸長0.58m。長軸は北東－南西方向になるが、南西側の方が幅が広くまた深い。２基の土坑の重複のように南西側が一段下がるが、上段の検出面からの深さは0.12～0.14m、下段の深さは最深0.39m。底面は上段が平坦であるが、下段は南西側に向かって傾斜する。遺物等は出土しなかった。

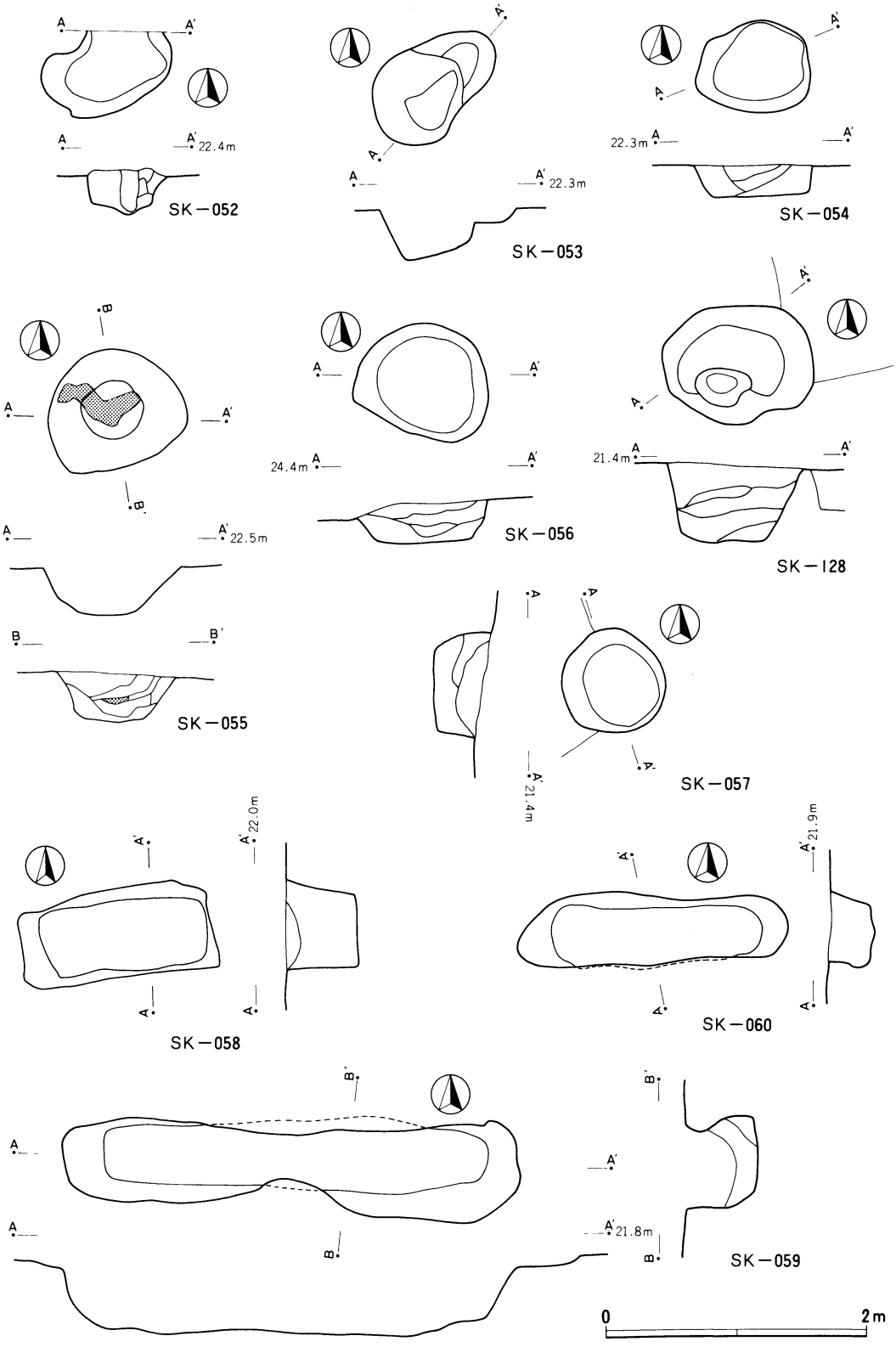
ＳＫ-054（第97図・図版34－１）　Ｍ24－01区、前記ＳＫ-053のすぐ東に位置する楕円形の土坑である。長軸長0.89m、短軸長0.72mを測る。壁面の立ち上がりは急斜で底面は平坦。検出面からの深さは0.12～0.18m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-055（第97図・図版34－２）　Ｍ23－13区に位置するやや歪な円形の土坑。長軸長1.06m、短軸長0.93mを測る。掘り込みは椀状で、検出面からの深さは0.35m。覆土中位から焼土ブロックが検出されたが、性格は不明。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-056（第97図・図版34－３）　Ｍ23－13区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.30m、短軸長1.05mを測る。平面形状はＳＫ-055に似るが、底面はより平坦である。検出面からの深さは0.26m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-057（第97図・図版34－４）　Ｍ24－14区に位置する円形土坑。ＳＩ-019に切られる。直径0.78mを測る。壁面の立ち上がりは急斜で底面は平坦、検出面からの深さは0.45m。覆土中から土師器片１点が出土した。

ＳＫ-058（第97図・図版34－５）　Ｌ23－19区に位置する長方形の土坑。長軸長1.80m、短軸長0.68mを測る。壁面は垂直近く立ち上がり、底面は平坦で硬く締まっていた。検出面からの深さは0.50～0.56m。覆土中から土師器片３点が出土した。


SK－052
SK－053
SK－054
SK－055
SK－056
SK－057
SK－058
SK－059
SK－060
SK－128
22.4m
22.3m
22.3m
22.5m
24.4m
21.4m
21.4m
22.0m
21.9m
21.8m
0
2m

第97図　土坑1 (1/50)

ＳＫ-059（第97図・図版34－６）　Ｌ23－23・24区に位置する長方形の土坑。長軸長3.49m、短軸長0.53mを測る。壁は一部オーバーハングし、底面は平坦で硬く締まっている。検出面からの深さは0.54m。覆土内から土玉片１点（第105図１）、土師器片（甕）25点、須恵器片（高台付坏）１点、近世陶器１点が出土した。

ＳＫ-060（第97図・図版34－７）　Ｌ23－20区に位置する長楕円形の土坑。長軸長2.08m、短軸長0.55mを測る。壁はＳＫ-059と同様オーバーハング気味で底面も平坦であるが、硬く締まっていなかった。検出面からの深さは0.27m。覆土内から土師器片10点、鉄器片１点が出土。

ＳＫ-061（第98図・図版34－９）　M23－17区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.05m、短軸長0.68mを測る。掘り込みは浅く、検出面からの深さは0.12～0.17m。覆土上位から土師器坏形土器２点（第105図２、３）が出土している。古墳時代の遺構か。

ＳＫ-062（第98図・図版34－８）　M23－16区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.10m、短軸長0.76mを測る。底面は皿状で、検出面からの深さは0.08～0.13m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-063（第98図）　M23－16区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.17m、短軸長0.55mを測る。壁面の立ち上がりは急斜で、底面は北東側で一段低くなり、検出面からの深さは0.21～0.45m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-064（第98図）　M23－16区に位置する不整形の土坑。長軸長1.60m、短軸長1.11mを測る。椀状の掘り込みで、検出面からの深さは0.28m。遺物等は出土しなかった。

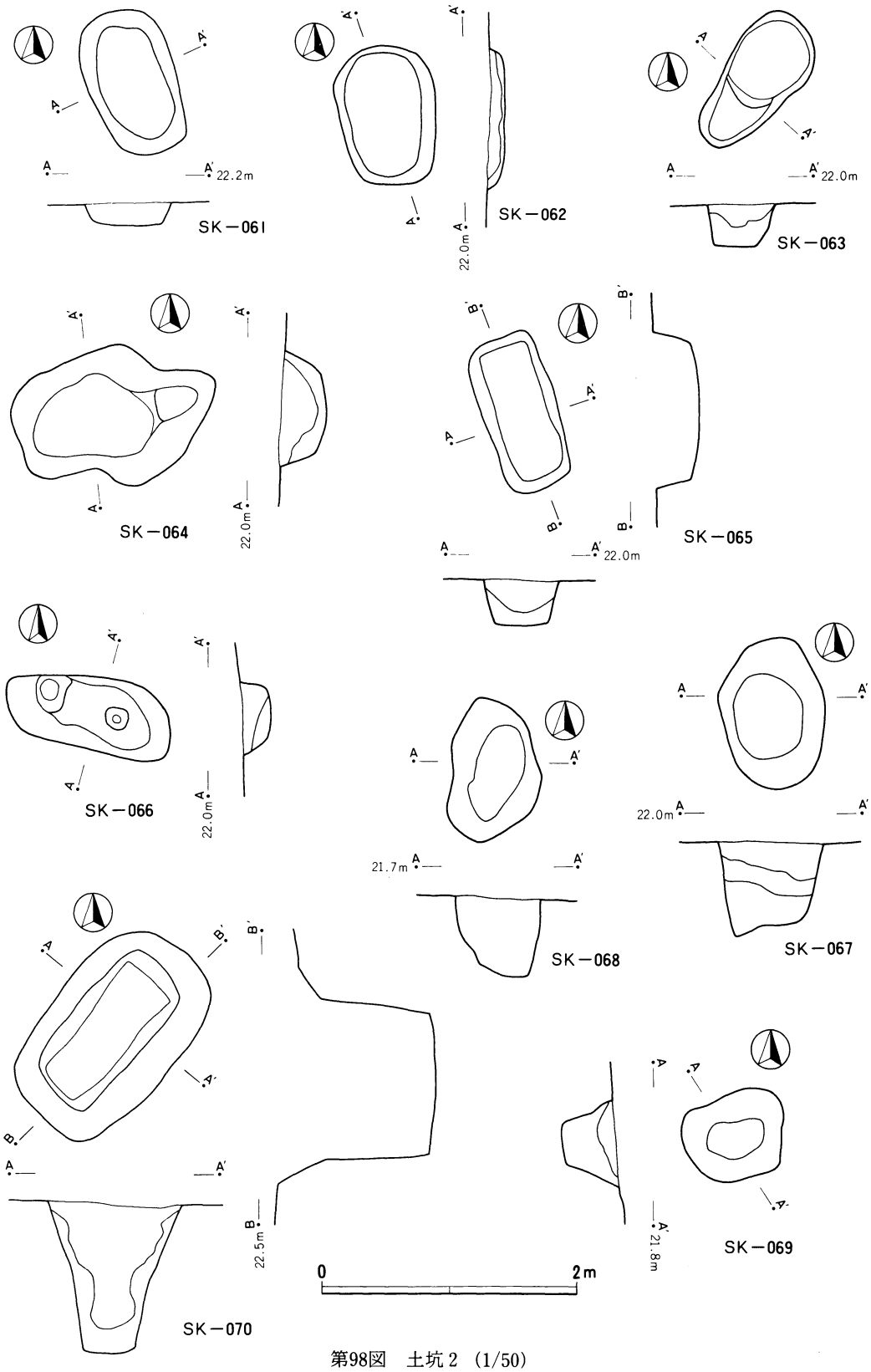
ＳＫ-065（第98図・図版34－10）　M23－16区に位置する長方形の土坑。長軸長1.24m、短軸長0.59mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近く。底面は中央がやや深いながら整っている。検出面からの深さは0.36m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-066（第98図）　M23－16区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.32m、短軸長0.57mを測る。検出面からの深さは0.14～0.18m。底面には２か所に浅い窪みが認められたが、性格は不明。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-067（第98図）　M23－11区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.16m、短軸長0.81mを測る。平面規模に対して掘り込みは深く、検出面からの深さは0.73m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-068（第98図）　M23－11区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.13m、短軸長0.69mを測る。この土坑も掘り込みは深く、検出面からの深さは0.56～0.62m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-069（第98図）　M23－12区に位置する不整円形の土坑。長軸長0.78m、短軸長0.59mを測る。断面形は逆台形で、底面は比較的平坦。検出面からの深さは0.34～0.39m。遺物等は出土しなかった。


SK－061
SK－062
SK－063
SK－064
SK－065
SK－066
SK－067
SK－068
SK－069
SK－070
22.2m
22.0m
21.7m
22.5m
21.8m
0
2m

第98図　土坑２（1/50）

ＳＫ-070（第98図・図版34－11）　M24－07・08区に位置する隅丸長方形の陥穴状土坑。長軸長1.67m、短軸長1.19mを測る。底面からの壁面の立ち上がりは急傾斜であるが、上位でやや屈曲して傾斜は若干緩やかになる。底面は概ね平坦で、小孔等は認められない。検出面からの深さは1.08～1.19m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-071（第99図）　Ｌ23－19区に位置する楕円形の土坑。長軸長0.84m、短軸長0.66mを測る。掘り込みは椀状を呈し、検出面からの深さは0.17m。覆土中から須恵器片１点が出土した。

ＳＫ-072（第99図）　Ｌ23－15区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.55m、短軸長1.10mを測る。皿状の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.30m。覆土中から土師器片１点と中～近世陶器片１点が出土している。

ＳＫ-073（第99図）　Ｌ23－09区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長1.13m、短軸長1.10mを測る。平面規模に比して掘り込みは深く、壁面は比較的急斜で底面は平坦である。検出面からの深さは0.49～0.54m。覆土中から土師器片５点と須恵器片１点が出土した。

ＳＫ-074（第99図）　Ｌ23－21区に位置する不整円形の土坑。長軸長0.88m、短軸長0.77mを測る。皿状乃至椀状を呈するが、北側に向かって掘り込みは深くなる。検出面からの深さは0.12～0.32m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-075（第99図）　Ｌ23－16区に位置する不整隅丸長方形を呈する土坑。長軸長0.98m、短軸長0.66mを測る。底面は東に向かって緩やかに傾斜し、検出面からの深さは0.24～0.45m。覆土中から黒曜石製の剝片１点が出土している。

ＳＫ-076（第99図）　Ｌ23－21区に位置する不整円形の土坑。長軸長0.92m、短軸長0.80mを測る。皿状の掘り込みで、底面には緩やかな凹凸があり、検出面からの深さは0.10～0.16m。覆土上位に宝永富士火山灰層が見られた。遺物等は出土していない。

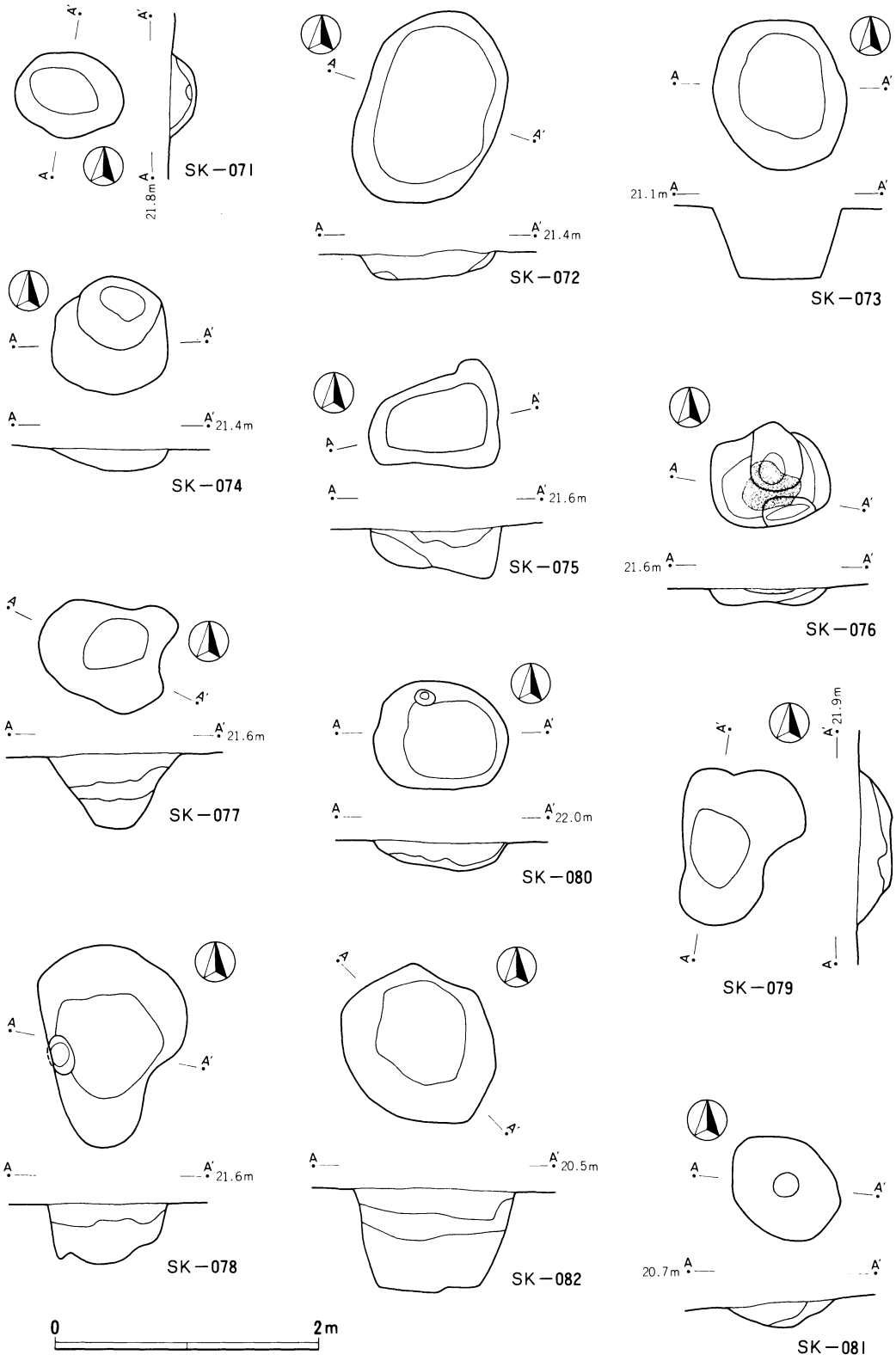
ＳＫ-077（第99図・図版35－１）　Ｌ23－22区に位置する不整形の土坑。長軸長0.96m、短軸長0.78mを測る。掘り込み断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.67m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-078（第99図・図版35－２）　Ｌ23－21区に位置する不整形の土坑。長軸長1.52m、短軸長1.10mを測る。検出面からの深さは0.25～0.41m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-079（第99図・図版35－３）　Ｌ23－22区に位置する不整形の土坑。長軸長1.12m、短軸長0.91mを測る。検出面からの深さは0.26m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-080（第99図・図版35－４）　Ｌ23－23区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.03m、短軸長0.82mを測る。皿状の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.18～0.31m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-081（第99図）　Ｌ24－11区に位置する楕円形の土坑。長軸長0.82m、短軸長0.76mを


SK－071
21.8m
SK－072
21.4m
SK－073
21.1m
SK－074
21.4m
SK－075
21.6m
SK－076
21.6m
SK－077
21.6m
SK－078
21.6m
SK－079
21.9m
SK－080
22.0m
SK－081
20.7m
SK－082
20.5m
0
2m

第99図　土坑３（1/50）

測る。皿状の掘り込みで、検出面からの深さは0.12m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-082（第99図・図版34－12）　Ｌ24－11区に位置する不整円形の土坑。長軸長1.18m、短軸長1.16mを測る。比較的掘り込みは深く、底面はほぼ平坦。検出面からの深さは0.95m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-083（第100図・図版35－５）　Ｌ24－11区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長1.18m、短軸長1.12mを測る。緩斜面に営まれている故か底面も緩やかに傾斜する。壁面の立ち上がりは急斜である。検出面からの深さは0.28～0.45m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-084（第100図・図版35－６）　Ｌ24－12区に位置する楕円形の土坑。長軸長0.95m、短軸長0.63mを測る。椀状の掘り込みを持ち、ほぼ中央が乳頭状にさらに掘り込まれる。検出面からの深さは0.53m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-085（第100図・図版35－６）　Ｌ24－12区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.17m、短軸長0.92mを測る。比較的深い椀状の掘り込みを有し、検出面からの深さは0.85m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-086（第100図・図版35－６）　Ｌ24－12区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長0.99m、短軸長0.79mを測る。やはり椀状の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.70m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-087（第100図・図版35－７）　Ｌ24－12区に位置する不整円形の土坑。長軸長1.16m、短軸長1.09mを測る。前記の２基と同様椀状の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.84m。おそらく同じ性格を持った土坑群であろう。遺物等は出土しなかった。

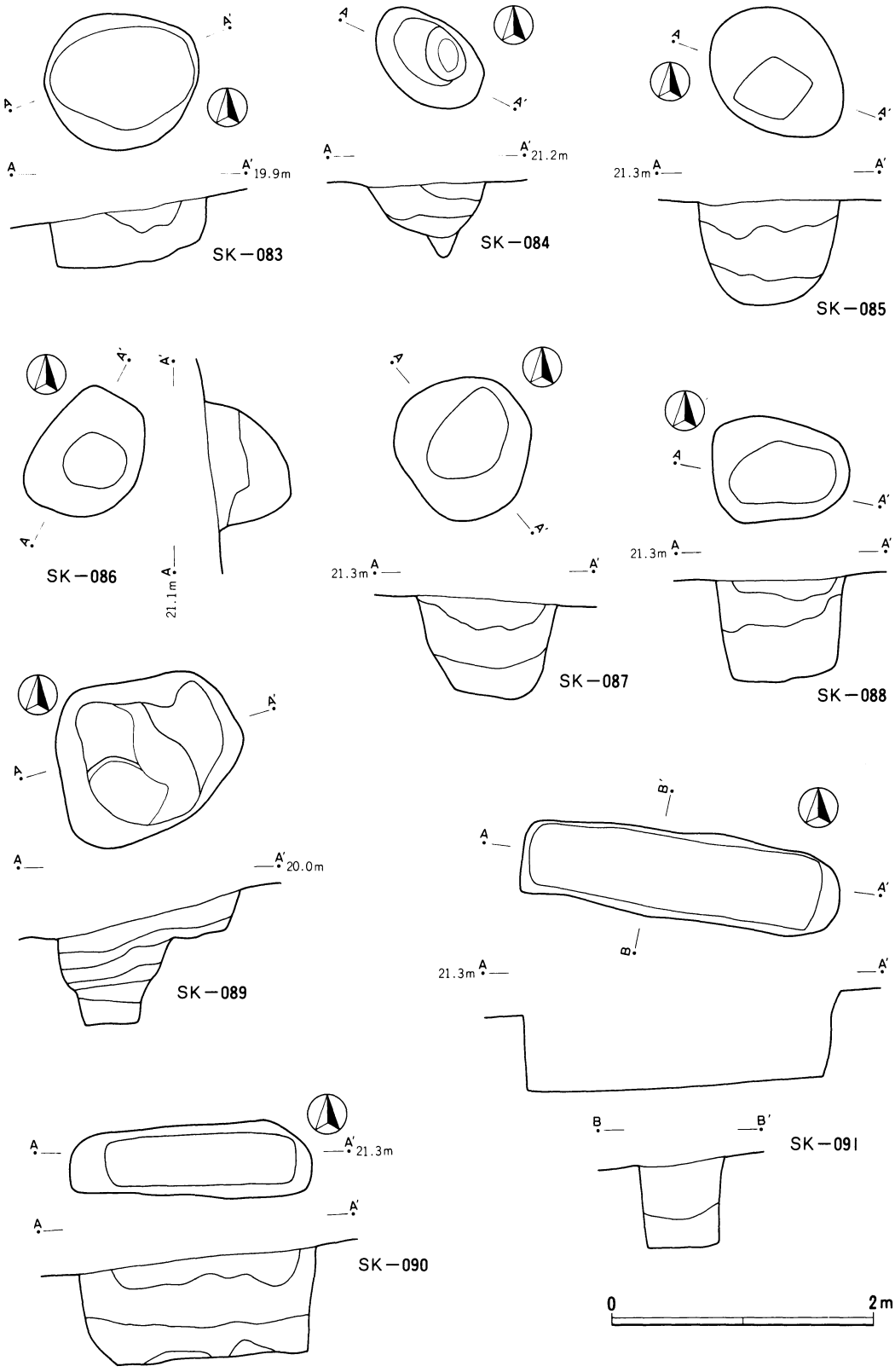
ＳＫ-088（第100図・図版35－８）　Ｌ24－12区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.04m、短軸長0.77mを測る。壁面の立ち上がりはかなり急斜で底面は比較的平坦。検出面からの深さは0.80m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-089（第100図）　Ｌ24－18区に位置する不整形の土坑。長軸長1.42m、短軸長1.15mを測る。東側に段を持つ形態で、西側が深く掘り込まれてさらに中に低い段を有する。検出面からの最深は1.03m、上段との比高差は0.66m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-090（第100図）　Ｌ24－13区に位置する長方形の土坑。長軸長1.85m、短軸長0.54mを測る。壁面はほぼ垂直に近く立ち上がり、底面は概ね平坦である。検出面からの深さは0.61～0.79m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-091（第100図・図版35－９）　Ｌ24－06区に位置する長方形の土坑。長軸長2.57m、短軸長0.64mを測る。壁面の立ち上がりはほぼ垂直、底面は平坦で、検出面からの深さは0.57～0.67m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-092（第101図・図版35－10）　Ｌ24－06区に位置する長方形の土坑。長軸長2.25m、短軸長0.71mを測る。やはり壁面の立ち上がりは垂直で、底面は平坦であった。検出面からの深



第100図　土坑４（1/50）

さは0.60～0.65m。ＳＫ-090～ＳＫ-092の３基はＳＫ-058～ＳＫ-060などと同様の性格のものであろうか。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-093（第101図）　Ｌ24－14区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長4.66m、短軸長2.66mを測る。壁面は底面近くでは垂直に立ち上がり途中で傾斜を変える。底面は「く」字形に屈曲している。検出面からの最深は1.50m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-094（第101図）　Ｌ24－06・Ｋ24－10区に位置する隅丸長方形の土坑。長軸長1.41m、短軸長0.87mを測る。底面は段状をなし、北側に幅の狭いテラスが検出された。壁面の立ち上がりは急斜である。検出面からの最深は1.00m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-095（第101図・図版36－１）　Ｌ24－06区に位置する隅丸長方形の土坑。長軸長0.94m、短軸長0.35mを測る。検出面からの深さは0.05～0.18m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-096（第102図）　Ｌ24－13区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.35m、短軸長0.73mを測る。底面には若干の凹凸があり、北東寄りに浅く窪む箇所がある。検出面からの深さは0.36m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-097（第102図）　Ｌ24－13区に位置する楕円形の土坑。長軸長0.88m、短軸長0.68mを測る。検出面からの最深は0.44m。覆土中から土師器片１点が出土した。

ＳＫ-098（第102図）　Ｌ24－14区に位置する楕円形の土坑。長軸長0.94m、短軸長0.84mを測る。検出面からの最深は0.38m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-099（第102図）　Ｌ24－14区に位置する隅丸長方形の土坑。長軸長1.19m、短軸長0.98mを測る。緩斜面に立地する関係からか底面も若干の傾斜を持つ。検出面からの深さは0.13～0.39m。遺物等は出土しなかった。

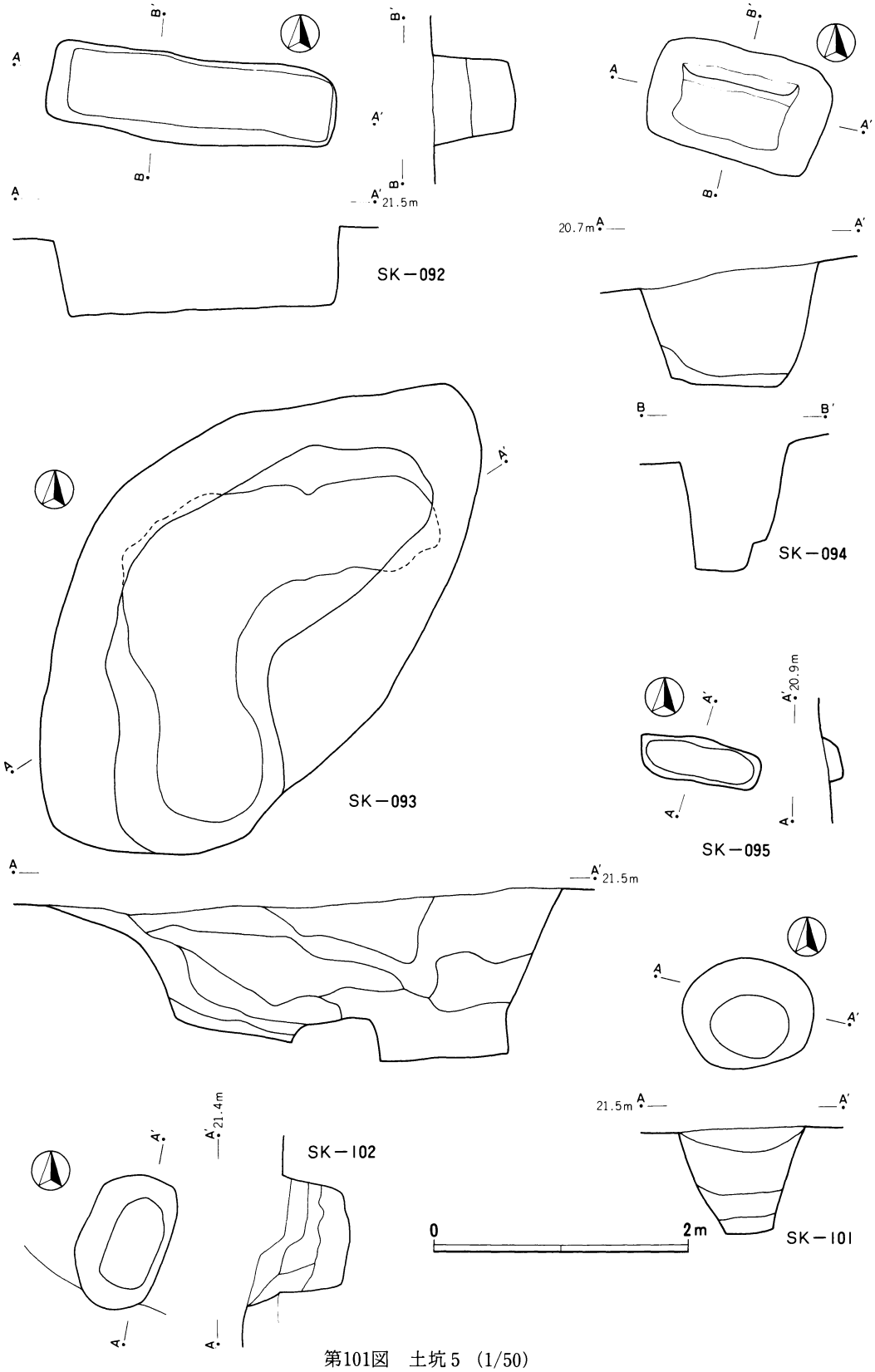
ＳＫ-100（第102図）　Ｌ24－19区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.10m、短軸長0.69mを測る。底面は凹凸を持った皿状で、南東端に底面から0.27mの深さを持つピットが穿たれている。検出面から底面までの深さは0.28m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-101（第101図）　Ｌ24－13区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.02m、短軸長0.86mを測る。掘り込み断面形は逆台形を呈し、平面規模に比して深い。検出面からの深さは0.70～0.82m。覆土中から土師器（甕）片９点が出土した。

ＳＫ-102（第101図）　Ｌ24－13区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.08m、短軸長0.67mを測る。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは急斜である。検出面からの深さは0.33～0.65m。覆土中から土師器坏１個体（第105図４）と甕１個体（第105図５）が出土した。

ＳＫ-103（第102図）　Ｌ24－13区に位置する不整形の土坑。長軸長1.30m、短軸長0.74mを測る。底面は段状をなし、２基の土坑の重複の可能性もあろうか。検出面からの深さは0.11～0.48m。覆土中から土師器片１点が出土している。

ＳＫ-104（第102図）　Ｌ24－13区に位置する。不整円形の土坑２基の連接とも考えられる。



第101図　土坑５（1/50）

全体の長軸長2.12m、短軸長1.38m。小径の土坑と大径の土坑の深さや壁面の傾斜は大差がない。検出面からの深さは0.40～0.54mを測る。覆土中から縄文土器片９点が出土している。

ＳＫ-105（第102図）　Ｌ24－13区に位置する長方形の土坑。長軸長1.44m、短軸長0.76mを測る。底面は二段の掘り込みを持ち、南東寄りにかなり深い部分がある。壁面の立ち上がりは急斜。検出面からの深さは0.54～0.91m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-106（第102図）　Ｌ24－12区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長0.88m、短軸長0.80mを測る。検出面からの深さは0.42m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-107（第102図）　Ｌ24－12区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長0.92m、短軸長0.90mを測る。椀状の掘り込みであるが、底面北寄りに小孔が認められた。検出面からの深さは0.37m、底面からの小孔の深さは0.74m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-108（第102図）　Ｌ24－11区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.87m、短軸長0.91mを測る。底面は若干の凹凸を持ち、また中央からやや東寄りに小孔が穿たれる。検出面からの深さは0.32m、底面からの小孔の深さは0.67m。覆土中から須恵器片１点が出土している。

ＳＫ-109（第103図）　Ｋ24－12区に位置する不整形の土坑。長軸長0.99m、短軸長0.80mを測る。掘り込み断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.64m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-110（第103図）　Ｋ24－10区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長1.10m、短軸長1.04mを測る。椀状の掘り込みで、検出面からの深さは0.58m。遺物等は出土しなかった。

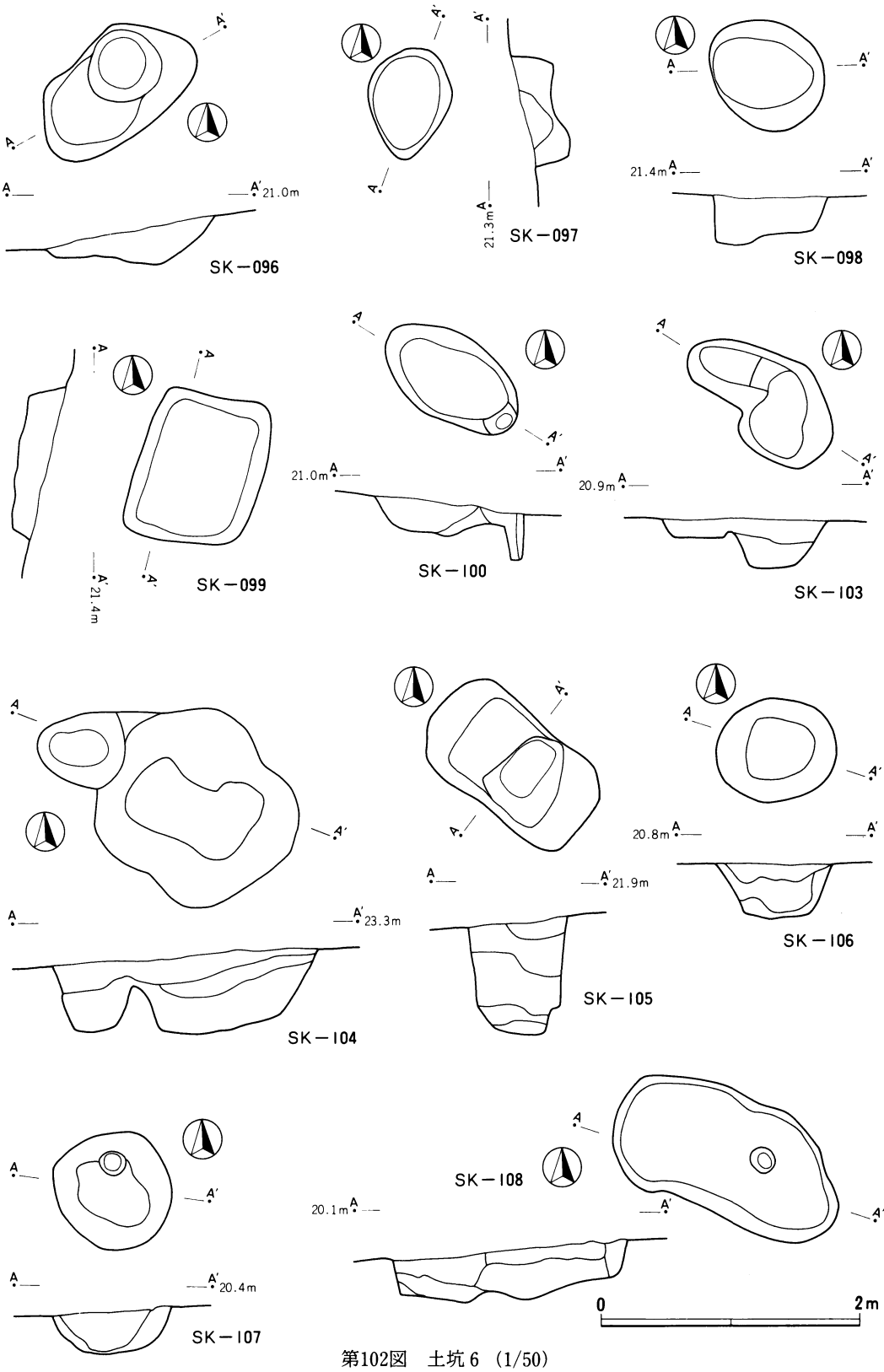
ＳＫ-111（第103図・図版36－２）　Ｌ24－08区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.26m、短軸長1.00mを測る。断面逆台形の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.64m。遺物として縄文土器片が出土している。

ＳＫ-112（第103図）　Ｌ24－12区に位置する楕円形の土坑。長軸長2.17m、短軸長1.37mを測る。皿状の掘り込みで、検出面からの深さは0.24m。覆土中から９世紀の土師器坏口縁部片２点、甕片１点が出土している。

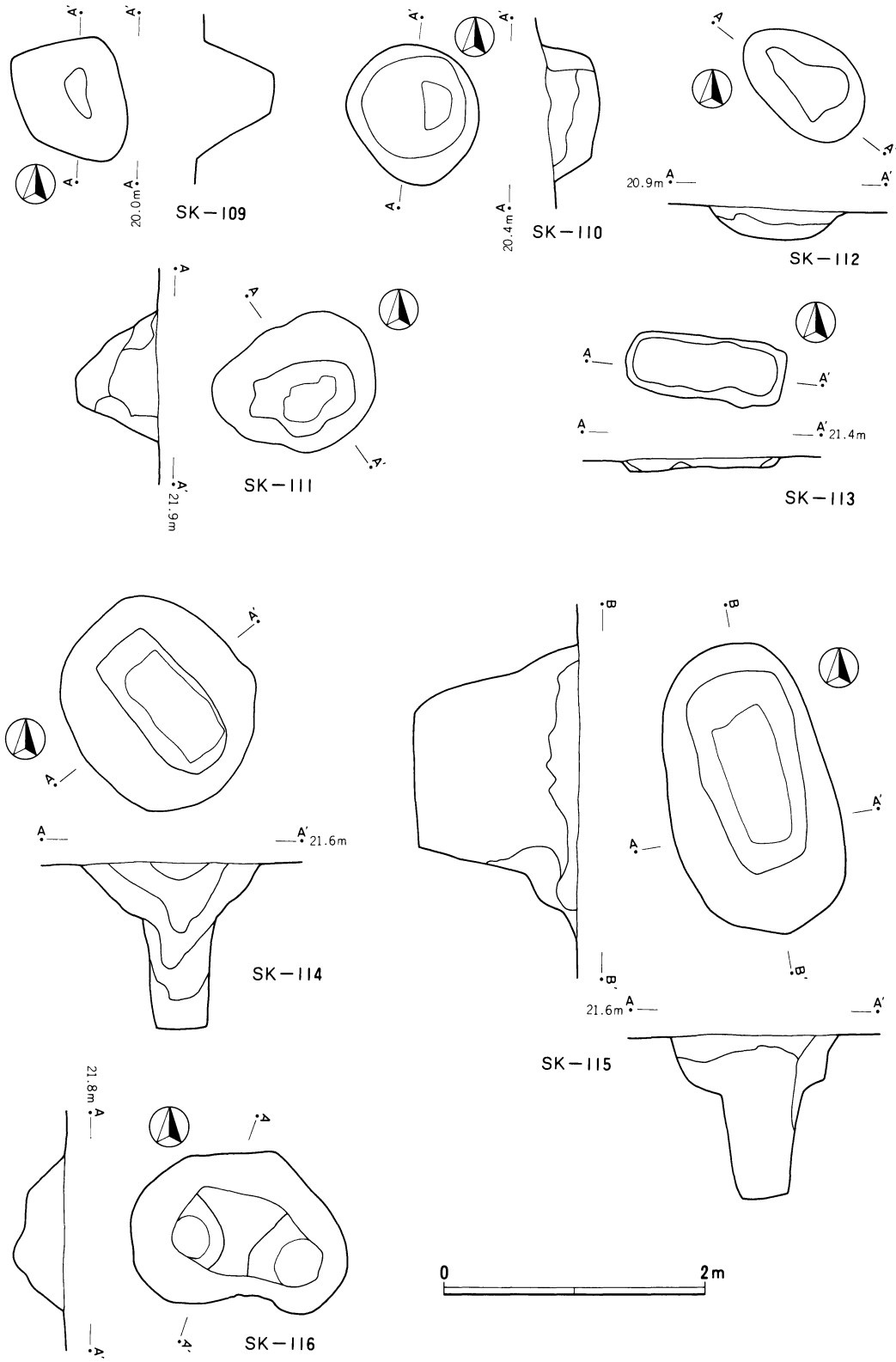
ＳＫ-113（第103図・図版36－３）　Ｌ24－06区に位置する長方形の土坑。長軸長2.43m、短軸長0.89mを測る。検出面からの深さは0.05～0.18m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-114（第103図・図版36－４）　Ｌ24－14区に位置する楕円形の陥穴状土坑。長軸長1.60m、短軸長1.37mを測る。上位は椀状の掘り方であるが、中位以下は長方形の掘り込みを持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で小孔等は検出されていない。検出面からの深さは1.18～1.28m。土器小片が少量出土している。

ＳＫ-115（第103図・図版36－５）　Ｌ24－01区に位置する楕円形の陥穴状土坑。長軸長2.23m、短軸長1.26mを測る。やはり上位は断面形椀状の掘り方を持つが、中位以下は長方形の掘り込みで、壁の立ち上がりは垂直に近い。底面は平坦で小孔等は認められない。検出面からの深さは1.24～1.29m。遺物等は出土しなかった。



第102図　土坑6 (1/50)



第103図　土坑７（1/50）

ＳＫ-116（第103図・図版36－６）　Ｌ24－12区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.69m、短軸長1.17mを測る。検出面からの深さは0.47m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-117（第104図・図版36－７）　Ｌ24－02区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.03m、短軸長0.78mを測る。検出面からの深さは0.40m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-118（第104図・図版36－８）　Ｌ23－23区に位置する隅丸長方形の土坑。長軸長2.01m、短軸長0.75mを測る。掘り込みは浅く、底面は平坦で、検出面からの深さは0.17～0.22m。遺物として土器片が少量出土している。

ＳＫ-119（第104図）　Ｌ23－17区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.23m、短軸長0.95mを測る。底面は平坦、検出面からの深さは0.21～0.30m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-120（第104図）　Ｌ23－12区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.17m、短軸長0.99mを測る。底面はごく小さく壁は直線的に傾斜し、検出面からの深さは0.58m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-121（第104図）　Ｌ23－13区に位置する不整円形の土坑。長軸長1.28m、短軸長1.24mを測る。ＳＫ-120ほどではないが底面は小さく、断面逆台形の掘り込みを持つ。検出面からの深さは0.65m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-122（第104図）　Ｌ23－13区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長1.02m、短軸長1.00mを測る。検出面からの深さは0.10～0.16m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-123（第104図）　Ｌ23－13区に位置するほぼ円形の土坑。長軸長0.79m、短軸長0.76mを測る。検出面からの深さは0.18～0.25m。覆土中から中世陶器片１点、他の土器片１点が出土している。

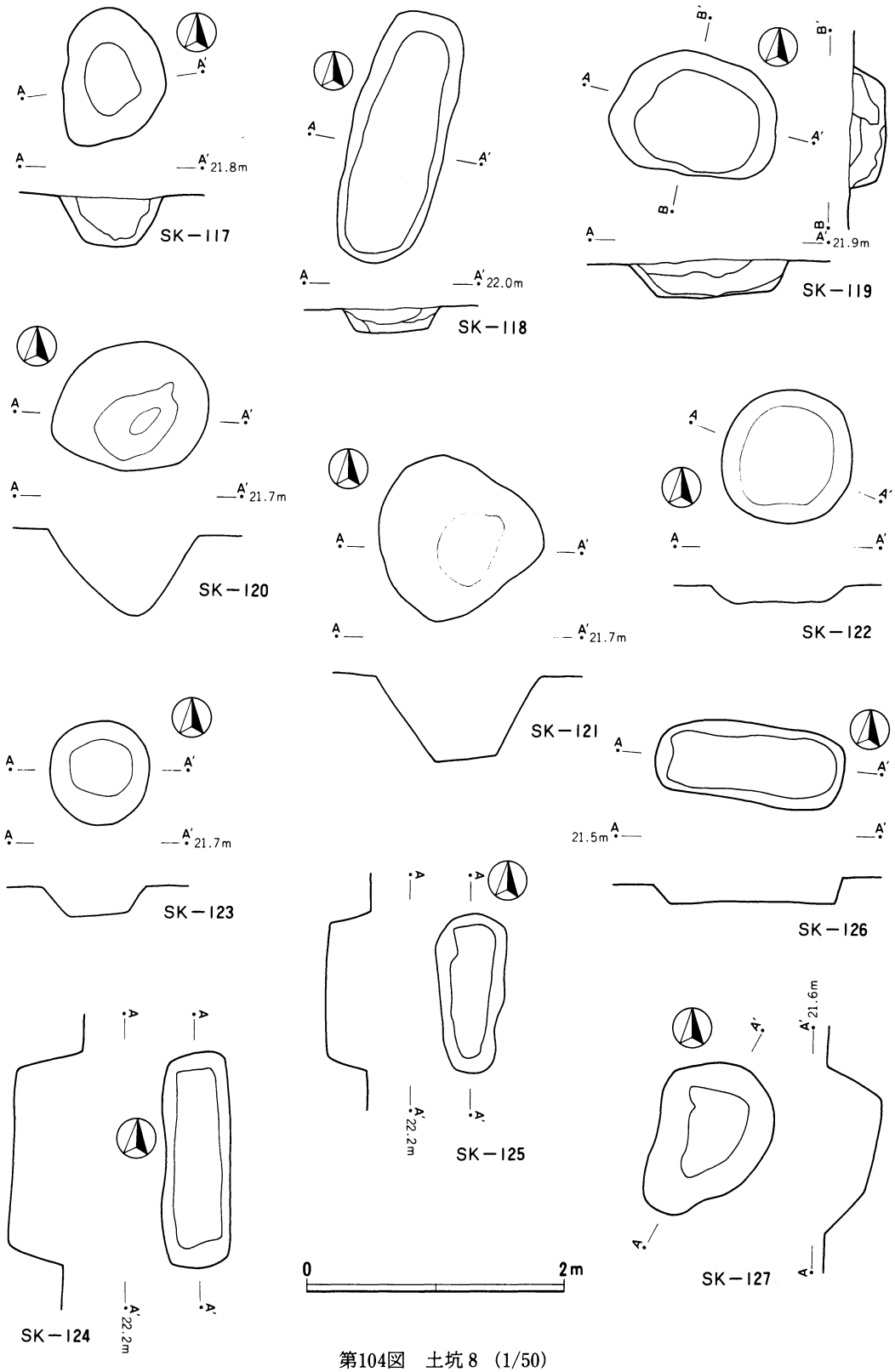
ＳＫ-124（第104図）　Ｌ24－09区に位置する長方形の土坑。長軸長1.63m、短軸長0.48mを測る。壁面の立ち上がりは急傾で、底面は平坦。検出面からの深さは0.42～0.57m。覆土中から少量の土器片が出土している。

ＳＫ-125（第104図）　Ｌ24－09区に位置する長方形の土坑。長軸長1.21m、短軸長0.51mを測る。ＳＫ-124に隣接し、形状も近似している。検出面からの深さは0.31～0.33m。この土坑からも少量の土器片が出土している。

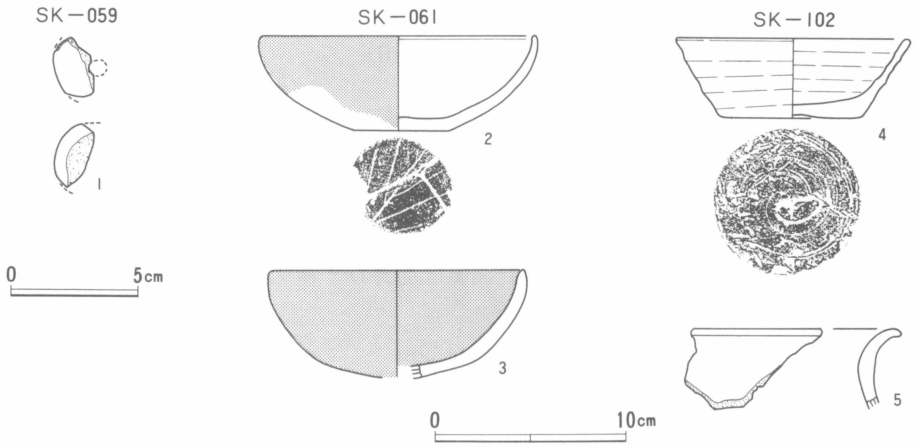
ＳＫ-126（第104図）　Ｌ24－08区に位置する隅丸楕円形の土坑。長軸長1.45m、短軸長0.59mを測る。検出面からの深さは0.13～0.20m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-127（第104図）　Ｌ23－17区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.28m、短軸長0.88mを測る。検出面からの深さは0.42m。遺物等は出土しなかった。

ＳＫ-128（第97図）　M24－01区に位置する楕円形の土坑。長軸長1.15m、短軸長0.90mを測る。断面逆台形の掘り込みを持ち、検出面からの深さは0.47～0.57m。底面の南寄りには20cm余りの深さを持つ浅い窪みがある。遺物等は出土しなかった。



第104図　土坑８（1/50）

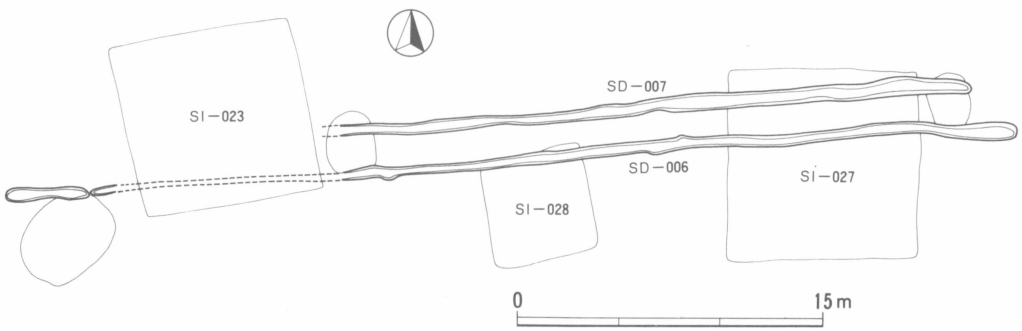


第105図　土坑出土遺物（1：1/3，2～5：1/4）

出土遺物（第105図・図版36－９）　１はＳＫ-059から出土した土玉片である。地蔵山遺跡では古墳時代、５～６世紀の竪穴建物跡から土玉が多く出土しており、当土坑内に混入した可能性もある。２、３はＳＫ-061出土の坏形土器である。いずれも浅い椀形を呈し、赤彩されている。２は平底で、木葉痕が残され、３は丸底。ＳＫ-061はこれらの遺物によって５世紀の所産である可能性がある。４、５はＳＫ-102から出土した土器である。４は坏で底部には篦切り痕が残されている。５は甕の口縁部破片である。

3　溝状遺構

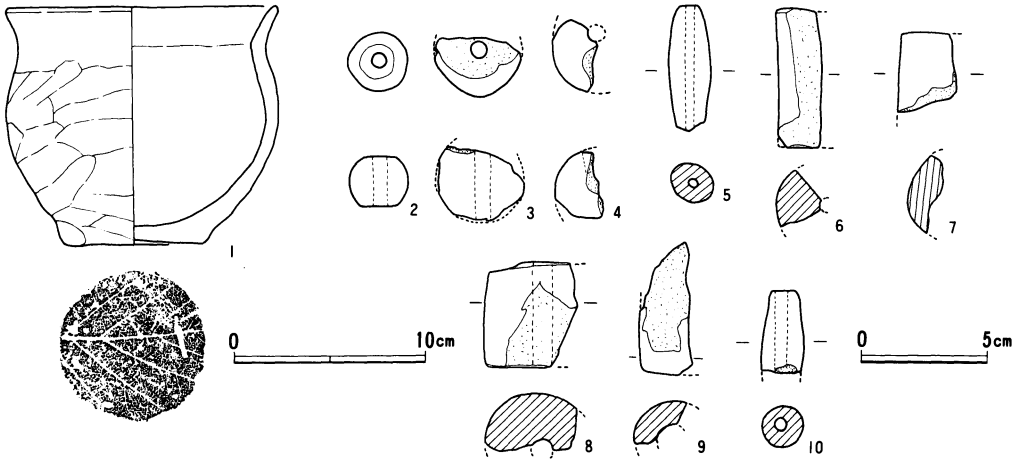
ＳＤ-006・ＳＤ-007（第106図）　Ｌ24－09区からM24－04にかけてほぼ東西に走る溝状遺構である。両者はほぼ1.5～２ｍの間隔を開けて並走し、本来同一の遺構と捉えるべき性格のものであろう。ＳＤ-006は幅0.4～0.8m、深さ３～12cm、ＳＤ-007は幅0.4～0.9m、深さは３～10cmときわめて浅く、底面は部分的に硬く締まっていた。また一部に宝永富士火山灰が堆積している。以上からこれらは幅およそ３ｍ程度の近世の道路遺構であり、両側の側溝部分が痕跡的に遺存したと考えるのが最も妥当であろう。



第106図　ＳＤ－006・ＳＤ－007

4　遺構外出土の遺物（第107図・図版36－10）

遺構外から出土した古墳時代以降の遺物のうち図化しえたものをここで報告しておく。1は小型の甕形土器で、M23－18区から出土したもの。底部には木葉痕が残る。すぐ南側のM23－23区には7世紀の竪穴建物跡ＳＩ-021があるが、それと関係するかどうかは不明。2～4は土玉、5～10は管状の土錘である。それらの計測値は別表のとおり。



第107図　遺構外出土遺物（1：1/4，2～10：1/3）

第11表　土坑出土及び遺構外出土玉類・土錘計測表

挿図番号	遺物番号	器種	最大径 mm	最大厚 mm	孔径 mm	重量 g	挿図番号	遺物番号	器種	最大径 mm	最大厚 mm	孔径 mm	重量 g
ＳＫ－059（第105図）							5	L23-20-38	土錘	14.8	—	3.8	9.86
1	024-1	土玉	—	—	—	5.75	6	L24-07-282	土錘	—	51.5	—	20.67
遺構外出土（第107図）							7	L24-07-23	土錘	—	—	—	14.32
2	M24-08-2	土玉	22.2	18.8	6.5	9.84	8	L24-07-138	土錘	—	49.1	—	36.51
3	L23-22-290	土玉	—	—	5.5	15.21	9	L23-14-1	土錘	—	—	—	10.03
4	L23-23-361	土玉	—	—	—	5.61	10	L23-14-35	土錘	—	—	4.6	6.76

Ⅷ 補　　論

1　鵜ガ島台式土器から茅山下層式土器へ

多数の炉穴群を伴う当遺跡遺物包含層から出土した縄文時代早期条痕文系土器は、千葉県でも有数の充実した土器群であると言えよう。Ⅳ章ではそれらの評価についてほとんど触れなかったが、鵜ガ島台式土器の最も新しい段階から茅山下層式土器への移行期を中心とすると思われる土器群であり、該期土器群の編年研究に寄与することは言うまでもあるまい。ただ当遺跡出土土器群が、どの程度の時間幅を持ち、そして細分が可能な資料であるのか、また移行期であるがゆえに鵜ガ島台式土器と茅山下層式土器の要素を混在させるのかについては検討が必要である。ここでその問題について不充分ながら考えてみたい。

今日の条痕文系土器群の編年が確定される経緯を略記すれば次のごとくであろう。かつての茅山式土器（今日でも条痕文系土器群の前半期を広義の茅山式土器と呼ぶことがある）は、横浜市野島貝塚[1]、横須賀市茅山貝塚[2]の調査を経て、とりわけ茅山貝塚における層位的事実によってまず野島式土器、茅山下層式土器、茅山上層式土器が設定された。野島式土器は茅山貝塚X層から、茅山下層式土器はⅥ～Ⅸ層から、茅山上層式土器はⅢ層を主体に出土し、これらの編年序列は明確となった。また同時に茅山貝塚の土器と鵜ガ島台遺跡[3]出土土器の対比から、野島式土器と茅山下層式土器の間を埋めるものとして鵜ガ島台式土器が提唱されている。この鵜ガ島台式土器の設定は、茅山貝塚に存在しない土器が鵜ガ島台遺跡で主体を占めるという言わば「遺跡の引き算」と「器形の上で茅山下層式との、文様の上で野島式との系統的な関連を示している」との理解に依っている。勿論鵜ガ島台式土器を含めた4型式の序列は、全く疑うことはできないものであるが、「鵜ガ島台式を出す遺跡で良好な層位のものはなく…(中略)…遺跡における型式のつながりを見ていっても諸型式が連綿と存在しており…(後略)」[4]、前後型式を含めた編年細分研究にとっては障害となっている。それゆえに今日の該期土器の研究は専ら型式学的手続きに依って行われている。型式学的操作は、考古学において重要な方法の一つであるが、それだけでは編年序列が検証されたことにはならないし、現実の土器群の変遷はそれほど整然としたものではないこともありうる。

こういった状況の下では、これまであまり検討の方法となってこなかった一括性のある資料の対比が重要であろう。幸い当遺跡においても炉穴跡に集中分布した土器がややまとまっており、また近年、他の時期と同様に該期の遺跡の報告例も増加していて、それらの中に良好な一括資料が認められている。また特に遺構一括資料でなくとも、短時の占地によって形成されたと思われる遺物包含層の資料もそれに加えられてよいであろう。ここではまず、そのような一括性が認められる資料を検討してみたい。

地蔵山遺跡炉穴跡出土資料　第108図及び第109図に当遺跡炉穴跡出土の土器群を集成した。これらのうち、有文の土器を出土した遺構について概観すれば次のごとくである。

ＳＫ-027を中心に出土したのはＡ－１・２類の土器である。30が大破片で、９とともに当遺構にのみ分布した個体。さらにＳＫ-036に集中的に分布した１が１片存在した。

ＳＫ－030～032には非常に多数の個体が集中したが、これは前述のように石器や礫などとともに遺構廃絶後の窪みに集中廃棄されたものと考えられる。出土土器はバラエティーに富み、Ｂ－１類である68、Ｂ－２類である84、Ｂ－５類が103、104など、Ｃ－１類として160、Ｃ－３類として190、195など、Ｄ類として265などとなっている。

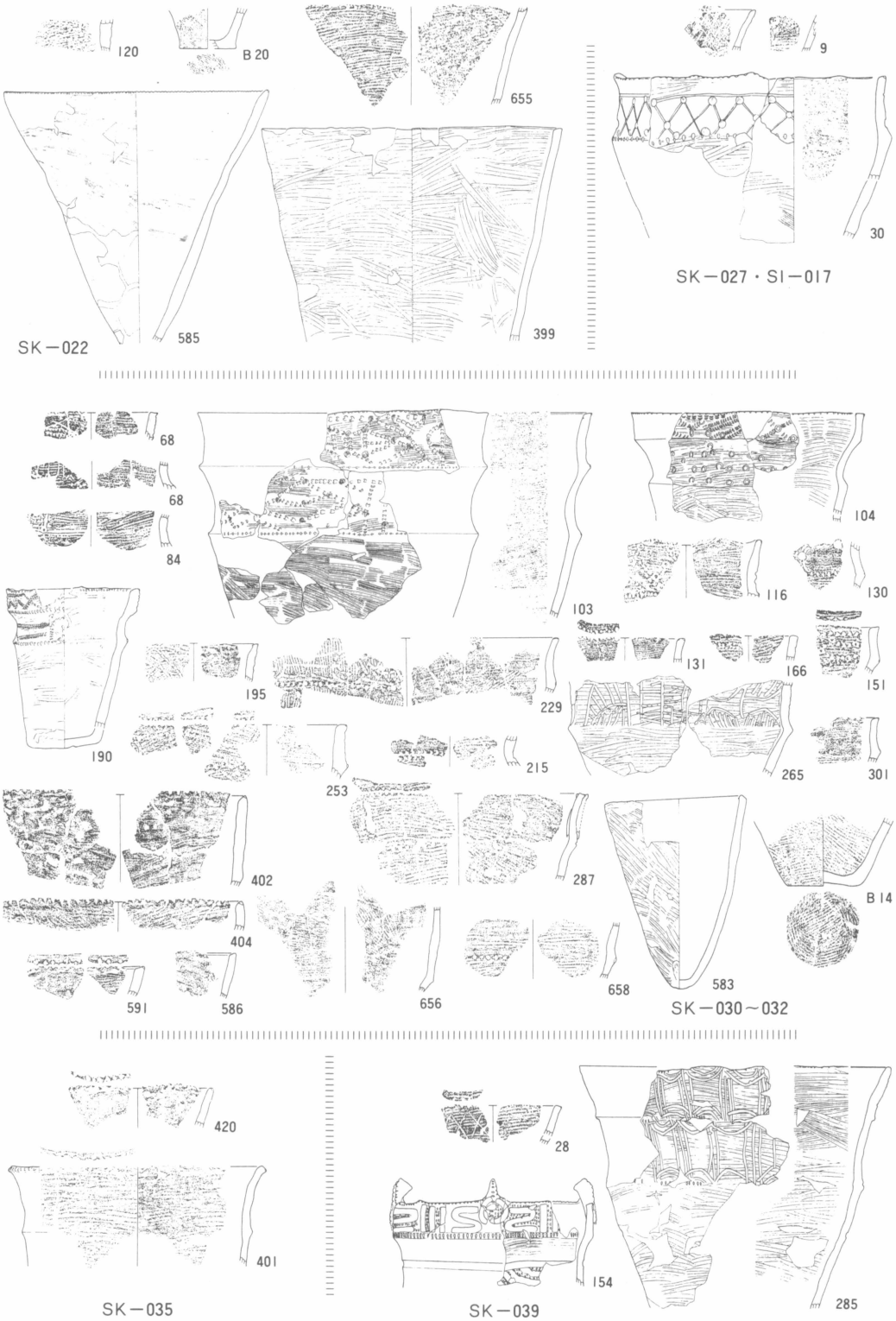
ＳＫ-036Ａにも比較的多くの個体が集中したが、まとまった破片が多い。またここには土器以外の遺物が分布しておらず、おそらくＳＫ－030～032の遺物集中とは異なった過程で残された土器群であろう。ここでも文様のバラエティーがあり、Ａ－１類の１、Ｂ－２類の88、Ｃ－３類の189、192、251、Ｄ類の269などが出土している。なおＢ－５類の152が036Ｄから、前記の集中とはやや離れて出土している。

ＳＫ-039ではＡ－１類の28、Ｃ－１類の154、Ｄ類の285が出土しており、ＳＫ-040ではＡ－２類の29、Ｂ-５類の122が出土している。斜格子文を施す土器は炉穴跡から多く出土し、あるいは特定の機能を示唆する可能性も考えられるかもしれない。

ＳＫ-047ではその中央付近と南東端付近の２か所に遺物集中が見られた。中央付近では７、22などＡ－１類(272も斜格子文を持つ可能性がある）が出土し、南東端付近ではＣ－３類である191と繊細な貝殻条痕を持つ400、582、584が出土している。

これらの資料群それぞれの一括性は、短時のうちに投棄または遺棄されたと思われる出土状況からみて大きな異論はあるまい。したがってここではそれぞれの炉穴跡出土土器群の同時性を前提として論を進める。まず多数の個体が存在するＳＫ-030～032、ＳＫ-036Ａ出土土器群について検討する。

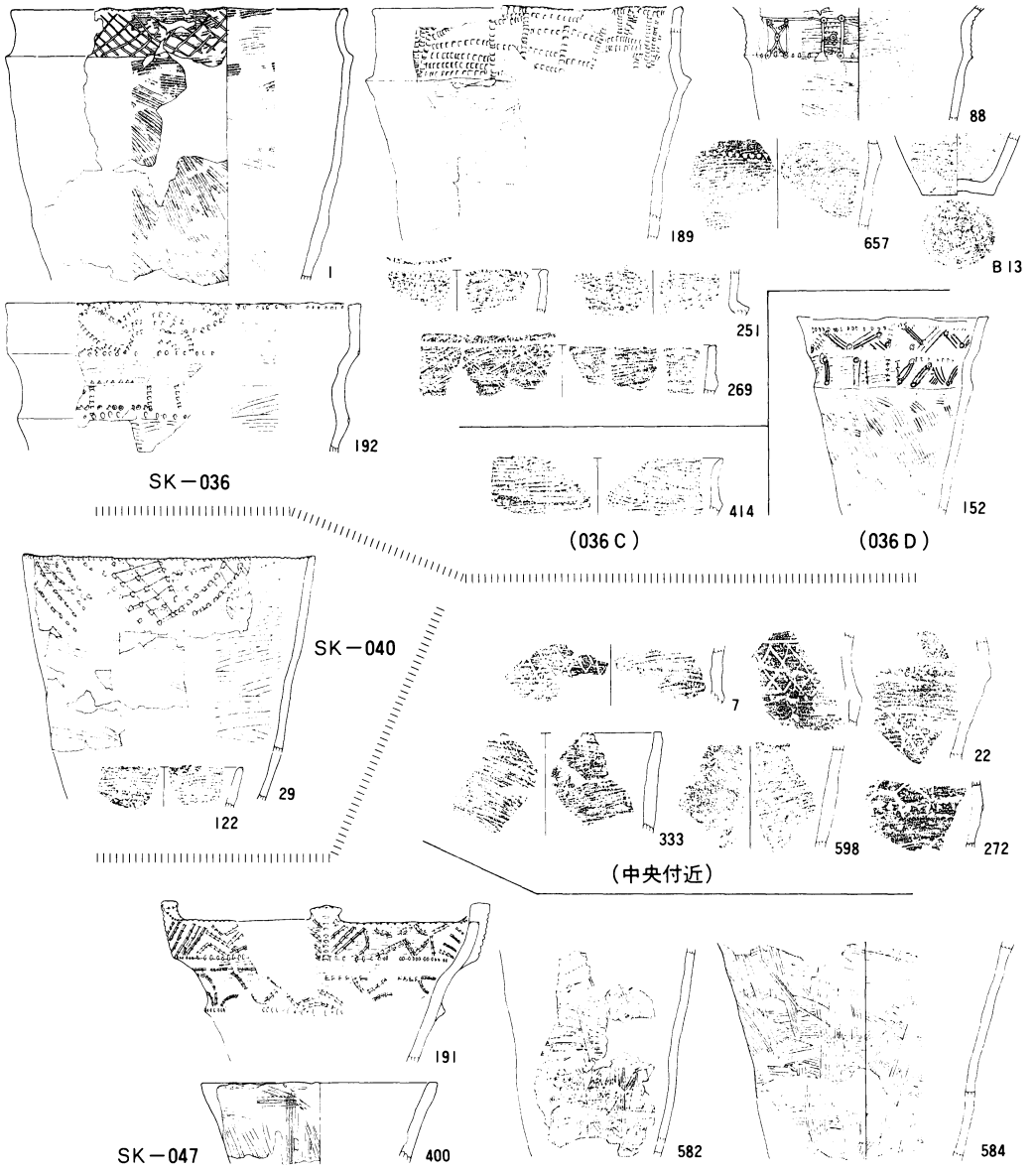
ＳＫ－030～032から出土した土器のうち68は鵜ガ島台式土器の典型的な区画文様を持っていると言えそうである。しかしそれは小片で全体の文様構成は充分明らかにされない。鵜ガ島台式土器のメルクマールの一つである円形文を持つ土器が数個体あるが、うち84は縦位の区画文のみが窺え、103、104、116、131などは連続刺突と円形文の組み合わせで、構図を含めて鵜ガ島台式土器の施文原則がかなり崩れ、茅山下層式土器に繋がる要素を色濃くしたものと言えるであろう。円形文を持たない190、195などは前記のような土器から円形文が除かれただけと見ることができる。190について言えば、単体で出土した場合には茅山下層式土器に比定されるものであろうが、現実には鵜ガ島台式土器の特徴を残した土器と共存するのが実態ではないか。265も重要な土器であるが、これについては後述する。器形については、典型的な鵜ガ島台式土器に比して全体に屈曲が緩やかになる傾向を持ち、それとの関連で口縁部の文様帯と頸部の文



第108図　炉穴跡出土土器集成１（1/8）

様帯との間の無文部分が明瞭でなくなっている。一方ＳＫ-036Ａから出土した土器群でもＳＫ－030～032に類似した様相が窺われる。ここでは88が84と、192が103とほぼ同種の土器と考えることができる。192は円形文を持たないため103とは別分類になっているが、円形文の有無を度外視すればその差はきわめて小さい。ＳＫ-036Ａには１（あるいは269も含めて）のような斜格子文を持つ土器が存在する。斜格子文を施す土器は鵜ガ島台～茅山下層式土器を通じて存在するが、当遺跡では炉穴跡に目立つ傾向があり、文様を持たずに条痕だけを施された土器とともに、炉穴において使用されるべき機能を持つ器種の可能性もあろう。ＳＫ－030～032で斜格子文を持つ土器が出土しなかったのは、遺物集中の形成過程が異なったからかもしれない。またＣ－３類に分類された189、251は器形の上では１に類似しており、文様こそ違えども同種の土器であった可能性も想定される。先に触れた器形と文様帯区分の関係では、88、192からすれば文様帯間の無文帯が明確で古い要素と言えないことはない。しかし総合的に見た場合、ＳＫ－030～032とＳＫ-036Ａ両者の出土土器は（あるいはＳＫ-036Ｄから出土した152も含めて）同時期に位置付けられると言え、鵜ガ島台式土器最末期から茅山下層式土器への過渡的な様相が表出されていると言うべきであろう。

他に注目すべき土器群として、ＳＫ-039出土土器とＳＫ-047出土土器がある。ＳＫ-039から出土した４個体のうち特徴的な３個体を図示したが、285はＳＫ-039の北に接して分布した286とともに弱い２段の屈曲を有する器形を呈し、半截竹管を直立気味にして引いた幅広の沈線で文様を描くもので、上位の文様帯と下位の文様帯の間に間隔をおかないところに特徴がある。この器形、文様帯区分、沈線施文技法の特徴は広島県帝釈観音堂洞穴[5]出土の土器に近似しているようである。その帝釈観音堂洞穴出土土器の文様モチーフ－縦位の沈線と「Ｓ」字状沈線を交互に描く－は実に154に共通し、茅山貝塚出土土器にも存在する。勿論当遺跡との間の直接的な関連を論ずるものではないが、疑いなく茅山下層式土器に位置付けられてきたものである。当遺跡では285に類似する土器は、前述のＳＫ-030～032出土の265がある。この265は、明断できる性格の問題ではないが、沈線施文具や条痕原体において285、286とは同一製作者を考定したくなるほど似ており、文様モチーフでも縦位に垂下する沈線と上下からの弧線を基本としている点で285と共通する。そうするとこれを含むＳＫ-039出土土器もまた、鵜ガ島台～茅山下層式土器への過渡期、降ったとしても時間差は小さいものである可能性は充分である。154に見られる文様モチーフは、関野哲夫によれば後出的と考えられているようである[6]が、この個体は沈線間を刺突充塡で埋め尽くしており、古い段階に位置付けても矛盾はあるまい。他方ＳＫ-047出土土器は、中央付近から出土したものと南東端付近から出土したものを分けて捉える必要があろうかと思われるが、南東端出土のうちの191は茨城県石岡市三村地蔵久保貝塚出土土器（特に№18）[7]との類似性が指摘されよう。この個体の器形は２段の屈曲を持つが、下位のそれは突帯を貼付けたもので、後出的と言うことができる。またこれに伴った400、582、584は繊細な条

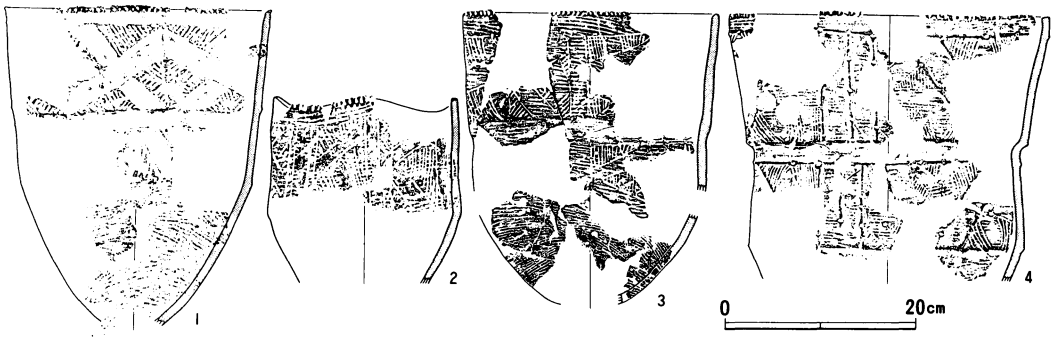


第109図　炉穴跡出土土器集成２（1/8）

痕を施す特徴的なもので、これまで見た資料群とは若干時期がずれるかも知れない。

鵜ガ島台式土器の変遷　さて地蔵山遺跡から出土した一括性のある土器群は、鵜ガ島台式土器から茅山下層式土器の流れの中でどのような位置を占めるのか。ここで少し視野を広げて鵜ガ島台式土器の変遷を考えてみたい。

鵜ガ島台式土器の細分を論じた主要な研究として関野哲夫[8]、佐々木克典[9]、野口行雄[10]の考察が挙げられる。それらはいずれも型式学的分析を主眼としている点で共通する。とくに関野の研究は文様の系統性とその展開及び文様帯区分と器形の変化を詳細に追及して鵜ガ島台式土器を古、中、新の三段階に細分したもので、今日に至ってなおこれを超える、あるいは否定する見

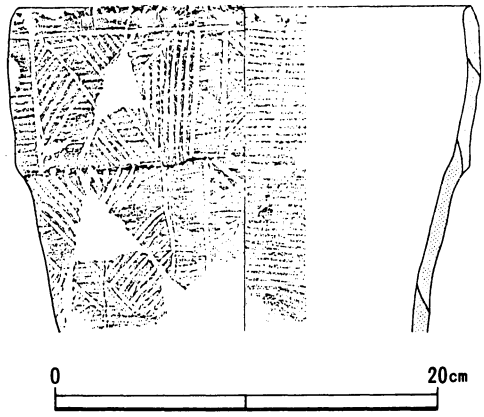


第110図　芝山町新東京国際空港No.7遺跡出土土器

解がないところからしても、鵜ガ島台式土器研究の現在の到達点を示すものと評価されよう。しかしまた前述の三者に共通して言えることであるが、型式学的操作が緻密になるほどに土器（群）の持つ諸要素が分解されて論じられ、ある時期、ある地域における土器群総体の把握への姿勢が希薄であるように思われる。三者の見解は、細部はともかくとして大枠においては関野の論考が基礎となっていて大きな相違点は見られず、全体の流れとしては概ね首肯しうるものであるが、土器群へのアプローチの方法としては、一括性が認定される資料あるいは遺物包含層でも顕著な集中分布を示す資料などの対比を第一義的に行うべきで、型式学的分析はそれを補助する目的に用いるべきであろう。

まず鵜ガ島台式土器の古い段階の基準資料として挙げたいのは芝山町新東京国際空港No.7遺跡出土土器[11]である。ここでは第3群第2類土器（野島式土器とされる）、第3類土器（鵜ガ島台式土器）、第5類土器（条痕だけが施される土器）が3D00グリッド周辺から東方にかけて－炉穴群に囲まれた中央の遺構空白域－出土し、狭い範囲で集中分布している。第110図にある程度器形が復原された有文の土器4個体を掲げた。1については報告者である西川博孝は野島式土器とする。しかしこの土器は本来の野島式土器と比較した場合、文様帯が2帯あり、さらに上位の文様帯（関野に準拠してⅠ帯と呼ぶ）と下位の文様帯（同様にⅡ帯と呼ぶ）が無文帯（口縁部のⅠa帯に倣うならばⅡa帯とも呼称できるか）を挟んで完全に独立している。文様は野島式土器に存在する襷状の区画の原形に近いが、文様帯区分と不可分の関係を持つ器形については、弱いながら2段の屈曲を有する。2と3は鵜ガ島台式土器とされたものであるが、文様帯区分及び器形における1と3の酷似性は明確である。おそらくいずれも尖底であろう。4は区画の交点に円形文が配される典型的な鵜ガ島台式土器であるが、Ⅱa帯の屈曲はより明瞭であるものの、その度合いは小さい。粗製土器は体部に屈曲を持たず、やはり尖底を呈するようで、口縁端部の刻目も野島式土器のそれに近い。空港No.7遺跡出土土器は、報文中の第3類6、9の2個体を除いて上記のような例によって構成され、野島式土器の様相を色濃く残したものを含むと言える。分布の集中性から見ても、それらはあまり長い時間幅を持つとは思われない。

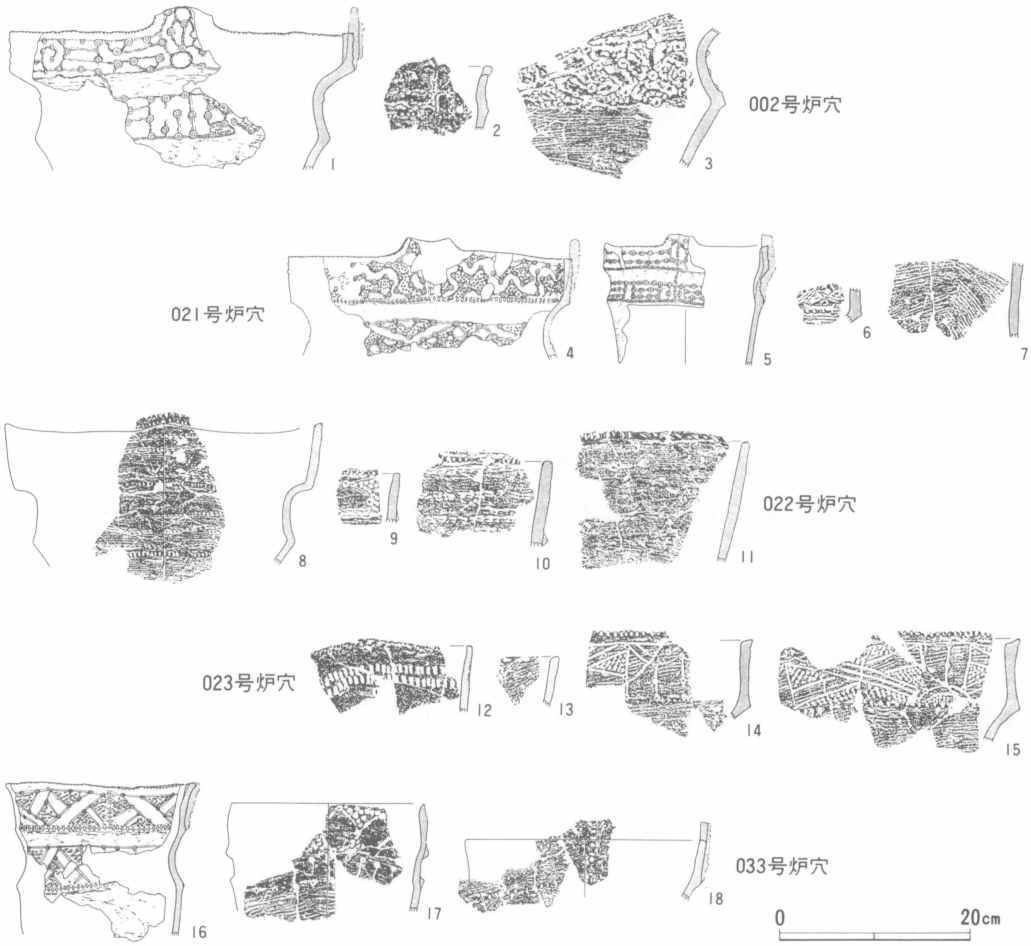
遺物包含層の集中分布の一括性の認定は確かに危険であるが、これらを型式学的所見にしたがって無理に分離することはより危険であろう。また空港No.7遺跡の様相に移行期の実態が集約されている可能性もあろう。しばしば引用される空港No.14遺跡の土器[12]（第111図）も同時期ではないかと思われる。なお量的には零細であるが、市原市東間部多遺跡079（炉穴跡）出土土器[13]はこの段階の一括資料である。



第111図　空港No.14遺跡出土土器

次に鵜ガ島台式土器の新しい段階の基準資料として佐原市大稲塚遺跡出土土器[14]を挙げたい。ここでは炉穴跡から一括出土した資料が豊富で、代表的なものを第112図に掲げた。まずそれらのうち002号炉穴と021号炉穴の出土土器を見よう。両者に含まれる大型の土器、1、3、4は無文帯部分のくびれが大きく、文様帯の幅が狭くなっているために全体に上下に圧縮されたような器形を呈している。文様は、それが襷状区画に淵源を求めうるものだとしても相当に崩れたものになるか基本的に縦横の区画線に単純化される。小径の5では逆にくびれは弱くなっているが、文様帯の狭化では一致する。022号炉穴では連続刺突によって文様が構成される8、10が目立った存在である。8の器形は1や4に共通するものと言える。023号炉穴と033号炉穴出土土器には14・15（同一個体）や16といった襷状区画文様が見られる。とくに16については佐々木克典によって鵜ガ島台式土器第一段階に置かれた文様そのものである。しかし共伴した17の器形を見ると屈曲が形骸化して突帯貼付けになり、I帯とII帯が接近して無文帯が消失している。さらに18が伴っているとすればとても鵜ガ島台式土器の前半には位置付けられまい。また包含層出土の土器もこれらと同じ内容を有している。全体として沈線による文様には襷状の区画を残し、細隆起線による文様は自由なものとなる傾向があり、さらに連続刺突（列点）が重要な文様要素として加わる。区画内の充塡文様はすべて刺突である。刺突充塡は野島式土器にもあり、関野哲夫によって鵜ガ島台式直前とされた埼玉県稲荷前5号塚マウンドF内出土例にも見られ、鵜ガ島台期を通じて存在し続けるのであろうが、鵜ガ島台式土器の古い段階のものが沈線充塡を圧倒的に多用することから刺突充塡の多用は当然新しい要素と考えうる。これら大稲塚遺跡出土土器の中に時間差がないとは言い切れないが、総体的に鵜ガ島台式土器の新しい部分を代表するものと捉えて間違いあるまい。

上記二つの段階の間を埋めるのが、神奈川県三浦市鵜ガ島台遺跡や茨城県潮来町狭間貝塚[15]などに多く認められる典型的な鵜ガ島台式土器であろう。千葉県内では成田市空港No.14遺跡[16]に豊富な資料がある。しかしながら多くの遺跡で出土しているものはかなり時間差を含んだ資料であり、現在のところ良好な基準資料は提示できそうにない。例えば空港No.14遺跡は空港No.7遺



第112図　佐原市大稲塚遺跡出土土器

跡と同様の内容を持つ土器（概ね報告者による分類の第２群II類に相当、III類の一部も含まれる可能性はある）が存在し、さらに大稲塚遺跡に共通する内容の土器（概ね第２群IV類に相当）も豊富であった。付言すれば空港№14遺跡は№７遺跡と小支谷を介して指呼の間にあり同一集団の領域内での移動の結果形成された遺跡群であるのは疑いない。いずれにしてもこの段階は、器形のうえでは底部の平底化の進行、Ｉ帯直下の屈曲の強まり、粗製土器においても屈曲を持った器形の採用など、文様の上では襷状区画文様の展開と殆どの土器における区画線交点への竹管状工具による円形文の付加、そして弧線の広範な採用が見られたはずである。おそらくこの段階は野口も述べているように時間幅も大きく、前後半に分けられる可能性は濃厚であろう。なお最新の調査資料では当文化財センターによって調査された沼南町石揚遺跡でこの段階の後半かと思われる良好な土器群が出土している[17]。石揚遺跡においては、建物跡、炉穴跡出土の有文の土器は襷状の区画文様を主体とするが、充塡文様は刺突が殆どであり、また連続刺突に近い竹管押引による区画線も認められる。しかし空港№14遺跡III類土器のように沈線を充塡する

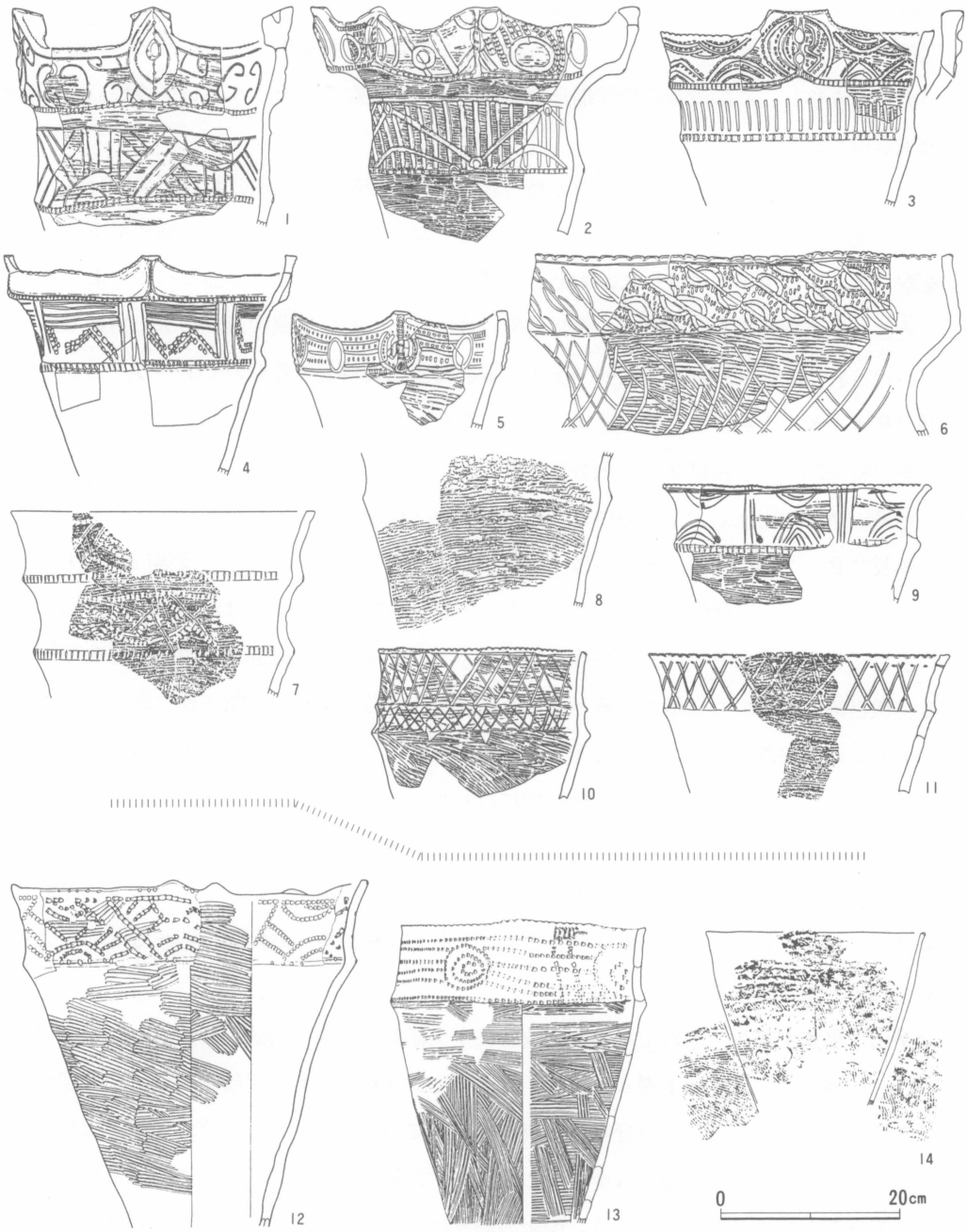
土器を多く含む例もあり、また石揚遺跡でも包含層出土の土器には沈線充塡が施されるものも比較的多く認められる。おそらく充塡文様は同じ竹管状工具を用いながらも沈線→押引→刺突の流れで漸移し、この段階の時間幅を示す指標の一つとなるであろう。石揚遺跡の調査成果の公表が待たれる。

以上述べたような内容により、鵜ガ島台式土器は古段階、中段階、新段階に区分される。図らずも関野や野口、佐々木等の見解に近い区分となるが、しかし一部の文様要素や特定の個体を取り出しては編年的位置付けの判断が困難であることは強調されて然るべきであろう。

そして鵜ガ島台式土器新段階の後に位置付けられるのが、地蔵山遺跡出土土器群であり、とりわけＳＫ－030～032及びＳＫ-036出土土器群は基準資料となるものであろう。これらを移行期の意味を含めた鵜ガ島台式土器最新段階と措定したい。そうすると鵜ガ島台式土器は都合４段階（将来的には５段階？）に細分されることになる。

地蔵山遺跡で出土した土器の中にも襷状の区画文様を持つ土器が少量ながら存在した。Ｂ－１類及びＢ－３類である。それらは一部を除いて土器の分布域の中でも遺構内や集中分布を示す部分にはなく、共伴関係は不明であった。とりわけ問題となるのは沈線または押引充塡を用いる47、48、49であろう。ある程度器形が復原された48は、口縁部がやや内傾気味で径に対する文様帯幅も大きいなど他の土器とはかなり異なった特徴を有し、明らかに同一時期の所産ではあるまい。野島式土器の出土などでも判るように、ごく短期またはごく小規模な占地は当遺跡の主体を占める時期の前後にも断続的に行われたと判断される。出土土器群全体を概観した場合には、一見文様が多様に見えるが、区画文様の施文方法（沈線、押引・連続刺突）や竹管または貝殻等による円形文の有無を捨象したならかなり単純化されることは言うまでもなく、総体的には前記炉穴跡出土の基準資料を中心とした比較的短い時間幅に収まるものが大勢を占めていると想定される。

茅山下層式土器へ　それでは地蔵山遺跡出土土器群と茅山下層式土器はいかなる関係にあるのか。意外なことに茅山下層式土器は、野島式土器や鵜ガ島台式土器より以上に実態が不鮮明である。その原因はやはり良好な基準資料の欠如であると言えるだろう。現時点においてもなお茅山貝塚出土資料の重要性は全く変わらない。近年の茅山下層式土器の研究としては関野哲夫[18]、阿部芳郎[19]の論考が挙げられる。関野の論考は、前述の鵜ガ島台式土器の細分を論じたそれと一連のものと言える。ただ関野の力点は茅山下層式土器の後半から茅山上層式土器に至るまでの編年にあり、それについては興味深い点があるが、前半とくに古段階については、あまり良好な資料を背景としないがゆえに型式学的操作の論証が弱く、疑問点もある。一方阿部の論考は、佐倉市山崎貝塚出土資料を検討して、器形、文様帯区分の変化の型式学的分析から茅山下層式土器の細分を論じている。傾聴すべき論旨であると言える。しかしやはり良好な一括資料の欠如から論証が不充分な点がある。では茅山下層式土器の最も古い段階の土器を含むと思



第113図　佐倉市山崎貝塚（1～11）・我孫子市柴崎遺跡（12～14）出土土器

われる資料にはどういうものがあるのか。まず千葉県内では阿部が用いた山崎貝塚、そして同じ佐倉市の上座貝塚[20]、我孫子市柴崎遺跡[21]、茨城県では石岡市三村地蔵久保貝塚出土土器[22]などが挙げられようか。

山崎貝塚出土土器は古い調査資料であるためもあって記録が残っておらず、したがって出土状況等は不明である。土器は鵜ガ島台式土器（その新しい部分で、量は少ない）と茅山下層式

土器があってある程度の期間の継続的な遺跡であると思われる。第113図の上段にある程度器形が復原された個体を掲げた。1は阿部によって茅山下層式土器古段階とされた土器で、器形が鵜ガ島台式土器にきわめて近く、またII帯（文様帯の呼称は前述の関野に従う）は隆起線により構成される襷状区画文様で半円形の弧線を伴う。このような土器は他遺跡の茅山下層式土器には例がなく、判断は難しい。他の土器との共伴関係は不明で、円形文や充塡文様を持たないが、鵜ガ島台式期に帰属する可能性も考慮しておく方がよいのではないか。しかし屈曲部の刻目は他の土器に共通する要素でもある。2以下については概ね茅山下層式土器として矛盾はないが、器形の上からは口縁部下の屈曲が強い2、6、2段の屈曲を持つもののその度合いの弱い3、7、10、1段の屈曲を持つ9、11などに分けられる。7、8の文様は連続刺突による区画線（7には半截竹管による沈線を併用）が描かれ、器形を含めて地蔵山遺跡出土土器によく類似する。3、9は上下から弧線を重ねることで共通する。縦位の沈線と弧線によって構成される文様は地蔵山遺跡ＳＫ-039にある。また9で注目すべきは、規則的ではないが貝殻による円形文が付加されることである。竹管ではなく貝殻による円形文は盛期の鵜ガ島台式土器には殆ど見られないが、地蔵山遺跡には目立ち、それが山崎貝塚にも認められるのは興味深い。3について阿部は口縁部の突起の変化、II帯文様の省略化などから茅山下層式土器の中段階に置いているが、基本的には刺突充塡を伴うこの個体が時期の降るものかどうか疑問がある。また1の円筒状突起から板状の扇形突起への変化が茅山下層式期に起きるとされているが、板状の扇形突起は先に見た鵜ガ島台式土器新段階に位置付けられる佐原市大稲塚遺跡では既に支配的である。2、6については幅広の篦状工具による沈線で文様が描かれるが、これもまた地蔵山遺跡ＳＫ-039に共通する要素であり、2のII帯にある斜行沈線の頂部に沈線と同じ工具で描かれる円形文は鵜ガ島台式土器の名残とも見られよう。以上のように山崎貝塚出土土器は、全体的に見て地蔵山遺跡に直続するか、一部地蔵山遺跡の最も新しい部分とは並行すると思われる土器群が主体を占めているようであり、茅山下層式土器の最も古い様態を示す可能性がある。しかし繰り返しになるが、一括性の検証は不可能である。

第113図下段には我孫子市柴崎遺跡出土の代表的な土器を示した。とくに12、13はしばしば引用されるものである。12の文様は関野によって茅山下層式中段階に位置付けられている[23]。それは三村地蔵久保貝塚出土土器に見られる「ハ」字状の連続刺突文様からの派生を考えるからであるが、この文様は明らかに弧線と襷状区画文様を連続刺突で描いたものであろう。関野の模式図では意図的かどうか区画線の一部が省かれて示されるが、これはどういうことであろうか。いずれにしてもこの個体は鵜ガ島台式土器の基本的な文様モチーフを直接的に継承したものであり、地蔵山遺跡の主体と同段階か、あるいは茅山下層式土器の古い段階に置くのが妥当ではないか。13についても地蔵山遺跡に共通する文様要素を持ったものがあり、明確な時期比定は無理としても、前者と同様の評価を与えてもよいであろう。柴崎遺跡で報告されている資料は

炉穴跡出土土器を主体としている。しかし鵜ガ島台式期のそれは6～7個体が示されているものがあるが、茅山下層式期のものは1～2個体の零細な資料で、土器組成が明らかにならない点が残念である。

石岡市三村地蔵久保貝塚出土土器もまた鵜ガ島台式期から茅山下層式期にかけての資料で、一時期の土器群の把握が難しい。中では茅山下層式土器の典型例として引用される№18や№22の土器は、地蔵山遺跡でも新しい可能性を指摘したＳＫ-047出土の191に器形、文様モチーフともに酷似している。茅山下層式土器の古い段階を代表するものであろう。

さてこれらの土器群に、茅山貝塚で典型的に見られるいわゆる凹線文による波状文などが認められないのは重要である。地蔵山遺跡ＳＫ-039や山崎貝塚2、6にある幅広の沈線は凹線文とは言えないものであるが、その先駆である可能性はある。そうすると「なぞり手法」と凹線文とが直接的に結合しないこともありえよう。ただいずれにしても関野の指摘にあるように、凹線文の出現は、茅山下層式土器を細分するうえでは大きな指標となるものであろう。

おわりに　以上、地蔵山遺跡出土土器群とその前後の時期の土器群との対比を行った。既に冒頭にも指摘したことではあるが、当遺跡出土土器群は鵜ガ島台式土器から茅山下層式土器にかけての移行期のものを主体とし、鵜ガ島台式土器の最末期に措くべき資料が最もまとまっていた。また一部茅山下層式土器の初頭に位置付けられる資料も含まれた。これらの資料の提示は、該期の土器研究のうえできわめて重要な成果とすることができるであろう。ここで触れた編年の問題は、未だ不充分なものであり、今後も議論が続けられなければならないが、その際の留意点として次の諸点を述べておきたい。

まず第一に、型式学的操作に全面的に依拠することは危険である。ここでも触れているが、型式学的操作によって得られた組列が、現実の土器群の変遷の中では時期が前後していると思われることもしばしば認められる。短い時間幅の中での土器の器形や文様の変化は、長い時間幅におけるそれよりも相対的に漸移的となり、また特定個人や特定専業集団が土器を製作するのでない限り、特定の時点における新旧の要素の混在は現実のものとなる。したがって編年細分が細かくなればなるほど、土器群の持つ諸要素を細かく分解すればするほど、型式学的操作のみに依拠する危険性は大きい。

第二に、編年細分におけるある段階が設定された場合、それにいかなる型式名を冠するべきかという問題がある。現実問題として、当地蔵山遺跡出土資料のように従来把握されてきた型式間の「移行期」に位置する資料の場合重要な問題である。関野哲夫の論考に次のような文章がある。

「…鵜ガ島台式土器の残存・併存したもので、土器の実態を示す資料であろうか。茅山下層式土器の古段階に関わる様相である。…」[24]

同一段階における二つの「型式」の併存－筆者が如上の文章の意を充分に汲んでいない場合

はご寛恕願いたい－は、少なくとも関東の縄文土器研究における「型式論」を究極まで進めれば起こりうることではあろう。それが異系統の搬入土器であれば全く問題はないが、同一集団の土器の組み合わせ－本来はその組み合わせこそが「様式」として把握されるべきもの－の中に複数の型式名の介在を許容するということが、考古学の方法として正当であるかどうか、決して軽視すべき問題ではない。また型式設定者の認識にたちかえって型式を把握すべきであるという意見をよく目にする。それは徒に混乱が生じることを防ぐという点で重要であるが、しかしまた情報量がきわめて限定された時点で設定された型式把握には限界（事実誤認の可能性も含めて）があることも事実であり、徒に当初の型式名、型式把握に固執することが正当でない場合もあろう。それと関連して、該期の土器研究により必要なことは、器形や文様の変遷ではなく、様式構造の変遷であろう。

第三に、調査時点及び報告書作成時点における資料の取り扱いの問題がある。該期は良好な一括資料に乏しいが、遺構内はもとより遺物包含層でも調査時点で詳細な遺物分布を記録し、報告書においても詳細な分布状況を、第三者の分析に耐える資料として提示することが必要であろう。遺物（土器群）整理の段階では、対象を限定しない個体識別を行い、器種分類毎の分布状況の把握、組成比率の把握がなされねばならない。この点は時間的制約とも関連するが、本書の反省点の一つでもある。本書で提示した資料以外に、整理作業の初期段階で捨象された土器片が相当数あり、したがって土器組成の把握には欠陥のある資料ということになる。

小稿での検討にはきわめて未消化な点が多いことは言うまでもないが、鵜ガ島台式土器～茅山下層式土器の研究も今日なお不充分な状況にある。今後良好な資料の増加が望まれるとともに、以上に列記した諸点－相互に関連した－に留意して、さらに考察を重ねていくことを約してまとめに代えたい。

註1　赤星直忠「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』1　1948

2　赤星直忠・岡本勇「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』1　1957

3　岡本勇「三浦市鵜ガ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』5　1961

4　関野哲夫「鵜ガ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』　早稲田大学出版部　1980

5　松崎寿和編『帝釈峡遺跡群』　亜紀書房　1976
岡本勇編『縄文土器大成1　早・前期』　講談社　1982

6　関野哲夫「茅山下層式土器について」『古代』80　1985

7　（慶応義塾高等学校考古学会「茨城県石岡市三村字地蔵久保三村貝塚発掘報告」『アーケオロジー』23　1956）
茨城県史編纂第一部会原始古代史専門委員会編『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　1979

8　前掲註4

9　佐々木克典「縄文時代早期の遺構と遺物」『神谷原II』　八王子市椚田遺跡調査会　1982

10　野口行雄「B地点出土の第2群土器について」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IIINo.14遺跡』千葉県文化財センター　1983

11　西川博孝・他『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV　No.7遺跡』　千葉県文化財センター　1984

12　野口行雄・他『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III　No.14遺跡』千葉県文化財センター　1883

13　西田道世・他『東間部多古墳群』　早稲田大学出版部　1974

14　石橋克宏・他『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI（佐原地区３）』　千葉県文化財センター　1991

15　西村正衛「茨城県潮来町狭間貝塚（第一次調査）」『学術研究』22　1973

16　前掲註12

17　担当者である太田文雄氏の教示を得、また資料を実見させていただいた。

18　前掲註６

19　阿部芳郎「千葉県佐倉市山崎貝塚とその土器」『貝塚博物館紀要』17　1990

20　新井和之「千葉県佐倉市上座貝塚出土土器群について」『奈和』16　1978

21　古宮隆信・他『我孫子市柴崎遺跡調査報告書〈第三次・第四次〉』　我孫子市教育委員会　1976

22　前掲註７

23　前掲註６　ただし註４文献では鵜ガ島台式土器の襷状区画文様を直接継承するものとして位置付けられており、この間に解釈が変化していることになる。

24　前掲註６

2　地蔵山遺跡における集落の形成

縄文時代早期の炉穴群及び遺物包含層を除けば、地蔵山遺跡で最も主要な位置を占める遺構は古墳時代以降の竪穴建物群である。A区、B区を合わせると30棟の竪穴建物跡が検出されているが、内訳は古墳時代25棟、奈良時代～平安時代5棟である。A区とB区の間には主要地方道千葉・大網線（大網街道）によって削平された部分、民家が密集する部分や未調査の区域があり、遺構分布の把握は万全ではないが、ここでそれらの遺構群がどのように形成されてきたかを通観しておきたいと思う。

時期区分　V章、VI章で述べてきたように、地蔵山遺跡の竪穴建物群は間断なく営まれ続けたものではなく、数回の断絶を挟みながら形成されたものである。集落の形成過程を見る前提として次の時期区分を設定しておく。

I期：5世紀後半～6世紀前半。最も多くの竪穴建物が営まれた時期である。これをさらに5世紀後半（I－1期）、6世紀初頭（I－2期）、6世紀前半（I－3期）の3小期に分けることができる。

II期：7世紀代である。遺構の造営時期としては7世紀の中葉前後に集中する。

III期：8世紀初頭に営まれた1棟の竪穴建物が帰属するだけである。

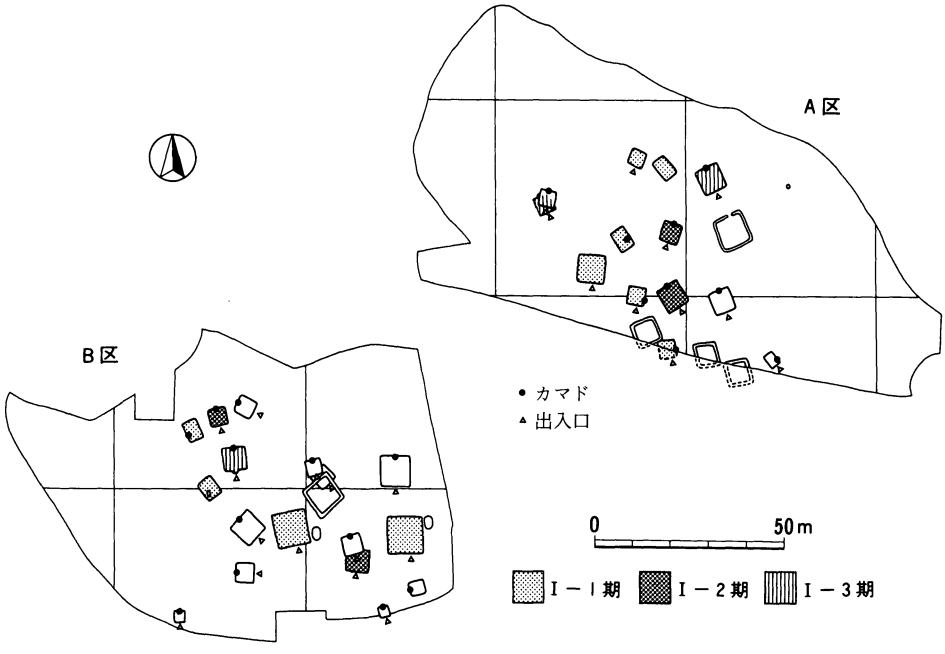
IV期：9世紀代である。本期に属する竪穴建物は9世紀の中葉前後に営まれているが、9世紀第2四半期（IV－1期）と9世紀第3四半期（IV－2期）の2小期を設定することができる。

I－1期　A区、B区合わせて10棟の竪穴建物が営まれている。それらの中でカマド、カマド状施設を持たない竪穴建物はSI－009、014、016、023、027、032の6棟で、A区、B区ともに3棟ずつの配置となる。それらは出土土器から判断する限り、5世紀後半に位置付けられることは明らかである。またカマド、カマド状施設を設けるSI－003、011、013、035についても5世紀後半に位置付けられ、カマド導入前後の若干の時間のずれはあったとしても大きな時間差ではなく、ほぼ連続して営まれ続けたであろう。これらの竪穴建物群はA区とB区双方に目立った偏在を示すことなく分布し、両区の間を含めて弧状の分布をなしていた可能性も想定される。個々の建物を見た場合、注目に値するのはSI－009、011、032、035の4棟の長方形プランの建物である。これらは入口位置、したがって主軸方位が明確ではないが、単純に長軸方向で見れば、いずれも北西－南東方向を指し、またA区とB区両方に対をなすかのように2棟ずつ分布する。またA区ではSI－009がカマドを持たないのに対しSI－011がカマド状施設を設けており、B区でもカマドを持たないSI－032とカマドを持つSI－035が対をなしている。この事実はSI－009→SI－011、SI－032→SI－035という二組の継起的な造営が行われた可能性も否定できない。この長方形プランを有する建物が特殊な機能を与えられた

ものと考えるならば、A区とB区それぞれに二つの単位集団が居住したとも推定することができる。しかし勿論A区とB区の間の遺構分布が明らかになっていないし、長方形プランの建物が特殊な機能を推定させるような特徴的な遺物出土状況等を示すわけでもないので、安易に断定することはできない。なお他の正方形プランの建物のうち、カマドを設置するものについては筆者がかつて建物構造を分類した[1]中の「C型」に相当する点も興味深いと言える。

Ⅰ－2期　A区、B区合わせて4棟の竪穴建物が営まれている。SⅠ－006、012、029、034がそれで、A区、B区それぞれ2棟ずつの配置となる。出土土器からは前述のごとく6世紀初頭前後の年代が与えられるが、ここで興味深いことは建物構造の酷似である。すなわちこれらの4棟は北辺側にカマドを配し、その対辺に出入口を設置していると思われるが、出入口側の中央に隅丸長方形の貯蔵穴を設ける「Fi型」なのである。出入口位置に貯蔵穴を設ける例は5世紀に出現し、主として大型建物に採用されているが、カマド初現期には殆どの建物が「C型」(「Cf型」を含む）となって一時的に見られなくなる。カマドが出入口の対辺に移る当初の短い期間は貯蔵穴が出入口側に残されるが、その際コーナーに貯蔵穴を設けるものの他に出入口施設下に設けるものが復活する。地蔵山遺跡Ⅰ－2期の建物がすべて「Fi型」を示すという事実はそれらの同時性を端的に物語ると言えよう。またA区とB区に2棟ずつ存在するという事実も、2棟を一単位とする二つの単位集団の占拠（調査区内に限って）を示唆するものかもしれない。

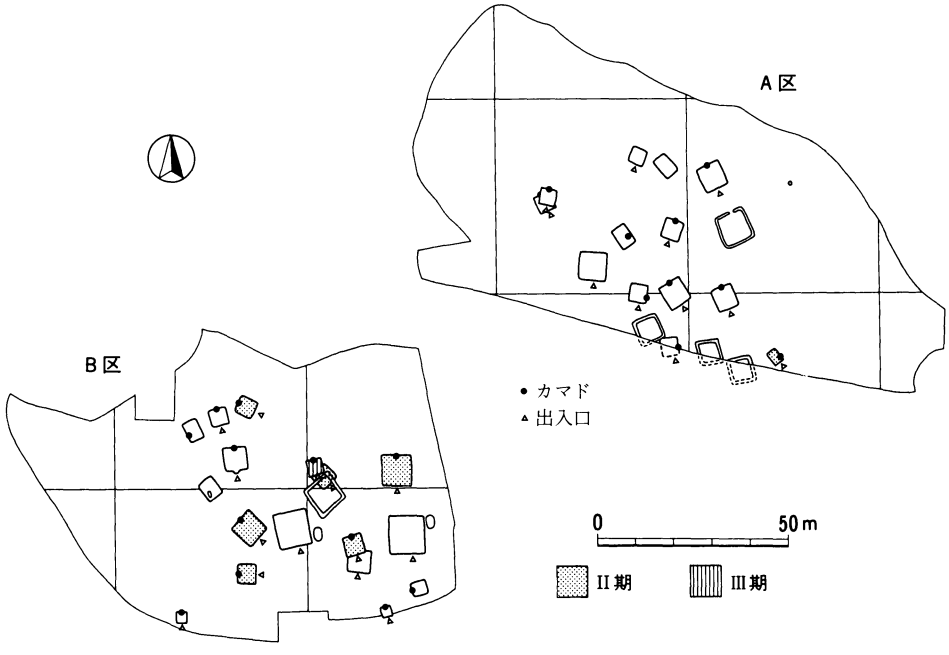
Ⅰ－3期　A区のSⅠ－008、015B、B区のSⅠ－031の計3棟が営まれている。これらの出土土器が示す年代は、前記Ⅰ－2期に直接的に後続するものと思われ、6世紀前半と考えてお



第114図　5世紀～6世紀の地蔵山遺跡

く。3棟の建物構造は、ＳＩ－008が「Ｆｉ型」、ＳＩ－015Ｂが「ＦIII型」、ＳＩ－031が「Ｆａ型」ですべて異なっている。筆者はかつて張り出し部を持つ「Ｆａ型」が「Ｆｉ型」から派生し、時期的に遅れて残っていくと考えたが、本期はおそらく「Ｆａ型」出現期に相当するのではないかと想定したい。出土遺物から見た年代観に殆ど差はないが、ＳＩ－015Ｂは古墳時代で最も新しい構造「ＦIII型」をとる。この事実は、カマド位置が出入口の対辺側に移って後、あまり隔絶することなく貯蔵穴がカマドの跡を追ったことを示している。筆者は貯蔵穴がカマド側にあるものを「ＦII型」と「ＦIII型」に分類したが、この二つは基本的に同一の類型であり、6世紀前半に既に出現して7世紀末～8世紀初頭における建物内貯蔵穴の一般的消滅まで安定して継続する。またＳＩ－008とＳＩ-015Ｂは貯蔵穴位置の違いはあるものの出入口とカマドを結ぶ主軸方位は全くと言ってよいほど一致し、2棟の同時性を示唆するのではないか。ここでもまた2棟が組み合わせとなる可能性を指摘できる。Ｂ区の方ではＳＩ-031の1棟しか検出されていないが、削平部分や未調査区に該期の建物跡がある可能性も考えられる。なおＡ区のＳＩ－004も該期に含められるかもしれないが、積極的な根拠を持たない。

II期　Ａ区、Ｂ区合わせて7棟の竪穴建物が営まれている。Ａ区ではＳＩ-002 1棟のみであるのに対し、Ｂ区ではＳＩ－021、022、025、026、028、033の6棟があり、本期はＢ区に偏った分布を示している。しかもＳＩ-002は長方形を呈する小型建物で、特殊な機能を有したものかも知れず、またＢ区の6棟より若干先行する可能性もある。Ｂ区にある6棟は、建物構造としてはすべて「ＦII型」か「ＦIII型」で貯蔵穴を持たないものはない。時期比定の根拠となる出土土器が零細で厳密な年代観を与えられないものもあるが、概ね7世紀中葉かやや降る時間



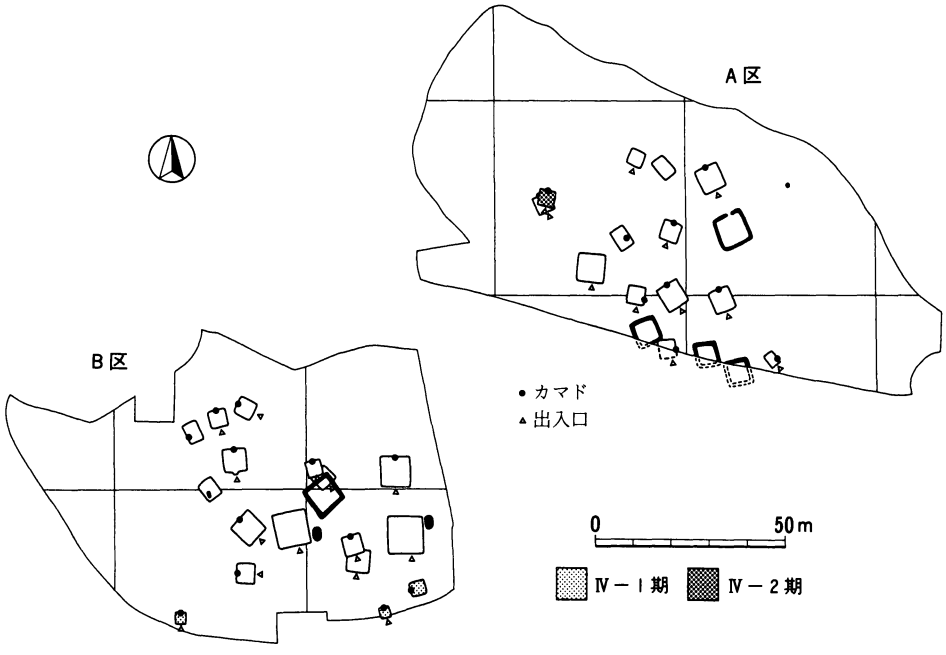
第115図　7世紀～8世紀初頭の地蔵山遺跡

幅に含められると思われる。しかしこれら6棟の間の先後関係は明断することはできず、集落の構成も不鮮明であると言わざるをえない。ただ一点興味深いことと言えば、出入口が南を向くＳＩ－021から東を向くＳＩ－026まで、主軸方位が扇形を呈して建物群が展開しているように見えることが挙げられる。意識的な結果なのであろうか。

III期　Ｂ区にＳＩ-024が単独で営まれているのみである。勿論削平部分や未調査区が広いため他にも8世紀初頭の建物が存在する可能性があるが、遺跡内にまとまった集落が形成されていない点は疑いない。またII期の建物群に直接後続すると考えるのも無理がある。なお建物構造としては「ＦIII型」で、7世紀代のそれを継承している。

Ⅳ－1期　9世紀第2四半期とした時期で、Ｂ区の南縁に並ぶＳＩ-019、020、033の3棟が相当する。3棟の間に大きな時間差は想定できないが、出土土器の様相からはＳＩ-020がわずかに先行する可能性はある。尤もそうであったとしても、該期の中での断絶は考えられず、相互に関連を持った建物群であることは確かであろう。これら3棟は台地南縁の斜面にかかる位置に営まれ、台地平坦部が大きく空白となる。しかしこれらの建物に先行してＳＫ－049、051の2基の土壙墓が営まれ、おそらく方墳ＳＸ-005も既に築かれていたと考えられる。さらにＡ区にも4基の方墳や火葬墓1基が検出されており、墳墓群はＡ区、Ｂ区間に連続していたと想定される。したがって当遺跡台地央部は、9世紀の集落が営まれる時点においても墓域として明確に意識されていたであろう。

Ⅳ－2期　9世紀第3四半期とした時期で、Ａ区のＳＩ－015Ａが相当する。Ⅳ－1期の集落に継起するものかどうかは明断できない。この建物もＡ区の墳墓が築かれている範囲を避ける



第116図　8世紀～9世紀の地蔵山遺跡

ように営まれている。

近傍の集落跡との関係　以上のように地蔵山遺跡に残された集落跡は、5～6世紀と7世紀に2度のピークを以て営まれ、以後散発的に竪穴建物が営まれたことになる。ここで周辺に視野を拡大してみると、まず古墳時代のまとまった集落跡として地蔵山遺跡の北側に所在した荒久遺跡[2]と南西側に所在した中野台遺跡がある。

荒久遺跡は青葉の森公園及び県立中央博物館の建設に伴って発掘調査が行われ、確認調査で知られた弥生時代終末期から古墳時代の集落跡のおよそ半分について本調査を実施している。調査された55棟の竪穴建物のうち、3～4世紀の竪穴建物が31棟、5世紀の竪穴建物が7棟、6世紀の竪穴建物が6棟、7世紀の竪穴建物が4棟あり、他の7棟は時期不明であった。荒久遺跡の5世紀代の建物群はそのいずれもが5世紀の前半に営まれたものと考えられ、また6世紀代の建物群については6世紀の初頭～前葉に位置付けられるものが存在しない。この点は注目すべき事実と言わなければならない。山口典子は荒久遺跡の報文の中で、荒久遺跡と千葉寺地区遺跡群の補完的な関係を予想しているが、少なくとも5世紀～6世紀にかけては、カマド初現期の前後に荒久遺跡が断絶しており、その時期に地蔵山遺跡の集落が営まれているとすれば、集団の移動も充分想定されてよいと言えよう。

しかし地蔵山遺跡の近傍にある集落跡は荒久遺跡ばかりではなく、より至近の関係にある中野台遺跡においても5世紀～6世紀の竪穴建物が検出されているようであり、問題はそれほど単純ではないかもしれない。また奈良時代～平安時代の集落跡としては観音塚遺跡、鷲谷津遺跡、中野台遺跡それぞれに営まれ、特に観音塚遺跡は該期の竪穴建物が100棟以上調査されている。周辺地域における奈良時代～平安時代の集落跡の中心は観音塚遺跡から鷲谷津遺跡にかけて存在したことは確実であるが、それらはいずれも現在未整理の状態で、地蔵山遺跡との関係を考察することはできない。集団関係の分析は、単一の遺跡レベルではなく遺跡群総体として考察することが不可欠であり、千葉寺地区遺跡群の調査成果が出揃った段階で再び考究すべき問題であろう。

註1　渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』11（財）千葉県文化財センター　1985　以下建物類型についてはすべて当文献による。

2　山口典子・他『千葉市荒久遺跡(1)』（財）千葉県文化財センター　1989
小林信一・他『千葉市荒久遺跡(2)』（財）千葉県文化財センター　1989

抄　　録

フリガナ	チバシジゾウヤマイセキ(2)
書名	千葉市地蔵山遺跡(2)
副書名	住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	II
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第224集
編著者名	渡辺修一　小林清隆
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809－2
印刷所	株式会社　弘文社　(千葉県市川市市川南2丁目7番2号)
印刷年月日	1993年3月24日
発行年月日	1993年3月31日

所収遺跡名(フリガナ)	所在地(フリガナ)	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
地蔵山(ジゾウヤマ)	千葉市千葉寺町(チバシ チバデラチョウ)	201	058B	35°35'20"	140°8'26"	19861001－19861128 19870601－19871214	6,724m²	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵山	集落	先土器	遺物集中　2か所	ナイフ形石器など石器30点	遺構、遺物包含層から出土した早期縄文土器は、編年研究上非常に重要 古墳時代の集落跡はカマド初現期の前後を主体とする
		縄文	竪穴遺構　2基 炉穴跡　29基	鵜ガ島台～茅山下層式土器 石鏃など石器213点 被熱礫	
		古墳	竪穴建物　13棟	土師器・須恵器・鉄製品	
		奈良平安	竪穴建物　4棟 古墳　1基 土壙墓　3基	土師器・須恵器・鉄製品	

写真図版

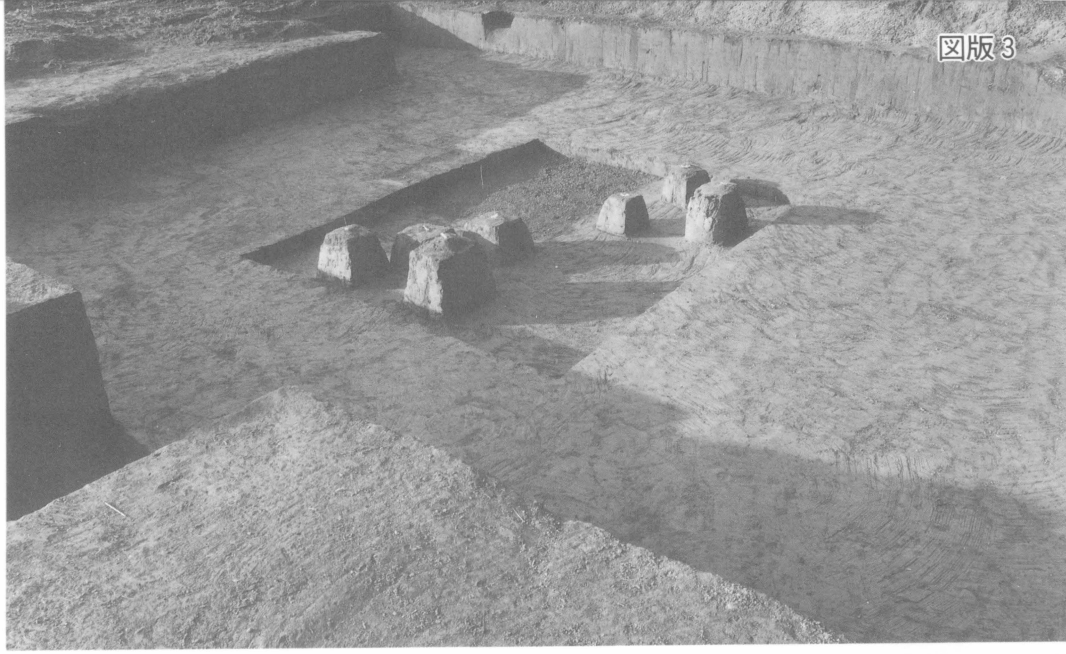
図版 1

遺跡周辺航空写真

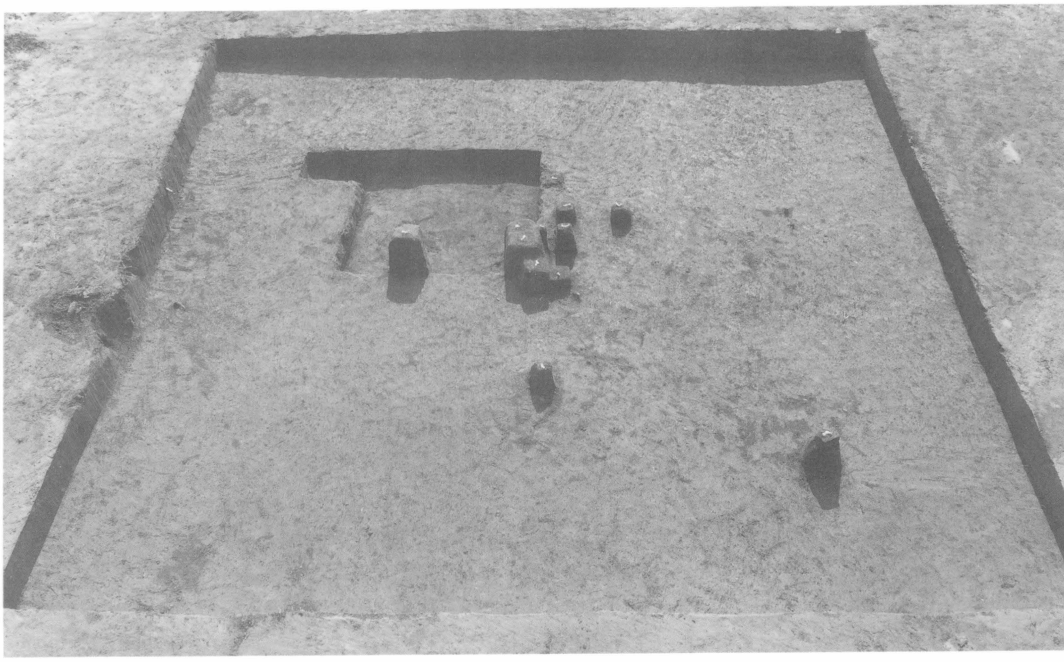
図版 2

1．調査区全景
（南より）

2．調査区全景
（東より）



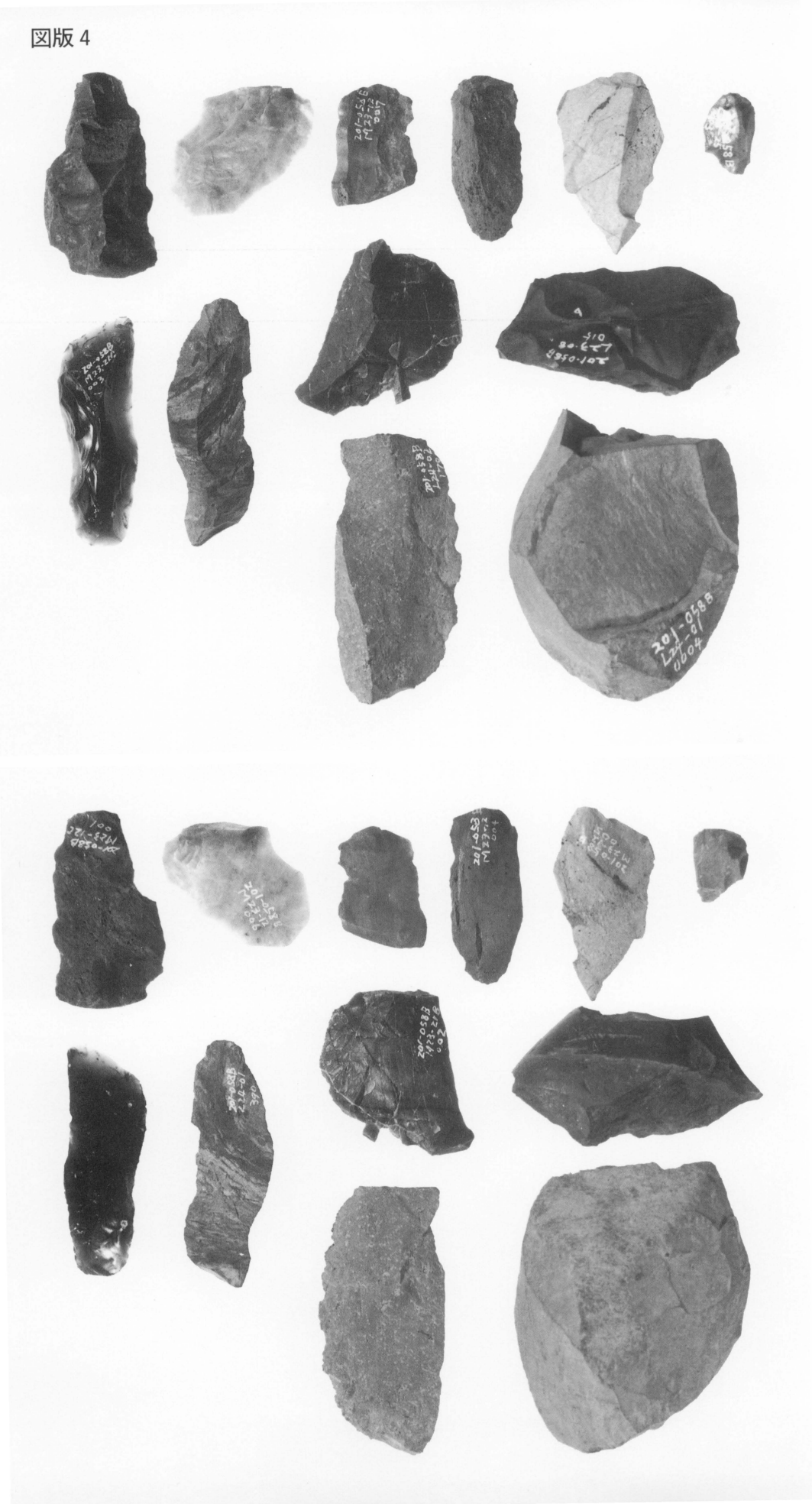
1．第2ブロック
遺物出土状況



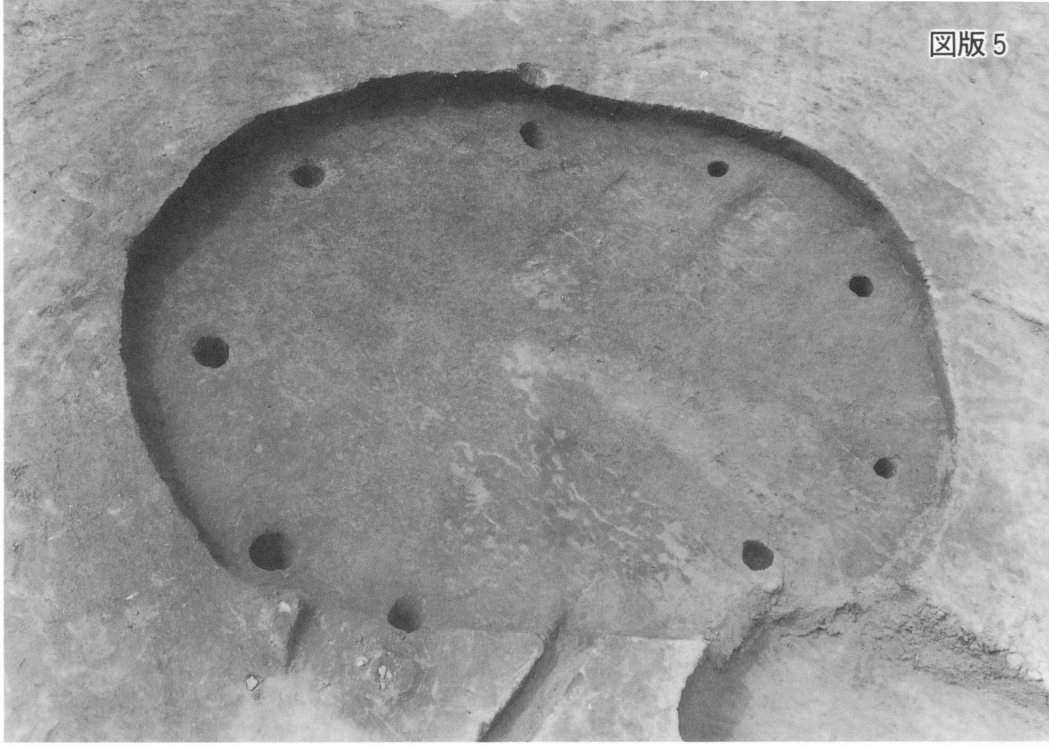
2．第3ブロック
遺物出土状況

3．ローム層断面

図版 4

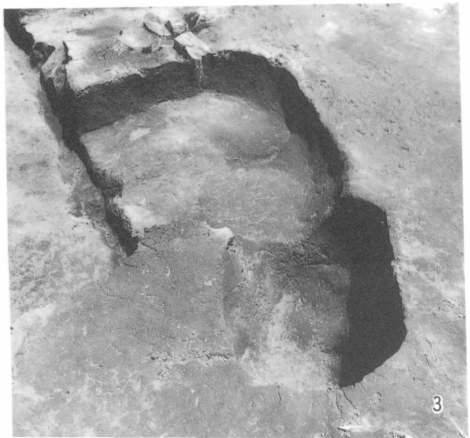


先土器時代石器



1．SI－017

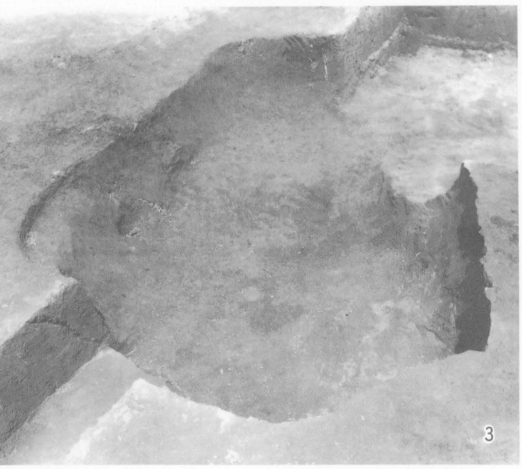
2．SI－018



3．SK－020
4．SK－021

図版 6

1．SK－022
2．SK－023

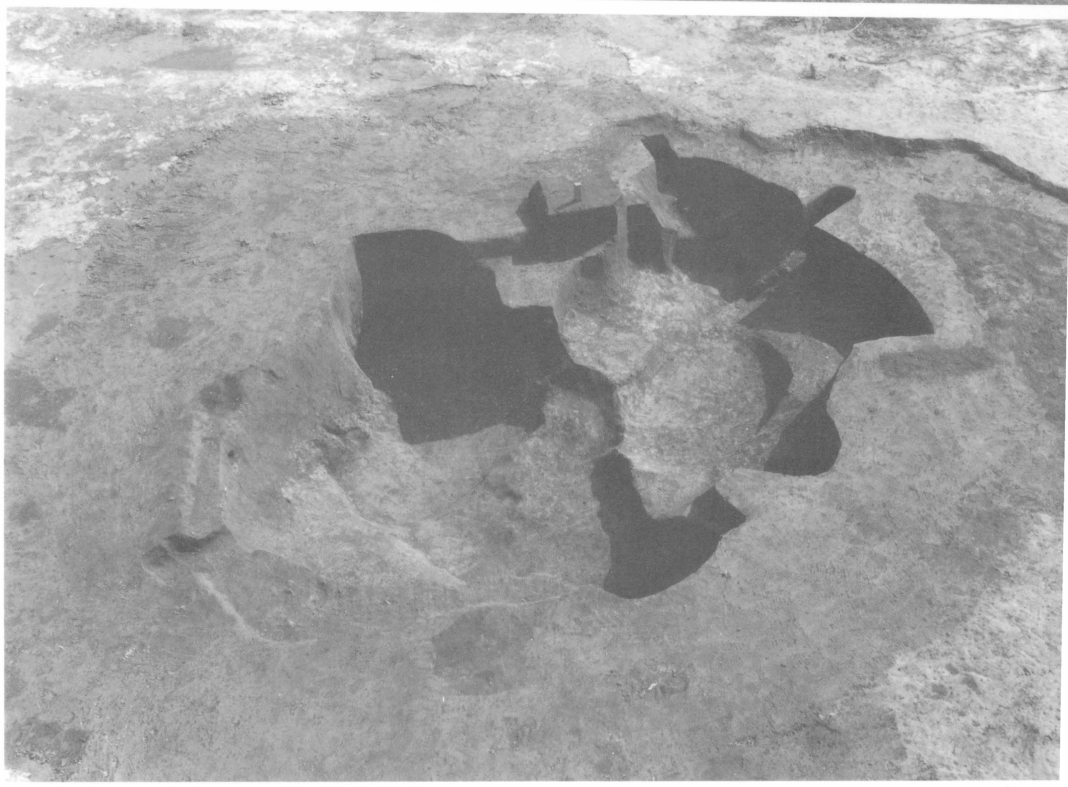


3．SK－024
4．SK－025

5．SK－026
6．SK－027

7．SK－030
～032

1．SK－035

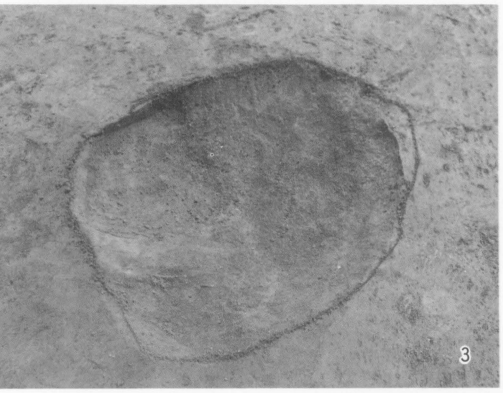


2．SK－036

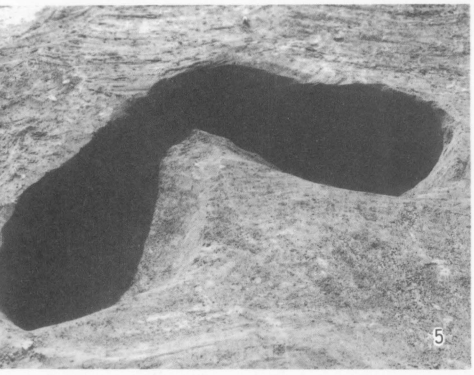
3．SK－037
4．SK－038

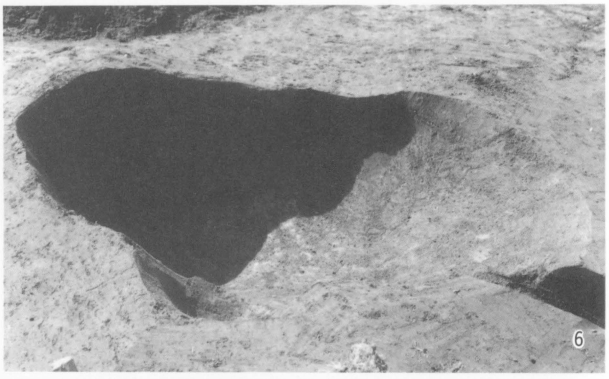
図版8

1．SK－039
2．SK－040

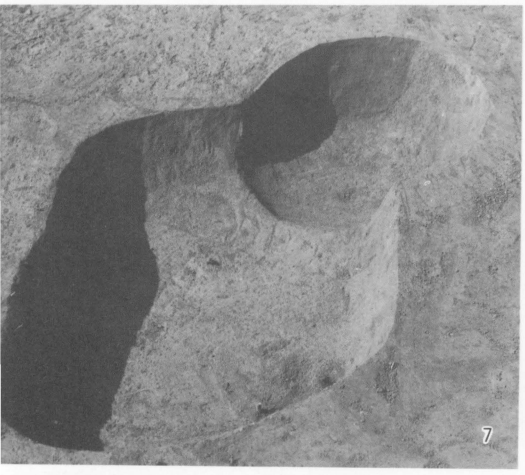


3．SK－041
4．SK－042



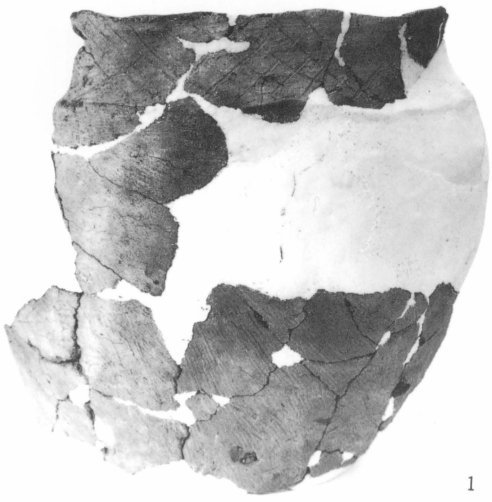


5．SK－043
6．SK－044

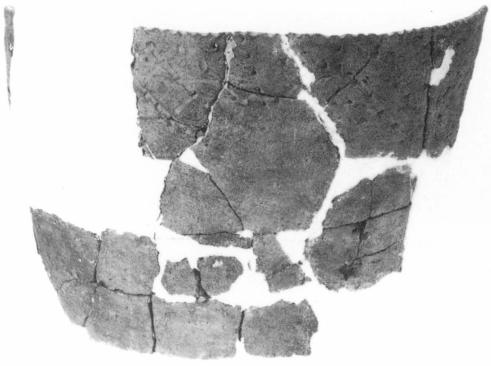


7．SK－045
8．SK－046

9．SK－047
10．SK－048



1



29

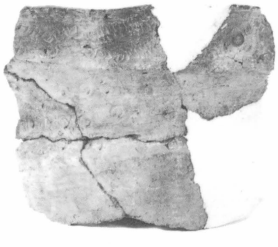
30

48

50

90

103



104

88

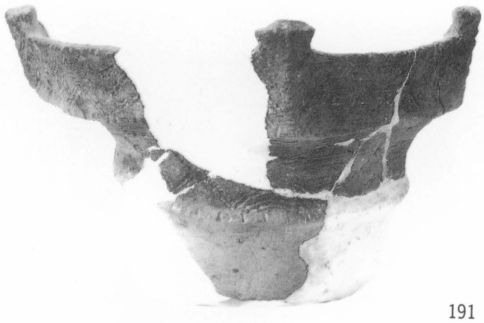
169

縄文土器（1）

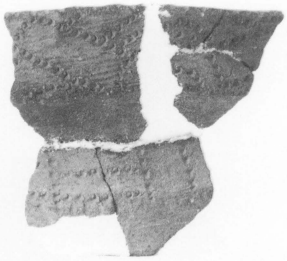
152

189

190



191

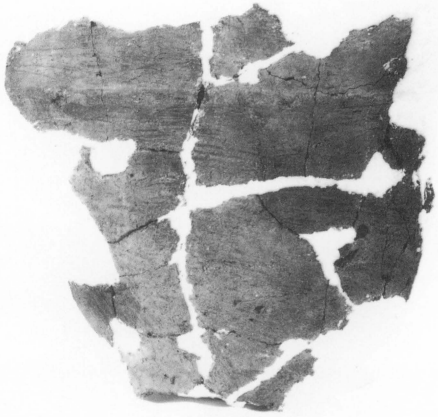


192

399

581

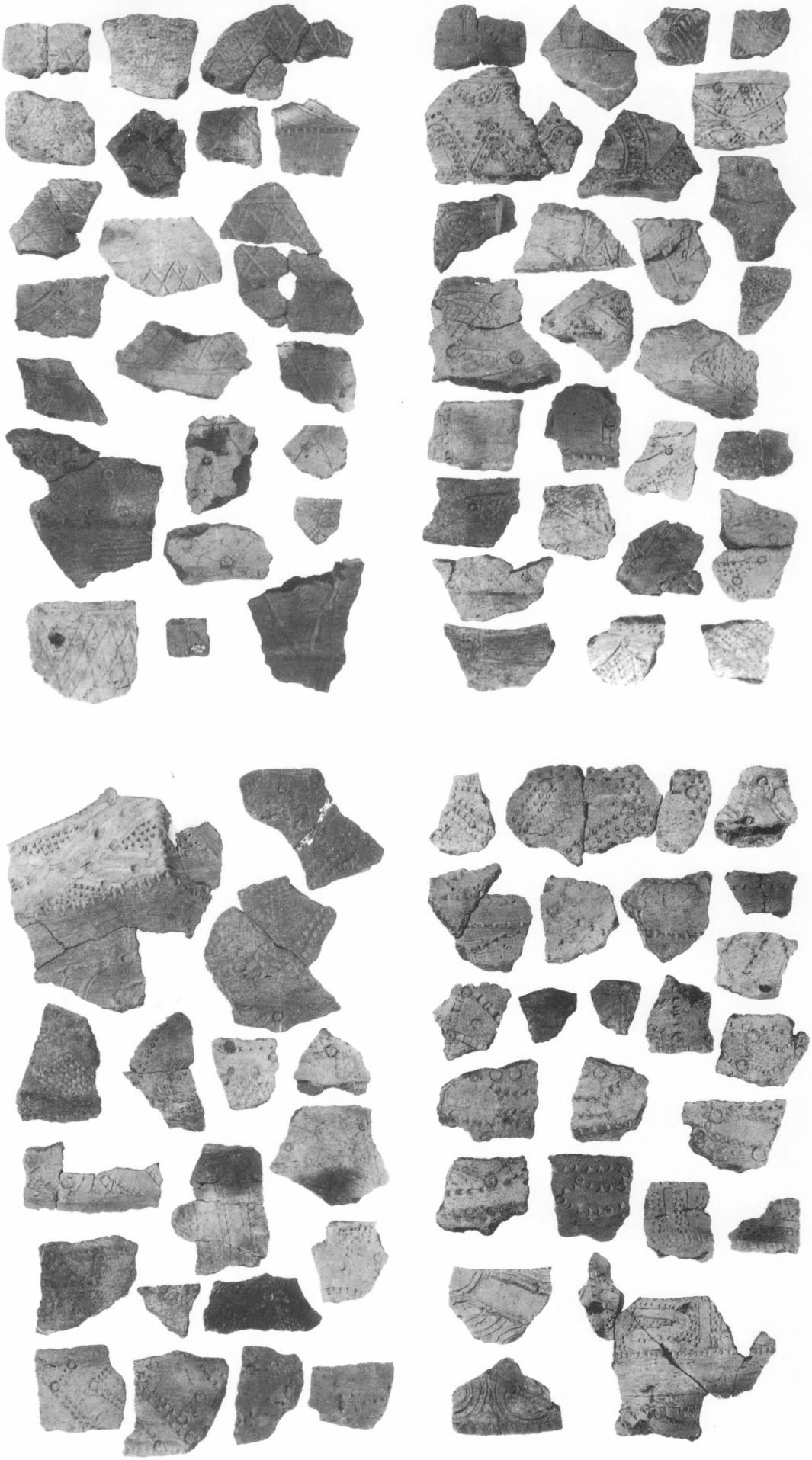
584



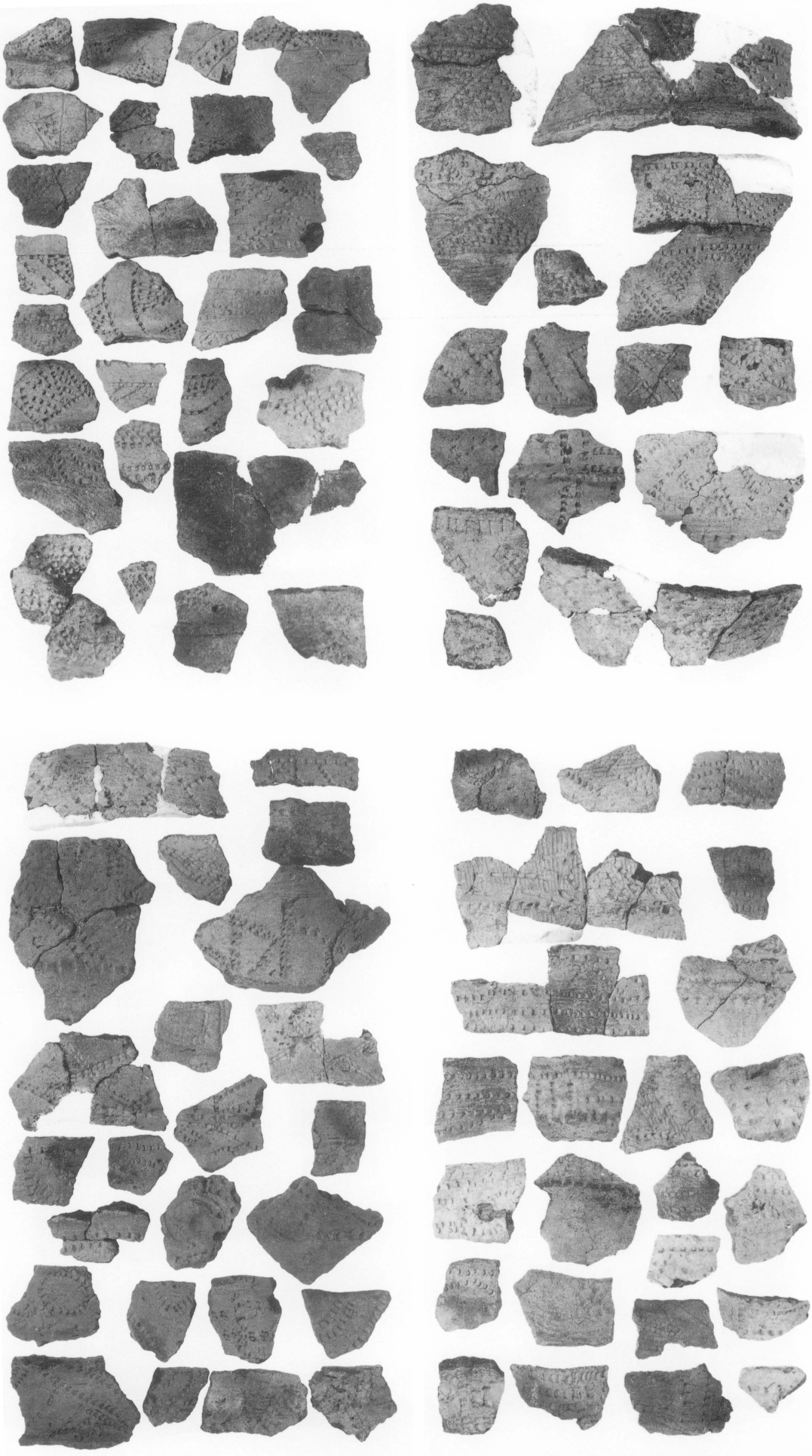
401

縄文土器（2）

図版11

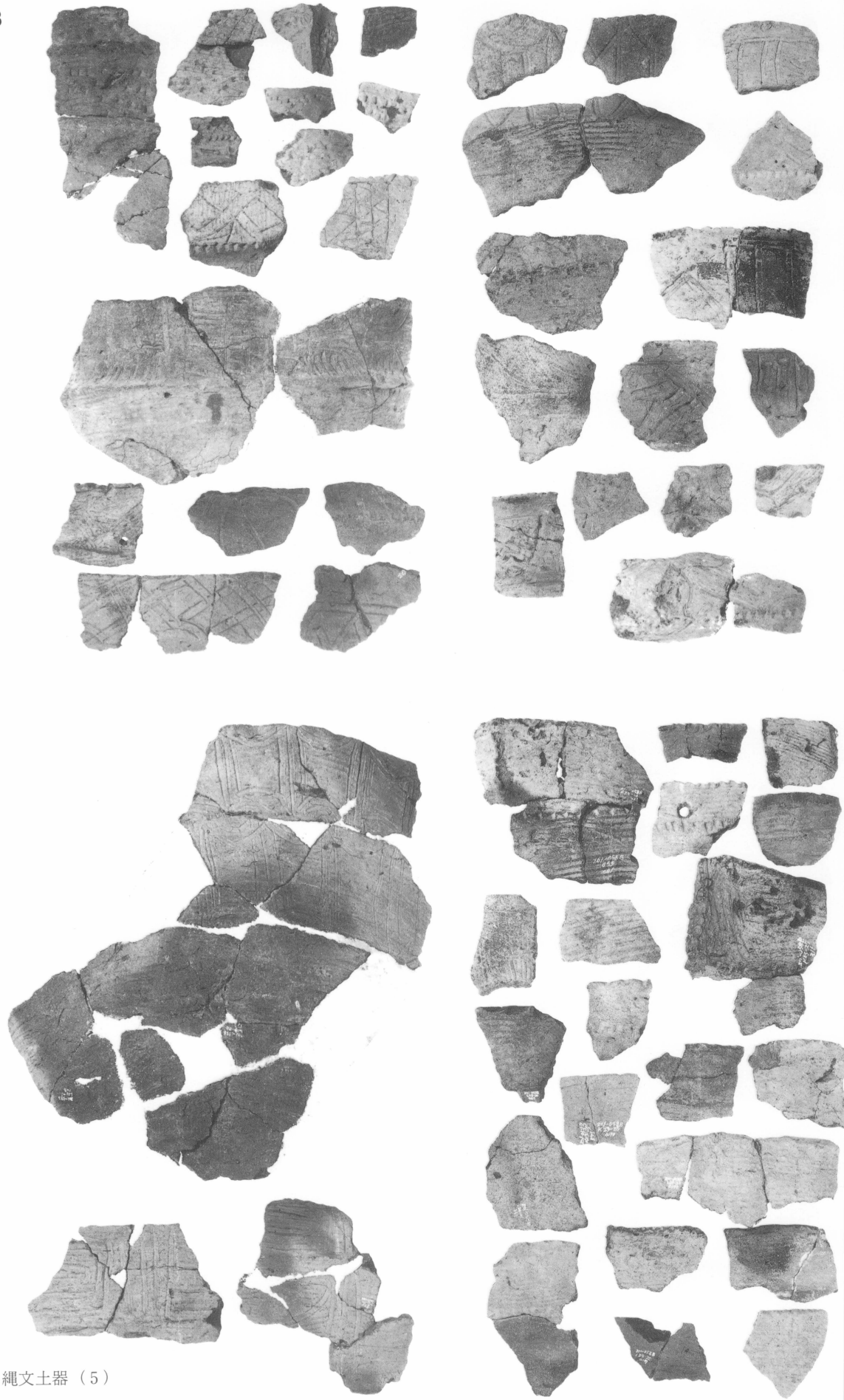


縄文土器（3）

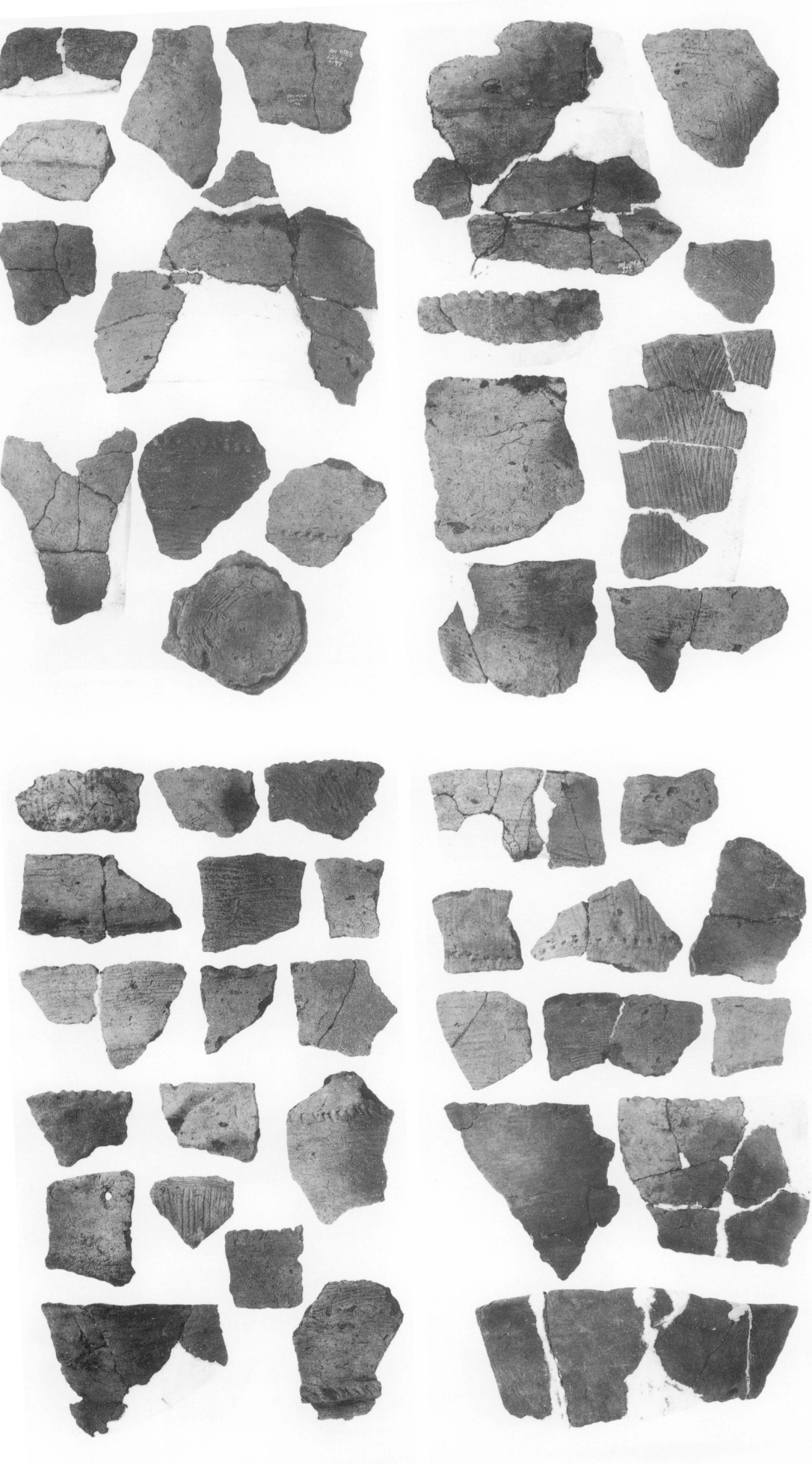


縄文土器（4）

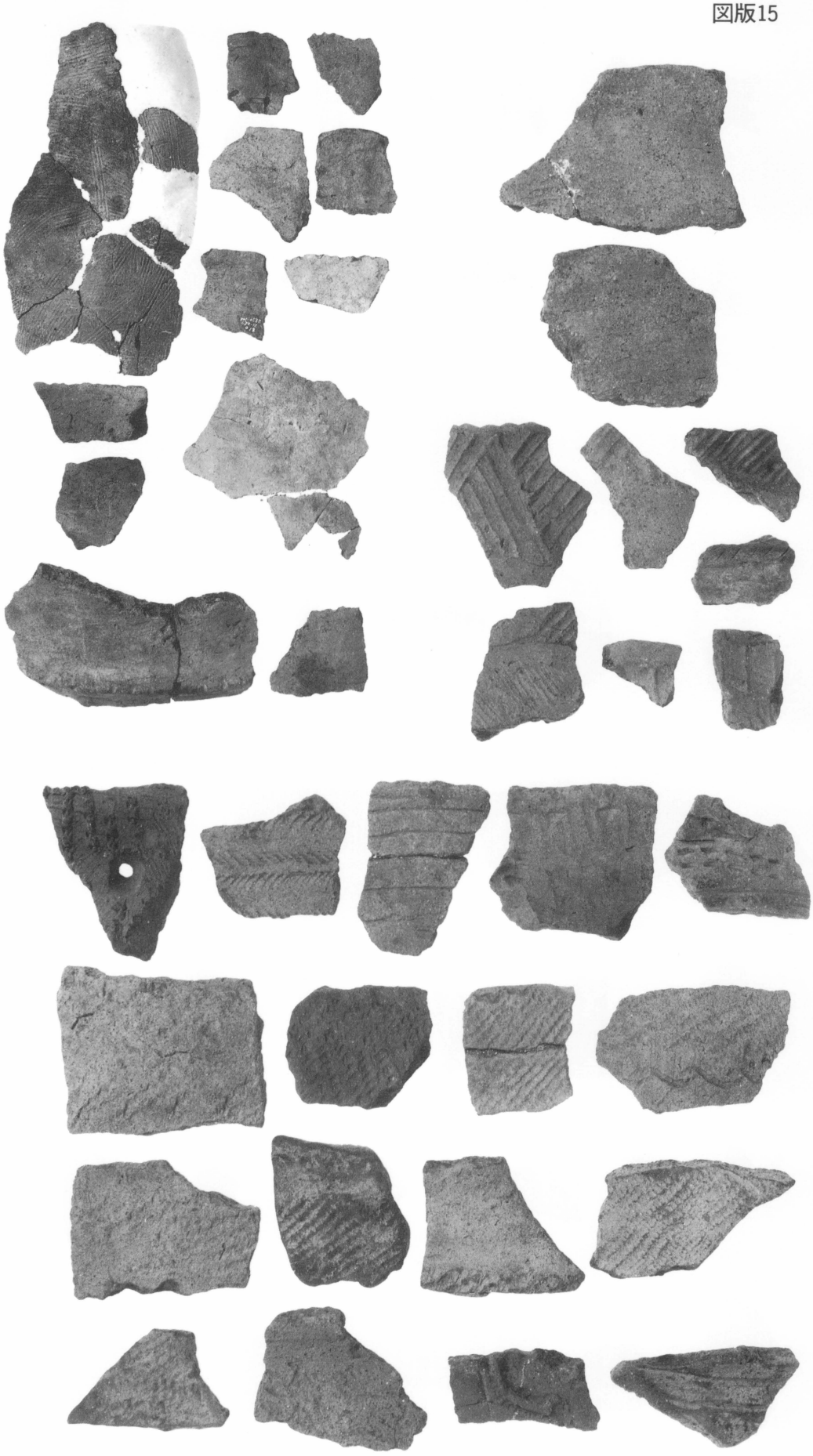
図版13



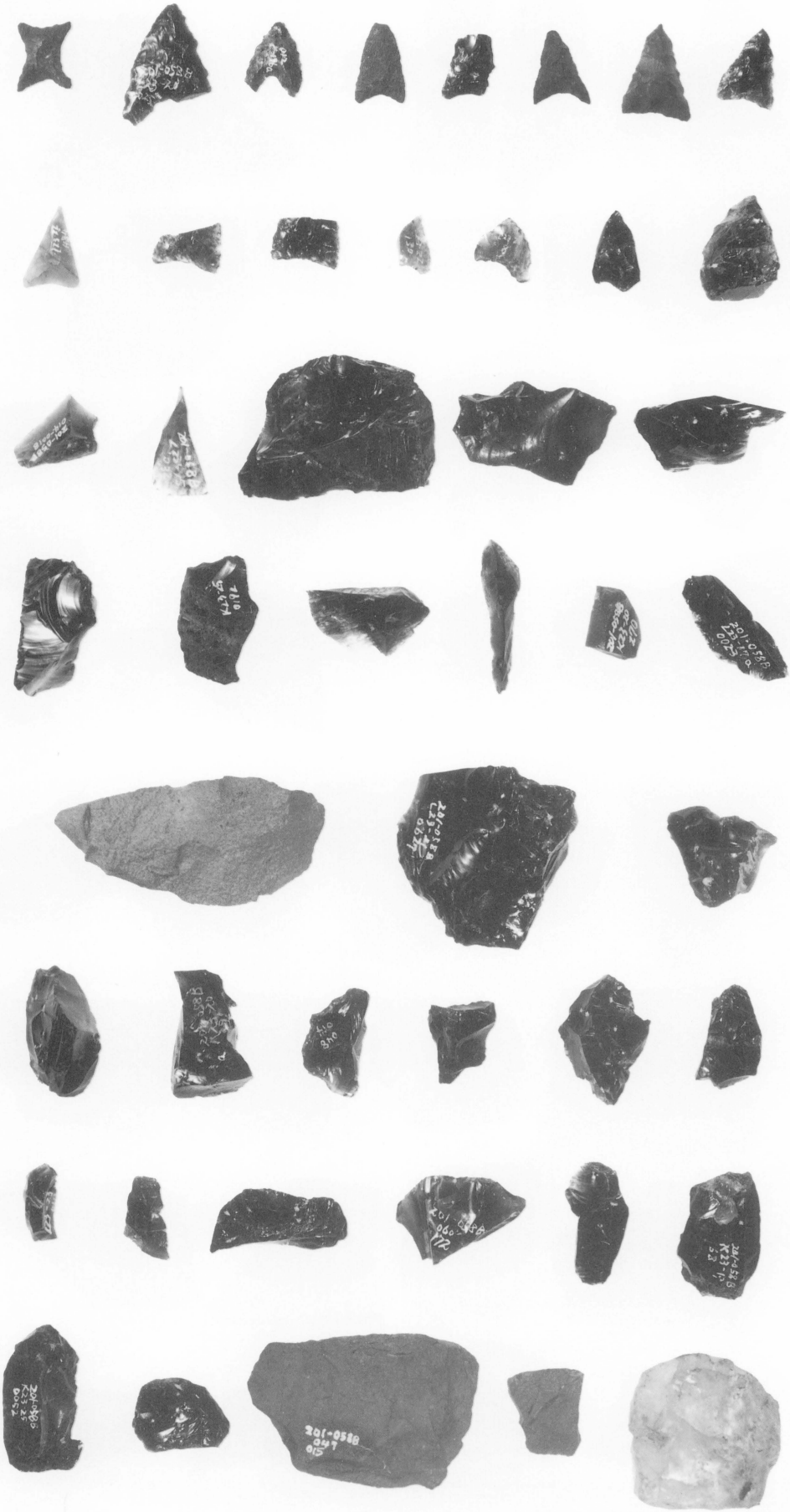
縄文土器（5）



縄文土器（6）

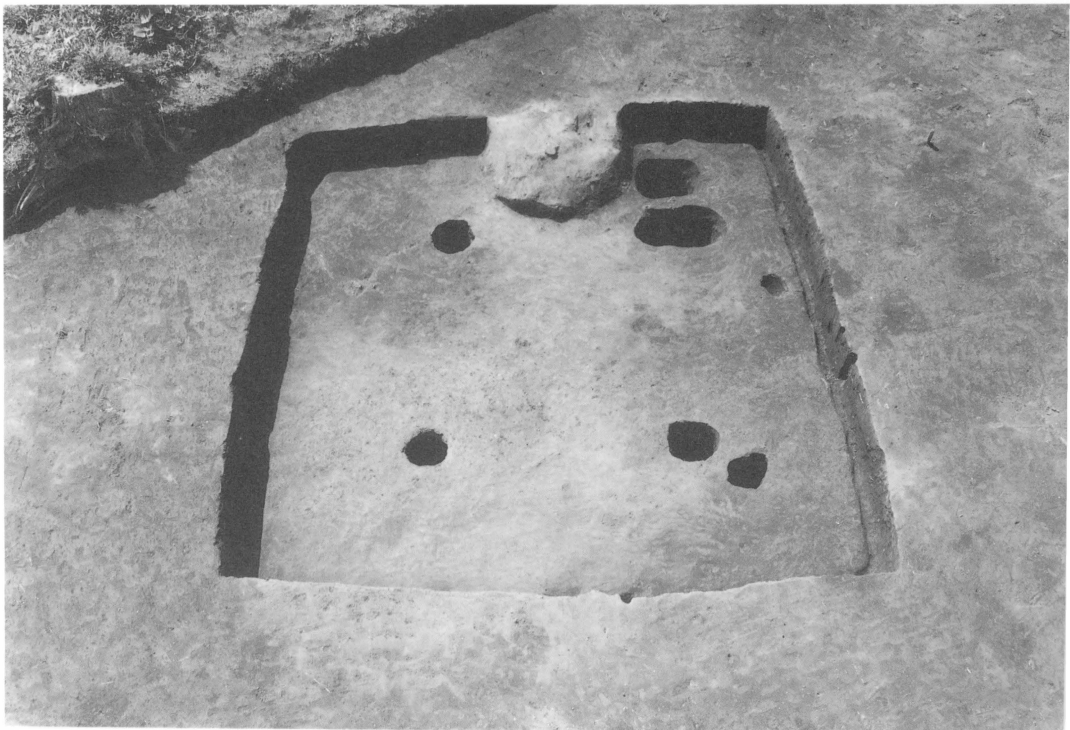


縄文土器（7）



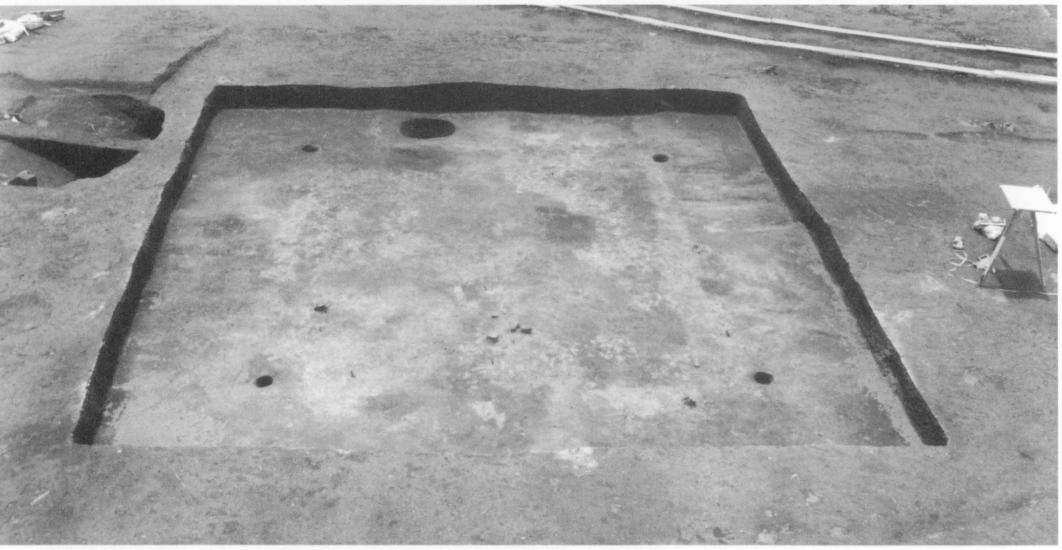
縄文時代の石器（1）

1．縄文時代の石器（2）



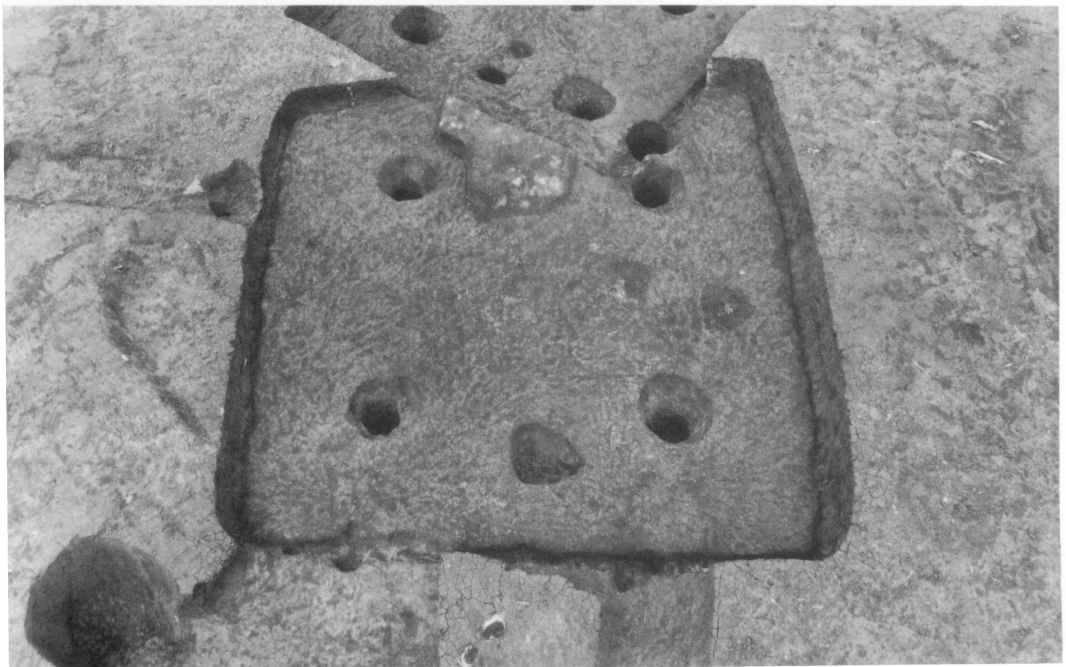
2．SI－022

1．ＳＩ－021



2．ＳＩ－023

3．ＳＩ－023炭化材検出状況

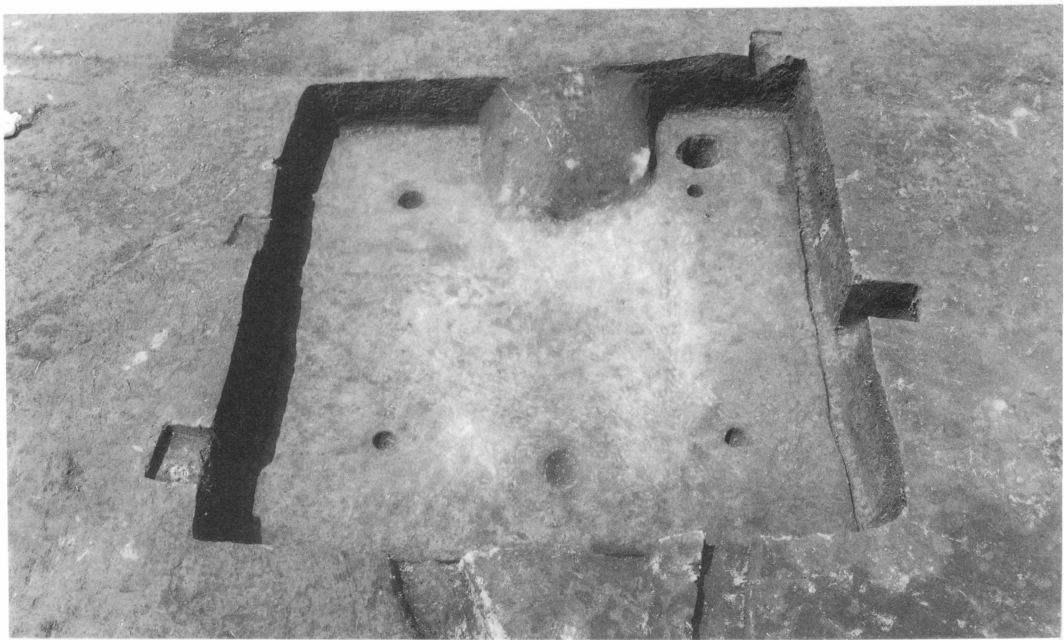


4．ＳＩ－025

1．SI－026

2．SI－027

3．SI－027臼玉出土状況



4．SI－028

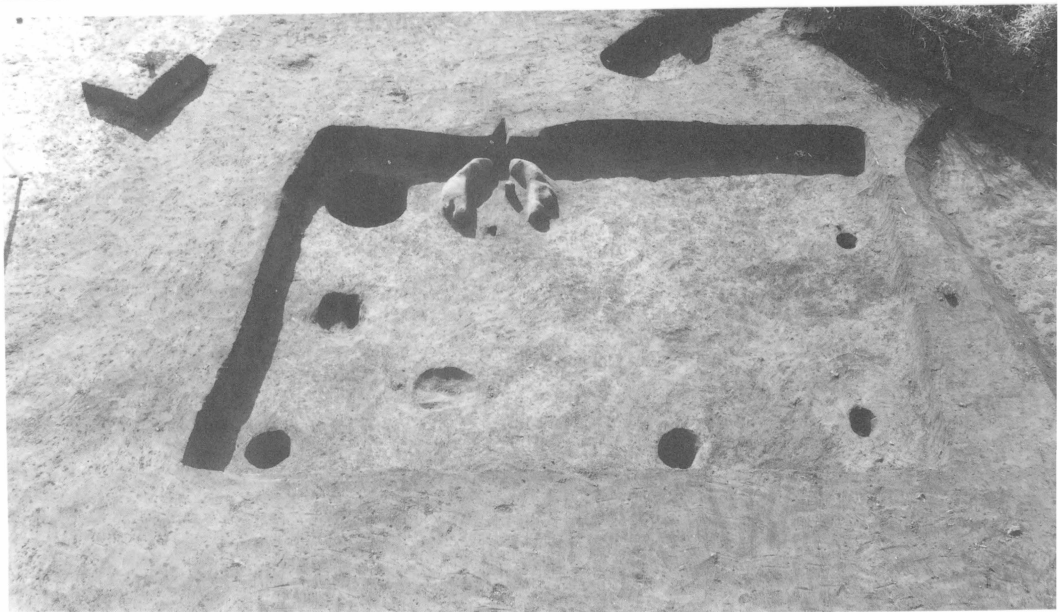
1．SI－029

2．SI－030

3．SI－031

1．SI－032

2．SI－034

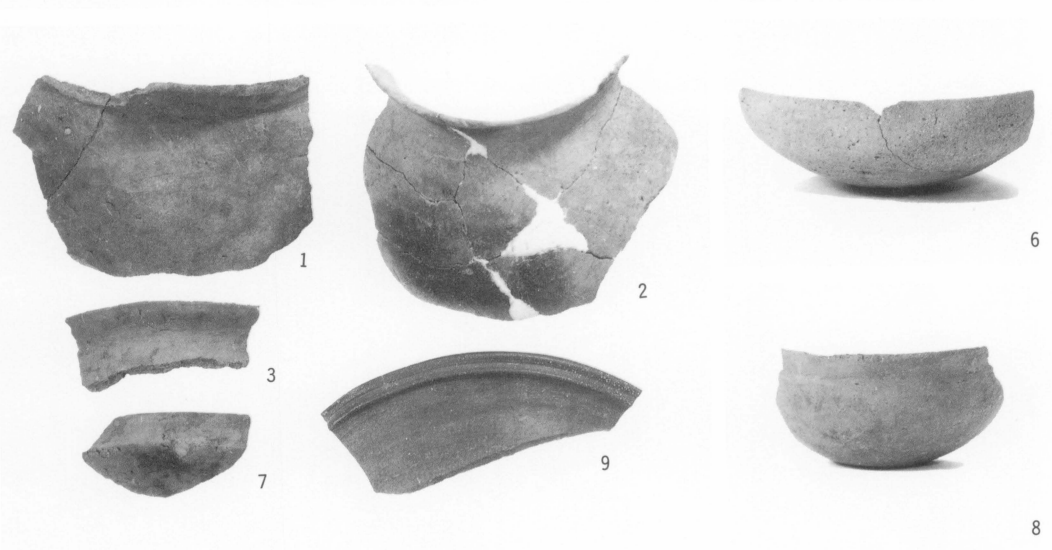


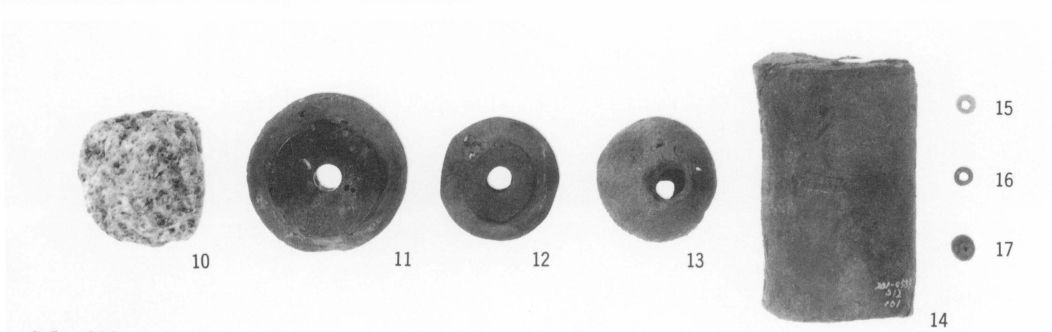
3．SI－035

図版22

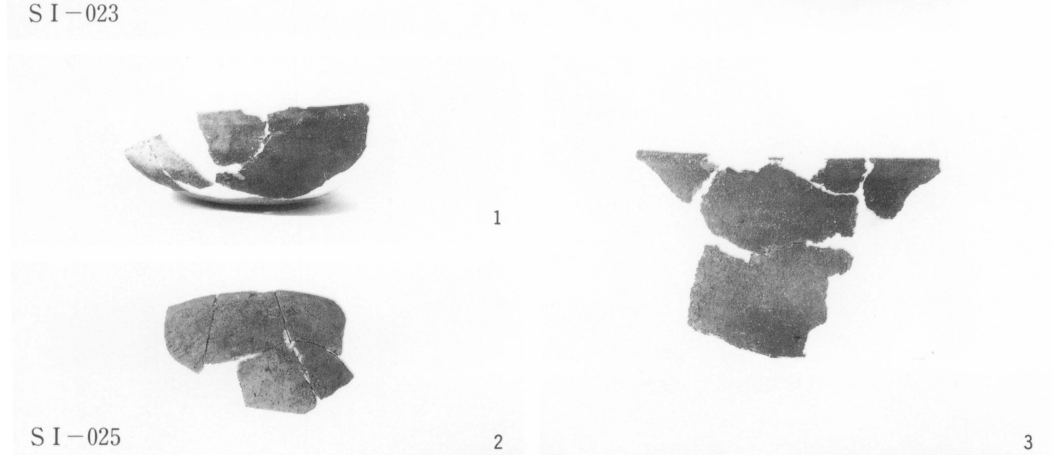
ＳＩ－021

ＳＩ－022



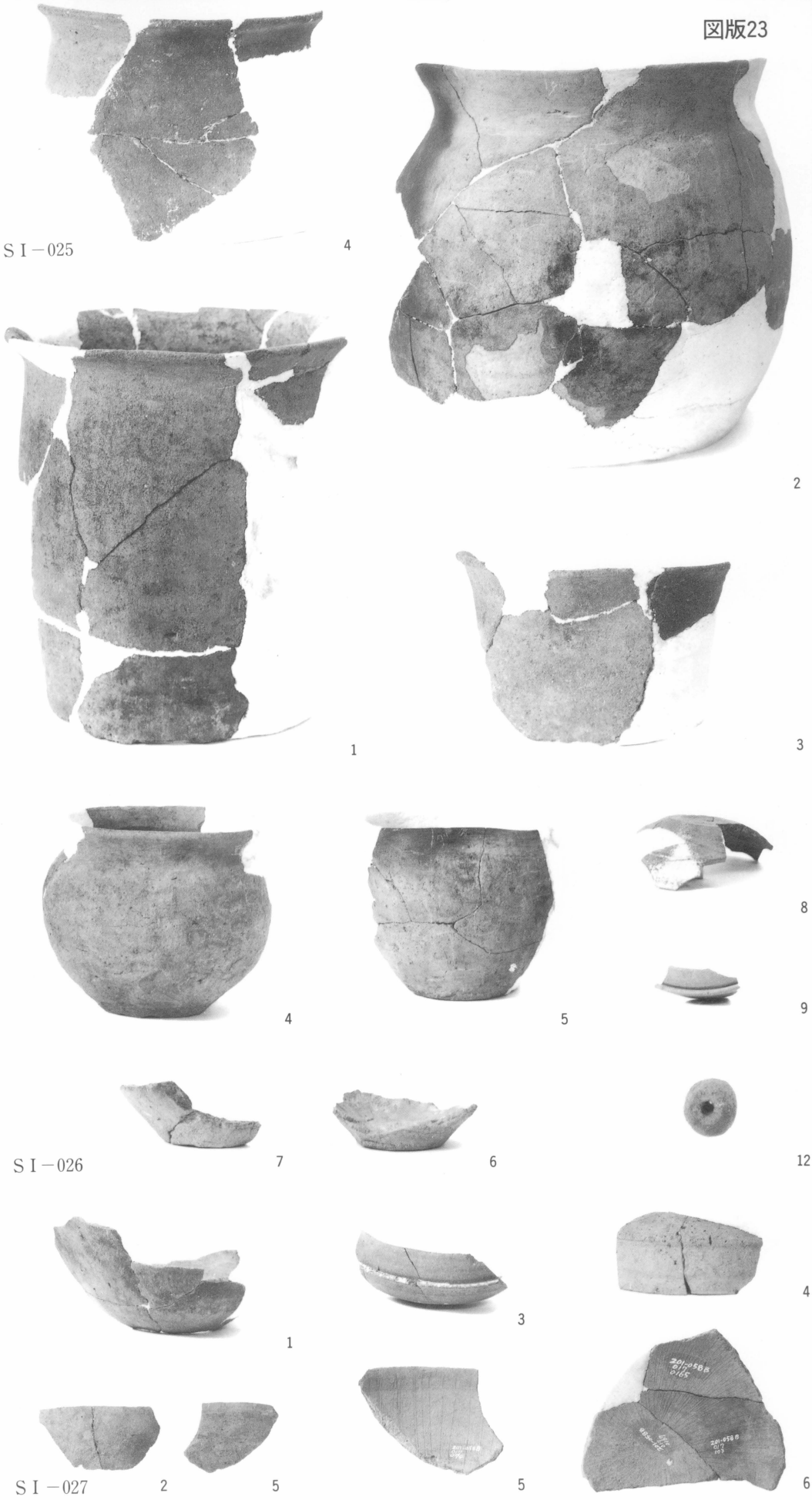


ＳＩ－023

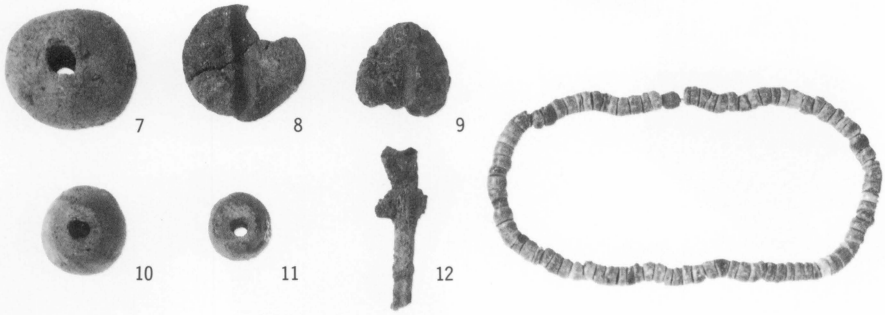


ＳＩ－025

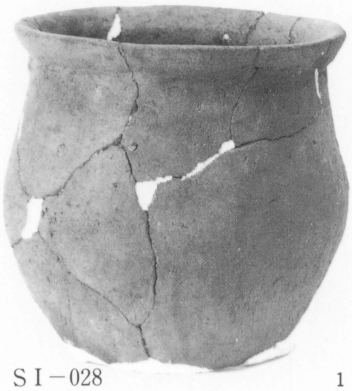
古墳時代
出土遺物（１）



古墳時代
出土遺物（2）



SI－027

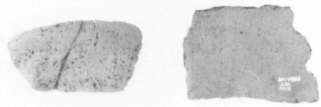


SI－028 1

4

3

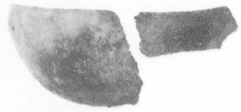
2



5 6

1

3

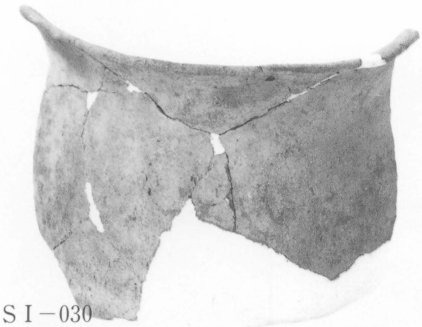


5

4

6

SI－029 2



SI－030 2

1

古墳時代
出土遺物（3）

3

4

5

6

7

10

SＩ－030

1

2

3

4

5

6

7

8

SＩ－031

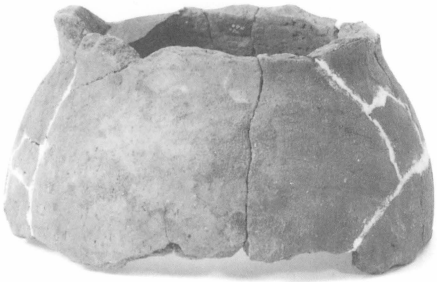
1

4

5

6

7

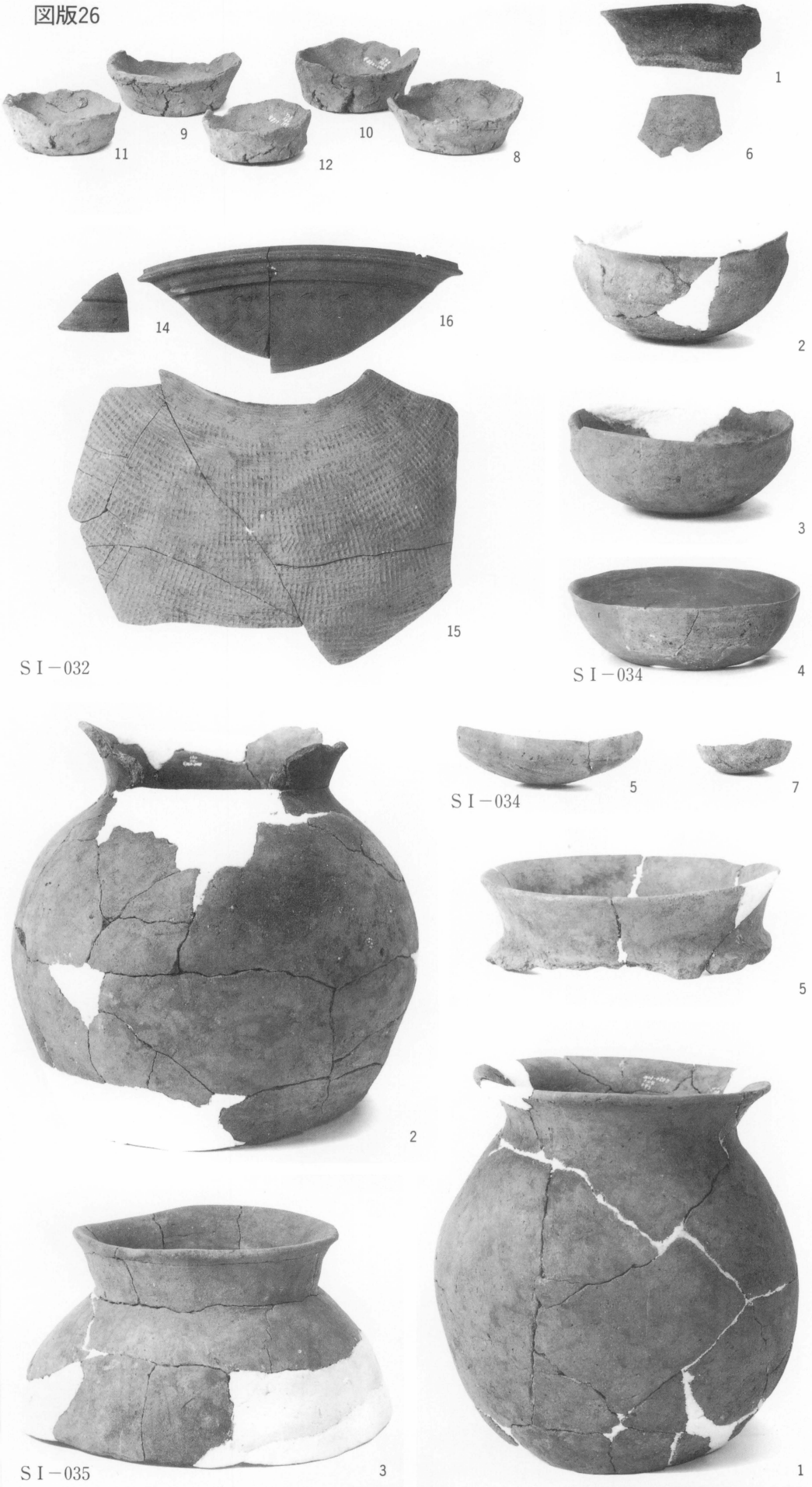

2

13

SＩ－032

古墳時代
出土遺物（４）

図版26



古墳時代
出土遺物（5）

6

10

9

11

13

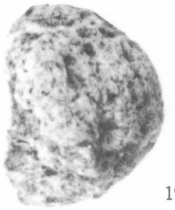
8

14

15

16

17


19

20

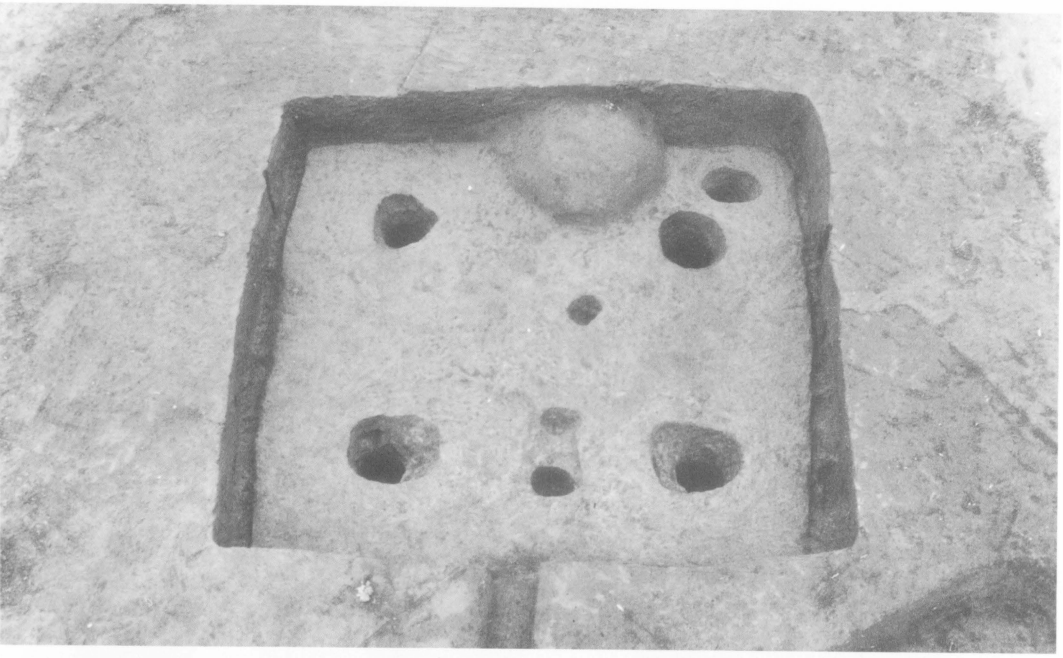
古墳時代
出土遺物（6）

ＳＩ－035

2．ＳＩ－019

図版28

1．SI－020



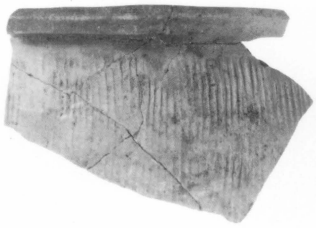
2．SI－024

3．SI－033

1

2

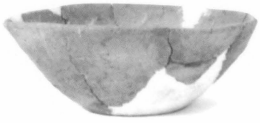
3


6

12

5

14


13

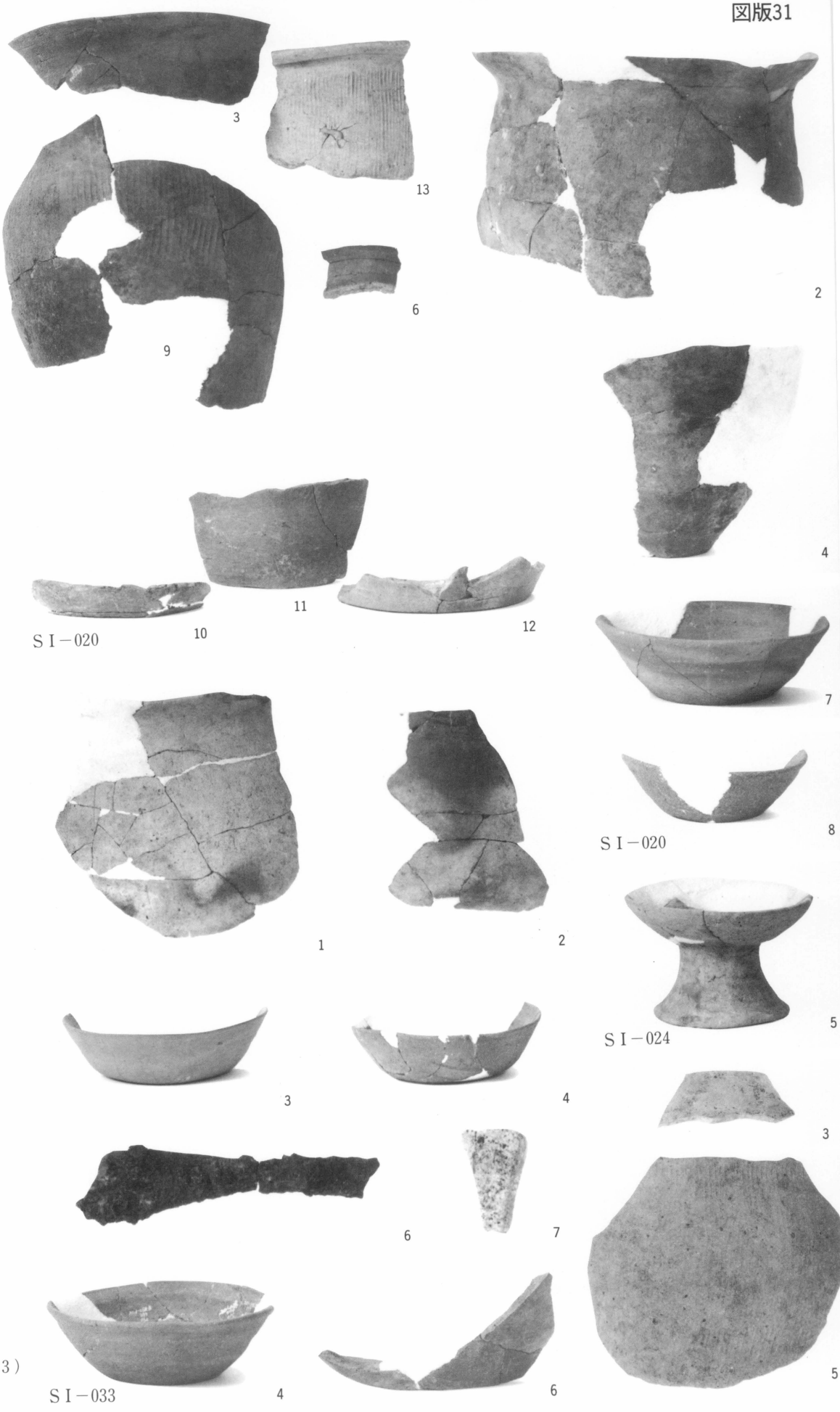
9

15

古代出土遺物（1）

ＳＩ－019

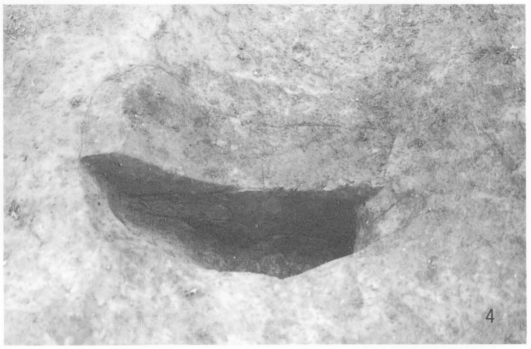
古代
出土遺物（2）



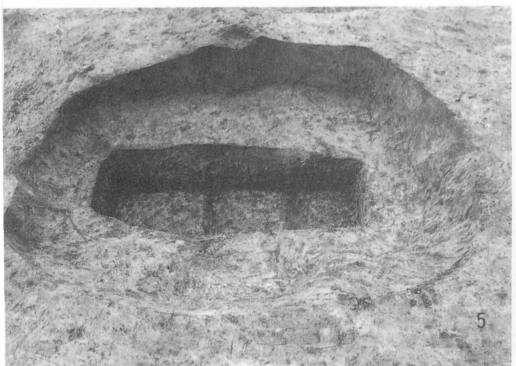
古代
出土遺物（3）

古代出土遺物（4）

2．SX－005

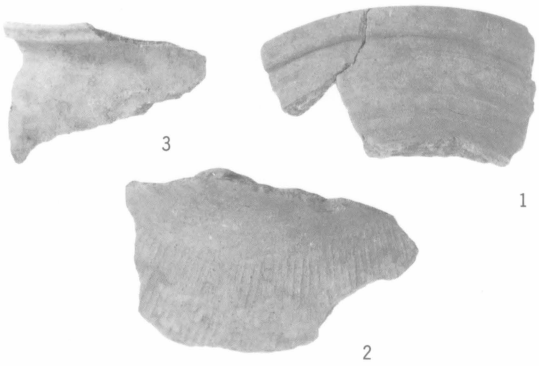


3．SX－005
中央部土壙
4．同上断面

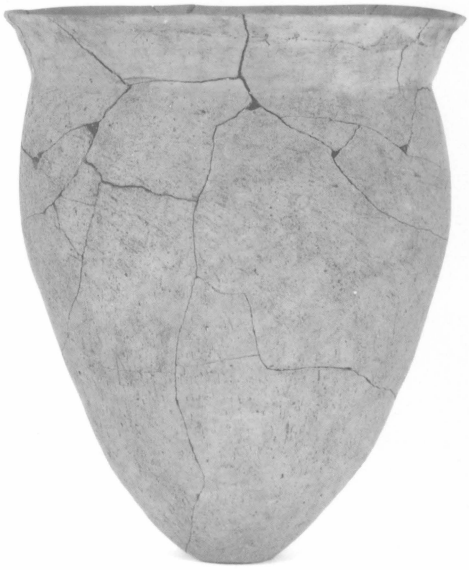


5．SK－049
6．SK－050

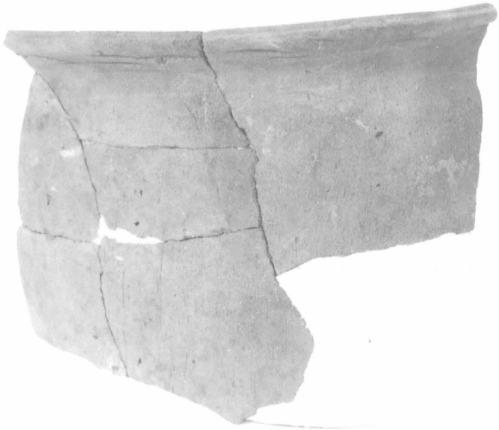
SK－051



SK－049



1



1

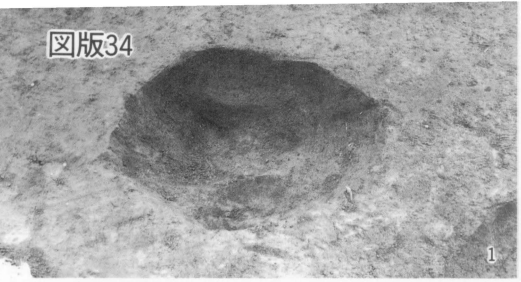
2．土壙墓
出土遺物

SK－050

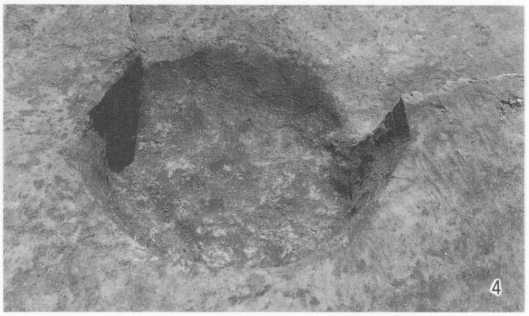
2

SK－051

2

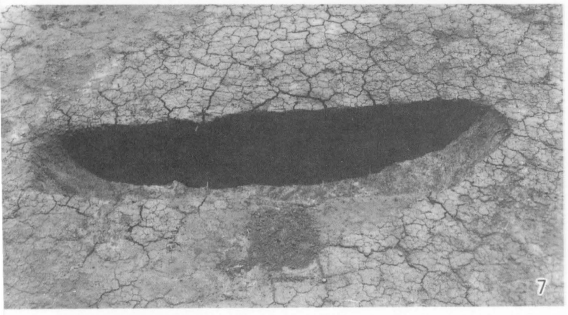


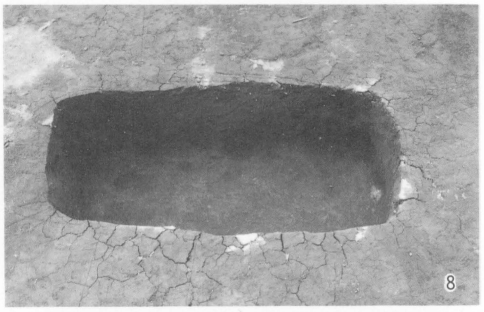
1．SK－054
2．SK－055



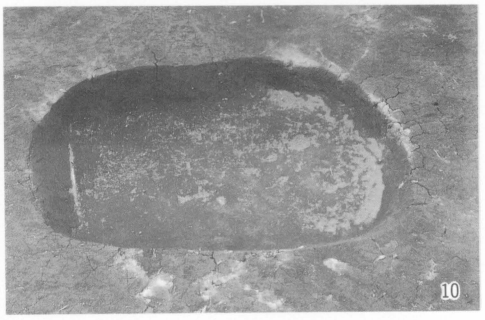
3．SK－056
4．SK－057

5．SK－058
6．SK－059

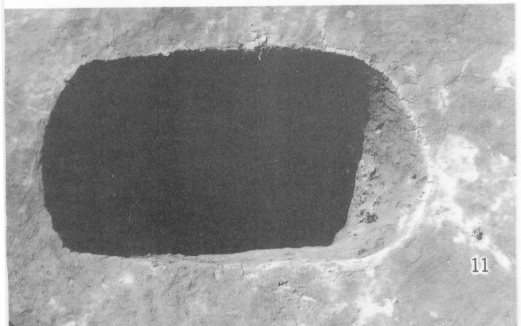


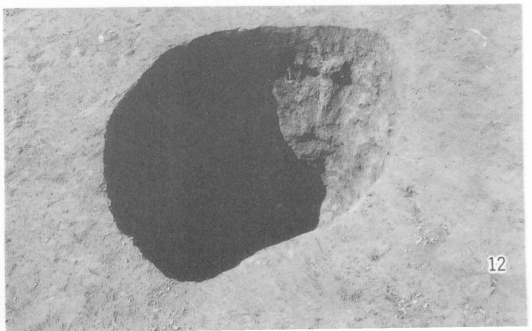


7．SK－060
8．SK－062



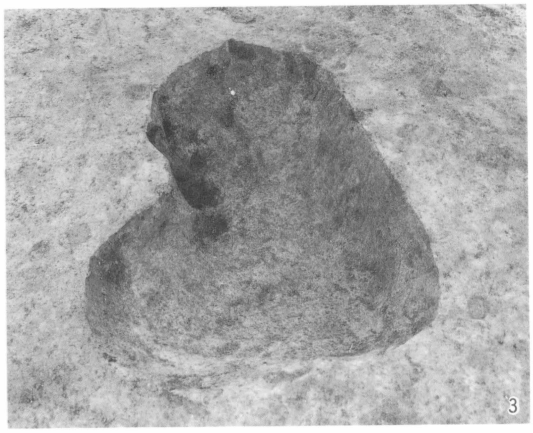
9．SK－061
10．SK－065



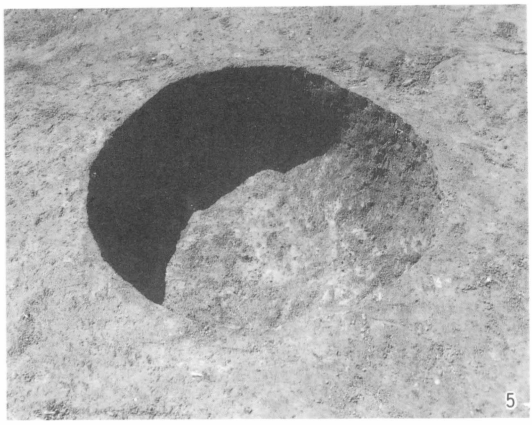


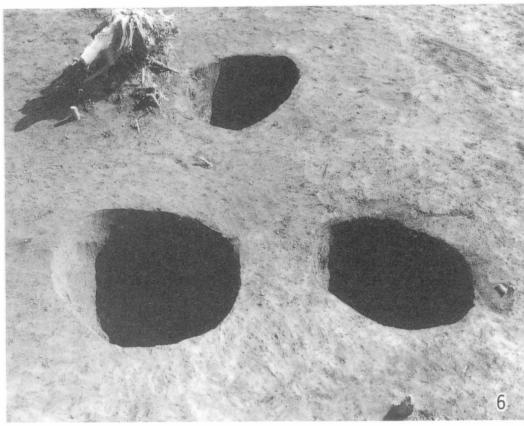
11．SK－070
12．SK－082

1．SK－077
2．SK－078

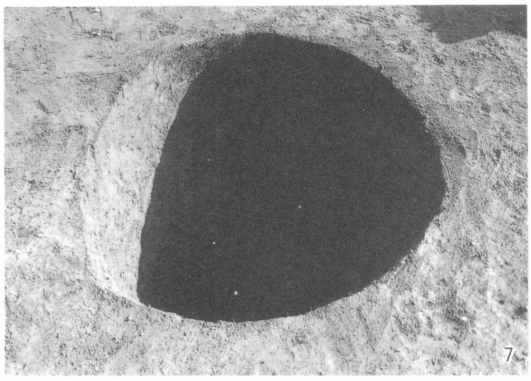


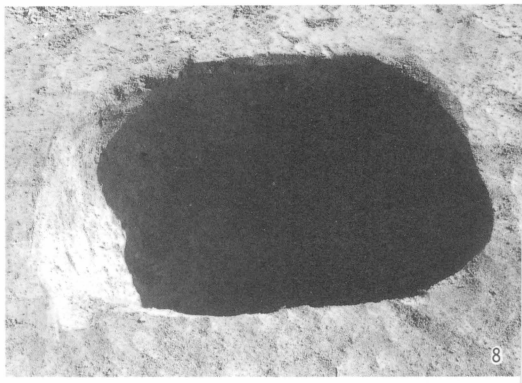
3．SK－079
4．SK－080



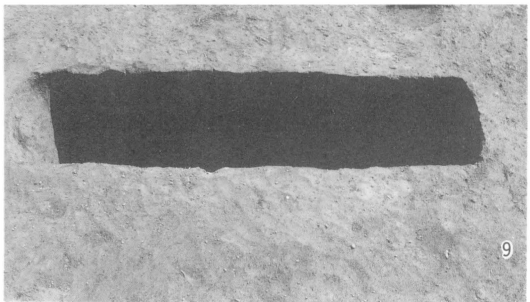


5．SK－083
6．SK－084
～086

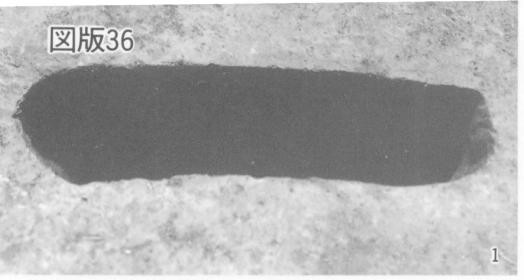




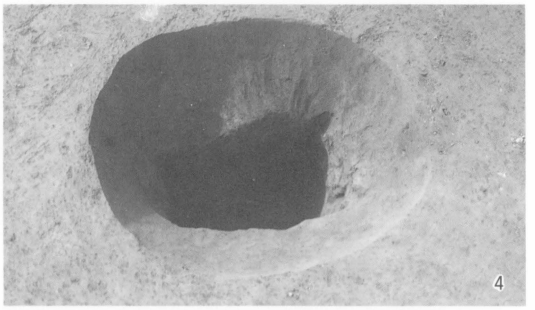
7．SK－087
8．SK－088



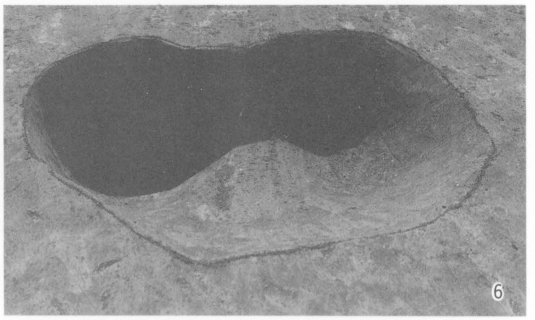
9．SK－091
10．SK－092



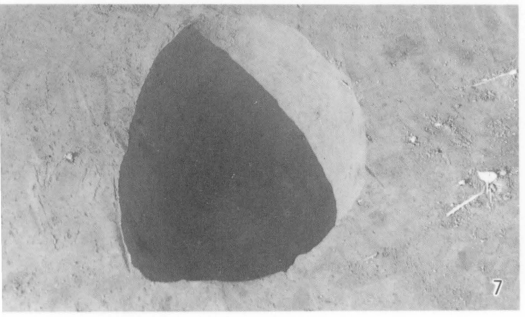
1．SK－095
2．SK－111

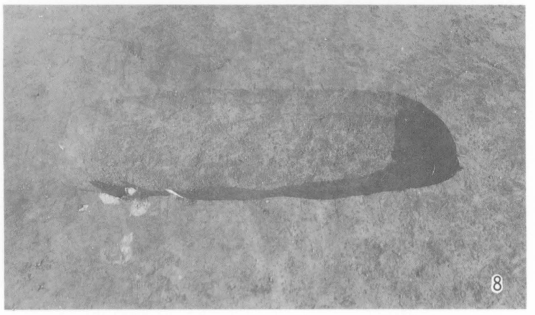


3．SK－113
4．SK－114



5．SK－115
6．SK－116





7．SK－117
8．SK－118

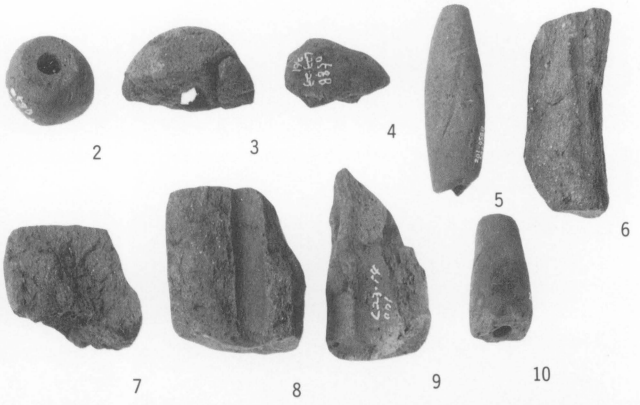
SK－061　2

SK－061　3

SK－102　4

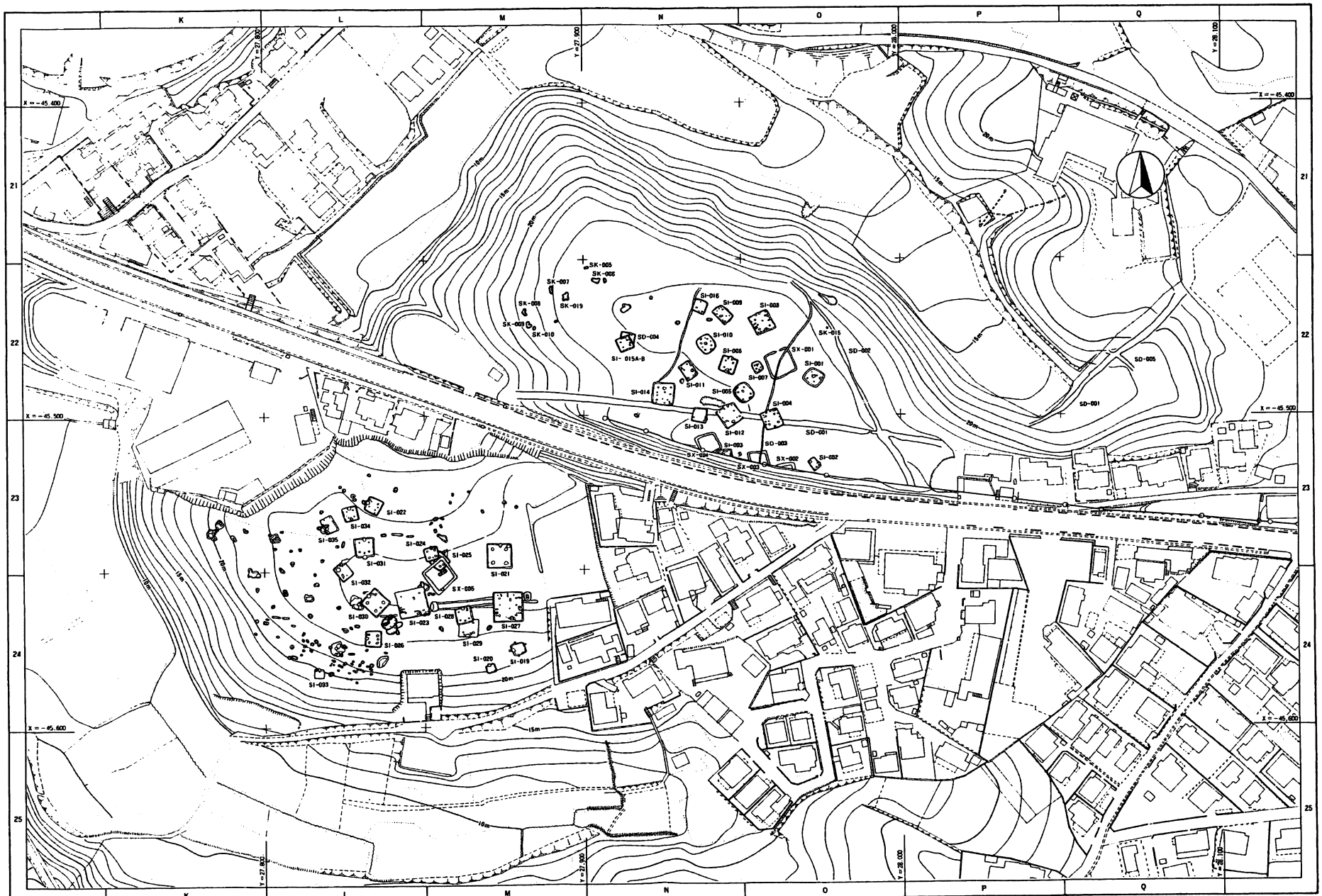
9．土坑出土遺物

1

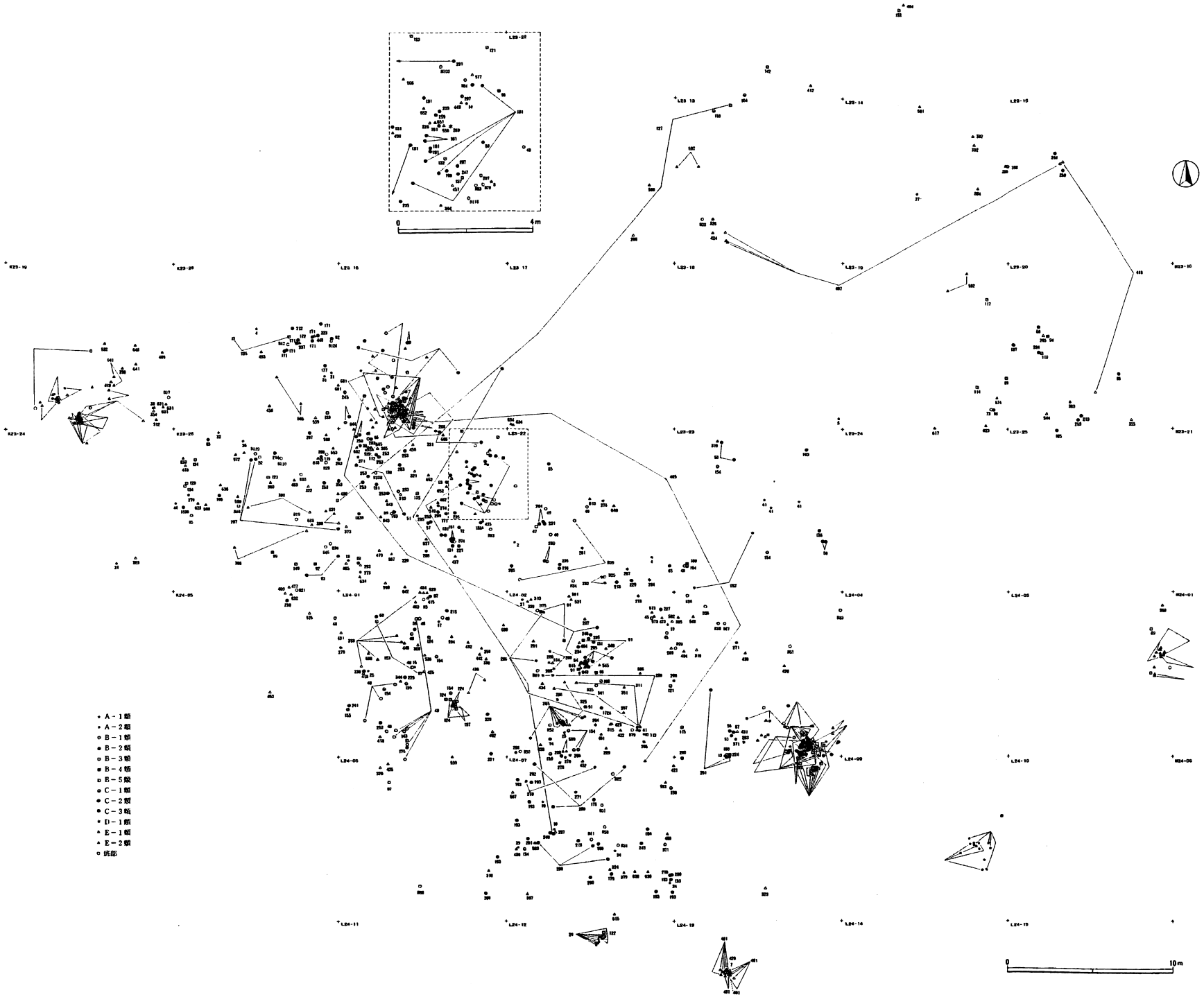


2　3　4　5　6　7　8　9　10

10．遺構外
出土遺物



付図１　地蔵山遺跡全体図　S＝1/1,000



付図2　縄文時代早期土器分布（1/160）

千葉県文化財センター調査報告第224集

千葉市地蔵山遺跡（2）

平成5年3月24日　印刷
平成5年3月31日　発行

発　行　住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿4丁目3番17号

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地－2

印　刷　株式会社　弘　文　社
市川市市川南2丁目7番2号